ルカに捧げよ

俊衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ルカに捧げよ

【Ｎコード】
Ｎ８４０４Ｖ

【作者名】
俊衛門

【あらすじ】
完璧な倫理、恒久的な平和。それでも都市の人々はフリーサイドを目指す。人体を分子配列のビット信号に置き換える「精神の野」フリーサイド。それに反発するように生まれた外縁のゲリラたちの書、「ナツィオへの帰還」。人の本質はどこか。完全自由か、完全調和か。あるいは苦痛に彩られた生か。一人の少女の存在が、バイオロイドのユーリに選択を突きつける。

1（前書き）

空想科学祭２０１１参加作品

1

「ユーリ」
と彼女が呼んだ。聞き慣れない単語だったので、私は最初それが何を意味するのか分からなかった。ユーリ。もう一度口にする。ようやく、それが私の名であることを思い出す。
「あなたは、業務は真面目だけど」
彼女、ソフィーヤ・テテリナは白衣の裾を指先でもてあそびながら、困惑と呆れがありありと浮かんだ表情を浮かべ、気だるさをかみ殺した風に笑う。
「真面目すぎて、ちょっと頑固なところあるよね。私のつけた名前、そんなに気に入らない？」
「慣れていないので」
そう答えると、またそれか、と彼女は苦笑した。
ユーリという名は彼女、ソフィーヤ・テテリナによるものだった。私が生み出された施設が、ウラジオストクにあることが、その由来であるらしい。彼女自身もロシア系を自称しており、そのためかスラヴ系の名を与える方が良いと思ったらしい。ともかくその呼称が、私の名前ということにされてしまった。
集合意思、ここでは”フリーサイド”と呼ばれているあの場所には、言語に依存した識別は存在し得なかった。不完全で非効率的でない全てのものの一切が排除されたフリーサイドでは、パーソナルネームがなにかしら意味を持つものではない。
「でもここはフリーサイドじゃないよ」
と彼女は言って、
「とにかく、何か名前がなきゃ私が困るよ。自分でつけないんだったら、私がつける」
彼女は半ば強引に私の名を決定付け、研究所内でもそれが私の名であるとされてしまった。私が生化学研究所に配属になった時に、

初めて与えられた業務が、この一見して不自然なパーソナルネームに私自身を馴染ませるということだった。

その、ソフィーヤ・テテリナであるが、研究所内では医師ということになっていた。体内の生体分子によるバイオモニタリング、場合によってはナノボットによるフィルタリングが行われ、外部からの投薬や検診が過去のものとなった現代では、医師という立場の人間が出来ることなど限られている。その限られた業務のほとんどを、彼女は私やほかのバイオロイドたちの「検診」に注ぎ込んでいるようにも見える。

「そんなわけないでしょう」

私の疑問に、彼女は幾分困惑気味の微笑みでもって応える。

「いくら生物情報学（バイオインフォマティクス）が医療を浸食したからって、医者は医者なりにやることがあるよ。あんたたちの検診ばかりやっているわけじゃないって」

そう主張する彼女、ソフィーヤ・テテリナは、もはや過去のものとなった診断を好んで行う。体内の監視は生体分子に任せるより他なく、ポンプで血液を採取する方法は倫理規定に抵触するので、実際には触診や検温といったごく簡単なものである。首のリンパに触れたり、脈を計ったりといった原始的なもので確認するのだが、彼女の医療行為には欠かせない儀式であるかのようだった。

「異常はみられないね」

ソフィーヤ・テテリナは、緑の輝光を放つウィンドゥに触れる。空中を浮遊する光の「小窓」は、彼女の思考をそのまま反映させた像を結ぶ。厚さ一ミクロンにも満たないディスプレイが空中に固定され、その表面を複数の文字列が走っているその光景は、初めて見た時はやはり奇妙に写った。もちろん、生み出される前からその原理について、情報として知っていたものの、最初は実際に目にすると透明な膜が浮かんでいるような感覚しか持ち得なかった。

ソフィーヤは文字列の入力を終えると、ディスプレイを消した。

緑光の小窓を構成していた粒子が崩壊し、さらさらと空間に溶けるように消える。砂糖菓子が自壊し、あるいは融解するような風情で。
「あなたはいつも健康ね。バイオロイドでもここまで完璧なのはまずいないわ。あなたのナノボットはとびきり優秀ね」
「私の生体分子は、恒常性を保っています。このような検診は必要ないかと思われますが、ドクター」
「名前でいいのに、ユーリ。そんな堅苦しくてもつまらないよ」
「あなたは医師（ドクター）であり、それがもっとも正確な呼称です。それと、私をその名で呼ぶのは何とかなりませんか」
　彼女は両肩をわずかに二ミリほど上下させた。最近知ったのだが、肩を竦めるというこの動作に特に意味はないらしい。意味のない行動でも、対人コミュニケーションでは重要なことだと彼女は言うが、意味のない行為はどこまで行っても意味がない。
「フリーサイドじゃ、名前なんて必要なかったろうからね。あそこは個体の認識なんて概念はないし。でも現実で生きていくなら名前は必要よ、ユーリ。長ったらしい識別番号を言わなくても、親しみを込めてその名を口にすれば争いも減るってものよ」
　時折、彼女は理にかなわないことを口走る。争いの有無が、どうして名前の有無に直結するのか、などとおそらく彼女自身も考えていないのだろう。
「観念しなさい、この研究所でもあんたの名前はそれで定着しているんだから」
　何となく、この話題になると彼女は楽しそうにする。自分の思い通りにことが運んでいる、それが愉快でたまらないというようだった。
「名前って大事だよ。他者と識別して、自分が自分であることを知らせてくれる。他の誰とも違う何者かにしてくれる」
「私自身の識別は、私自身のコードで成されています。他者との判断はそれでつきます」
　ソフィーヤは微かに笑みを浮かべた。私がどのように判断し、ど

のように意図を汲み取ろうともかまわない。そういう笑い方をする。あるいは意図などなく、私の言い方がおかしかっただけなのかもしれないが、それすらも汲み取れない。つくづく、ここはフリーサイドではないのだと思い知らされる。曖昧で不便で、非行率かつ不安定な世界。

「段々と慣れてくるよ。あなたのプログラムはフリーサイドの意志が反映されているから、戸惑うことが多いだろうけどね」

「ご心配なく。意見の相違や、思想の偏りによる衝突を緩和させる。そのための我々なのですから」

ソフィーヤは、少し驚きを以て私の顔を見た。私の答えが、彼女が期待していたものと違ったのだろうか。

「フリーサイドに影響されたバイオロイドは、あなたが初めてだけど。あそこじゃそういう風にプログラミングするのね」

「それは私の意志です。何もフリーサイドがそのように意志決定をしているのではありません」

「そうね、ごめんなさい。言い過ぎたね」

何故か謝罪のようなことを言い、彼女は目を伏せた。何か自分がとてつもない罪悪を犯してしまったかのような、そんな目をしている。ソフィーヤ・テテリナがフリーサイドについて語る時は、いつもそうだった。何か後ろめたさを内包したような物言い。私に対する配慮なのか倫理規定を考えてのことなのか、分からないが。

彼女は机に向き直り、空間にまた新しい小窓を現出させた。彼女がなぞる指先の擬似神経が、透明な採光膜に数列を刻みつけ、その数情報が再び暗号化されて彼女自身の脳幹に入力されるまでにナノ秒単位の時間しか掛からない。殆ど無意識に、彼女自身が暗号化され、出入力を完了させる。

「この計測は意味があるのでしょうか」

私が服を着ると――膚を露出して鼓動を聞くという医療行為は、あまりにも野蛮じみたものであるように思える――ソフィーヤは入力の手を止めた。

「フリーサイドが政府公認となってから初の試みだからね。バイオロイドの甲二型は、電位空間で脳に情報を送り込み、発達させる。だから都市政府も慎重になっているのよ。監視分子とは別に、あなた自身のデータを取り、提出を義務付けられている。ここだけじゃなくて、あなたの仲間は全てね」
「承知しています、ドクター。最初の民間モデルであり、尚且つフリーサイド第一世代と呼ばれているということを。しかし、だからといってこのような時代遅れの触診など」
「時代遅れって、何を基準に言ってるのかしら」
「一般論です。すでに廃れて等しい行為で、その行為を目にすることも極めて少ない。それに、感染症の恐れがあります」
「悪かったね。私のときは、これが一般的だったんだよ。昔ながらのやり方が慣れているからね、私は」
ソフィーヤ・テテリナは見た目こそ若いが、実年齢はすでに半世紀分に相当する。生体分子による定期的なホルモン投与で、細胞を若く保つことなどそう難しいことではない。彼女の言う「昔ながらのやり方」とは、都市政府が成立する以前の、彼女がまだ生体分子を埋め込む前の時代の医療なのだろう。今では映像資料の中でしか伺い知ることが出来ないことであり、生体分子よりも多くのことは得られない検診だが、ソフィーヤ・テテリナはまるでそれが儀式であるかのように行う。
「生体分子じゃ、細かいところは分からないのよ」
などと彼女は、理屈にあわないことを言ってごまかす、それすらも同じく儀式めいていた。特に意味などないのだろう、と。真意が分からない以上、そう判断せざるを得ない。
「それで、少しは慣れた？」
「何がでしょうか」
唐突にソフィーヤは話題を切り替えた。私の都合などまるで構わないというような強引さだった。
「あなたが生まれてから五年しか経っていない。ここの研究所に来

てからはまだ一年。そろそろ馴染んでくれたかなって思って」
「業務に差し障りはありません。フリーサイドほどの自由度はありませんが、不自由は特に感じません、ドクター」
事実、仕事は難しいものではなかった。破壊された脳神経に代わって疑似神経を配列するのが脳幹技士の役割で、その新たな配列にプログラミングを施すのが、ニューラルプログラマーと呼ばれる職業だ。元の人格を復元する他、倫理的に問題のあるバグを見つけて排除すること、あるいは暴力衝動を抑えるプログラムなど、倫理院の許可するプログラムの全てを組む。パターンを見つけて神経配列に走らせれば、事足りる。
しかし、私の答えは彼女が期待していたものではないらしく、ソフィーヤは果たして苦笑で応じる。
「そういうことじゃなかったんだけどね。まあ、うまくやれているならそれに越したことはないけど」
「それ以上のことが、他にあるのでしょうか」
受け答えは完璧なはずで、どこにも指摘すべきことなど存在しないはずだった。それなのに、ソフィーヤは不満そうにつぶやく。
「まあ、いいわ。この意味が分かるようならそもそもバイオロイドじゃないし、あんたもこんな研究所には来ないよね」
「それは、どのような」
「いいの、気にしないで。ちょっとした入れ違いだから、最初からそんな話はなかったってことにして」
彼女の言うところの、ちょっとした入れ違いとは、これで三度目だっただろうか。通常業務に戻るまでのつかの間、彼女は私との会話を行うが、いつも噛み合わない。
「あなたが与える情報は、いつも少なすぎます」
特段、非難する意図はない。ただ私としても、通常業務に戻る時間が惜しいので、そろそろ切り上げたかった。
「与える情報のみがいつも正確なわけじゃないよ」
ソフィーヤ・テテリナの、桜色めいた唇がささやいた。

「ではあなたの言う、情報以外のものとは」
「フリーサイドの情報はいつも正しいってわけじゃない」
「一つの事象を走査すれば、それは常に真では無いのでしょうか」
「真であるから、正しいわけじゃない。そもそも正しさなんて、その時々で変わるものよ」
まるで謎解きだった。決して解のないパズルを解かされている。彼女と話す時は、いつもそうだった。とりとめのない会話自体を楽しんでいるとしか思えない、不可解な問いを繰り返すのみで、核心には決して触れようとしない。
「仰る意味を計りかねます」
当然、私はギブアップとするしかない。すると彼女は、今度はしてやったりというような笑みをこぼす。規定事項とはいえ、少々不服さを禁じ得ない。
「それは教えてどうなるってものでもないよ」
ソフィーヤは言ったきり、押し黙る。大抵そこで話が途切れ、それ以上の展開など望むべくもないというように彼女は言う。
「あとで報告をあげるからもう行っていいよ」
特別なことなど無く、今の今まで淡々と作業をこなしていた、というような振る舞いでもって彼女も彼女自身の仕事に戻る。

それが、私が生み出されてから一年目のこと。まずは彼女との関わりに慣れることが、最優先事項だった。ソフィーヤ・テテリナとの関わりは、不可解な「検診」を通して成される。不可解であっても、それが不変であること。その意味を理解し、行動すること。しかし私は意味など――そもそも見出すものすら見えないものを、理解しないまま、五年の月日が経った。その間私はルーティンに業務をこなし、そこに何かの意味など何も無いものだった。
そして六年目。その前提が、根底から覆されることとなる。ある、一人の少女との出会いがそうだった。「ユーリ」に慣れ、彼女の言葉もそれほど意味はないことだと知ったある時、出会った一人の少

女。否が応でも、その選択を迫られ、その選択が今でも正しいものであったのかどうか。自信を持って言えることではない。

2

右手の辺りに、スクリーンを固着させた所員とすれ違った。

浮遊する無数のナノボットに投影された視覚情報に文字を打ち込むのに夢中で、あやうく私とぶつかるところだった。体をかわした瞬間、眼前のスクリーンが歪んだ。私と彼との間に生じた空気の流れが、空中のナノボットを拡散させたためだった。すぐにまた同じ像を結び、彼は私に謝罪の言葉を述べてから足早に駆けてゆく。廊下を行き交う人々は、誰も彼もが同じようなスクリーンを目の前に固着させ、緑色のスクリーンが彼らの移動にあわせて空中を流れている。

ナノボットはどこにでも散布されている。公園のベンチ上でも、リビングルームでも、ベッドの上ででも、誰もが同じような情報小窓に向かい、肉眼では関知できない薄い光の膜を通じてネットワークとつながる。

粒子のテクノロジーによって固定端末は過去のものとなっていた。一部の懐古主義者たちが用いる、シリコンチップの端末をいじる者は、社会的にはマイノリティである。液晶画面はナノボットが生み出すスクリーンに、半導体の回路は脳幹に備えた神経回路に取って代わられた。現在、情報処理とは膚の下に走る疑似神経回路とナノボットが連動し、一番身近な脳という生体コンピュータにインプットする作業のことを指し、機器そのものは無形化の一途を辿る。情報の出入力には、わずかに〇・二ピコ秒しかかからないという事実は動かしがたく、それを思えばシリコンチップを好んで用いる者はいない。

ロビーには、所員であふれていた。巨大なＲＮＡ鎖を模したようなオブジェが中央に鎮座し、それを囲むように配置された大理石のベンチに腰掛けた白衣の集団が、各々の業務を遂行すべく空間にスクリーンを固着させ、ネットワークとやり取りしながら光格子の情

報と行列式に向かっている。
　周囲に倣って、ということでもないが、私もまた自分のウィンドウを呼び出した。薄い光の膜と相対して、指先でなぞると膚の下にかすかな手応えを感じる。ディスプレイの光格子と数列を指で弾き、固有ＩＤを呼び出すといつものプログラム画面を現出させた。指先でスクリーンをなぞると、かすかな手応えを感じる。疑似神経が電位信号に触れ、反応することで脳内回路と情報を共有させる、その際生じる電気刺激だ。回路に蓄えられた情報がミクロンの電子膜に、演算式を焼き付け、それを基に私はプログラミング言語を組み立てる。スクリーン上をアルゴリズムが流れるのに、数列が網膜に焼き付くような感覚になる。
　数列は膨大な脳のコードであり、そこに現れる数字はすべて思考のベクトルそのものだった。精神を病み、対人関係にトラブルを抱え、どうにも立ち行かなくなった人々が、最後の手段として用いるのが、ニューラルプログラミングと呼ばれる手法だった。測定する脳波によって、感情の導き方を脳にンプットするこの技術は、それでも脳に直接言語を送り込むという意味で特別扱いされている。倫理に触れかねない、脳への干渉は、限られたスタッフのみが行う。だから、本来ならばホールの真ん中でスクリーンを広げるべきではないのかもしれないが、高度にコード化された脳の中身は、それこそ高度な暗号技術を要するので、一見しただけでは読み取ることはほぼ不可能だ。
「鬱になっているのか、この患者は」
　かと言って、暗号は万人に解読不可能になっているわけではない。横から覗き込むシェン・リーには、特に暗号など意味を成していないかのよう錯覚に陥らせる。
「勝手に見ることは、プライバシーの侵害になる」
「こんなとこでおっぴろげてちゃ、見たくなくても見えるわな」
　スラングめいたことを言って、シェン・リーは自分の前髪を引っ張った。モンゴロイドの血をひく彼の容姿は、等しく漆黒に塗られ

た髪色をしていて、それが遠目から見てもそれと分かるほど目立つ。黒い髪とは、所内でも少数で、配属されてからしばらくはそのような染髪料があるのだと本気で信じていた。なぜ髪を染めるのか、などと聞けば場合によってはヘイトスピーチになりかねないので、一週間は彼と口を聞くことがなかったのだが、シェン・リーも同じプログラマーであったことで、互いに交流が生まれ、今ではプログラミングについてアドバイスを受けることも少なくない。

「しかし、これは相当複雑な演算だな。どんなトラブルを抱えているんか知らないが、良くここまで放置していたものだ」

シェン・リーが驚くのも無理はない。企業が社員のワークバランスを考えた経営

していれば、本来ならば精神病の類はほぼ一掃できるはずなのだが、どの都市でも完全にバランスが取れているとは言い難い。倫理院が常に目を光らせ、人権を損なうことのないよう――企業活動であっても、対人コミュニケーションであっても、個人の脳波は表層部分に限り、ネットワークで監視している。鬱になるほどのストレスを溜め込むことは滅多にない。都市住人は他人の脳波を感じずに日常を送ることはないのだから。

「仕事も家庭も、充実はしていたようだ」

私は文字列の最後の値を入力した。

「特に何かに不満を抱えているわけではないようだったが、それでも実際にこうして深いレベルまで心を病んでしまっている。本人は、どうやらこの都市で何を手に入れても、満足ができない。そう考えているようだ」

「そこを突き崩してやるのか？」

「プログラム上では。ただそのように導いても、彼の心に響くかどうか。どうやらフリーサイド入りを希望しているらしい」

「フリーサイドか、猫も杓子もフリーサイドだねえ」

「どういう意味だ、それは」

「大流行って意味だ、フリーサイドが。それほど皆して悩み抱えて

いるのか、ってそういやお前さんもフリーサイド絡みだったか」
「私にフリーサイドのことなど聞いても分からないよ。胎内を記憶する子供がいないように、私も意識が出来る前のことなど覚えているはずもない」
「そうかい。まあそれはそれでいいんだが」
ようやく、プログラムが完成した。指先の疑似神経を通じて脳内回路にバックアップを蓄える間、網膜裏に張り付けた微小ディスプレイに通信が入ったのを確認する。差出人はリーバー・ストラウス、最重要事項と記されたメールを私はナノボットが漂う空中で、スクリーンとして開いた。
「呼び出しか」
とシェン・リーが言うのに、私はスクリーンを閉じた。
「フリーサイド絡みの要件だ」

ストラウスが研究所の所長という立場にいるのには理由がある。初期型バイオロイドの、初の公的機関登用という実験的名目からの起用で、特に能力による選別ではなく、ある種の宣伝効果も含めた人事であった。ストラウスはこの世に生を受けてからわずか二年の間に、一所員から所長にまで上り詰めた。異例の出世でもあるが、そこには倫理院の意志が介入している。
ともあれ、優位遺伝子を限定的に選別された彼自身もまた有能でもある。少なくとも彼の人事を妬む者を黙らせるほどには優秀だった。十年という少ないキャリアでも研究所をまとめることが出来るのも、彼が生まれながらに優位であることの証でもある。
そのストラウスと、私は向き合っている。ホルモン投与など当たり前なこのご時世に、わざわざ高年齢――およそ五十歳代――の風貌にモデリングされた、彼の深い皺が刻まれた顔が机を挟んで対面し、鋭い眼でもって遠慮なく睨みつける。本来、そのような威嚇にも似た行為は人権委員会に好ましくないと判断されるのだが、威嚇感情が想起されているわけではないので特に問題はない。

「カウンセリングの経験はあるか、１２（トゥエルブ）」
開口一番、ストラウスはそう聞いた。１２（トゥエルブ）という呼称は、私自身のナンバリングが十二番目であることを表す。ソフィーヤ・テテリナのパーソナルネームは、ストラウスには通じない。
「君の経歴は見た。三年前に精神学医療を修得したようだが、カウンセリングの資格も取ったと聞く」
そう言うストラウスの手元には、掌に収まるほどのサイズに切り取られた、ナノボットの小窓が浮かんでいた。かすかに燐光すら放つスクリーンは、ナノボットの絶対量が少ないせいかやや輪郭が崩れかかっている。
「確かに資格はありますが、カウンセリングそのものに関わったことはありません、所長」
私は答えた。そう答えるより他なかった。古い、カウンセリングの手法が言語を介して行う精神療法であり、それを応用したのがニューロプログラミングという手法である。なので、プログラマーは最初にカウンセリングを学び、場合によっては資格を取得する。
「しかし、カウンセリングはすでに廃れた技術です。それを行う機会は皆無であり、私が携わることなどありませんでした」
「だが資格はある」
「教練所にゆけば誰もが兵士になれるわけではありません」
私が言ったことが、余程意に介さないのか。ストラウスは渋面をますます濃くさせる。
「施設には、カウンセリングの資格を持つ者は、君を含めて二人しかいない。今までは確かに、カウンセリングの必要性がなかったから、カウンセリングのスタッフを増員することなど考えなかった」
それこそ精神病患者や、人格を破壊させた鬱病患者、あるいは倫理ネットでも抑えきれない暴力衝動の持ち主であっても、ニューロンへのプログラミングですべて事足りることの証左であった。言語へ変換し、対象者に説得する方法は、コミュニケーションのツールが貧弱だった時代の遺物であることは疑いようがない。

「プログラマーは口をそろえて同じことを言うな」
ストラウスが指先でスクリーンを弾き、両手で引き延ばした。神経が、ナノボットの投影域を拡張すると、果たして半身を覆い隠すに足るほどのスクリーンに固定された。
「ルカ・オベール、十五歳」
言い訳や逃げ口上の類は許さぬというような、断固とした口調でストラウスが言った。スクリーンに、今喋った通りのデータが送信され、文字情報と共に人物像までが刻み込まれた。ストラウスの脳神経回路に蓄えられた、おそらくカウンセリングの対象となる患者だろう少女の顔と対面させられる。
「南フランスで保護された。精神レベルが十二階層にまで至っている」
「かなり重篤ですね、十二階層とは。どうして今まで手を打たなかったのですか」
「少し訳ありだ、この子は」
切り出す間を計りかねるように、ストラウスは言葉を切った。ややあって口を開いた。
「君は、フリーサイドへ至る手順を知っているか？」
いきなり話が変わるのだから、少々不意を突かれた気分だったが、そんなことはおくびにも出さずに私は答えた。
「脳神経を、ナノボットへとリンクさせるのでしょう。ニューロンの配列と、ＤＮＡのコードをスキャンし、粒子の配列にアップロードする。良く知られたやり方です」
おおよそ間違って記憶することなどあり得ない。私自身がそこで生まれたのだから。散布されたナノボットとは別に浮遊する粒子群は、無形ではありつつも独自の配列をもって存在し、そこには無数の回路が形成される。脳と、ＤＮＡの配列をまるごとコピーして転写した先が、フリーサイドだ。精神の野などとも呼ばれるそこに、無数の人格と記憶、人々の意識が漂っている。
「フリーサイドはその特性故に」

ストラウスは私の答えに満足したわけではないだろうが、とりあえずは合格というように頷いてから言った。
「粒子の配列が保証される限りは、そこにいる意識群は存在し続ける。システム自体が故障することがあっても、ナノボットの自己複製によって粒子が絶えることはない。つまり、生き続けることが出来る」
「転送されるには、正式な手続きが必要です」
「だが法の目を掻い潜って、フリーサイドを目指す者も少なくない。そこに行けばほぼ永遠に生きることが出来る。彼女――ルカ・オベールの両親も、そういう思想の持ち主だった」
「それは」
私はスクリーンの少女を見た。十五という年齢相応の、幼い子供の面差しを残している中で、視線だけは意志の強そうな、老成したものだった。色素の濃い、黒い瞳でもって、敵意すら感じられる鋭い目。
「彼女はフリーサイド遺児だ」
私の脳裏に浮かんだ言葉をなぞるように、ストラウスが言った。

3

「自由主義は加速している」
シェン・リーが、複雑な波形が刻まれたスクリーンをなぞって言った。
「何だそれは」
「フリーサイドが出来たときの、創始者の言葉だ。彼女の両親が思い描く理想でもある、あらゆるものから自由になるための究極形態ってね。彼らだけじゃなくて、結構都市の内部には多いらしい」
私は、フリーサイドの歴史を思い出そうとしていた。国家群がまだ存在していたとき、当時のアメリカ合衆国で完全自由を模索していたリバタリアンたちによって、自らを肉体のくびきから解放しようと設立された教団が、後にフリーサイドの原型を作った、それが始まりだったと記憶している。
「医療が発達して、侵襲式のナノボットを体に入れてでも、逃れられないのが死と言うものだ。病や老いから来る一切の苦痛や恐怖から解放されても、死というものがどうしようもないのが現状だってな。でもフリーサイドならそういうことはない。あそこに行けば、人類最後の課題が解決出来るって、そういう思想だ」
「機械細胞や機械義肢や、選択肢はありそうなものだが」
私は、ガラスの向こう側を見た。向こうからはこちらの様子が見えないようになっている。ガラスを隔てた先にいるのが、ルカ・オベールという少女。三人の所員と対面している。彼らはカウンセリング要員ではなく、私と同じプログラマーだった。名前から始まり、出身だとか服の好みだとか、当たり障りのない会話で緊張を解こうと試みているが、少女はうつむいたまま口を開かない。それどころか、迷惑がってもいる風でもある。
シェン・リーの手元に広がる脳波グラフは、急激にではなく微かに変動していた。脳波測定の非侵襲型インターフェースがナノボッ

トを介して、一秒刻みでナノボットから情報を送られる。その脳波の記録は明らかに嫌悪の値に振れていた。あまりにも激しい変動は個人の人格権を損ねると判断されるが、今はまだそのレベルには達していない。

「機械細胞だって、充分苦痛を和らげてくれる。義肢は傷つくことがない。確かに良い選択だけど、フリーサイドならば苦痛そのものがないらしい。精神の末端にまで、安らぎを与えてくれる。自己複製する分子（ナノボット）に意識を移せば、ほぼ永久的に生を享受できるってね」

「それは誰の言葉だ」

「どこぞのフリーサイドシンパの議員が、ウェブニュースでちょっと」

それだけのことを記憶している、シェン・リーに賞賛の声を送るべきなのかどうか、一瞬迷ってしまう。

「フリーサイドか・・・・・・」

かつて存在した国家群に反逆する形で生まれたフリーサイドは、今や世界中に拡大し、今もまだ増殖し続けている。ライフスタイルの、新たな形として。またターミナルケアや生命保護の手段の一つとして。人権委員会もその存在を認め、規制緩和の動きも活発となっている。私を初めとしたＴＸシリーズも、こうした動きの中で生み出されたと聞く。フリーサイド中での思考形成という、新たな試み。

「彼女の親は、フリーサイドにあこがれるあまり、違法業者に依頼したらしい。で、方法が不完全だったのか知らんが、彼女の両親はフリーサイドに転写されたものの、あの子一人が残されてしまった。そういうことみたいだね」

よくある話だ、とシェン・リーはため息交じりに言う。

「あの少女」

と私は口にしていた。

「何だって？」

「いや、南フランスで保護されたと聞いたが――何と言うか、顔つ

きが欧米人らしくない」
「容貌や容姿についての不用意な発言は、人権侵害になりかねないぜ、ユーリ」
人権侵害と言う割には愉快そうに笑う。よく笑う男だった。ここに赴任してから、彼ほど表情豊かなバイオロイドには未だお目に掛かれていない。
「さっきは画像の乱れかと思ったが、どうもそうではなかったようだ。彼女の両親もフランス生まれだと聞くのに、彼女――ルカ・オベールの顔立ちは、お前に似ている気がする」
「そうだよ、だって。あの子は東洋系だから」
「と、いうと」
「養子なんだってさ、オベール夫妻の」
シェン・リーは別のスクリーンを呼び出した。私の目の前に現出させたかと思うと、数秒とおかずに情報を刻みつけた。
「元々あの子は、外のゲリラ村で保護されたらしい。十年ぐらい前に、都市外縁のゲリラから、身寄りのない子供を保護して養子に迎えるってプロジェクトがあった。極東のゲリラから保護されて、オベール夫妻が希望して、戸籍を取得した、それがあの子だ」
スクリーンに、シェン・リーの発言を裏付けるような情報が羅列される。人権委員会の、孤児受け入れ事業のデータだった。
「元の名前は何と」
「アミヤ・ルカ、と言った。漢字表記だとこんな感じ」
シェン・リーは人差し指で、空中に文字を書いた。シェン・リーの指が動いた通りに、ナノボットの採光がトレースし、金色の文字を浮かび上がらせる。もう既に廃れて久しい象形文字だった。当然読むことは叶わず、『阿宮瑠香』と不可解な形を持つ彼女の名はどこからが名前でどこからが姓なのか、見当もつかなかった。
「下の文字、『瑠』と『香』でルカって読む。それが名前。極東でも珍しい名前と苗字らしいけど、まあともかくあの子はゲリラたちの中で死にそうだったところを、人権委員会に保護されたわけだ。

でもその時募集した夫婦はきちんと審査されて、その上で里親になったわけなんだよな……」
シェン・リー、まるで感慨深い場面に出くわしたような、遠い目をする。脳波測定で細かく人格を精査したはずなのに、その両親が何故フリーサイド行きを希望したのか、疑問であるようだった。しかしフリーサイドに行く人間は、人格に特別問題があるわけでもなく、第一都市内に住む人間が異常人格者であるはずがない。本当に普通の人間が、フリーサイドに憧れを持つのだ。
丁度ガラスの向こう側で、所員が彼女の両親について質問を投げかけていた。君の母親はどんな人なのか、といった類の、やはり当たり障りのない話。両親の話になると、彼女の脳波は少し落ち着きを見せた。例え言葉では両親を讃えても、脳波が恐怖や嫌悪を示すことがある。その場合は虐待が疑われ、親の人格に問題ありと判断される。しかし今はその兆候は見られない。
「オベール夫妻は、彼女にとっては良き親だったらしいな」
とシェン・リーは言う。シェン・リーにとっての「良き親」とはどういうものなのか分からないが、少なくとも虐待などは無かったのだろうと伺える。もっとも、倫理ネットは児童虐待や育児放棄に対応しているから、多くは被害者を出す前の早期発見が可能となっている。ナノボットが倫理思考を監視し、常に他者と共有している中では、突発的であっても殺意や敵意を生じさせることは少ない。衝動が高まれば、脳神経回路がホルモンの分泌を抑え感情を鎮め、大事に至る前に都市警に通報が挙がる。虐待やあるいはヘイトクライムを防止する、理想的なテクノロジーといえた。
「でも、あの子何も喋んないな」
「緊張しているのだろう。いきなり心を開いてくれる患者などいない」
「そうかねえ、まあ気長にやるしかないか」
「気長に、というのもまた違うだろう」
私が言うのに、シェン・リーは怪訝そうに目を細めた。

「どういうこった」
「フリーサイド転送による副作用、というか。ＤＮＡを情報に還元する際に、うまく転写出来れば良いが失敗すれば肉体に負荷をかけることになる。違法な業者ならばそれも当然、その結果として彼女の体内機能が失われてしまった」
「だから機械細胞にしたんだろう」
　シェン・リーがデータを見ながら言った。彼女の体が、機械細胞によって大半が占められていることを示すデータだった。外部で精製したＤＮＡを元に、金属分子を増やす機械細胞は、移植自体は難しいことではなく、自己複製によって元々の細胞が機械細胞に置き換わるまでに時間はかからない。
「その副作用のせいで、この子は機械細胞で補填せざるを得なかったと」
「データによれば、機械細胞に補填した後から異常行動が見られたらしい。なぜか、自分の体を傷つけるようになった。それもただの自傷行為でなく、手首を切り首を切り、よからぬ薬品を飲み込んだりして、そうだな。自殺未遂を何度も繰り返した」
「自分の体を？　自分で？」
　シェン・リーは信じられないという様子で聞き返す。当然といえば当然の反応だった。都市の中にいて、そんな奇特な行為を繰り返すものなどいないだろう。シェン・リーはさらに訊く。
「原因は分からないのか」
「今の所はまだ。ただそのせいで他の体組織は崩壊を続け、そのたびに機械細胞が修復し、それを繰り返していくうちに機械細胞が九割を占めるまでになった。あの機械細胞は、修復と同時に元々の生体部分を補強する作用もあるからな」
「心のケアが必要ならば、さっさとプログラムを組めば良かろう」
「プログラムを受け入れないんだ、彼女は。治療自体を拒否する。残った方法が原始的なカウンセリングで、何とかプログラミングを受けるまでの心境に持っていこうということらしい。ただ彼女自身

の攻撃的な衝動を抑えないと、治療も難しいらしい」
「いくらプログラムを拒否するといっても、強行手段に出るわけにはいかないのかね」
「人権委員会は承服していないようだが」
再びガラスの向こうを見る。四方を真っ白い壁に囲まれた広い室内の真ん中に、少女が一人座っている、その光景がやたらと少女の違和感だけを際立たせる。ただ一つだけ色のある、異物めいた存在に見えてしまう。彼女の纏う白い衣に落ちる、長くて細い艶めいた髪色は黒に彩られ、それだけでもやたらと目立っているせいだろうか。
所員の一人が、フリーサイドについての質問を投げかけた。その瞬間、いきなり脳波が波を打った。嫌悪の値に急激に振れ、悪意とすら取れる感情が現出した。
「まずいな」
シェン・リーはマイクを引っ掴み、所員に指示を投げかけた。
「今日はここまでだ。患者にストレスがかかる」
言うと、所員たちは早々にスクリーンを閉じた。あまりに激しい嫌悪の感情が続くと、精神的に悪影響であるとされ、カウンセリングは中断される。
「今の、どう思う」
「フリーサイドに、あまり良い感情を持っていないようだな」
どう思うも何も、見たままの結果を私は口にする。それ以外に判断のしようもない。シェン・リーはデータを閉じて、
「まあ、違法業者に掛かってあんな体になったんなら当然か。しかしフリーサイドを否定されちまうとはね」
シェン・リーは何か同情めいた視線を向けた。ルカの境遇を、理解しようと努めているようだった。
「フリーサイドがどんだけ良い所かって、教えてやりゃいいんじゃないか？　ユーリ」
「何故私が」

「だって、お前。フリーサイドが古巣なんだろう？　俺らみたいに、コンピュータで意識を形成したのとは違う、フリーサイドの集合意思によって思考を生み出されたんだったら、あそこがどんな所かって分かるんじゃねえか」
「分かるわけないだろう」
スクリーンが、また砂糖菓子のようにさらさらと崩れてゆく。完全に無くなったところで、私は立ち上がった。
「フリーサイドにいた、という言い方は誤解を招く。ＴＸシリーズが思考を形成したとは言っても、意識があったわけではない。どんな場所なのかと問われても」
「冗談で言ったのにこのカタブツは」
シェン・リーは苦笑した。
「お前さん、真面目すぎて頑固なところあるよな」
どうやら、それがこの研究所での、私に対する共通認識らしい。
今更訂正する気にもなれず、私は黙って立ち去った。

4

「調子はどうだい、ユーリ」
私が部屋を出たときに、後ろから声をかけられた。ソフィーヤ・テテリナのやや気だるさを押し隠すような物言いは、すぐに分かる。
「来週からパートナーだから、よろしく」
「パートナーとは」
「カウンセリングの資格を持っているのは、私の他にあんただけだって聞いたから。さっきストラウスに言われたよ、あんたをサポートしてくれって」
「あなたとペアで、カウンセリングをということですか」
「あんたには実務経験はないでしょう」
当然の如く、ソフィーヤは言う。プログラマーでカウンセリング資格を持っていること自体が稀であるのに、その上実務経験など到底望むべくも無い。そんな事情は全て呑み込んだ上での物言いだった。
「昔取った杵柄で、どこまで出来るか分からないけど」
「経験がおありなら」
私は特に気分を害したわけでもないが、一応口にしてみる。
「先ほどのミーティングに来ていただければ、良かったのですが」
「悪いわね。人権委員会の連中が来ててさ、その対応してたのよ」
「委員会がここに？」
「あの子、ルカ・オベールの処遇についてね。あのままカウンセリングを始めるかどうかってこと。このまま研究所に置くか、それともフリーサイドにまた送り込むかって。倫理院でも揉めているみたいね」
「彼女をフリーサイドに送り込もうというのですか」
「確定じゃないよ、そういう意見があるってだけ。大体、フリーサイドが元であの子の体、ボロボロになったんだから。簡単にまた送

り込もうなんて意見は少ないよ。でも彼女の両親はフリーサイドにいるわけで、子供の権利上両親と引き離すのは好ましくないって判断されている。虐待の疑いがなければ、基本的に親と過ごすのが望ましいってことでね」ルカは、両親の話をしたときには何ら感情の変化が見られませんでしたが、話がフリーサイドのことに至った時に嫌悪を示しました」

私が言うと、ソフィーヤは少し驚いたように瞠目した。

「それはどの程度」

「基準値を一瞬だけですが越えました。ストレスがかかると判断し、中断しましたが」

「そう」

ふと彼女の瞳が揺れた。私から視線を逸らしたその目が、何か遠くのものを眺めるように変化した。ソフィーヤ・テテリナは何も見ていないような、私には及びもつかないものでも見ているような風情ですらある。

「そうなると、結構根が深いね」

誰に聞かせる風でなく、そう呟く。

「基本的に食事ってものは、いつも摂らなくてもいい」

彼女の手元に、合成食品のランチがある。所内の食堂に、私達はいた。

「その都度生体分子を補給すれば、必要な栄養素を蓄えられる。でも週に一度はこうして食事しないとね、食べ方を忘れちゃう」

ソフィーヤは細かく切った培養肉を口に運びながら言う。家畜の飼育と殺処分、食肉加工がまだ認められていた時代の調理をわざわざ模している。その時代の味覚を楽しむか、あるいは料理を口に運び、咀嚼するその行為を必要とする一部の者のために、そのようなイミテーション料理が存在する。

「非効率な栄養摂取なんだけど、食事って味覚や触感を楽しむ側面もあるわけ。文化圏によっては儀式であり、文化であり、その意味

は様々なんだけど、基本的に人間は食事を生命維持だけでなくて文化として捉えていたわけね」
一体それが何の料理なのか分からない。彼女の皿にあるものを、手慣れた風に切り分けて彼女は言った。
「でもそれは動植物を殺して、他人の権利の侵害に基づくものが含まれていたわけ。だから都市の人間はそれを好ましくないって判断したんだけど、それでも人々の習慣はなかなか抜けないわけで。まあ私もそうなんだけどさ」
私は黙ってコーヒーを口にした。この飲料も合成された味覚に基づくものだった。飲まずとも良いのだが、彼女が食事をしている間することが無いので注文した。益も害もないので、暇を潰すには丁度良い。
「それで、さっきの話。つまりあの子は、フリーサイドに対して良く思っていないってこと？」
「ただ、彼女はフリーサイドに行く時に、同意書を提出したはず。フリーサイドに行く行かないは、個人の意思がなければならないはずなので」
「正式な手続きを踏めばね。でも実際はわからないよ、何せ非合法の業者だし」
彼女は最後に、塩化水を飲み干し、グラスを置く。
「よくあることだよ。フリーサイドそれ自体は、何らこの世界で暮らすことと変わらない。個人の意識は百パーセント転写され、ただ肉体を持つか持たないかの違いであるって証明されたとは言っても、やっぱり抵抗があるっていう人間は。人は生まれ落ちたときからこの世で生を全うし、正しく老いて正しく死ぬべきと主張する人間とかね」
ソフィーヤが食堂の正面に据えられた大型のスクリーンを見ると、浮遊する大画面には民族派ゲリラの同行を示す文字情報と映像が流れていた。都市外部に存在する、古い時代の教義を貫き、世界政府と倫理院を毛嫌いする勢力は、外縁の部隊と未だに前時代的な紛争

を繰り返している。人権を無視する習慣と唾棄すべき虐待、それが普遍的であると主張するもの達。カフカスのコサック達の自爆テロを伝えるウェブニュースだった。
「ルカ・オベールも、民族派ゲリラの村で保護されたと聞きますが」
「保護されたのは五歳の頃でしょう。強固なイデオロギーに染まっていたとは考えられないわ。もっともそういう子供はまず養子には出されないで厚生施設に預けられるけど」
「ではなぜ」
「それを探るのが仕事でしょう」
身も蓋もない言い方をして、ソフィーヤは席を立った。トレーをもって、ついでに私が飲み終えたコーヒーのコップを拾い上げた。
「明日から始めるよ。手順は後で送っておく」
「私はなにをすれば」
「しばらくはサポートしてくれればいいよ」
ソフィーヤは通信が入ったのか、新たにスクリーンを呼び出した。両手がふさがっている状態だというのに、ナノボットの投影する文字情報を眼で追い、その状態のまま食器返却口に早足で駆けて行く。スクリーンを凝視して、足下を見ないままそれでも何かにつまづいたりしない。ほとんど神業めいていた。
食堂のスクリーンが、切り替わった。何か情報が更新されるたびに、スクリーンの表面がはがれ落ち、下から新たなスクリーンが現出する。といっても、実際にははがれ落ちるということはなく、ナノボットが配列を変えて新たな情報に形成し直されるというだけのことだった。ナノボットのビット数に変わりはなく、空間の粒子運動と光の投影で視覚情報が切り替わる。
スクリーンに、誰か知らない人間の顔が映し出された。都市の人間だが、外縁に逃げだそうとしたらしい。基本的に都市の外に出る手続きさえ踏めば――そしてその手続きはＤＮＡが登録されていれば難しいものではない――自由に出ることが出来る。わざわざ外縁に出る必要などなく、不可解な行動だった。

私は席を立った。

診察は、いつもの医務室ではなく、引き続いてあの部屋で行われる。ナノボット散布量が特に多い場所は、それだけ生体分子への監視も強め、脳波測定もし易い。それだけが理由ではないだろうが、ともかくそれは行われた。

「ソフィーヤよ、よろしくね」

まるで作りものめいた笑みではなく、本当に親しい友人であるかのように彼女は握手を求めた。ソフィーヤ・テテリナは対象に触れることに何の躊躇いもないようだった。

ルカ・オベールは一瞬だけ目を合わせたが、すぐに俯いた。その目にもまだ、敵意の色が宿っているように見えた。下を向いていても、ちらちらと視線だけでこちらを伺っている。指先で髪をもてあそび、落ち着きがないようにも思えた。

「緊張しないでね。あなたをどうこうしようってわけじゃないから。ちょっとだけお話させてもらえればいいの」

「話すことなんてないよ」

彼女、ルカ・オベールが言った。初めて聞いた声は、ハスキーでありつつもどこか押し殺す、呻きにも似た響きをともなっている。

「何でもいいのよ。無理に話す必要はないけど、要望とかでもいい。私たちも出来る限りのことはするから」

「何もないってば」

ルカは心底呆れた風に、つっけんどんな態度を取る。

「どうせあんたら、私をどうにかしてあそこに戻そうとか考えてんでしょ？　そうするように言われて、仕方なくやっているんでしょうが」

「そういうわけじゃないよ。あなたがどうするか、ということはあなた自身の自由だし、私たちもなるべくそれにあわせる」

「じゃあ、まずそこの奴がいじってる画面閉じてよ。そんなもんで

あたしの頭ン中見ようとか、気味悪い」
　不意にルカは私を睨みつけた。画面を開いている者といえば、この部屋では一人しかいない。
「ユーリ、それ閉じて」
　ソフィーヤは私の方を見ずにそう告げる。しかし、閉じろと言われて閉じるというわけにもゆかない。脳波の測定がプログラムの重要な指針となる以上、簡単に応じられるものではない。
　私が躊躇していると、ソフィーヤは今度ははっきり、一言一句を刻みつけるように言った。
「閉じなさい」
　少々圧倒されたことは否定できない。私は反射的にスクリーンを閉じた。ソフィーヤは続き、部屋の外に待機している所員にも閉じるようにと告げた。案の定、ガラスの向こう側から反論が挙がるが、ソフィーヤは妙に迫力のこもった圧しつけるような声音で命じた。
「閉じたわ、これでいい？」
　要求通りにしても、ルカは睨み続けていた。
「どうだか。あんたら、どっかで盗み見ているんじゃないの？」
「そんなことはしないわ。信じられないなら、ナノボットに介入してこの部屋だけをスタンドアローンにもできる。空気中のナノボットを、四〇パーセント減ずればまともに脳波測定は出来ない」
　もっとも、一立方あたりの空間からナノボットが四〇パーセントも減ったら、異常事態として研究員すべてに知れ渡ることだろう。ソフィーヤの声には、そうして異常を関知して駆けつけた所員たちを全て追い払ってやるという響きがこもっていた。
「私たちは」
　と睨みつけるルカに微笑みかけ、
「あなたに無用なプレッシャーや、不快感を与えるたいわけじゃない。あなたが話したくなければ無理に話すことないし、嫌なものは嫌って言ってくれて構わない」
「ホントかよ」

ルカは鼻で笑った。どうせ出来っこない、と高をくくっているようだった。どうせおまえ達は口だけだろう、分かっているんだという風情の。

「それは、信じてもらうしかないわね。私たちがいくらそうだと言っても、あなたと私とではまだ信頼関係なんてないもの。無理はないと思うけど」

ソフィーヤは何とかして少女の懐に入ろうとしているが、ルカ・オベールという厚い壁を突破するのに難航している。少女はソフィーヤを軽蔑するような視線で見下ろす。その、少女の細腕には、無数の細かい傷がついているのが確認できた。

度重なる自傷行為によるものだと知れた。機械細胞がどれほど修復しても、また同じ箇所に傷をつけてしまうので、完全回復を待たずに新たな傷痕がつけられる。どれほど休みなく痛めつければそうなるのか。

ルカが、突然私の方を向いた。予期せず視線がかち合い、少女がますます視線を鋭くさせた。

少女は恐ろしげな視線をどうにかして演出している、という表情だった。切れ長の目に精一杯の迫力を宿してはいるが、少女の、年齢相応の幼さが打ち消してしまっている。それでも彼女の目は、憎悪であるかのような色を帯びているようだった。

脳波測定をしていたのなら、どれほど嫌悪の情に振れていたのか分からない。通常であればヘイトクライムの予兆として、倫理ネット中に嫌悪感が蔓延し、周囲にいる全ての者の脳幹回路に呼応することだろう。その瞬間から、都市警の網膜走査カメラにマーキングされ、問題行動が起こらないか否か監視され、という措置が取られる。カウンセリング目的の診察、そういう名目だからこそ見逃されているにすぎない。

「こんなことは危険ではないですか」

と、ルカの面談が終わった後、私はソフィーヤに提言した。ちなみにこの日のカウンセリングはうまく進まず、彼女と言葉を交わす

ことわずかに三言という少なさだった。
「彼女が嫌だって言うんだから」
「脳波を測らずに行えば、余分なストレスをかけさせても予防出来ません。心理的な負荷状態に晒されればＰＴＳＤの恐れもあります」
「だから負荷をかけさせないためにオフにしたんじゃない。どういう理由にせよ、あの娘が嫌悪しているのは何もフリーサイドに限らない、脳波測定の類が嫌だって言うんなら、あのまま続ければ相当のストレスになる」
「全てに従う必要はあるのでしょうか。悪意を事前に察知するのも脳波測定あってのもの。もし何かしらの暴力衝動があった場合、緊急避難行動をとることも難しくなります。プログラミングを施すならばまだしも、対面式のカウンセリングであれば脳波を測ることは当然であると思われますが」
「それがなければ出来ないっていうわけでもないわよ。そもそもそんなものを必要としない時代の手法だから」
「あなたの身の安全を保証するものです、ドクター」
はたと、彼女が立ち止まった。あやうくぶつかりそうになるところを身を引いてよけたところに、彼女が刺すような視線を送ってくる。
「あの子が不快だってことを、あなたはわざわざやるの？」
「しかしそれによって、彼女の自傷行為を見過ごすことになるかもしれないとなると、看過できる要求ではありません」
ソフィーヤは、少し斜に構えたまま、じっと私の方を見る。スクリーンを固着させたまま所員が三人、私たちの間を通過した。
ソフィーヤがため息をついた。
「だから危険だって言うのね」
「今は」
およそ自らを死に至らしめるということが、私には信じられないのだが、今でも自殺を試みる人間というものは一定以上、いる。その場合でも倫理ネットが有効な予防線であり、自殺願望はネットを

介してすぐに伝わる。
「ネットを切るということは、つまりそれだけのリスクを負うことと
となる」
「分かっている。けどあの部屋には、自らを傷つけるものは何もな
い。それに、行為に及んだら即座に止めるぐらいのことはできるよ。
それに、いつもネットを切るわけじゃない。カウンセリングに費や
すほんの数分間、接続を切ればいいだけの話よ」
「しかしそれでは」
「いいから」
そうやって強引に説き伏せる。いつもの通りだ。

5

「なんだか振り回されてんな、おまえ」
シェン・リーが固着されたスクリーンを叩き、プログラムの演算式を組み立てながら言う。金色の格子に定着されたＤＮＡの塩基配列が、ビット数に置き代わり、数列が構築されてゆく様を呆けたような表情で見つめて、合成飲料のボトルを口につけ、一息ついてから、
「あの先生は、どうにも俺たちプログラマーとは違うところがあるからな」
「違うとは？」
「医者なんだろう、あの人。倫理ネットが構築される前、まだフリーサイドがコンピュータが見せる電位空間でしかなかった時代の人だから、倫理ネットじゃなくて原始的な対面式カウンセリングを経験してきた」
プログラムを組みながら、シェン・リーは業務に関係のない情報をあちこち張り付けていた。週刊ニュースの三文記事とグルメ情報を並列させてプログラミングをする、という芸当はおそらく研究所内ではこの男にしか出来ないことだろう。それでも業務は人並み以上にはこなす。シェン・リー自身、よほど器用な設計をされた世代なのだろうか、あるいは後天的に身につけたものなのだろうか。
「言語による治療が非効率のものであるけど、ああいう上の世代はそれこそが至高のものであるって考えてる節があるからね。だから違うんだよ。俺たちとは考え方が」
「特にそのような様子はないが」
私は画面を閉じた。ルカに関する報告資料だが、何十回と彼女の経歴を眺めても、新しい情報など得られない。
「カウンセリングには倫理ネットが必要ないって言うんだろう。古い考えだ、それは」

「必要ないと言っているわけじゃない。ルカ・オベールにとってはそのほうが良いってことなんだろう」
「でも必要ないって言う。ネットを切るってことがどういう意味なのか、良く分かっていない証拠だ」
「彼女は、それでも経験者だ。彼女に従うより他ない」
私がそういうと、シェン・リーは哀れみめいたような渋面で以て応えた。
「まあいい、もともと俺が口出すようなことでも無し。口出す暇も無し、と」
スクリーン上を流れる行列式と複雑な回路図を眺めてシェン・リーはため息ばかりつく。よほどのことがない限り現れないエラーメッセージに頭を悩ませているようだった。
「厄介なのか」
「ああ、厄介もなにも。今までにない脳波の揺れだ。脳神経に何ら異常はないんだけどな」
今、シェン・リーが向かっている回路は、ここ最近増えている自殺志願者のものだった。性格には自殺を希求しているわけではないが、シェン・リーが受け持つ患者は自らの職も、自由な暮らしもすべてかなぐり捨て、都市の外へと逃げだそうとした、そういう人間のものだ。
都市の外に出たところで、必ず死ぬという保証はないが、都市の中のように必ず生存できる保証もない。完全な治安と完璧な医療を自ら抜け出し、揺り籠を飛び降りようという人間は、自殺志願者と同等であると見なされる。
「都市の外に出たいってなら、申請すれば別に難しいことじゃねえんだけどな。けど、単に都市の外に出ようってな類じゃないんだ、こういう人間はな」
コーヒーをすすりながら、別のスクリーンに触れて、検索単語を入れながら、シェン・リーは時折瞼を押さえた。
「こういう患者がいるってのに、カウンセリングどうこうでうまく

行くってなあ思わんけど」
　そんなことを呟いてスクリーンを叩くと、スクリーン上上に画像が映し出された。
「現実に、紙媒体のメディアってものはほぼ廃れたんだが、古い時代に思いを馳せたい人ってのはいる。で、そういう人用に本というものはまだまだ存在するんだが、この本はちょっと違う」
「何がだ」
「ナツィオへの帰還、ってそれが本の題名なんだが。都市の外に出たがる自殺志願者は、決まってそいつを呼んでいる。どこのどいつが出しているのかわからない地下出版なんだが」
「ナツィオ？」
「生誕の地っていうやつだ。ナチズムの語源にもなっている。まあ人は生まれた地を愛し、民族の為に尽くすっていう古くさい教義だ。都市外縁の民族派ゲリラなんかの考えと似ているんだが、そいつを読んだ人間はなぜか都市の外に出たがっちまう」
「本自体に、何か脳波を乱すものでも？」
「まさか。本は本だ。それに、何か脳に干渉する電波でも出ていりゃ、すぐにわかる。倫理ネットの監視に引っかかれば」
「じゃあなぜ」
「知らんよ。脳波は基本的に安定しているし、今のところはその本を緊急避難的に遠ざけておくってぐらいしかできない」
　シェン・リーはスクリーンを閉じた。終業時刻が近づいて、そろそろ生体分子がオーバーワーク警告を発してくる頃だ。ライフワークバランスの取れない就業は如何なる理由があろうとも許されず、それは都市行政機関であっても変わらない。
「残業ってのは人権侵害だとは思うけど、こういう時ぐらいは認めてもらいたいものだね。全然終わる気配がない」
「非行率なシステムを自ら好んでやることもないだろう。労働が崇高であるとされていた時代の遺物にすぎないものだ。それこそ民族派のイデオロギーと変わらない」

「まあ、そうだな」
とシェン・リーはカップを握りつぶした。オブジェの向こう側に位置する屑籠に投げ捨てるが、見事に外れて床に落ちた。それを待ちかまえていたかのように、円形状をしたクリーナーロボットが床上を滑り、今し方捨てられた投棄物を回収しにくるのを、シェン・リーはぼんやりと見つめていった。
「そういやあの娘も自殺志願者なんだって？」
「ルカ・オベールのことか。はっきり自殺志望とわかっているわけではない。自傷癖がそのまま自殺願望というわけではないからな」
「でも何度か死にかけたんだろ？　両親は生命主義でフリーサイド行きを希望しておいて、子供が自殺志願者になってりゃ世話ないね」
「それは関係ないだろう。親がどうだろうと、子供には子供の思想というものがある」
「しかし、ルカは両親のことは嫌っていないのだろう。フリーサイド側から、両親が彼女を説得するとか、できないのかね」
「フリーサイドから介入することは許されていない。それに、フリーサイドに何らかの嫌悪感情を持っているなら、それは危険だよ」
「とはいっても、自殺志願者。カウンセリングごときでどうにかなると思えないけどね。何せプログラミングでもこれだけ苦労しているんだから」
シェン・リーは、誰に聞かせるでもなく、呟いた。
「何で死にたがるかね」
それは、私にもわかることではない。

フリーサイドの記憶はいつのことか、と問われたらおそらくは否と応える。それは本当に記憶がないのではなく、どう説明して良いか分からないからだ。言語に変換するという行為が、フリーサイドではそもそも必要とされない行為だ。あそこにいる間、快いものだったのかそうでないのか、定かではない。ただ古来から否定されてきた苦痛というものは、まるっきり存在し得ない、それがフリーサイ

ドだ。

フリーサイドには苦痛はない。老いることも、病に伏せることも、死ぬこともない。人間にとっては理想であるはずの世界だった。なにしろ近代の歴史というものは、苦痛を出きるだけ遠ざけることに執着し、快楽を追い求めることを目的としていたのだ。ありとあらゆる意味で人間の行動を縛る神が死に、肉体的苦痛を伴う習慣や儀式は追放され、精神的苦痛を伴う我慢を強いる社会は駆逐された。すべては苦痛から逃れるためだ。

だからオベール夫妻がフリーサイドを希求した理由も、すべて人類の歴史を以て証明できる。オベール夫妻は中産階級の、ごく普通の家庭だった。子供に長いこと恵まれず、人権委員会に何度も養子の申請をしていた。ルカを迎え入れた後、彼らはルカを「まるで我が子のように」かわいがったという。夫妻の間に不仲はあり得ず、また仕事や家庭に何か問題を抱えていたわけではない――フリーサイドの懐疑派は、オベール夫妻のような人間を指さしてさも現世に問題を抱えていたかのようにのたまうが、実はそうではない。ごく普通の、そして都市の福祉と医療の恩恵に預かり、幸福そのものを享受していたような人間がフリーサイドを目指すのだ。まるでそこに行けばより一層の幸福を受けることが出きると信じているように。

本当に幸せになれるのか、否か。それは行ったことのある人間にしか分からない。そういうわけで、フリーサイド世代と呼ばれる私に、良く人は訊ねるのだ。フリーサイドとはどういうところなのか、と。当然、答えることなどできない。

言えることとは、少なくともルカにとっては、フリーサイドは拒否するに値するものだった。システムの異常か、あるいは彼女自身の心の変化なのか。人類が痛みを遠ざけることを望んでおきながら、彼女は自ら痛みを引き寄せ、自傷行為に及んでいる。機械細胞でなければ、死に至らしめる可能性すらあるのだから、シェン・リーの言うように彼女は自殺志願者なのかもしれない。本来ならば自殺を

志願する者は、強制的であってもプログラムを施し、自殺願望そのものを消すことも許されているのだが、如何せんそのプログラムを受け付けないのだから、カウンセリングで原因を探るより他ない。
だが、その間にも彼女の体は、機械細胞に浸食されてゆく。

研究所に入ってすぐに病棟に向かった。重度の精神疾患を抱える者を保護し、リハビリとプログラミングを繰り返すためだけにある棟。そのさらに奥が、ルカ・オベールの収容されている部屋だ。特例としてナノボット散布が三十パーセント以下に抑えられ、カウンセリングの最中は脳波測定すら行われない。人類がかなぐりすてた原始的な、異境じみた診察室に私たちはいる。机を挟んで、ソフィーヤと私が座り、ルカ・オベールと対面する。相変わらず全身に敵意を纏わせ、周りの空気ごと私たちを拒んでいるような雰囲気すらある。細い手足と薄い肩に精一杯力を込めて、威嚇するかのようにこわばらせていた。
「緊張しないでもいいのよ」
あくまでソフィーヤは友好的に振る舞った。患者の懐に入るには、こちらの襟元を開かなければならない。そのためには本来一対一の面接が好ましいのだが、不測の事態に備えて私も同席することになっている。
「そんな構えられると、こっちも緊張しちゃう」
緊張などといっても、脳の分泌量はその都度調整される。厳密に緊張状態に陥ることなどあり得ないのだが、彼女はあえてそう言った。
「緊張とかじゃない」
低い声音だった。ルカはあくまでもそれを押し通すのだというように、うなり声にも似た口調を無理に絞り出していた。ソフィーヤは苦笑いしながら、ガラス基盤のノートを取り出した。ナノボットの少ない場所では、あらかじめ粒子を定着させたガラス端末を用いることがある。ただの一枚ガラスにすぎないが、粒子が脳内回路に

連動して視覚情報を現出させる。
「南フランスってね、私行ったことないの」
　そのガラス基盤に、ソフィーヤは触れた。粒子が流動し――それを肉眼で捉えることはできないが――南フランスの景色と思われる画像を描き出した。青と白、古い町並みと海岸線。空と海が交わる境界線上に、太陽の白色を受けた商船が航行している。リアルタイムの映像だろうか、景色はかすかに動いていた。
「良いところなんでしょうね。十年前、景観保護区となったところで一度旅行に行きたいと思ったんだけど、なかなか時間が無くてね」
「保護区となったのは八年前と記憶していますが」
　私が訂正するのに、ソフィーヤは黙ってガラス基盤を叩いた。すぐに網膜の裏側に、プライベートメッセージが刻まれた。
　曰く、「余計な口挟むな」と。こんなことで少ない回線を使ってもらいたくないのだが。
「別にそんないいとこじゃないよ」
　ルカが、か細い声で呟いた。ソフィーヤがそれを聞き逃すはずもなく、
「そう？　観光地としては人気高いみたいだけど」
「別に。その映像だって、一部だけだし。保護区だとかいっても、ほとんどが似たような光景だって。清潔なビルと塵一つ無いアスファルト。誰も彼も気持ち悪いぐらい血色の良い顔張り付けて、人間がどれほど健康かっていう証明みたいに同じような体つきで歩いていて」
　恨み辛みをぶつける風でなく、嘲りのようなもの。呆れかえったすべてのものに、見切りをつけた風情すらある。露骨に嫌悪感を示せば、まだ対処のしようがあるというものである。なのに。
「あんたもそう。つまんない奴らの一人で、それなのに私についてみんなみんな、可哀想だからなんとかしなきゃって。くだらないことしかしゃべんないんだから、ご機嫌とろうっても無駄」
「うーん、そういうことじゃなかったんだけどね」

ソフィーヤは苦笑して、ガラス基盤の画像を打ち消した。
「ただ、私は都市から出ることってあまりないの。他の都市に行こうにも時間がなくて、まあ確かにあなたの言うようにどこも同じような光景だけど、でも他の場所にも興味あるからね」
「他の場所なら、都市の外がいい」
不意にルカが笑みを浮かべた。口元を不敵に歪ませて、その目には何ら楽しさなど感じてなどなく、むしろ苛烈さすら増す笑みだった。
「私の育ったところのこと、教えてやろうか？　あの夫妻のところじゃなくて、それよりもっと前。ゲリラ村でのこと」
「そんなことは話さなくてもいいわ」
ソフィーヤがルカの身上を知らないわけはなく、当然彼女がそこでどんな目に遭っていたのか、知らないわけではない。
「いいじゃん、そっちの方がたぶん楽しいよ。何にもない都市よりは一杯あって、刺激的だって――」
遮るように、チャイムが鳴った。昼を告げる合図だった。
「その話は」
とソフィーヤはガラス基盤を仕舞って立ち上がる。
「また今度にしましょう。あなたも疲れているだろうし」
ルカの酷薄な笑みが消えた。また元の、何の光も宿さない、鋭さばかりが目立つ無表情に。粒子が一瞬にして形態を変えるよりも早く、戻る。
「じゃあね、ルカ。また来るわ」

6

早々に立ち去った後に、ソフィーヤが訊いてきた。
「どう思う」
「何がでしょうか」
無数のスクリーンを目の前に通り過ぎる所員たちと同様、ソフィーヤは右手で小窓を呼び出して、データを参照している。目は全く前を見ず、それでも誰かとぶつかることはない。その上で私に意見を求めようとは。よくそれだけ器用に出来るものだと思いつつ、私は応えた。
「あの場面で彼女の故郷の話が出てくるとは」
「出来るだけ負担をかけさせたくないけど、普通ゲリラ村なんかにいた子供はそのときの経験を話したくないものなんだけどね。虐待やレイプや、無理矢理に銃を持たされて女子供を撃てと命じられたり、薬を打たされて三日三晩性欲の処理道具にされたりなんてこと」
「詳しいですね、ずいぶん」
「その手の患者は死ぬほどみてきたからね」
過激な言葉や差別用語は、倫理ネットの中にあっては絶えず警告を発せられるものだ。ご多分に漏れずソフィーヤの表現は「悪意的かつ残酷」であるという警告が成されるが、ソフィーヤはお構いなしのようだ。いくら網膜の裏で警告されても、口にした以上はどうしようもないだろう、という様相で、全く意に介す風でもない。
「でも自ら口にした」
円盤型のロボットが足下をすり抜けるのに、躓きそうになった。あの円盤の中央から、毎秒数千億単位のナノボットが吐き出され、円盤の下側からは死に絶えたナノボットを回収して回る。機体本体には、私を生み出したＴＸ社のロゴが確認できた。
「やはり、イデオロギーでしょうか」
「何が」

「つまり、あの子が民族派ゲリラを毛嫌いしているのでなく、民族派のイデオロギーに毒されているがために、フリーサイドを嫌っていたとは」
「何でゲリラ村の話が出ただけでそう決めつけるの」
「決めつけてはいませんが、可能性としてはあるのでは」
「何度も言うけど、イデオロギーに染まっていたら問答無用で厚生施設行きだよ。とても都市住人の養子としては迎えられない」
ソフィーヤはなぜか不機嫌そうに――実際脳波が若干の嫌悪感を示していたが――私を睨み、立ち止まった。
「それと、あんまりイデオロギーの話はしない方がいいよ。いくらイデオロギーっても、全部理解出来ないのに否定するのは、印象だけで判断するのと変わらない。たとえフリーサイドからすれば承伏しかねることでも、軽々しく発言はしないに越したことはないよ」
「お言葉ですが、ドクター」
私はその言葉を絞り出すのに、相当の苦労をしなければならなかった。
「私はフリーサイド側というわけではありません。その発言こそ、印象だけでの判断と取られかねませんが」
「そうね、ごめんなさい。ちょっと苛ついてた」
そう謝罪すると、ソフィーヤは自らを落ち着かせるように、頭を振った。
「疲労が激しいようです、ドクター」
「肉体的な疲れじゃないの、これは。今から人権委員会のロビイストとやり合わなきゃならないから、それでね」
「人権委員会が、ここへ？」
「いわゆる急進派っていう連中。あの子、ルカのような子供をフリーサイドに送り込むべきって主張して、ここの所ずっとその件で呼び出し食らってるの」
「フリーサイド遺児の問題ということですか」
「そ、両親と引き離すことが人権侵害であり、たとえ違法に転送さ

れたものであっても親と離ればなれにするぐらいならば、その子供も転送されてしかるべきということね。法を犯し、法の目を欺いて転送されたものであったとしても、未成年者が親と引き裂かれることは問題なんだって」
「いよいよとなれば」
私は次の予定を気にしつつ、意見した。
「それもやむを得ないのでは。両親と離れている今の状態が良いとは思えませんが、それよりも今機械細胞に置き変わりつつある彼女の身を案ずるなら、一つの選択肢とみてもよいかもしれません」
「でもあの子は、フリーサイドを嫌っている。それを強制執行ってなれば、それこそ大問題よ」
ソフィーヤもまた時計を気にしながら、スクリーンを閉じた。
「体の崩壊は精神的なものだと思うから、カウンセリング次第だけどね。まあそれも、あんたの働きにかかっているけど」
私はそんな大層な働きなど出来ません。そう言おうとしたが、ソフィーヤは時間がないと言って早足で駆けて言った。次のカウンセリングは四時間後、と言い残して。
昼休憩は、そろそろ終わろうというところだった。ほとんどの所員はこの間に食事を採るのだが、私は特にそういったものは必要ではない。朝に栄養分のカプセルを投与すれば、あとはその都度糖を補給すれば事足りる。だから私はこの後すぐに仕事を再開できる。仕事を早めに片づけて、次のカウンセリングに備えておくことができる。
そう思っていた矢先、網膜のディスプレイに緊急メッセージが飛び込んできた。ソフィーヤでなく、精神病棟のスタッフからのものだった。
すぐに私は、精神病棟にとんぼ返りする羽目になった。途中で三人ほどの所員とぶつかったが、気にしている暇はなく、清掃ロボットにつまづきそうになりながらもルカのいる診察室を目指した。

診察室の前で、若い女性スタッフが青い顔をして座り込んでいた。よほどショックなものを見た、という顔だった。彼女が私の名を呼ぶのを待たず、私は部屋に飛び込んだ。

だだっ広い空間の、その真ん中に、ルカ・オベールの小さな体が横たわっていた。細い手足を折り畳むように体を丸め、胎児のような格好で血の中に沈んでいる。少し黒ずんだ彼女の血は、金属分子が混じった粘着質なものだ。彼女の肩を背中を濡らし、その出所は彼女の首筋から流れていることが分かる。

「あの、違うんです。」

女性所員はひどくおっかなびっくりという風に言った。拡張視覚情報が瞼の裏側に現出され、彼女に関する情報が流れた。メイニー・ジェーン、バイオロイドではなく全くの生身の人間。

「違うんです……私は、その、こんなことになるなんて思わなくて、それで」

「そんなことどうでもいい。医療チューブを、早く。出血が多いとさすがに死ぬ」

私が発した死という言葉が、よほど恐ろしげに響いたのか。メイニーが窒息したような短い悲鳴を上げた。幸いにして他の所員が駆けつけ、素早くルカの首筋に修復用のチューブを差し入れた。ストレッチャーにルカの体を乗せ、そのとき、ルカの手に小さなフォークが握られていることを確認した。

「どうしてあんなものが、ここに」

搬送されるルカを見送りながら訊いた。この部屋には、自らを傷つけることのできるもの、鋭利なものは一切置かないように気を配っていたのに。

「あの、食事を……」

彼女は、未だ恐怖から抜け出せないでいる。

「食事を、出したんです。その、あの子何日も食べてないから、所員の食事と同じものを」

「彼女は自殺願望がある。それは知っていたのか」

「本当に自殺するなんて……出したら、いきなりフォークで、喉を……」
軽率な、としかしそれは口には出さなかった。都市に住まうものなら、自ら命を絶つなんてことを本気でやるとは思わない。そんなこと、誰も信じられない。当然のごとく、メイニーもまた。
網膜の裏側に、通信が入った。医療チームからだった。出血が止まり、意識を取り戻したというものだった。あの出血ならば相当な傷だと思ったが、どうやら機械細胞は思いのほかうまく機能してくれたようだ。それを告げると、メイニー・ジェーンはようやく落ち着いたようだった。パニック症状に揺れていた脳波が、平静を取り戻し、それに合わせるように彼女はへたり込んだ。まだ少し、息が上がっていた。
「ごめんなさい、あの私……」
「いいから、君は休んでいなさい」
メイニー・ジェーンは自らの至らなさを責めているようだった。あまりにも自己反省が強すぎると、鬱状態になりかねないので、ショック状態が強い場合は休養を取らせることが定められている。
「君だけが悪いわけじゃない。誰もそんなことになるとは思わないから、私だって本当は思っていなかった」
ルカの流した血のあとを見た。血液中の分子が凝縮し、砂状の物体を形成した。本来の血と異なり、金属分子を含んだ血漿は体外に放出されたら瞬く間に凝結する。生体内を補修するためにある分子は、それを離れたら単なる鉄の粒子に過ぎない。指先でつまんで見ると、一掴みの鉄がぼろぼろと崩れた。
ソフィーヤから通信が入るのに、時間は掛からなかった。
倫理ネットが、少ない粒子の中でどのような情報伝達を行ったのか分からないが、ともかくルカの自殺未遂が所内に広まるにはそれほど時間は掛からなかっただろう。彼女が三又の食器で喉を突き破ってから十分後、ストラウスが怒鳴りこんできた。

「説明をしてもらおう、１２（トゥエルヴ）」
いや、怒鳴りこむというほど威勢の良いものではないが、明らかに怒りを湛えた目を向けて、それをわざと内に抑えていた。
「お前の乏しい語彙で成せることかどうかは疑問だが」
「説明、要るでしょうか」
そんな必要などないほどに、メイニー・ジェーンの意志は伝わっただろう。それともルカの意識が途絶えるのが先だったか。ストラウスは、威嚇のためだけに作ったとしか思えない皺をさらに深くさせた。
「君の監督責任能力を疑うな。彼女が自傷癖があると、わかっていたはずだ」
「重々承知しています。私の判断ミスです」
「そのようだな」
ストラウスが皮肉めいた視線でルカの流した血のあとを、たっぷり五秒間眺めた。自ら凝固した血液に触ろうとはせず、代わりに靴の踵で踏みつけた。
「医療チームから出血は止まったという通信が入りました」
「当たり前だ。この施設内で死人が出ることは、それは絶対にあり得ないことであり、そのあり得ないことがあればそれは施設の存続が未来永劫あり得ないということだ。先の脳波の乱れが、人権委員会の脳髄に届き、一時的にショック症状に陥ったというのも、またあり得ないことだ。ここでは絶対にあってはならないことを、おまえの不注意で引き起こした」
そのとき、ちょうどストラウスの背後に影が立つのを確認した。静かに怒るストラウスをたしなめるかのような、ソフィーヤ・テテリナの迄然とした声音が響いた。
「システムの不備です、所長」
まるで存在を予測していたように、ストラウスが振り向いた。そうは言っても顔を半分傾け、視線だけを寄越すだけで、ほとんど注意を向けた風には全く見えない。

「何故、所員用の食事が配膳される」
「現場の判断では、防ぎ切れません。自殺をするなんてことは、誰も予想出来ないのですから。彼女の食事は、当分の間チューブに切り替えるべきです」
「倫理上の問題は無視してか」
「全責任は、私が。それよりも所長、人権委員会がお見えです」
ストラウスは冷めた目で見つめた。すべてにおいて関心を失ったかのような目の色をしている。一瞥し、それ以上何も言わず、そのまま部屋を出た。何一つ未練などないというように。
果たしてソフィーヤが脱力するのがわかった。
「あのオヤジ」
とソフィーヤは髪をかき上げ、
「それで、本当の所は誰が配膳したの」
「申し訳ありません、私が――」
「誰が、って訊いているんだけど」
メイニー・ジェーンの名を出すのが、一瞬ためらわれた。彼女が直接出したものであっても、それを確認しなかった私に責任がある。この場の監督責任は、私にあるのだ。
私の意図が伝わったのか、ソフィーヤは微笑んで言った。
「別に糾弾したいわけじゃないよ。この事態を引き起こしたのは私のせいだし、その責めを転嫁する気はない。でも今度から気をつけてもらいたいから、ちょっと注意するだけ」
「注意でしたら、後の方がよろしいかと。自殺未遂の現場を見てしまったので、医務室で休ませています。心的ダメージによっては、修正プログラムを施さなければならないかもしれない」
「そう。じゃあ後にするわね。どのみち、後で調べればわかるし、それにもっと厄介な案件を抱える羽目になったから」
「人権委員会ですか」
ソフィーヤは、お手上げというように首を竦めた。
「ちょっとタイミング悪かったかもね。嫌悪のパターンが、一時的

にせよ所内に広がっちゃったから。大抵の人はそれで影響されるってことはないんだけど、委員の連中って皆そういうのに敏感だから」
　果たしてどちらの意味で「敏感」と言ったのか。倫理院の中には、わざと脳波プロテクトの基準をゆるめる者もいる。突発的にしても嫌悪感情は起こりうるものであるが、それに身を晒すことで倫理性をアピールしているのだ。完全な倫理社会が実現されていれば、他人の脳波に影響されることなどないなどとして。
　そういう彼らは、比喩でも何でもなく「敏感」だ。
「ショックで倒れたというのも、そういう事でしたか」
「そんなの自己責任だろうって話だけどね。まあ信念のために命を晒す覚悟はご立派だけど」
「それで、その方は」
「もう気がついたよ。それで、いたくご立腹で所長を召集って算段だよ」
　それほど驚いた顔はしなかったのだが、彼女はいかにもといういたずらめいた笑みを浮かべた。
「方便だと思った？　あんたを救うための」
「いえ、ただあまりにもタイミングが良すぎたので」
「世の中そうはうまく行かないよ。まあ、もうちょっとあんたの困惑ぶりを見ていても良かったけど、そういうわけにもいかないからね」
「別に困惑などは」
「明らかに動揺してたけどね。近年希にみる慌てっぷり。あんたのあんな顔見たのは、後にも先にも私だけだろうね」
　困惑という定義に当てはまることなど何もなかったと思ったが、彼女からすればあれでも立派な「困惑」であるらしい。一人で納得して、一人で笑い、それでも彼女の言うことを逐一訂正するの気にもなれないのでそのままにしておく。そうやって、いつの間にか彼女の制御下に置かれ、彼女のペースに引きずられることとなる。それに違和感を覚えることすらなくなった。

「それで」
私は話を切り替えることにした。
「ルカ・オベールの面接は、どうするのですか」
「目下の問題はそれよね」
彼女は急に真顔になって、
「あんなことになったすぐ後に、じゃあやりましょう、ってわけにもいかないだろうし」
「通常、自殺未遂者に対するカウンセリングはどれくらいの時間を置くのですか」
「自殺しようって人がここ数年いなかったんだから、わからないね。でもまあ、最近の脱走騒ぎなんか見ていると、時間なんかかけるだけ無駄って感じだけど。保護したら有無を言わさず脳を調べられ、プログラムを施す」
都市外へ出奔する、間接的自殺者。施設内ではそういう位置づけだった。直に刃物を突き立て、命を絶つのではないにしろ、都市の空気に慣れたものが外縁に出て生存出来る確率は限りなく低い。故に、間接的であるにしても、自殺者と同じに分類される。
「では、ルカも同じように、傷が癒えたらすぐにでも」
「そう簡単にいかないよ。強引にやって、警戒されたら何も話してくれなくなる」
「強引さがあなたの信条かと思っていましたが」
「そんなわけないだろう」
そんなやりとりをしながら、彼女は廊下を曲がった。彼女の診察室は別棟なので、直進しなければならないはず。ソフィーヤは私に、ついてこいというように顎をしゃくった。
「実はね」
彼女は少し、申し訳なさそうな困惑の色を成した。
「私らも呼び出されてんだよ、本当は」
「呼び出される、といいますと」
「人権委員会に。担当のカウンセラーから話を訊きたいってさ」

「それなら、そうと仰っていただければ」
「言い出しづらかったんだ。まあともかく、もうちょっとの間つきあってよ」

7

所員の服装、建物の内壁、外観に至るまですべて白を基調とする研究所内では、かなり目立つ格好をしている。黒いスーツの女性が目の前に立っていた。実際はナノボットに投影された虚像であり、オンラインの映像に過ぎないのだが、実際に目の前にいるとそこにいて、立っている、という表現の方が当てはまりそうだ。

女性の胸元に光る徽章が、如実に語っていた。ハーブの葉と翼、平和と協調を表す人権委員会のロゴマークが燦然と輝く。自らがルールであるというような自信に満ちた視線、その目が私たちの方を向くのに時間はかからない。

「わざわざ視察ご苦労様なことですね」

いきなりソフィーヤが仕掛けた。自ら仕掛けることでこちらの不利を打開しようとい意図すら見える。

女性が薄く微笑んだ。網膜の拡張視野が、金色の線形と文字列を弾き出し、女性についての情報を提示した。レイラ・アードニーという名が提示され、人権委員会のシアトル支部在籍であることを報せる。拡張視野の情報は、プライベートなこと――家族構成、趣味嗜好、ブラッドタイプ――以外のことは粗方表示されるのだから、自己紹介の必要がない。

「オンラインといっても、倫理ネットの接続を切らないのはポリシーですか」

ソフィーヤが言うのに、彼女――レイラ・アードニーは薄ら笑いを浮かべた。

「そうね。今思えば、でも切っておいても良かったかもしれないわ。そのためにスタッフが一人倒れたから」

拡張視野に、また通信が入った。ソフィーヤからのプライベートメッセージ。曰く、「イヤな奴」と。

「ここのシステムは万全だと思っていたから、当然あんなことにな

るとは思っていなかったけど」
「万全なシステムというものはなかなかないものですよ、委員」
傍らのストラウスが多少呆れたような視線を送る。万全であることが、この研究所には常に求められることであると、そのように訴えかけるかのようだったが、ソフィーヤはお構いなしに続ける。
「患者は自傷癖がある、ということは分かっていたことでしたが、ここの所員には伝わりづらいところがありました。人が自ら命を絶つ、絶ちうるということを現実のものとして受け止められない。その理解があれば、未然に防ぐことが出来たでしょうが」
「そう、現実として受け止められない。現実に、自殺者はいないはずだから。でも不測の事態に対処するのも、あなたたちの責務でしょう」
「ええ。私自身、見過ごしておりました。倫理院のカンファレンスでは、自殺という現象を教えないのだと知っていなかったために。そして情報の収集を怠ったのはほかならぬ私です、反省しております」
レイラ・アードニーがわずかに顔をゆがませた。唇が少しだけ痙攣するかのようだった。ナノボットの作り出す立体映像は、どんな些細な変化でも走査し、転写してしまう。
「行為そのものの存在は」
不機嫌さを隠そうともせず、レイラ・アードニーは続けた。
「教えないということはありません。自殺を未然に防ぐのに、自殺という現象を知らずして理解など出来ない」
「当然、私のスタッフも全員、自殺の可能性があると理解していました。しかし、どこかでそんなことは起こり得ないと高をくくっていたように思われます」
「教育不足だというの？　こちらの」
おそらく倫理教育の大本であり、基本ともいえる倫理院のカンファレンス――それに苦言を呈するということは、いくら言論の保証がされていてもなかなかやらないことだ。誰もが、倫理院のするこ

とは完璧で穴などない、と信じているのだから。
「いいえ。起こった事故は、監督不行き届きです。そのことは如何様な処分も受けます。しかし、今後の参考のためにと思いまして」
ソフィーヤは、どうやったらここまで挑発的になれるのか、という笑い方をする。完璧に作りものめいていて、次に口を開けば何を言い出すのか分からない、得体の知れなさを感じさせる。
「まあ、いいわ」
ややあってから、アードニーが言った。ため息をついて、
「どのみち、この騒ぎで我々も教育の不備を感じていたところだから。自殺なんて過去のものって、そんな意識だったのは認める」
「騒ぎとは」
私は訊くが、しかし答えなど求めるまでもなくすべて分かりきったことだ。レイラ・アードニーは果たして、私の予想通りの回答をする。
「脱走者が、これほど多いということは。いえ、脱走者自体がそもそも例がないことだから」
「脱走したからと言って、自殺願望がある、とは決まらないのではありませんか」
シェン・リーにぶつけた質問と同じことを訊いてみるが、これもまた予想通りの答えを聞くだけだった。
「市民は、都市を離れては生きていけないわ」
そしてそれは真理でもある。生体分子による体内監視は、外縁に行けば通用しなくなる。逐一健康状態をモニタリングし、恒常性を保とうと運動する生体分子は、ネットの通じない荒野では単なる分子でしかなく、病巣の発見は著しく遅れる。常に生体分子の恩恵に預かる市民が、都市を離れたらどのような状態になるか。それはまだ誰も試したことはない。試したことはないが、今より良くなるとはどう考えてもありえない。生命を維持する装置としての都市なのだから、そこを出ればそれだけ死に近くなることは明らかだった。
「しかし、それを分かっていながら都市外へと出たがるのは」

「あの本の、影響ですか？」
ソフィーヤが口を挟んだ。隣のストラウスの表がいっそう強ばった。それは無理もなく、私も一瞬身が締まる思いがした。
「ナツィオへの帰還。そういう題名でしたね。今時珍しいデッドメディア、私も幼い頃に見た記憶があります。本という……ああ失礼、委員の世代ならばお詳しいでしょうね」
名誉毀損で訴えられても文句は言えないことを、ソフィーヤは何の躊躇いもなく口にした。レイラ・アードニーの整った顔が、ますますひきつった。もっとも美しいとされる二十代から三十代の容貌にデザインされた、八十歳の委員。
「あのようなイデオロギーに満ちたものは、読んだことはないですよ、ドクター・テテリナ。ついでに言うと、その発言をまた繰り返したら委員会に報告します」
「失礼、委員」
まるで悪びれもせずソフィーヤが一応の謝罪の言葉を述べた。本当に謝罪の意志があるのか、かなり怪しいものだった。
「あの本は」
レイラ・アードニーはすっかり諦めたというように頭を振った。
「調べてみたけど、何も仕掛けはないわね。読んでみたけど、やはり何があるというものじゃない」
「委員は読まれたのですか、その本を」
私が訊いたときだけ、レイラ・アードニーは口調を柔げる。
「読んだわよ。大した内容じゃなかったんだけどね。ただ自説を書き散らしたという印象で。でも情緒的表現が多くて、論文というより詩編でも読んでいる感じだった」
「主張とはどのような主張なのでしょう」
「人は生まれた故郷を愛し、故郷のために死すべきっていう。たとえ離れていても、死ねば必ず故郷へと帰る。そんなことを延々と。とても全部読んでられなかったわ、退屈すぎて」
レイラはそう言って笑った。

「しかし、あなたが退屈であったとしても、脱走した市民にはそうでなかったのでしょう」
「だから、あの本は一応回収することになったわ。都市警に協力を要請して、まあ特に影響なさそうだけど出版元を抑えるようにって。でも地下出版だから、探し出すのには時間がかかるけど……どうかした？」
レイラは怪訝な顔でのぞき込んできたのに、私はうつむき加減だった顔を上げる。
「何でしょう」
「いや、何か思い詰めたような顔したから」
思い詰めたことなど何もないが、実際に都市警と聞いて心に掛かるものがあったのは確かだ。脳波が揺れたか、あるいは表情がさえなかったのか。だが、あえて話題にする必要もないのでこう答える。
「何もありません」
「そう。ならばいいけど。まあ都市警が好きな人ってあまりいないからね」
一人で理由をつけて納得し、彼女は向き直った。
「自殺志願者に対する対策はこちらとしても行う。でも彼らのケアは、あなたたちにしか出来ない。だから今後、このような事態にならないよう」
「肝に銘じます、委員」
ストラウスが答え、ソフィーヤが形だけ同意したように首肯した。全く適当な受け答えだ。
アードニーの姿がぼやけた。輪郭が溶け、曖昧になり、粒子が静かに瓦解してゆく。頭の先から、像が砂となってこぼれ落ち、空間と同一となるように掻き消えた後には、会議室の白壁が迎えた。
「だから私は反対だったのだ」
いきなりストラウスが言った。呼び出すのが、ということなのだろう。激昂しているようでもあり、諦観しているようでもある、苦々しさをこらえた口調で。

「担当のものを呼ぶというのは彼女の発案でしたか」
ソフィーヤはもう、今までのやりとりなど忘れてしまったかのように振る舞う。まるで堪えていないようで、実際堪えていないのだ。叱責を受けて落ち込む、ということが彼女にはない。
「あの女は、私が担当しているって分かっていたから呼び出したんですよ。嫌味を言いたいがために。だから問題ありません」
「そうだとしても、君の態度はあまり道徳的とは言えないな。あのようなこと、看過するわけにはいかない」
「気をつけます」
ソフィーヤはそう言うと、
「では所長。私は業務に戻りますが」
「そうしてくれ。二度とこのような失態を晒さぬようにな」
最後に皮肉一つ吐いて、ストラウスは退出した。ソフィやは一つ伸びをして、首を回した。
「何か肩凝っちゃった、ユーリ。ちょっと揉んでくれない？」
「私の業務に、そのような事項は含まれていませんが」
「そんぐらい良いじゃない。あの女の相手して、疲れちゃった、私」
「整体の経験はありません。それに、筋肉の凝りなどは循環回路が働けば直に解消されます。特にそのような行為をする必要はないかと思われますが」
「かったいね、まあいいけど」
事実を口にした途端に文句を言われるという希な事態に面食らうが、それよりも私は訊きたいことがあった。
「ドクターは、あの方と知り合いなのですか」
「あの方って」
「レイラ・アードニー委員のこと、ご存じのようでしたが」
「ああ、あれね」
彼女は記憶をさぐるように目線を上にやり、少ししてから答えた。
「大した知り合いじゃないよ。つまり倫理院のときに、彼女が上司で私が部下っていう。その程度。その後、彼女が委員会に配属にな

って、私がここに来た。当時からやたらと私に突っかかって来てたけど、まあこういう形で再現されるなんてね」
廊下を歩きながら、ソフィーヤの脳波が少し嫌悪に傾いているのが分かった。嫌悪のレベルによってはヘイトクライムを引き起こす可能性ありと判断されるが、今のソフィーヤの心境はそれほどの嫌悪ではない。
「フリーサイドの推進派なんだよ、彼女」
唐突に口にした。私が返答しかねているのに、ソフィーヤはいたずらぽく顔をのぞき込んだ。
「なんであの女が嫌いかっていうとね、あの女は委員会の中でもかなりの急進派でさ。フリーサイドの規制緩和を求めているのよ、政府に。もちろん彼女のような立場は委員会でも少数派だけど、彼女はフリーサイドこそが理想郷って思っているみたい」
「理想郷、ですか」
随分と文学じみた言い回しだが、確かに推進派はフリーサイドを理想郷のようなものと思っている。諍いもない、病もない、老いることも、死ぬこともない――人類が目指したものがそこにあるのだから。
「では、あの方もいずれフリーサイドに？」
「そのつもりなんでしょ。でも、フリーサイドが出来た時も、それが公認となった後も、彼女はフリーサイドに行こうとしなかった。ホルモン治療と遺伝子導入で若返って、分子量を増殖して、他の都市住人と同じようなことしかしなかった。なぜだと思う？　本人は、都市住人を啓蒙するために残っているとか言っているけど、フリーサイド側からだって、こちら側にアクセス出来る。自ら率先してフリーサイドに行って見せて、あっちの方から啓蒙すればいいだけ。それなのに、なんでさっさと転写しない？」
そんなことを訊かれても、所詮個人的な事柄なので分かるはずがない。私が黙っていると、ソフィーヤは私の思わんとしていることが分かったのか、一人で勝手に答えを出した。

「本当は行く気なんてないんだよ。こっちでよろしくやりたいって訳さ。今の役職を手放すことなく、都市の中で快楽を享受し、中途半端に延命措置を取っているのも今の生活を失いたくないから。あの女、フリーサイドが理想郷だって口ほどには思っていないよ。寿命が来てどうしようもなくなったら、じゃあそのときに行けばいいやって。そう思っているはず」

「何か、特別な事情があるのでは？　現時点で審査が厳しいと聞きますが」

「委員会だよ。いくら規制されていると言っても、現状で認可が下りないってことは、まず無い。自分は後込みしていて、それで他人には是非ともってフリーサイド行きを薦める。我が身可愛さで口だけの人間は、ちょっと好きになれないね」

仕事が残っているから、と言ってソフィーヤは診察室へと向かった。今の話を誰かに聞かれていないかどうかと周りを確認しつつ、私も業務に戻ることにした。

スクリーンを開いた時に、ソフィーヤが言った言葉が、耳に残る。フリーサイドは理想郷。しかし、そのように公言する人間が、フリーサイド行きを躊躇している。だが、躊躇するのも仕方がないように思えた。所詮、フリーサイドがどう言うところなのかは、情報としてしか誰も知らない。実際に行ったものがいないので、どのような場所か、正確に想像できるものなどいない。

圧倒的に未知な世界だ。未知であるから、私のような少しでもフリーサイドに関わりのある者に訊いてくる人もいるが、残念ながら私も正確には覚えていない。ちょうど人が、胎内にいる状態を思い出せないように。そうなれば、躊躇するのも無理はない気がした。

もしかしたら、ルカがフリーサイドを忌避する理由はそこにあるのかもしれない。ふと、そんなことを思った。未知の状態を想像することは難しく、それ故に恐怖を感じるのだとしたら、それは生物の本能のようなものだ。そう簡単に直るという類のものではない。

だが一方で、その未知のものに強烈な憧れを抱く者もいる。彼ら

は未知のものを恐れず、それどころか違法業者に委託してまで、フリーサイドを希求する。
ただ、ルカの場合は特別だ。フリーサイドを嫌悪するだけでなく、自らの体ですら嫌悪する。命を投げ出し、身を削り、その行為すべてがフリーサイド行きを拒むがためなのだろうか。
網膜が警告表示を出し、終業の時刻が迫っているのに気づいた。所員たちがあわただしく帰り支度を始めていた。少しでも終業時刻をすぎると、それだけでペナルティを課される可能性がある。
周囲に倣い、私もスクリーンを閉じた。駐車場につく頃には、すでに所内には殆ど人がいなくなっていて、早く帰れとせき立てるように円盤状の清掃ロボットがフロアを周回していた。日中は人であふれているオブジェの周りには、気配すらしない。ナノボットに投影されたアナログ表示の時計画像が見下ろし、長針の位置が零を指す頃、私はフロアを出た。

8

「フリーサイドの急進派なんて、実は少ないぜ」
とシェン・リーは金色の液体を飲み干した。かつて健康主義者と文化擁護者たちの対立を抑え、一応の妥協点として提示された疑似アルコール溶液は、ビールといわれる古い時代の酒に加工されてシェン・リーの持つグラスに注がれている。蒸留酒であってもカクテルの類も、すべて疑似アルコールで作られ、それは本来の意味でのアルコールとは一線を画する。決して体内に蓄積されず、瞬時に分解され、体に与える影響は皆無。酔う感覚は微々たるものの、酒類としての用途は果たす。まさに、「夢の飲料」――そんなキャッチコピーを思い出す。
シェン・リーのグラスはもう三杯目だったが、私はというと杯を舐めるように飲んでいるので、まだグラス半分しか進まない。
「急進派って、そもそもがその時代の少数派なんだから当たり前だろう」
私が言うのに、シェン・リーはグラスの酒を一気に飲み下した。
「そうだが、けれど世間ではそう思われていないみたくてな。フリーサイドは理想郷である、ってそういう考えが主流であるって思われてるらしくて」
「しかし大半は慎重派なのだろう」
私はようやく、疑似アルコールのビールを飲み終えた。バーカウンターの横にあるパネルに触れると注文画面が投影され、少し青みがかったスクリーンが空間に描かれた。清廉さと静けさ、格調高い空間を演出するという名目で、店内は寒色系の調度品に統一されている。それにあわせて、ナノボットも全て青系統の色合いでもって投射される。
「中産階級なんかをあわせると、そうだな。だが富裕層ともなれば、そうでもない。この世のあらゆるものを手に入れたような人間が、

次のステージにねらいを定めるのがフリーサイドだ。そういう人間が率先してフリーサイドを目指す」
「ルカの両親は、特に富裕層というわけではないようだけど」
「もちろん、中産階級にいないってことはない。というか、富裕層がこぞってフリーサイドを目指している。そういう奴らが、フリーサイドは理想郷だ、って宣伝するわけだ。そうすると、少なからずそれを信じてフリーサイドに行く人間が増える。違法業者が減らないのもそのためだ。連中、どれだけ取り締まっても志願者がいる限りは活動し続けるよ。それならばいっそ規制緩和しちまおうってことで、急進派というかフリーサイド推進派が勢いづくって、つまりそういう寸法だ」
シェン・リーは少し酔っているように見えた。普段から饒舌であることを誇りにしている彼が、酒を口にすればより饒舌になる。本物のアルコールが追放されてから、脳を麻痺させるほどの酔いとは経験し得ないものとなっていたが、シェン・リーにはそれは当てはまらないらしい。
「少し飲み過ぎたか」
私が言うと、シェン・リーは嘲笑じみて笑う。
「飲み過ぎたところで体に何の負荷もかけない。飲み過ぎたって、こんなものはただの液体だ」
「そうだが、何だか様子がおかしいからさ」
「気にすんなって、いつものことだ。明日からまた一ダース分の更正プログラムを打ち込まなきゃならないんだ、ちょっとぐらい発散してもいいだろう」
その発言は、ストレスをため込むということが無い人間には不自然であったが、私はもう訂正してやろうという気はなく、カクテルを傾けた。
店を出て、メインストリートに至る。空中で描かれる、ナノボットに投影されたアナログのオクロックと、広告ビジョンが出迎え、

ビルの合間で瞬き、変化し、金色の格子が形を変えて白色の文字が赤紫へ、青緑と白銀に縁取られた画面がＴＶＣＭを写し、三次元投射されたネットアイドルを浮かび上がらせる。アメジストじみた破片が飛び散って、また収束し、複雑な螺旋を描き出すのを見ながら私たちは通りを横切った。

「ところで、話は変わるけどユーリ」

シェン・リーが何かに気づいたように道の向かい側を見やる。私も同じ方向を向くと、派手に着飾った女達とスーツ姿のホワイトカラーに混じって、明らかに場違いと言える格好をした人間を目にする。研究者然とした白衣を羽織り、胸のプレートに生化学研究所のロゴマークが刻まれていた。

「メイニー・ジェーン」

情報を取る必要はない。昼間の一悶着の後に顔を合わせて以来、何となく覚えていた。

「知り合いかい」

「そういうわけじゃないが。しかしこんなところで何をしているんだ」

「プライベートな詮索はなしだぜ、ユーリ」

若い女性が一人でこんなところに来るのには訳があるはずだから、あまり口を出すなというところだろうが、それにしても彼女の姿はあまりにも場所にそぐわない。仕事が終わったそのままの格好で、こんな所に来るだろうか。

メイニー・ジェーンの姿が人垣の向こうに消えた。殆ど人波にさらわれたような印象だった。

「すまん、シェン・リー。今日はここまでだ」

「ここまで、ってどういう――」

シェン・リーが訊くのにも答えず、私は信号が変わるのを受けてすぐに大通りを走った。後ろからシェン・リーが声をかけるのにも振り向かない。なぜか胸騒ぎがして、このまま見失うことが躊躇われた。

人波を押し分け、路地裏に入った。メイニー・ジェーンが消えた辺りを、拡張視野を使って探す。すぐにメイニー・ジェーンの生体分子から発せられる情報が、倫理ネットを介して飛び込んできた。

いきなりの警告表示。私ではない、メイニー・ジェーンの信号だった。出血の過多を示すエラーコード、不思議に思っていると足下を野外用の清掃ロボットが駆け抜けた。もう一台、足の間をすり抜けるのに、私は足を取られそうになる。また一台、アスファルトごと削り取りそうな固いブラシを回転させながら、わざわざ狭い路地裏に集結する。

同胞（はらから）とも言えるＴＸ社の清掃ロボットたちが、ビルの谷間に数台群がっていた。よほど大量のゴミが投棄されなければあり得ない量だった。円盤たちが、奥の方でしきりにビープ音を慣らし、地面をブラシで削り、行き来している。その円盤たちの真ん中に、黒々とした影が横たわっているのが見えた。

近づいた。いきなり血の匂いがした。むせ返りそうになりながら、円盤たちをよけつつ、影の正体を見た。果たして、研究所の白衣と胸のプレートを見、長い髪が血の中に沈んでいるのがわかる。血の出所は首筋、その人物が握っているガラス片が致命傷になったらしい。透明な欠片が血で黒く染まっている。まるで胎児のように体を丸めた姿。

すっかり生命活動を停止した、メイニー・ジェーンの亡骸が、そこにあった。

今までは都市の外に出奔する程度だったが、それすらも未然に防がれていた。それが、本当に自殺者を出したとなれば、当然騒ぎにもなる。自殺が禁止されたカトリック全盛の中世ほどでなくとも、都市の中で自殺者が出ることがどれほどこの倫理的な都市機構であり得ないことなのか。まして、倫理院直属の研究施設に属するスタッフが死んだとなれば、それが何を意味するのか。

今まで通りとはゆかなくなる、それは明らかだった。

都市警に通報して、その瞬間に倫理ネットに私の感覚――恐怖よりもまずは驚愕、続いて疑念。悲哀は殆ど無い――が伝わり、周囲の通行人にも伝播してしまったらしい。メインストリートはパニックになってしまった。そのぐらいで取り乱すのならば、実際に死体を見たらショック死するのではないかと思ったが、さすがにその辺りの配慮はされていたらしく、都市警が駆けつけるとすぐに現場付近が封鎖され人々が決して死体を見ないように配慮された。

私はというと第一発見者ということで、当然あれこれ訊かれるだろうと覚悟していたが、そうでもなかった。都市警の一人――若い警官だ――が近づき、私に告げた。

「あなたが、見かけたのですね？」

尋問するようではなく、丁寧な応対だった。警察などはそれだけでも暴力装置としての性格を帯びているため、市民に対する態度は特に威圧的にならないよう、徹底的に教育されている。

「偶然ですよ。私が来たときには既に」

「ええ、わかります」

何が「わかる」というのか疑問だったが、彼は特に説明せずに続けた。専門の機関でＰＴＳＤの検診を受け、場合によっては脳神経プログラムを導入した方が良い、この件についてはあなたの身の潔白はすでに証明されているから、気に病むことはありません、等々。相手も拡張視野を持っているのだから、私がそのプログラムを作る側だということが分かっているはずなのだが、そのようなことはおくびにも出さない。教育がしっかりされている証拠とも言える。

簡単なデータの交換と、やりとりだけでその日は終わった。第一発見者なのだからもう少し拘束されるかと思ったが、拍子抜けするほどあっさりと帰された。とはいて、もし何かしらの事件性があれば後々呼び出されるのだろうとは思えた。

9

所員が自殺したというだけあって、所内は騒然としており、第一発見者である私ももまた質問責めにあうこととなった。なぜ、彼女は自殺したのか。何か思い悩んでいることはなかったのか、どうしてこんなことになってしまったのか、等々。疑念や嘆き、中には私を責める声もあったが、それは本当に少数で、多くは私には同情の声が集まった。

気を落とすな。気に病むことはない。あのタイミングでは、誰だって見落とす。自分を責めることはない、などと。私自身、気に病むことなどなかったのだが、所内での私の位置づけは不幸にも同僚の自殺を止めることができず、血を見てしまって精神的に落ち込んでいる可哀想な奴だと、そのように伝えられているのだから私も特に訂正することなくその地位に甘んじる。

もちろん、そのような同情ばかりしている訳にもゆかず、私は出勤してから三時間後には所長室に呼び出されていた。部屋に入ったとき、シェン・リーと、なぜかソフィーヤも呼び出されたらしく、ストラウスの横にたっている。

「都市警によれば」

ストラウスは大柄な体をゆすって、私に向き直った。

「検死した結果、自殺が認められたそうだ」

「私への疑いは晴れたのですね」

バイオロイドは決して人を殺すことが出来ない。そう分かっている上での確認だった。ストラウスは薄い眉をしかめて、

「力の掛け方も出血量も、一人の力で切り裂くには不自然な切れ方だったそうだ。普通の人間はいきなり自分の首を切るなんてことは出来ないから殺人が疑われたが、傷に対する破片の角度がどう見ても自分で突いたとしか言えない角度だということだ」

ということは、通常誰かを刺し殺すぐらいの力で、メイニー・ジ

ェーンは自らの首を突き刺したということになる。それはそれでかなりの力が必要と思えた。
「自殺者の心理を思えば、ためらい傷が出来てもおかしくないんですが」
ソフィーヤが疑問を口にする。
「何者かに脳の侵入を許したかもしれません。神経回路を一時的にでもハックすれば、そのぐらいのことは出来るかも」
「侵入の痕跡は見受けられないそうだ。ただ」
ストラウスは珍しく、言いよどんだ。これから話すことがどれだけの影響をうけるのか、計りかねているような口調で、
「ただ、本当にあの所員の意志であるのか、ということは分からない。何かしらのイデオロギーに毒されていたということは考えられる」
「と、言いますと」
「例の本だ」
私が訊くのに、ストラウスは掌を空中にかざした。右手の中心部に、ナノボットの光源体が集中して、青白い光が生まれた。無数の粒子がより集まり、やがてそれは立体映像へと形を変える。青い色が、くすんだ茶色に代わり、長方形の形を成したそれは、一冊の本となる。デッドメディアとなって久しい紙媒体の記憶装置に像を結んだ。
「これが、自殺した所員の自宅から発見された。何か分かるか」
「ナツィオへの帰還」
とソフィーヤが、英字文体のタイトルを読み上げた。
「今をときめく、イデオロギー書ってやつか」
シェン・リーは、ことの深刻さなどまるで意に介さないというような軽口を叩く。
「都市から脱走する自殺志願者が読んでいたっていう。本当に自殺してりゃ世話ねえな」
「あまりなめた口聞くんじゃないよ、シェン・リー」

とソフィーヤ。少し厳しい口調で、それ以上言ったらただでは済まさないという気迫を込めている。
「でもこれではっきりしたじゃないですか、ドクター」
シェン・リーは肩をすくめて言う。
「この書が、つまりはそういうものだってこと。脱走者は自殺者と違うっても、この本を持っている人間というのはやはり自殺願望があって、現に自殺しているって」
「そういうことになる」
ストラウスは画像を消して、私たち一人一人の顔を見て言った。
「こいつにどういう仕掛けがあるか分からないが、都市政府は既にこの本の出版差し止めと回収を決めた。地下出版であるから、出所を突き止めるのは難しいだろうが」
「実物はあるのでしょうか」
私の質問に、ストラウスは怪訝な顔をした。
「そんなこと聞いてどうする」
「いえ。この本にどのような仕掛けがあるのか、調べた方が良いと思いまして」
「それはお前の仕事ではない、１２（トゥエルヴ）。人権委員会は、この本についての閲覧を一部までと限定している」
「ではこれは」
どうみても原本をスキャンしたとしか思えない仮想立体を指で弾いてみる。紙の感触は得られず、ただ指を圧迫するような感覚がある。神経と連動しているときの電気刺激にも似た。
「現物をコピーはしているものの、すべてを読むことは出来ない。当然、一部には規制がかかっている」
「読んだら死んじゃいたくなるから？」
シェン・リーはどうすれば規制を解除できるのかとたくらんでいるような目で仮想立体の本を見つめていた。規制プログラムがあれば攻性のプログラムを使って、ナノボットの群知性をだますことが出来るが、私の見る限り成功率はかなり低い。

「読めばすぐに自殺衝動に駆られるということはないだろうが、そういうことだろう。何かある、その何かが知れるまでは迂闊には動けないということだろう」
「こんな本でなあ」
シェン・リーはプロテクトを破るのを諦めたらしく、肩をすくめてみせた。私はというと、本の画像に触れ、表紙をめくってみる。一般的に本と呼ばれるものは手にしたことはないが、昔の映像などで本を読む人物は見たことがある。脳に直接情報をアップロードするのではなく、印字された文字を自分で見て、理解するという無駄な作業。そんな印象しか抱かなかったが、それを好んでする人間がいる。
だが、私が無駄だと思ったように、普通に都市の生活を享受していれば誰もが本というメディアは非効率である、と思うはずだ。私の考えが市民の考えから逸脱しているならばその限りではないが、そうではない。効率的で快適、皆が皆そのような生活を望んだのだから今日の都市があり、フリーサイドがある。わざわざ古いメディアを持ち出して、それに影響されて自殺する、という人間は少ないのえはないか。
「でも実際に出ている」
と、ソフィーヤ。診察室に戻り、スクリーンを広げながら言う。ルカ・オベールの電子カルテと対面して、神経接続で情報を共有している。ルカの容態は安定しており、どうやらその後の経過に問題がないことを確認したらしく、彼女はスクリーンを閉じた。
「来週の木曜からまた始めましょう。あまり時間を置くと彼女に理解を示してもらう前に法案が可決しちゃう」
「法案、というと例の」
非合法の手段でフリーサイドに行き、その結果取り残された子供たちを救済する。そのような名目で特別法の是非が議会でなされている。そのことを言っているのだろう。
「人権委員会でも今回のことで、フリーサイドの規制緩和に大きく

動いているみたいね」
「それは、どのように関係あるのですか」
「都市から自殺者を出すってことは、すなわち都市機構がそれだけ完璧ではないってことだから。フリーサイドのような新たなライフスタイルに対し行政は保守的な態度であり続けるから、そのせいで犠牲が出たっという立場なんだって。確かにフリーサイドならば、そもそもが死ぬということがないからね。自殺を防ぐにはいいかもしれない」
「では、彼女は――ルカはフリーサイドに」
「それは彼女の意志一つ。ただ、これ以上自殺衝動を繰り返すようならば、対応も変わってくる」
ソフィーヤは言葉を濁した。それ以上の議論は避けたいところなのか、ともかくソフィーヤらしくない誤魔化し方だ。
「ルカのカウンセリング、あまり時間はかけていられないかもしれないね。委員会の決定が下る前に、終着点を見つけてやらなければ」
私は黙って、立体映像を呼び出した。凝着した粒子が配列し、古ぼけた外観と、洋紙の質感と、本のタイトルを現出させた。相変わらずの博物館に陳列されていそうな死んだ媒体。ナツィオへの帰還と題された表紙をめくると、印字されたページはなく、ただ白い紙面が続くだけだった。
「内容は閲覧不可、というのも少し不可解ではありますね。どんな作用があるにしても、中身が分からないのでは」
「検閲って、本当ならば表現の自由を侵すことになるけど、明らかに公共の福祉を乱すようならば差し止めの理由になるってそういうことでしょう。この検閲と出版停止には、都市行政第四十九条が適用されている」
ページをめくっても、やはり白紙ばかりが続いた。だが時折、思い出したように活字の頁に差し掛かる。その部分は閲覧しても問題ないと判断されたのだろうが、その基準は定かではない。十頁飛ばし位の速度でめくり、巻末にたどり着くまでに時間はかからなかっ

た。
「その出版社、わりと有名みたいね。わざわざ紙に印字して本を読むということを求めるニッチな市場を築き、わずかばかりの顧客のために本を売っている。北半球の都市には大体展開しているみたい」
「メイニー・ジェーンは普段から本を読むのですか」
巻末の部分は検閲がかかっていなかった。出版元と著者のデータが刻まれている。本の中身は英語だったが、著者の名前だけ私の知らない言語で綴られていた。
「さあね。普段から読んでいたのなら、誰かに目撃されているでしょうし、部屋にも何冊かありそうなものだけどそんな痕跡は無いみたいで……どうかした？」
私が巻末部分だけを凝視しているのに、さすがに気になったらしくソフィーヤが訊いた。私は本から目を離し、著者の名前を指さした。
「いえ、この名前が」
「名前がどうしたの」
「何か見覚えあるんです。言語の知識はあまりありませんが、この表記には」
ソフィーヤがのぞき込んだ。奇妙な、記号めいた象形文字を見つめると、文字の上を軽く指でなぞった。すぐさまスクリーンを呼び出し、表面に指を重ね置いた。
果たして神経回路が読みとった文字列が、粒子の膜上に転写され、刻み込まれた。幾分大きめの文字を描き出す。
「漢語表記ね」
スクリーン上にある「阿宮圭」という文字列。ネットの翻訳が読み方を拾い上げ、文字の横に「ＡＭＩＹＡ　ＫＥＩ」とアルファベットが浮かび上がった。
「アミヤ・ケイ、と読むのね。アミヤというのが名字ね」
「そういえば、ルカの前の名前もアミヤでしたね」
表記を見て、私もようやく思い出した。ルカがゲリラ村にいたと

きに与えられたパーソナルネーム。シェン・リーに教えられた漢語名が、「阿宮瑠香」だった。
「ルカと、何か関係があるのでしょうか」
ソフィーヤは文字を見つめ、何か意外なものでも見たように目をみはった。
「どうかな。ファミリーネームが同じって言っても、偶然ということもあるし」
「それこそありふれた名字ならばそうですが、この名字は東アジア圏でも珍しいということですが」
私が言うのに、ソフィーヤは考え込むように腕を組み、スクリーンの文字を見つめた。
「このこと、人権委員会は気づいているのかしら」
ややあってから、ソフィーヤが口を開く。私は仮想立体の本を閉じた。
「分かりませんが、気づいていないということは考えにくいです。検閲している以上、些細な情報も見逃すことはないかと」
「まあ、気づいているなら何か言ってくるでしょうけど。何も言わないってのは結構不気味ね」
「ルカに、何かしらの調べは入るのでしょうか」
「それは無いでしょ。彼女の心的外傷を鑑みれば、過去のことに触れるってことがどれだけ危険か分かるはず。それに、もし何か関係あるとしても彼女はゲリラじゃないんだから。何も訊かれることなんてない」
「しかし、それでも何かしらの背後関係を調べられるということはあるのでは。彼女がゲリラ村にいたということは明らかなのですから」
「じゃああなたが調べてみるといいわ。都市行政のデータアーカイブになら、ゲリラの情報があるかもしれない」
「あなたは調べないのですか」
「調べてもいいけど、私はちょっとやることがあるからね。これか

らすぐ北京に飛ばなければならない」
「北京に、なぜ」
「なに、私用だよ。北京で医療倫理の学会があるから、それでね」
「倫理院の、ですか」
「よりによって北京だって。皮肉にもほどがある」
　かつて人権抑圧の代名詞であるかのように言われた北京が、現在では倫理院の本拠であり、人権社会のモデルケースとなっている。世界のどの都市よりも犯罪率が少なく、どの都市よりも犯罪予備思考の持ち主が少ない。それが、ソフィーヤにとっては「皮肉」であるらしい。歴史の教科書を紐解けば、過去に北京に存在した国家がどれほどの振る舞いをしたのかを思えば――ということなのだろうが、その過去も既に一世紀以上遡ることであり、それを今更言及するのもフェアでない気がした。
「何かいいたそうだね」
　ソフィーヤは、納得の行かぬ顔をしていた。
「何もありません」
「何でもため込むのは、ストレスになるよ」
「私にはそのようなことはありませんから」
　それは疑うことのないことだった。人間関係の軋轢に押しつぶされ、プログラムの恩恵に預からざるを得ない、都市住人とは違う。非合理的な解釈がそのまま個人の苦しみとなることがストレスならば、非合理的解釈を生み出さなければ良い。
「そうだね。あんたには必要ないことか」
　ソフィーヤは何か、分かったような分からないようなことをいい、
「ルカのこと、しばらくはあんたに任せるよ。けど私が来るまで面接は再開しないように」
「隔離したままで、ということでしょうか」
「見舞いぐらいならばいいけど、あまりつっこんだことは言わない方がいい」
「分かりました。ただ、私の方から何か言うということは無いでし

ょう」
「いや、何言ってもいいけど」
と彼女は笑い、
「ただ、あの子を刺激しなければいい。例の本のことも、彼女の耳に入ることだけは避けて」
「承知しました、ドクター」
それが可能であれば、の話だが。これだけの騒ぎになっておいて、今さら情報を耳に入れるなとは、少し都合が良すぎる気がした。

10

ルカが収容されたカプセルは、およそ成人男性一人分のスペースが確保されている。やや彼女の身の丈にあわないその中に、呼吸補助の酸素溶液が満ち、医療ナノボットと蛋白分子が溶け込み、傷病と病巣の破壊、すべて患者の細胞周期にあわせつつも短時間で治療させる。ヒトの子宮じみたバイオプラスチックの内部に、さしずめ羊水のように浸り、回復を行う緊急治療の器。

彼女がその中から目を覚ましたのは、首筋に金属を突き刺してからおよそ十三時間後のことだった。

「よく眠っていたよ」

私が声をかけると、まだ乾ききらない髪を撫でながら彼女が睨む。衣服や膚を濡らした溶液は、カプセルから放出されたとほぼ同時に乾燥されるのだが、なぜか彼女の黒い髪は濡れたままで、艶めいた黒をさらに濃くさせていた。

「私は基本的に緊急対応のマニュアルは熟知している。それでも、不測の事態ということはいつでも起こりうるが、今回はさすがに驚いたよ。私がいないときを見計らって、あんなことを?」

「あんたがいたら」

彼女は敵意たっぷりという様子で言った。

「その場では刺せなかったから。あの女なら、騙せたからよかったけど」

「彼女に食事を要求したんだね」

もし自ら食事を摂りたいと願い出る者がいたらどうなるか。自殺願望を持っていると知っていたとしても、自ら生きる意志のようなものを示されたら従うかもしれない。そこに凶器が添えられているのだとしても、だ。診察室は倫理ネットに必要なナノボットが少なく、ルカの自殺衝動を読みとることが出来ないと、全て知っていてルカは食事を欲したのだ。

「手の込んだやり方」
彼女は私の思いを知ってか知らずか、薄く笑みを浮かべた。
「って思ったでしょ。この女、やり方がせこいって」
「そんなことはない」
うまいやり方である、とは思ったが。
「けれど、次からはやらないでもらいたいとは思った。君の要望で倫理ネットと脳波測定を切っているんだ。だから私の方からも願いを聞いてもらいたい」
「何だよ、死ぬなってか」
「私は基本的に、君の意志を尊重する。けど、何も言わずにされるのは心苦しい。だから工作じみたことをする前に、一言声をかけてもらいたい」
なるべく、命令するような言い方は避けたつもりだ。死ぬな、とも生きろ、とも。こちらから固定観念を植え付けることは、今後の面接にも影響が出る。
「心にもないことを……」
彼女はぽつりと呟いた。
「あんたらだって、どっかで私のことを馬鹿にしている」
「馬鹿になどしていない」
「じゃあ何で、私の好きにしたらあんたたちは、そうしちゃいけないって言うんだよ」
ルカの言うところの「好きにする」とは、自らの体に傷をつけ、血を流し、絶命たらしめることであり、それをさせない十分な理由というものはもちろん存在する。生命を守ることが役割である我々が、自死を見過ごすことなど、あってはならない。
しかし、ここで無用な議論は避けたいところだった。非合理な信条（ビリーフ）を非合理と指摘することは簡単だが、それはソフィーヤの言うところの「襟元を開いてもらう」ことにはつながらず、ますます意固地になることは必至だ。
「今言ったように、私たちは君の意志をねじ曲げるつもりはない」

「こんなモンにぶち込んで」
とルカは、医療カプセルを叩いた。
「よくも言えたもんだね。こんな施設も、面接も。私が一言でもやってくれ、って言ったわけでもなしに。こんな」
ルカは自分の両腕を抱え、それがいかにもおぞましいものでも見るかのように目を背けた。彼女の指が、膚を掴み、爪が食い込むほど強く握り込んだ。
「こんな、誰も頼んでないのに、勝手をして訳の分からないもん植え付けてまで」
「それは一時的なものだ。本来ならば、その機械細胞は傷の修復に充てられるものだから、恒久的にそのままというわけではない」
本来ならば、だ。機械細胞が元ある細胞を食いつぶさないように、成長因子は欠落（ノックアウト）されている。元々が本人の遺伝情報を読みとったものなので、本人の細胞と共存は可能なはずだが、それができないことに問題がある。
「私が死なないことに、あんたらにどれだけの得があるんだよ」
ルカは、憎々しげな声音でそう言う。私はなるべく、彼女を刺激しない言葉を選ぶ。
「メリットやデメリット、ということならば多分両方得られない」
「じゃあほっときゃいいじゃん。何で余計なことすんのさ」
「君が養子になったとき」
そろそろ網膜裏の時刻が、休憩時間の終了を告げてくるのに、私はやや早口になった。
「都市にとっても、君を引き取ったオベール夫妻にしても、おそらくそのようなことは考えていなかったと思う。あくまで推測だけど」
「推測なら勝手なこと言うなよ。あんた、分かっていないなら勝手に分かったつもりになりやがって」
敵意そのものという様子で、ルカは食ってかかった。刺激すまいと思っていたのに、どうやら地雷に触れてしまったようだ。それでも黙し、何も話さないよりはマシなのかもしれない。多くを語って

もらえるなら、少なくとも脳波測定が出来ないのであれば、それが彼女のことを知る唯一の手段だ。
「では君は、誰にも干渉されたくなかったのかい」
私が訊いても、彼女は目を伏せたままだった。
「機械細胞は君の生命を守るため。養子のプロジェクトは、君の身を守るため。でも君はそれが不快だったのかい。オベール夫妻のことにしても」
彼女は考えていた。私の発した意味を、おそらく噛みしめているようだった。もっとも、彼女自身がどう思っているかなど、知る由もない。改めて倫理ネットの利便性を思い知らされる。
「帰ってよ」
ルカはやがて、短く呟いた。か細く鳴いた、精一杯の抵抗であるかのようだった。
「来週の木曜日」
私は入り口の電子錠を開けた。
「また診察室で待っている」
待っている。その表現が意図せずに出たことに、改めて驚く間もなく、電子扉が私と彼女の距離を断った。

業務を終えた後、本来ならばまっすぐに帰らなければならないのだが、私はもう一つやることがあった。散々無理して残業の申請を行い、ストラウスが渋々許可を下ろしたのが業務終了から三十分後のこと。
「一時間だけだ」
と念を押したのち、ストラウスは所長室に戻った。あまり遅くなれば、彼の帰る時間も遅くなる。それは他者の権利を侵害する行為でもあるので、本来ならば望ましくない。もちろん、それは心得ているのだが、何せ業務時間内では調べ得ることではない。ゲリラの情報など。
中央制御室は、特にナノボットの密度が濃い。普段は数十人とい

うオペレータが詰めかけているドーム構造の制御室の中央に、天球を象ったようなオブジェが天井から吊られている。よく見ればそれはオブジェではなく、ナノボットの発生器であることが分かる。シェン・リーが生まれた公共遺伝子プールにも出資した、医療ナノボット大手のソンギル・コーポレーションの片翼を象るロゴマークが確認出来る。その天球を中心に、簡素な椅子が放射状に並んでいる。

その一つに腰掛ける。空間をなぞり、神経接続を開始する。中央の天球が青白く光り、それに呼応するように粒子が凝縮してスクリーンを現出させる。もう一つ、空間に現出させ、私の目の前にはスクリーンが計三枚、現れた。

スクリーンの一つに振れ、検索用の画面を呼び出した。

阿宮圭。意図せず、指を動かすと、脳内回路に蓄えられた文字情報が浮かび上がる。もう一つのスクリーンに、情報の文字列が浮かび上がった。

東アジアのゲリラ。情報によると、極東の都市外縁に暮らしているらしい。民族主義を強固に唱え、とっくに廃れた君主を祭り上げている。数ある民族派の中では、イスラム勢力に次いで危険度が高い。

否――イスラム勢力はまだ科学的考察を用いているのに対して、東アジアのゲリラは完全な宗教的狂信者であるという。三、四人の専門家の意見を拾ってみたが、おおよそそのような評価だ。

阿宮圭は、その東アジアゲリラの一員であったらしい。十年前の紛争で捕縛され、そのとき彼は十五歳であった。まだ若いということで、厚生施設に送られたが、その翌年出奔。二年後に遺体となって発見され、北京の共同墓地に埋葬された――。

情報は、それだけであった。血縁関係なども、どこにも記述はされない。最近の更新でも「ナツィオへの帰還」についての言及はなかった。人権委員会が、意図的に記述を削除したのか分からないが、ともかく彼についてはそれ以上知る由もない。

今は死亡している、ということはあの本は彼の死亡前に書かれた

ものであるということになる。つまり彼が少年であったときのもの。それが今更何かの影響を及ぼすとは考えにくい。人権委員会も、そのように判断しているのかもしれない。だから、一応の検閲をかけてはいるものの、阿宮圭という著者名を消さずにおいているのだろう――そう考えると、急に脱力がおそってきた。わざわざ残業を申請した意味も、全て無かったようなものだ。

私はスクリーンを閉じた。中央の天球が再び沈黙する頃には、十七時二十分を回っていた。それほどの時間をかけずに済んだのは、喜ばしいことであろうが、あまりにも得られた情報が少なくて残念でもある。ともかく私はストラウスに終了を告げ、帰ることとした。駐車場に停めた水素車に乗り込み、エンジンをかけた瞬間、ふと思う。

阿宮圭が少年の頃に書いたにしても、あの本がイデオロギーに満ちたものであることは間違いない。ルカが、阿宮圭と血縁であろうとなかろうと、彼女もまた東アジアの出身だ。彼女自身がイデオロギーに毒されているのかどうか。そうなれば、やはり施設に行くべきなのか。

来週にはソフィーヤに報告しようと決め、私はアクセルを践んだ。

11

私の推論は、はっきり言って翌日には裏切られることとなる。推論とは、阿宮圭の存在が取るに足らないと判断した、そういう淡い期待に似たものだ。私の見通しが弱かった、あるいは浅はかだったと自覚させられることとなった。

研究所にその存在を認めたのは、出勤一時間前のことだった。普段は交通誘導の自動装置で運行する乗用車の群を縫うように、マニュアル操作の装甲車が何故か走っているところからすでに違和感があった。研究所に着いたと同時に、その装甲車が入り口に横付けされ、その車体には都市警の印が刻まれていたのが決定的だった。

交差する鎌と剣に絡みついた蛇と、その下に鎮座する鰐亀の図式。よく見れば蛇は、亀の尾と一体化している。装甲を着込んだような無骨な甲羅を持つ亀、それに負けず劣らず凶暴そうに、牙をむく蛇。治安維持のための部隊が、何故それほど恐ろしげな図柄を配するのか首を傾げざるを得ない意匠だ。

正面のゲートをくぐってすぐのＲＮＡ鎖のオブジェのところに、スーツ姿の男たちが四人、集まっていた。黒灰めいた色が固まりあい、そこだけぽっかりと穴でも開いているかのような違和感がある。所員たちはその集団になるべく近寄るまいとして遠巻きに見ながら足早に通り過ぎてゆく。その中で私一人が、その集団に近づいていった。

「都市警は全員防護服を着ているかと思ったが、そうでもないんだな」

そのうちの一人に声をかけると、果たして四人分の視線を一斉に浴びる。

「あまり暑苦しい格好していたら、そのうち市民から苦情が来そうなものだ」

「あまりおしゃべりは好きではないな、１２（トゥエルブ）」

普段はパーソナルネームで呼ばれることの多い中、その呼び方をするのは身近な人間では二人しかいない。ストラウスと、あと一人。
「お前が来るって分かっていたら、こうして声をかけることもなかったよ、アルファ9（ナイン）。たとえあまり歓迎されないとしてもだ」
彼――9（ナイン）は、私の頭一つ分上の位置から見下ろしてくる。厳つい岩盤の胸板を反らすように、傲然とたる態度で告げた。
「俺も、お前がいると分かればここに来たくはなかったが。これも仕事でね」
「余計な不安を周囲に振りまくことが都市警の仕事か。それは随分と精が出ることだ」
残りの警官たちが色をなすのに、アルファ9は私の腕を掴み引っ張った。
「少し外れる」
アルファ9は私を連れ出すと、歩きながら、幾分声を潜めて言う。
「挑発の類は慣れているが、あまり積極的に言うものではないな、12（トゥエルブ）」
「挑発のつもりはないが、それよりこれはどういうことだ。何故都市警がここに」
「今、お前のボスと交渉していてな」
アルファ9は、仲間たちから離れたことを確認すると、廊下の壁に寄りかかった。
「しばらくここに警官を常駐させることになりそうだ」
「自殺の件か」
するとアルファ9は頭をかいて、心底呆れるかのようなため息をつく。
「昨日、この施設から中央のアーカイブを閲覧した奴がいてな。情報をたどったら、お前の脳波に行き着いた」
「それが問題だというのか」
「いや、全うな手順を践んだのなら構わない。が、お前が見ていた情報は阿宮圭についてだろう」

鼓動が少しだけ乱れた。それを告げる網膜の生体情報を無視して、私は言った。
「それがどうした。既に死んだ人間だろう」
「その、阿宮圭とお前たちが預かっている娘――ルカ・オベールといったか、その二人が関連している可能性がある」
まさか、と言おうとして、しかし私自身その疑念を抱いていたことに気づき、黙る。アルファ9は、してやったりという笑みを浮かべた。
「お前もそれが分かっていたのだろう。あの本、多分お前も見ただろうが、著者の名前とお前のところの患者の名前が一致している」
「偶然だろう、そんなもの」
「偶然というなら、何故わざわざ調べるのかね。まあともかく、阿宮圭がゲリラであり、ルカ・オベールが同じ地域の出身である以上、何かしらのつながりを見いだすとしてもおかしくはないだろう」
「ルカを、監視するというのか」
アルファ9はやけにクラシックな腕時計をのぞき込んだ。仲間たちの方と見比べて、いつ彼の仕事に戻るべきか、間を計っているかのようだった。
「ルカは精神状態が不安定だ。あまり余計な刺激を与えたくないのだが」
「その方法については、あの所長と折衝している。あとで主治医と、多分お前の話も聞くことになるだろう。ルカ・オベールの心理状態になるべく影響のない程度に、しかしあの本の著者と関連があるなら、ゲリラのイデオロギーを背負っている可能性が高い」
「馬鹿な。とっくに死んだ人間が書いた本など」
アルファ9は時計を見て、そろそろ時間だと呟く。私も時間を確認した。既に業務に入っていなければならない時間となっている。
「ともかく、彼女のことは我々の監視を行う、それが大前提だ。なに、お前の仕事を邪魔するつもりはない。つつがなく、業務に戻ってくれ」

アルファ9はそれだけ言い残すと、まだロビーにたむろしている仲間たちの方に駆けていった。釈然としない思いで、私も業務を遂行すべく、スクリーンを開いた。

「都市警が監視するって本当かよ」

よほど衝撃的だったのか、シェン・リーの声が少しばかりうわずった。そのせいでフロアでいらぬ注目を浴びてしまたった。

「声が大きい」

と注意してから、

「ルカの元の名、それとあの本を書いた著者。同じ姓を持つことが、単なる偶然とは考えにくいということらしい」

「たしかに、あの名字はあっちでも珍しいものらしいけど。だからって、それだけの理由で倫理院管轄のここに介入できるものなのか」

「その倫理院が許可しなければ、監視などしない。倫理の実行にはある程度の強引さが必要だって、つまりはそういうことなのだろう」

シェン・リーは片手でプログラムの打ち込みをしながら顔はこちらに向け、もう一方の手で仮装立体の映像を呼び出す。『ナツィオへの帰還』の、コピーされた実体を指で弾き、巻末のページをめくった。

「この阿宮圭って、ゲリラの中じゃどういう地位だったんだ」

「分からないが、ただゲリラの戦術にはプロパガンダで彼らの信奉者を増やし、兵隊とする手法がある。古典的な本だが、イデオロギーを広めるために書いたのであれば、おそらく阿宮圭は情報戦を担っていたのだろう。もっとも、データ上では死亡したことになっているから、何故そこまで過剰反応するのか理解出来ないが」

「死んでない、とか。実は」

シェン・リーは仮想立体の本を閉じながら、そんなことを口にする。プログラムの打ち込みもほぼ終了したらしく、スクリーンから手を離す。手先の器用さは遺伝子の差なのだろうかと思った時があったが、シェン・リーと私ではそれほど遺伝情報に差異はなく、経

験の差なのだろうと最近は思っている。
「死んでいないとはどういうことだ」
「だから、データの方が間違っているんじゃねえのかってこと。死んだと思われていたけど、実は生きていました、ってさ。生きているって分かりゃ、おちおち泳がせてもおけない。当然、阿宮圭とつながりがあるかもしれないって思えば、ルカの方にも監視がつく」
「しかし、阿宮圭の遺体は収容された後、焼却されたと聞く。彼らの文化と同じ方法で埋葬されておいて、今更生きているなどと」
「どうかな。ＤＮＡマーキングがいい加減だと、実は全然違う人間を燃やしてました、なんてことにもなりかねんし」
「倫理院管轄の厚生施設だ。検査違いなんてあり得ない。それとさっきから死んだだの燃やしただのと、あまり穏やかではないな。言葉一つとっても暴力性があるのだから、気をつけた方が良い」
「ユーリは真面目なこって」
シェン・リーは明らかにわざとだと分かるように、頭を振ってみせた。
「で、その関係であんたの友人がここに来ているってか」
「別に友人ではない」
今朝のやりとりをシェン・リーもみていたらしく、アルファ９のことを訊いてくるのだが、実際に彼との思い出など何もなく、ただ同じようにフリーサイドで意識を醸成された、それだけに過ぎない。有り体に言えば兄弟と言えなくもないが、特にそれで共感を覚えるということはなかった。
「あいつ、マクガインって呼ばれているらしい」
私が次の仕事に取りかかるのに、シェン・リーが口を挟む。
「そのアルファ９、っていうのは要するにナンバリングか。あいつのこと、何でナンバーで呼ぶんだ」
「ストラウスが私のことをユーリと呼んだことがあるか」
私の言うことに、シェン・リーは甚だ納得しかねるという顔をしている。私はスクリーンに向かってプログラムの行列式を出力し、

データが読み込まれるのを待ってから口を開いた。
「我々のパーソナルネームは、無くても良いものだろう。進んで名乗るものではないし、よほど親しいわけでなければナンバーで呼んでも差し障りはない。私と9（ナイン）は確かに同じシリーズだが、生み出されてからすぐに別々の進路になったのだから、パーソナルネームなど知る由もないだろう」
「そうか？　俺は結構、進んで使う方だったけど、名前」
「お前が特殊なんだよ」
シェン・リーは、私が研究所に入ったときからシェン・リーだった。彼を作った開発チームが、ナンバーでなく最初から名前をつけていたためであるらしい。本来のナンバリングではなく、最初からパーソナルネームを与えられた存在。ただ番号か名前か、それだけの違いであったので、それほど気にかけるわけでもなかった。ただ新鮮な驚きはあった。私たちにとって、個体の識別方法など何でも良いのだから。
「でさ、どうするんだ。あのまま都市警の好きにやらせるつもりか」
シェン・リーの興味はプログラムの打ち込みよりも、都市警の動向について向けられているようだ。このシリーズは名前と同時に好奇心も与えられたのだろうかと疑いたくなるほどの食いつき方だが、私は至って平静に答えた。
「好きにやらせるも何も、監視は倫理院の意志を越えない範疇でやるだろう。いくら行政府がゲリラの存在を恐れているとしても、誰だって倫理行動を逸脱した行為は出来ないのだから。最低でもルカにストレスを与えない方法を取るに決まっている」
「じゃ、勝手やらすってわけか」
「そうではない。ただ、お前が期待しているようなことにはならないってだけだ」
「何も期待なんかしてないが。ただ、やはり気になってな。都市警じゃなく、ルカのことが」
私が打ち込む手を止めたのに、シェン・リーはさらに続けた。

「余計なストレスを与えるんじゃないかって、そういう懸念もある。けどそれとは別に、あの本」
「あの本がなんだ」
「いや、つまり自殺を誘発するってことがさ。あの子、ルカがやっていることと同じことじゃないかって。阿宮って姓が一致するということ以上に、本を読んだものと同じ行動を取っている」
そこまで言われれば何を意図しているか分かったが、私はそれでも訊いてみた。
「何だというんだ」
「だから、ルカはゲリラが意図している行動を取っている。あの本がゲリラのイデオロギーなら、ルカの自傷はまさしくイデオロギー通りの行為じゃないか」
「イデオロギー通りとは限らない。あの本で自殺者が出たのはまだ一人だけだし、あの本が直接の原因であると確定したわけじゃない」
「そうだが。ただ都市警は本の内容を知っているのだろう。なら、ゲリラのイデオロギーと照らしあわせてルカを監視するというのなら」
彼女がゲリラに通じている。当然抱く疑問だが、出身や姓でなくイデオロギーと行動に共通点があるのだとすれば、それほど強い根拠はない。
「彼女がゲリラのイデオロギーを体現しているなら、ここではなく厚生施設に送るべきだろう」
「まあ、強固なイデオロギーなら当然そうするべきだろうな。ここに来るのは大抵が精神的な疾病を抱えたもので、ゲリラの過激思想を持ったものは他の、ロサンゼルスの隔離都市に送られる。阿宮圭が送られたのも同じ所だろう」
「彼は脱走したがね」
「そう。その脱走自体がすでにイデオロギーじみている。わざわざ安寧の地を捨て、外縁に落ち延びるという行為がすでに、都市に対する挑戦みたいなものだ。あの本が説くところは、人は生まれ故郷

に帰るべき、というまるで根拠のない理論だが、今思えばそのときにはすでに奴の中で思想が出来上がっていたんだな」
「故郷に帰るという思想が？」
「都市の住人に、正確な故郷などない。都市で生まれたなら都市が故郷だが、本当の血のルーツと言われたらどこにいなるかなんて、誰も分からない。そんな薄い根拠に縛り付けようっていう思想を、ルカも持っているのだとしたら」
シェン・リーが言わんとするところは、分からないでもなかった。血の信仰は、優勢学であり、選民思想でもあるがために、二十一世紀の国家解体時にはすでに消え去っていた。一部の国家を除き、血の連続性で人を分けることが如何に愚かで、意味のないことかを悟っていた。その一部の国家が、後の民族派と呼ばれる集団に変わり、ゲリラと化した――フリーサイドで得た知識だ。
「それが、なぜ自傷行為につながるんだ」
私は、精一杯声を振り絞らなければならなかった。
「本のイデオロギーは、何も自殺を教唆するものではないのだろう。全部読んでいないからはっきりしたことは言えないが、その理論が自殺につながるとは」
「一人死んだだろう、その本を読んで」
「一人だけでは分からないだろう」
「だが、都市警は警戒している。ってことは、やはり自殺させる何かがあるんだろう。で、そのイデオロギー背負っているかもしれないルカが監視されるのは、単に著者とのつながりだけじゃない、彼女がそれほどまでに自分を傷つけるのは、あの本と関係があるって。そう捉えられてもしょうがないだろう」
シェン・リーは、ふと打ち込む手を止めた。止めて、私の顔を見て言う。
「そんなことを言っても、お前も同じこと考えてたんじゃないのか？　あの子がイデオロギーに染まっているんじゃないかって」
「それは、確かにそういう疑問もあったが……」

答えに窮した私に、シェン・リーが畳みかけるように言う。
「手に負えないって思ったら、早々にギブアップするのも手だぜ、ユーリ。それがあの子のためってときもある。ここじゃなきゃいけないってこともないんだから」

12

約五十時間振りに見たソフィーヤは、明らかに疲労をため込んだ顔をしていた。それが長旅によるものだけでないことは明らかで、つい二時間前に都市警とのやり取りを終えたばかりなのだという。

「学会でも、ルカのことが出たよ」

ソフィーヤは目をこすった。まさか睡眠が足りていないということは無いだろうが、しきりに目元を押さえているあたり、どうやら碌々眠れていないようだ。

「フリーサイドに行くべきか、ということですか」

私がコーヒーを差し出すと、ソフィーヤは礼を述べつつ受け取った。安物の培養豆で淹れたコーヒーなど味を楽しむものではなく、単純に眠気を飛ばす作用しかない。もっとも、眠気を覚ますなら脳に直接、電気刺激を送り込む方法もあるが、ソフィーヤはあまりそのような行為は好まなかった。

「両親と引き離した今の状態は好ましくないが、ルカ自身が望まないのに送り込むことが正しいのかってね。でもこの間の自殺騒ぎで、フリーサイドの方に意見は傾きつつあるよ。あそこに送り込めば自殺ということはまず不可能だからね。精神だけで生きていけるんだから」

ソフィーヤはコーヒーに口をつけてから、

「それで、シェン・リーはあの子を厚生施設に移すべきって言ったの」

「そう断定したわけではないですが、選択肢の一つであると。彼女がイデオロギーに染まっているならば」

「それも一つの手だね。私たちに出来る限界があれば、他の機関に任せることだって必要。何ら恥じることはないよ」

「あの本と、同じイデオロギーを持っているのだとしたら都市の脱走者も同じように厚生施設に送るべきでは」

「そっちは、イデオロギーとは違うと思うけどね。民族派、特に東アジアのゲリラは、自死行為に何らかの儀式的意味を持っていることがあるから。いわゆる、集団本位の自殺だね」
「ある特定の集団、民族なり国家なり、個人が属する共同体が持つ文化が、個人を殺すというものですか」
個人が生きることを恥と教え込み、命よりも優先されるべきものがあると刷り込み、結果社会が個人を自殺に向かわせるというものだ。夫を亡くした妻は後追いすべきとして生き埋めにし、恥を晒したものは潔く死を選ぶべしと腹を切らせ、国家のために敵を討てと飛行機ごと体当たりさせた。個人ではなく集団ありきの理論。
「ゲリラの社会では、まだそれが生きている所がある。ルカが、そのような理論を抱えて、そのせいで死を選んでいるのだとしたら確かにイデオロギー的だけど。でも他の都市住人はそんな思想とはほど遠いところにいたわけだから、イデオロギーとは無縁でしょう」
「あの本がイデオロギーの温床になっていたのでは」
「だとしても一時的なものよ。そう長続きするわけじゃない。ルカも、ゲリラ村で過ごしたときよりも都市で過ごしたときの方が長いんだから、そんなイデオロギーとは無縁だと思っていたんだけど……」
ソフィーヤはどこか虚ろな目をしていた。寝不足によるものであるのか否かは、判然としなかったが、スクリーンではなくもっとも遠い所を眺めるかのような目だ。
「そういえば」
と私が言うのに、ソフィーヤが目を向ける。
「ルカに会ってきました」
「会った？　いつ」
「あなたが北京に飛んでいる間にです。目を覚ましてから、すぐに」
「病室にまで行ったっての。あまりそういうことは良いことじゃないんだけど」
ソフィーヤはまあいいわ、などと言って

「なんか言ってたの、あの子」
「どうして私の好きにさせてくれないのか、と。機械細胞を埋め込まれたことも、あまり気に入ってはいなかったようです。ゲリラには機械細胞を埋め込まれることは恥であり、そのような者は死を選ぶべき、という思想でもあるのでしょうか」
ソフィーヤはスクリーンの文字列を見つめ、ややあってから口を開いた。
「機械細胞そのものが、もしかしたら嫌なのかもね」
「どういうことですか」
「つまり、今の状態。機械細胞があの子の肉体を修復しているけど、それが嫌だから今のまま死にたいっていうことじゃないかって。この状態を放置しておけば、いずれは脳も全て、疑似神経配列と回路に置き変わる。もちろん、彼女の記憶も転写されるけど、機械に置き変わるくらいならってことかも」
「だから、今のままフリーサイドに行くか、あるいは機械化するか、その選択で揺れているわけではないですか。彼女の思想がどちらの選択も拒否しているが、それがイデオロギーのせいということが」
「イデオロギーのせいかどうか、もう少し面接を重ねてみた方がいいかもしれない。今、性急に判断するより、彼女が何で機械細胞を嫌がっているのか知る手がかりでも分かれば、施設を移したとしてもやりやすいでしょう」
ソフィーヤがそう言い終わるのと、コーヒーが出てくるタイミングがほぼ同時だった。左脇からステンレスの人工操作手が延び、淹れたてのコーヒーのカップを二つ、机に置く。円筒形の雑務ロボットが他の注文は要るかと問い、ソフィーヤは結構よ、と答えると人工操作手を引っ込めて走り去った。
「今の、ＴＸ社ね」
「見ていましたよ」
いかにも広告効果を狙ったかのようなロゴマークが、ボディの前面に刻まれていれば誰でも気づくというものだ。今にも羽ばたきそ

うな金色の鳳、その足下に大きく社名を刻み込んでいる。私の古巣である、と紹介するのもはばかられるほどに仰々しい印で、このごろは街で見ない日はないというほどありふれている。
「そういえば、都市警のルーキーもあなたと同じなんですってね」
「アルファ９ですか」
せっかく持ってきたのだから、私はもう一方のカップに口を付けた。酸味ばかりが舌に残る、いかにも培養物という味だった。前世紀までの環境破壊を修復すべく、各都市とも環境保護名目で農産物の収穫に多くの規制を設けている。
「同じ、という言い方は語弊があります。遺伝子プールは彼がアルファグループ遺伝子から選別され、私はベータグループです」
「どう違うの、それ」
「遺伝子に違いはありません。ただ、フリーサイドに脳神経を接続し、意識を構築しますがそのときのプログラムに差異があると聞かされます」
脳に施されるプログラムが、同じ目的であってもその方向性が違うことがある。同じ値であってもそれぞれの度合いによって変化するベクトルのように、時に違うものとして扱われる。患者の生活環境に合わせて内容を変えるのだが、結果としては同じ。健康で文化的、倫理と人権が守られた生活を再び送ることができるようにする。それが、プログラマーとしての使命だ。
私と９（ナイン）に施された倫理の違いは、恐らくはそういうことなのだろう。当然それは自覚できるものではなく、推測の域を出ないものではある。
「そう。あんたの知り合いなら、ちょっとは融通効くかと思ったけどそうでもないのかね」
「なにを期待していたのですか」
あからさまに落胆の色を浮かべるソフィーヤに、私は少々の不服感を抱いて訊いた。
「そう睨むなよ。都市警が面接の間も監視するなんて言い出すから

さ、ちょっと揉めてんだよ。あんたの知り合いがいるってなら、説得もしやすいと思ったんだけどそうもいかない。となるとどうするかって話」
「9（ナイン）は私の話など聞きませんよ。都市警はゲリラに通じる証拠を挙げたいだけですから」
「そうじゃない、とは信じたいけどね」
ソフィーヤはこめかみを押さえて、欠伸をかみ殺すような、いかにも眠そうな様子だった。私は睡眠が不足しても疲れない抗生物質の存在を思いだしつつも、ルカのことについて質問した。
「次の面接も、同じ手順で行うのでしょうか」
「そうだね。私が話し手になるからあんたは補佐する感じで」
「私がやるのは駄目でしょうか」
果たしてソフィーヤは目をみはり、それが余程の驚愕であるとまざまざと見せつけるかのような表情をつくる。
「どうして、また」
「いえ。直接話してみないと分からないと思ったので。確かに私は経験が少ないですが、それでも資格は持っています。足りないところもあるでしょうが、あなたがスーパーバイザーとしていてもらえば、心強い」
ソフィーヤはしばらく考え込んだ後、言葉を捻り出すように言った。
「経験の差は、実践を積むことで埋められるものの、あの子は少し、あなたには手に余ると思う」
「承知しています」
それでもルカ本人から、本当のところを聞きたい。それが第一でもある。おそらく、私のことを忌避しているであろうルカが、本音はなにを思っているのか。
「そんなにやりたいというなら構わないけど。ただ次の一回は私がやる。イデオロギーの影響か否か、判断した後、この施設に残すかどうか決めたいから」

ルカがイデオロギーの影響下にあれば、施設を移すことを視野に入れた方法だった。ルカの自殺願望の元となるイデオロギーを、そっくり消し去ることのできる施設。阿宮圭が入れられ、脱走した場所だ。

「そんなに心配しなくても大丈夫だよ」

私はよっぽど暗い顔をしていたのだろうか、ソフィーヤは微笑み、私の肩に手を置いた。

「施設といっても、倫理規定には逆らえない。ここを出たとしても彼女がそこでどうにかなるってわけでもないよ」

だが、そこでフリーサイドに行くのが妥当だと判断されたら。彼女は望まずにフリーサイドに行くことになる。

13

白と透明。彼女の座る椅子と、向かい合ったガラスのテーブル。彼女の衣服と、飾る物のない診察室と、誰も踏みしめたことがないのではと疑いたくなる床の色の、目に刺さる白の中に、彼女の髪が際だつ。黒い髪自体は珍しいものではないが、彼女のそれは少し違って見える。他の色の、一切の介在を許さないという風情の漆黒を、髪の繊維に織り込んだかのような濃い色だった。他に手を加えない髪を、ただ自然に流れるままにしている。彼女の幼い横顔にかかる、深い墨の色。

ソフィーヤはガラス机を挟んで、ルカと対峙している。今日はガラス基盤の簡易端末は持たず、その端末は今私の手の中にある。中の会話はすべて記録することになっており、同時に絶えず彼女を監視する都市警からの通信も端末に入る。

「傷の様子はどう？」

ソフィーヤが問いかけるが、カプセルに入って傷が残るということはまずあり得ない。首の傷だけでなく、腕の古傷も、すっかり治癒していた。おそらく、自傷行為でつけた傷は、専門家ではなく応急処置を重ねていたから残ってしまったのだろう。

ルカは自分の腕を抱えるようにして体を丸めていた。刺すような視線が見上げてくるのに、ソフィーヤはあくまで微笑を崩さない。

「この間、私がいなかったばかりにとんでもないことになっちゃったね。あんなことになったから、もう来てくれないかと思ったけど、今日来てくれた。それだけでも十分よ」

「誰かにそう言えって、言われたんかよ」

随分敵意むき出しなルカの云いに、ソフィーヤは肩をすくめた。

「まさか。私は一度も誰かの指示なんて受けていない。あなたの言うように通信も切ってあるし、私に指示をするようなものは何もないわ」

「そう言い切っても、私は確かめようがないけど？」
「そうね。それはあなたに信用してもらうより他ないわね」
ソフィーヤは苦笑し、ルカはやはり視線をゆるめず、睨んでいる。その様子を私はガラス越しに見ていた。
「こんなことで」
背後で声がして、振り向くと９（ナイン）の厳つい顔がいきなり間近に迫ってきたのに、私は少し狼狽してしまった。
「何故ここに」
「監視すると言っただろう」
９（ナイン）はガラスの向こう、ソフィーヤとルカのやりとりを見ていた。音声はこちら側に届くが、こちらの姿は見えないようになっている。私は慌ててスピーカーを切った。
「お前は向こうに行かないのか」
「最初の一回はそうだったのだが。ドクターが、本来カウンセリングは一対一だと言うのでね。あんなことがあった後で、二対一の面接は心理的な負担が強いと」
「面接か」
アルファ９が馬鹿にするように鼻を鳴らすのに、私は少しばかり納得しかねた。
「何がおかしい」
「いや、こんなことで何か変わるとは思えなくてな。脳神経回路にプログラムを与えてやれば良いものを」
「それができないから、こうして原始的方法をとっているのだろう」
こいつは何か説明を聞いたのだろうかと疑いたくなる。
「都市警は、ゲリラのことしか頭にないのだろが」
「ゲリラのことではない、都市全体の治安維持のためだ。たとえば読んだだけで自殺の衝動に駆られる本と、その巻末にある著者の名前」
「ルカは関係ない、と言っているだろう」
「それを判断するのも、我々の仕事だ」

まるで私やソフィーヤにその権限はないと、遠回しにそう言っているようにも聞こえる。反論しても、同じように否定されるのだろうと予測し、私は再びガラスの向こうに目を落とした。ルカは何もしゃべらず、ソフィーヤも無理に喋らせようとしないので、診察室には沈黙が流れていた。

「あんなことで」

と9（ナイン）が言って、

「どうにかなるとは到底思えないがね」

「お前たちが暴力の専門なら、こちらも精神医療という専門がある。なかなか互いの仕事は見えづらいものだ、マクガイン」

彼は一度無視した。というよりも聞き逃したのだろう。私がその名を口にしたことに気づくまでに数秒かかった。

「あ？」

「マクガイン。そう呼ばれているのだろう。名前など不要だとのたまっていたお前が、随分な変化だ」

9（ナイン）――マクガインは、不愉快極まりない様を、鉄の面に押し込めるのに精一杯らしかった。非常に長いこと激情をかみ殺し、ようやく理性が勝ったらしい。静かに言ってのけた。

「チームの人間が勝手に呼んでいるだけだ。俺が名乗ったわけではない」

「そんなものだろう、パーソナルネームというものは。私も似たような状況だ」

「何故、貴様と同じくされなければならんか」

彼――マクガインは、苦々しく吐き捨てた。

「心理プログラムというものは、カウンセリングの論理療法を元に設計されている」

私が切り出すのに、マクガインは不意を突かれたらしく、あわてたように聞き返した。

「何だと」

「先ほど面接が役に立つのかと訊いたが、プログラムは脳波を測定

し、クライエントの何が彼の障害になっているのかを分析する。家庭のこと、仕事上のことなど、とにかく本人が抱いている非合理な固定観念（ビリーフ）というものを、回路から読み取り、それを変えるための行動（ビヘイビア）を提示し、合理的判断へと導く。そういう手順を踏むわけだ」

「行動規範をそのまま脳にアップデートするわけではないのか」

「それは洗脳に近い行為だ。あくまで本人の意志を尊重するために、感情を押さえつけている固定観念（ビリーフ）を崩す、そのための思考変換を促すというものだ。本人の意志と関係なく社会的倫理的人道的思考を植え付けることは、たとえ倫理のためとはいっても禁止されているからな、診察には事前に別のプログラムが組まれる。リレーションといって、緊張を解きほぐしてプログラムとの融和を目指すものだ。本人にとって、一番心地よいと感じる波長と脳波を同調させることで、クライエントがリラックスする状況を作り、抵抗無くプログラムを受けられる心理状態に持っていく」

「よく分からんな」

目下、マクガインは興味を抱くには至らないらしく、義務的に訊くことで退屈を紛らわせている。私にはそう思えた。

「プログラムは今のプロセスでクライエントの心理負担を取り除く。だがルカの場合、そうしたプログラムを受け付けようとはしない。リレーション・プログラムすら、脳波と同調せずに拒否している。そうなると言語による面接によって、彼女の非合理（イラショナル）な固定観念（ビリーフ）を見つけてそれをうまく行動変換させてやらなければならないのだが、そこに至るまでが大変でね」

「そりゃあ、自殺までされるぐらいだからな」

マクガインは皮肉のつもりだろうかそう言って

「そこまで強固な観念に縛られているならば、いっそのことお前の言う、洗脳に近いことであっても施せば良い。あの娘が死にたがるうちは、強制的な手段もやむを得ないだろう」

それがどういう意味であるのかをまったく考慮しない物言いに辟易する。都市警というものは、全員同じ考え方なのだろうか。人道

のため、多少の暴力の行使を許された、数少ない存在であるがために、与えられた思考というものも暴力の匂いを纏っている。
「お前の好む施設は、ここにはないな。厚生施設なら多少の強制性は認められている。強固なイデオロギーを持っていると判断された者が行くところだ。ルカの場合、一般の都市生活に溶け込んでいたから、そのようなイデオロギーはないと判断されていたのだが」
「しかし、今はそうではないと」
マクガインは、全て悟りきったかのような声を出す。
「ルカの自傷癖は心的要因でなく、もしかするとゲリラのイデオロギーかもしれない。そうなればここではなく、厚生施設で処置する方が望ましい。フリーサイドを忌避し、自らを傷つける固定観念（ビリーフ）も、イデオロギーありきなら強制執行もやむなしとなるだろう」
ちょうどソフィーヤとルカの面接が終わる頃だった。一度の面接で三十分かけても進展がない場合は、そこで打ち切ることになっている。カウンセラーが時間を引き延ばせば、クライエントの心理的負担をかけると判断されるためだ。
「集団を離れて、都市の中に入った者が、果たしてイデオロギーを維持しつづけることができるのか疑問だが」
マクガインは座ったまま動かないルカを見て言った。
「だいたい、あの娘の自傷行為はいつからのものなんだ」
「いつ、というと」
「あの娘、両親はフリーサイドに行ったのだろう。その前からずっと自殺未遂を繰り返していたのか」
「そのようだな。自傷行為について、何度かプログラムを受けたことはあるようだが、うまくいかなかったようだ」
私はあらかじめ回路に蓄えた情報を告げた。治療を行っても、その数日後にはいきなり手首を切ってしまう。彼女が自らを傷つけるなどと毛ほども思わないスタッフたちの目を欺き、尖ったものや鋭利なものを見つけては体を傷つけていた。記録にはそうある。
「もっとも、これほど頻繁に傷つけるようになったのは、彼女が取

り残されてからだ。その原因を、探っている」
「あんな何の進展もないやり取りで何がわかるものかね」
「それを言われると、なかなかつらいものがある」
ガラスの向こうが暗転した。部屋が暗くなったのではなく、ガラス壁そのものが暗くなったのだ。色彩変動の分子が定着されたガラスは、電位信号によって光の反射度合いを変化させる。透明から黒へと変異したガラス壁が完全にルカの姿を覆い隠したのをうけて、私は向き直った。
「もし本当にイデオロギーの可能性があるなら、上海と手続きする可能性があるが、やはりそこでも監視するのか」
「当然そうなるだろう。阿宮圭とのつながりが分かるまで。もし何のつながりもなければ問題はないのだが」
「死んだ人間に、そういつまでも執着するものでもないと思うがね」
「馬鹿を言うな。いくら奴が死んでいるからといって、ゲリラにつながるかもしれない手がかりだ。見過ごすわけにはいかない」
都市警というものは皆同じ事しか考えていないらしい。これで倫理規定が同じだと言われても疑念しか抱きようがないが、それはソフィーヤの言うところの「優先順位が違う」ということなのだろうか。そのようなことを考えていると、空気圧力の扉が開く音がした。
「入るよ」
とソフィーヤは何の遠慮もなく部屋に踏み込み、勝手に椅子を引き寄せて座る。心なしか、疲労の色が見えた。
「進展はありましたか」
「見てたんならわかるでしょ。何も収穫なしよ、あの子相当手強い。昔取った杵柄じゃ、手に余るわ」
「イデオロギーの片鱗は」
「今の段階じゃ何とも。だいたいカウンセリングって、向こうから何か悩みがあるから相談しにくるのであって、こっちからアプローチするものじゃないからね。無理矢理聞くとそれはそれで相手に敵意を抱かせちゃうから」

「犯罪者への」
いきなり、マクガインが割って入った。
「カウンセリングもかつて行われた、と聞くが」
ソフィーヤ、まるっきり今気づいたという様子でマクガインの方を見やる。思い切り迷惑そうなしかめっ面を張り付けて、
「あら、失礼。ユーリの同僚だったわね、あなた。ええと、マクガインといったっけ」
「それは正式な名称ではない。私のことは――」
「番号だとすぐ忘れちゃうのよね、私。9（ナイン）とか12（トゥエルブ）とか、そんなもの人に覚えさせる気なんてないでしょ、それ」
責めるような口調で言われても、ナンバリングは自ら好んでつけたものではない。そもそも、拡張視野には常に相手に関する情報が送られているのだから、それを以て「覚えられない」ということはない。覚える必要がないのだから。
ソフィーヤはマクガインと目を合わせず、スクリーンを開いて
「でもマクガインって珍しいよね。名前じゃなくてそれファミリーネームじゃないって。都市警には名前のセンスに欠ける奴しかいなかったのね。私ならもっと良い名前つけてあげるよ。どう？」
「遠慮しておく」
マクガインは全て諦めたというように息を吐いた。
「そう、残念。私結構得意なんだよ、名前考えるの。で、何だっけ。あの子が犯罪者だとか今言ったけど」
「あの娘がそうだというわけではない。犯罪者のカウンセリングにも用いられるのだろう、その論理療法というものは」
「あの子は何の罪も犯していないよ」
「自殺未遂を犯した」
「自殺は罪じゃない。望ましくはないけど、法として裁かれる類のものじゃないよ」
「だが、人道上認められるものではないだろう。罪でないにしても、許されることではないものであるはずだ」

「やめてよ、カソリックじゃあるまいし。そういう古い時代の教義は当てはまらないんだよ、この場合」
「だが、お前たちは自殺しようとした彼女を説得しようとしている。もし罪でないならばそのまま死なせればよいのにだ。それは自殺を罪だと認識しているからではないのか」
ソフィーヤは特に不機嫌そうではなかったが、水面下ではそろそろ本格的な論争に発展させてやろうと。そう思っているかのような、気配がした。
「次の面接はいつ頃に、ドクター」
本格的な論争になる前に、私が訊くと、ソフィーヤは向き直り
「とりあえずまた一週間後。あの子の固定観念（ビリーフ）が何なのか知るためには、もう二、三回は面接しないとね。何にせよそれが分からないことには。それらが分かった後に、あんたに徐々に渡していくからそのつもりでいて」
それはつまり、私が面接を行うということだ。自ら願い出たことは言え、改めて聞かされると、自分がそれだけ大それた事をしようとしている。そう認識させられる。だが彼女は至って平然と言ってのけた。
「別に気負うことはないよ。私もサポートするし、やっているうちにできないことがあればすぐに代わる」
ソフィーヤは言い終わるか終わらないかのうちに時計を見て――年代物のアナログ時計を彼女は好んで身につける――席を立った。
「私はこれから委員会に報告に行かなければならない。ちょっと遅くなるから、今日はこの後あがっていいよ」
気づけば五時まで、あと三十分少々といったところだった。ソフィーヤは慌ただしく荷物をまとめ、部屋を後にした。
「報告など、必要あるのか」
マクガイン、ソフィーヤの後ろ姿を見送りながらつぶやいた。
「逐次報告の義務がある。何せ診察室はネットが切られた状態にあるからな」

「何故そのようなことを」
「クライエントの希望だ」
果たして私は、渋面と向き合う羽目となった。マクガインは不可解なものを見るように、実際に不可解だったのだろう、侮蔑すら浮かべた眼差しをしている。
「そうやって患者の言うことをいちいち間に受け、相手の言いなりになるのがカウンセリングというものなのか。恐れ入る」
「相手のやることなすこと全て否定してかかるお前たち都市警よりは、平和的だとは思わないかね」
不愉快さに拍車がかかった様子で、マクガインは怒りすら籠もったように表情を強ばらせた。
「ともかく、その一週間」
とマクガインは踵(きびす)を返し、
「監視を続けるからそのつもりでいろ」
「それは良いが」
マクガインは早々に切り上げたがっているようだったが、これだけは言っておかなければならない。
「今日はたまたま会話を聞かせることになってしまったが、次からはそうはいかない。この中に立ち入ることは遠慮してもらう。やり取りを見ること、聞くこと、まして口を出すことはクライエントに悪影響を与える」
「それはお前たちの都合だ。我々には我々のすべきことがある。当然だろう、あの娘がゲリラに通じている可能性がある限り」
「そんな証拠はどこにもないだろう。何らかの手段で通じていたとしても、それと彼女のケアは別物と捉えるべきだ」
「何もあの娘を直接尋問しようというものではない。面接そのものに口を出すわけではない、ただ記録は見せてもらう」
「重大なプライバシーの侵害だ、それは。都市警といっても、そんなことは許されないはず。倫理規定に反しているではないか」
マクガインの威圧感に耐えつつ、私はさらに告げる。

「もし、彼女がイデオロギーを持っていて、厚生施設に移すとなれば、そこでどうするかはお前たちが決めると良い。だがここはまだ厚生施設ではない。ここではここのやり方に従ってもらう。いいな」
マクガインは最後まで硬い表情を崩さなかった。やがて渋々といった様子で了承の意を告げた。
「いいだろう。そちらの言うことは全て本部に伝え、その上で了承が得られたらそうする」
マクガインは、仕事が残っていると言って、部屋を出た。
私はスクリーンを呼び出し、診察室の様子を見た。当然のことだが、ルカは既に退出し、おそらくは今病室に戻っていることだろう。あと一週間か、もしくは一月後か。今見ている診察室の中央、ガラスのテーブルを挟んで私とルカが対面する。本当にそのときがくるのか分からないが。彼女がゲリラのイデオロギーを持っていれば、ここではない上海に移されることとなる。
もしくは、このまま何の進展もなければ――フリーサイド孤児を救うため、委員会では議論が割れている。ルカが両親のもとにゆく、そのための一切の手続きが簡単なものとなれば、彼女はフリーサイドに行くだろう。イデオロギーの発覚が先か、法案が可決されるのが先か。どちらにしても私が直接彼女と面談する確率は低いと言わざるを得ない。
私がそこに座ることはない。そう確信めいたものがあった。スクリーンを閉じたところで、退出時刻が迫っていることに気づき、私は部屋を出た。

14

シェン・リーがしつこく飲みに誘うのを断り、私は家路を走る車中にいた。寮に住んでいるシェン・リーと違い、郊外の集合住宅を住まいとしている私には、飲んで帰るということが本来それだけでも障害を伴うことだ。私は結局週末にはつき合うという約束を無理矢理取り付けられ、それを条件に解放された。

それが三十分前のこと。ウェブラジオのスイッチを入れ、窓を閉めた。もうすぐ高速（ハイウェイ）に至ろうというところだった。

高速（ハイウェイ）の入口を過ぎ去ったところで、左手側に円球（ドーム）天井建築の、白塗りの建物を見やる。広告塔の、青色電光で浮かび上がり、街を見下ろすように聳えるそれこそが、都市とフリーサイドを繋げる関門だった。倫理院が管理するその施設は、その外観から「聖堂」と呼び習わされる。正式な手順を踏み、政府の認可が降りた者だけが聖堂に入り、そこから自らの身をフリーサイドへと捧げることが出来る。フリーサイドへの移行に可能な、ＤＮＡ配列の電子変換、脳内回路の転写をすべて行い、完全に安全に、確実に精神を委ねられる場所。それが聖堂の役割だった。

天球の中にある、たっぷりの粒子を含んだ空気の中で、彼らは完全な自由の中に身を置くこととなる。そこではルカのように、不完全な転写により取り残され、肉体を損傷させるリスクを限りなく低く保ち、完璧な移行を可能とする施設。それでも現時点では、聖堂に至るまでの道のりが険しい。フリーサイドの入口に立つまでに、人々には多くの制限を設け、その障壁によってオベール夫妻のような違法業者に委託する者が多いことも確かである。

議会では、フリーサイドへの規制緩和で紛糾している。事を慎重に運ぶべきとする保守派に対して、急進派がにわかに勢いづいているのはルカの存在があったからであろう。彼らのように、法を犯してまで意識を転写させる者が後を絶たない以上、規制緩和によって

違法業者の根絶を目指す。加えて、ルカのような不幸な子供が出ることを防ぐという名目を得た、アードニーや他の推進派委員による答弁。そこまで聞いたところで、私はラジオのスイッチを切った。

高速（ハイウェイ）に乗ってから、十分ほどが経過していた。いつもはスムーズに流れてくれる道路が、今日はやたらと込んでいた。各車には相互監視デバイスが備わっていて、常に車内のＡＩが装備されている。交通障害になる可能性があれば事前に交通を誘導するのだが、今日はどういうわけか正しく作動していないようだった。街中に車が溢れ、ハイウェイの入り口に至るまでに随分時間がかかりそうだ。

私は車の自動操縦に切り換え、スクリーンを開いて見た。ウェブニュースには、やはり交通渋滞の記事が踊っている。動画にはちょうど私がいる高速近くの聖堂と、高架橋が映っていた。

二十世紀の遺物。ニュースではそう形容していた。渋滞という概念が消え去ってから久しく、辞書の中でしか知り得ないことで、まさしく遺物と呼ぶにふさわしい。都市の管理システムは、正常に作動する限りどこかで滞ることなど

「あってはならない」

最後にそんな文言で締めくくられ、しかしこれだけならばまだ、それほど異常な事態とはいえなかった。

ふと私は、他のドライバーたちが上を見上げているのに気づいた。渋滞であるなら普通は前を向いているはずだろうが、そうではない。道路沿いの、ビルの上を指さし、前方の水素車に乗っている女性など上を見てややパニック状態に陥っているようだ。倫理ネットを通じて、周囲の人間が発する脳波の乱れを関知できた。

私も上を見た。それほど高くないビルの屋上部分に人影を認めた。若い男性のようだった。柵を乗り越え、屋上の縁に足をかけた。

果たして、彼が飛び込むのに時間はかからなかった。彼の体が宙を踊り、まっすぐ落下し、その体が地面に到達するまでにかかった時間はおよそ八秒。私の車のボンネットに叩きつけられた。

すさまじい音がした。車体が揺れ、ボンネットが衝撃でへこんだ。彼の体はまるでゴム素材で出来ているかのように弾み、弓なりにしなった格好で地面に投げ出された。
私が車から飛び出すと、地面に横たわった彼と目があった。すでに事切れた彼の首は、およそ不可能な角度に曲がり、大きく見開かれた眼は半ば飛び出ていた。地面に接した頭蓋から、血が溢れ、本来鉄黒めいた血漿は組織の混じった灰色をしていた。彼の耳から、鼻から、同様に白い組織がこぼれ、それが彼の脳髄であることは疑いようもない。そうでなくとも彼の首からは骨が突き出、チタン導入された人工骨の断面をさらけ出しているというのに。
前の車に乗っていた女性が車を降りたが、それがいけなかった。彼の死体を目にした瞬間気を失い、その心理的ショックが倫理ネットを介して広がってしまった。現場は騒然となるのにそう時間はかからず、誰もが車を降り、その場を離れたがった。
ふとプライベート回線が入っているのが分かった。網膜の裏にちかちか光るメッセージの受信を知らせるランプは、緊急性を要する場合のみ点滅するようになっている。　私はスクリーンを開き、指先を幕の上に置く。神経回路を通じて、私にコンタクトを取ってきた者の声が、内耳に備えたマイクロスピーカーに響いた。
「異常な脳波を関知した。貴様、そこにいるのか」
スクリーン上には「ＳＯＵＮＤＯ　ＯＮＬＹ」としか記されないが、紛れもなくマクガインの声だった。予想した人物と違っていたが、今そんなことを気にしている場合もなく。
「飛び降りだ、マクガイン。ビルから飛び降りたか、もしくは突き落とされたか。ともかく男性がビルから落ちてきた。私の目の前で」
スピーカー越しに舌打ちするのが聞こえた。マクガインの苦々しい表情を想像した。
「自殺か」
「分からないが、突き落とされたってことは考えづらい。突き落とすも者の殺意を、事前に汲み取ることが出来るはず。強い脳波は五

キロ圏内までネットで伝わるから」
今こうして伝わっているように。死体を目の当たりにした人々の恐怖感情が、否応なく神経回路を刺激し、伝染し、誰も彼もがおびえている。もし私の脳神経回路に、心的負担の防御プログラムがなければ、私もその中の一人になっていたはずだ。
「すぐに動きたいが、そちらに行くまでに時間がかかりそうだ。応急処置は？」
「たぶん無駄だろう。既に事切れている。今は下手に動かさない方が良いかもしれない」
スピーカーの向こうで沈黙が続いた。マクガインはどうにかして最善の策を為そうとして、
「分かった。お前はなにもしなくて良い。我々が何とかしてそちらに行くから、そのまま動くな」
マクガインはそれだけ言って通信を切った。
ふと人垣の中で、じっとこちらを伺う影を見つ影を見つけた。皆が皆、パニックに陥り、どうしてよいか分からず右往左往し、あるものは失神し、あるものは恐怖で身を竦め、怒声や、悲鳴、どうにかこの場を離れようと車を動かそうとして別の車にぶつけたりして。そんな中でただ、何かしらの動作も起こさず、ただこちらを静観している。目深にかぶった帽子のせいで顔は伺えないが、明らかに他の人間とは違っていた。
違和感があった。群衆の中で、彼と二人しかいない錯覚にとらわれた。帽子の男は私の方を一瞥し、そのまま踵を返して路地の方に歩いて行く。その様子さえも奇妙に落ち着き払っている、ように見えた。
私は、つい先ほどマクガインに言われたことも忘れ、その男の後を追った。

15

路地に入ってから、男の足が急に早くなった。入り組んだビルの谷間を、足早に駆け、しかしそれでも私は何とか見失わず、男の後をつけた。ここで見失えば、それこそ手がかりなどこの先もずっと得られない気がした――倫理ネットにさらされていたにも関わらず、冷静に現場を見、私と目があった瞬間逃げ出した。まずあり得ない行動だった。何より、私が見た限りでは、拡張視野に情報が飛び込んでこない。都市にいる誰もが自分が何者であるのかというプロフィールを、少なくとも名前や所属が明らかにされた情報を表面上張り付けて生きているはずなのだが。

「ＵＮＫＮＯＷＮ」

そう表示されていた。普通はそんなことはあり得ない。都市住人である限り。そうでないならばどこの都市にも登録されない個体ということだ。

男が角を曲がった。私もそれに倣う。

いきなり、腕を引かれた。すさまじい力で左肩を捕まれた。私は左脇に吊った護身用のスタンガンに手を伸ばすが間に合わず、有無をいわさず壁に体を押しつけられた。抵抗しようとしたのへ、首筋に鉄の感触を得る。

「慣れないことはしないことだ。なあ、あんた」

耳元でささやく声。少し目を向けると、自動拳銃を握る男の手元が見える。声は、やや鼻にかかったような、発音の確立されないブロークン・イングリッシュだった。

「あんな分かりやすい尾行も、そうそうお目にかかれないものだ。自ら存在を主張しながら追っかけてどうするよ」

もう少し視線を傾ける。今銃を突きつけているのは、先に追っていた男とは別の男だ。私の腕をひねりながら押しつけているから、どうにも身動きがとれない。帽子の男は、いかにも可笑さをこらえ

ているという様子で言った。
「なあ、こいつ都市警け？　だったらこの都市の防御はザルなんけ」
「それならそれでやりやすいが、どうも違うだろうな。こんなもの」
と男の手が、スーツの下に伸び、スタンガンを取り上げた。
「都市警の装備じゃあない。動きもまるっきり素人だ。そんな奴があとをつけようだなんて」
どうにか首を傾けて、男の顔を見た。やや目がつり上がった東洋系の顔立ちをしていた。年は二十代か三十代前半といったところだろうか。やや色素の抜けた、灰色がかった髪色は、どう見ても遺伝子導入して作られたものだ。
帽子の男が、にやにや笑いながら掌ほどの端末を私の目に向けた。レーザーが私の網膜を走査し、ディスプレイに文字が浮かび上がる。拡張視野が一般化する前の、簡易型のリーダー端末だった。
端末には、私に関する情報が一字一句漏れなく記載されている。拡張視野ならば、こちらが情報を閲覧したということが相手にも伝わる仕組みとなっているが、端末で一方的に情報を取られるというのはあまり良い気持ちはしない。なにしろ、男の情報は「ＵＮＫＮＯＷＮ」を示している。これでは私の権利だけが侵害された形になる。
「都市警どころか、一番争いが似合わない奴ときたものだ。倫理院のバイオロイドか」
男は、端末を見ながらつぶやく。
「君たちは一体」
胸郭を圧迫された格好だったので、うまく声がでなかった。私はひどく必死に声を振り絞らなければならなかった。
いきなり男が、すさまじい力で腕を捻り上げた。関節が直接絞り込まれたような感覚で、どうあってもそれ以上曲がらないという角度で以って。網膜裏のセンサが肘部の靱帯切断を警告し、あと二インチも捻れば完全に関節が壊れる。そういう角度だ。
「へえ、これだけやっても痛くないのか。バイオロイドとは便利だ

な」
明らかに面白がって、男はよりいっそう強く銃口を押し当てた。
「そちらから質問することは一切まかりならん。質問はこちらからする、いいな」
一言一言、確認するような物言い。事実と少しでも違えればどんな最悪の事態にも転びうると予感させるに足る言葉選びだった。私が黙っていると、それを了解の意と捉えたようで、男は更に続ける。
「まあ倫理院というのは、荒事には慣れていないだろう。経験上、後を追い回すのはたいていが都市警の犬どもか外縁の連中だ。こういうことに慣れていない奴は、だいたいしっぽを出すものだ」
「よお、そいつ殺すんけ？」
帽子の男がはやし立てるような口調で言った。ひどく訛りの酷い口調だった。都市生活者であれば、ブルーカラーの労働者であっても口にしないだろう崩れた英語。それだけで外縁から来たと察するに足る材料だ。
だが外縁から来たのならば、どうやって都市ＩＤを手にしたのか。
「殺しても意味はないが、顔を見られた以上はなあ」
男は銃の撃鉄を起し、いかにも考えているというそぶりを見せた。
「ただこいつ、倫理院でも生化学研究所の所員だ。ＴＸ社の、なるほど最初の民間でかつ、あのフリーサイドで意識作られた実験世代ってか。こんなところでお目にかかるとはな」
驚いたような皮肉を込めたような、男は端末上の情報――勝手にかすめ取られた私の個人情報を――見ながら言った。そうしている間にも拘束は解かれず、むしろさらに締め付けがきつくなってゆく気がする。神経に伝達される危険値が上昇し、網膜に投影されるのに、私はやや焦りを感じていた。
「どこの所員て？」
「こいつはそこのプログラマーだ。おそらく脳神経の方だろう。あの研究所じゃ、脳のイカれた連中を洗脳してやる場所なんだよ」
誤解も甚だしいし、臆面もなく差別用語を口にした男の無神経さ

が信じられなかった。倫理ネットに繋いであれば、今の発言はヘイトスピーチと認められ、都市警に通報が挙がる類のものだ。何も反応がないということは、この男はやはり倫理ネットとは無縁の所にいる。都市住人ではない。
「ルカのいるとこけ、そこ？」
「多分な。こいつがそのチームなのかどうかわからないが」
帽子の男はやはりにやつきながら、私の顔と端末を見比べた。私は少しだけ拘束が緩んだので、顔をもたげて男の方を向。
「なぜ、君たちがルカのことを……」
腕の締め付けが最大限になった。私の肘と手首を捻り上げ、首筋に鉄がめり込むほど強く銃口を押しつけられた。それとともに関節が外れる音がして、網膜の生体監視（バイオモニタ）の危険表示が一気に振り切れた。
「気安く呼んでいるんじゃないよ、人の妹を。あんたはあいつの何だ？　悪いがバイオロイドと付き合わせるほど俺はお人好しじゃない」
いきなり押しつけられて、コンクリートとキスする羽目になった。口の中に細かい砂が入り込み、唾を吐き出した。口中を切ったらしく、唾にかすかな鉄の味を感じ取った。
「でもまあ、名前がわかるってことはやっぱり関わりがあるんだな。多分、あの本のことも知っているんだろう。もしかして対策チームの奴か？　だとしたらとんだ間抜け野郎だ」
私が黙っていると、帽子の男が、歯の欠けた口をゆがめて、からかうような口調で言う。
「どうすんのけこいつ。人質にすっかあ？　いくらかにゃなるでよ」
「いくらにもならんよ。こんなの連れていきゃ、足手まといになるだけだし、奴らに攻め込ませる口実を与えることになる」
「でも、顔見られたでよ」
「顔などいくらでも変えられるが――面倒なことにならんうちに」
その先は言わなくてもわかった。男の、銃の引き金にかかった指先に、徐々に力が加わるのが見て取れた。漠然と、撃たれるという

思いがあった。撃たれたその先がどうであるか、頭蓋骨が潰れ脳髄をさらけ出した自分の姿までが想像できた。
撃ち込まれた、その瞬間まで。
いきなり銃声がした。男の銃ではなく、もっと遠くから響いた。間髪入れず男の背後で光が爆ぜ、遅れて煙の塊が一気に膨れ上がった。
男が振り向いたところへ、もう一発。今度は男の足元で弾ける。至近距離で破裂したマグネシウムの炎が、白光をまき散らし、網膜を突き刺すのに、ようやくそれが暴徒鎮圧用の閃光弾であることがわかった。煙が充満し、その煙の中に今度は黒い姿の一団がなだれ込んで来るのを認める。
「確保しろ！」
怒号とともに黒い集団が一斉に発砲した。ショートバレルのショットガンから放たれた散弾が、帽子の男の顔面を弾き飛ばした。おそらくはこの都市で許される範囲の非致死性の弾なのだろうが、それでも大の男を転倒せしめるには十分だったらしい。帽子の男が倒れ込むのに、私の耳元で舌打ちを打つ人物がいた。
男は私を突き飛ばすと、集団に向けて発砲した。先頭の突入員が倒れるのに更に撃ち、撃ちながら後退する。突入員たちが応戦するが、男は素早く煙の中に消える。突入員たちが追い、その間に私は助け出された。
「何てざまだ」
私を助け起こしておいて、悪態をつく。マクガインの、呆れとも軽蔑ともつかない眼差しが突き刺さった。
「都市警ってのは荒事もやるのかい？」
「それが専門だからな」
右手をかばいながら立ち上がると、マクガインはショットガンを置き、腕の様子を見ながら
「手首を外されたか。まったく、よけいなことをするからそういう目に遭うんだ」

「返す言葉もないな」
靱帯が切断されて、しばらくは動かせそうもない。応急的に医療分子が働いてはいるだろうが、大抵は大きな怪我でなければ直ぐに治るところを、未だ修復に至らないということは思ったよりも深刻な状況であるらしい。
「何故こんな真似を」
「その男が」
と私は倒れている帽子の男を見やった。ちょうど突入員二人に両脇を抱えられ、立ち上がるところだった。帽子を取られ、自決防止の猿ぐつわを噛まされた男の顔は、まだあどけなさを残した十代後半といったように見える。
「見ていたから」
「後つけたってか、阿呆め。通報だけ入れりゃいいものを、鉄火場には向かないベータグループが無理をしやがって。もう少し遅れたら確実に殺られていたぞ貴様」
「悪かったよ」
隊員に拘束された男が恨めしそうに私を見た。左頬に痣をこしらえてはいたが、それ以上の傷はなく、隊員たちに促されるままに歩き、連行されてゆく。
「とりあえず、連中の出自を調べないとな。あの本と関わりがあるのかもしれんし」
「もう一人の方は」
「今し方、取り逃がしたって連絡が入った。そのうち追跡させるが、まずあの本のゲリラと見て間違いないだろう。おまえの仕事も減るだろうな」
「皮肉か、それ」
私は都市警の突入員たちが引き上げるのを見送りながら、ふと先ほどの男の言葉を思い出していた。手首を極められた時と、破壊された時の二回。
「さっき、あの男はルカのこと口にした」

「それは」
マクガインはショットガンの銃口を下ろし、ショットシェルを排出しながら答える。
「あの娘のことは、ニュースで毎日のように取り上げられるからな。人権団体との絡みもある」
「それともう一つ」
マクガインは、奇妙なものでも見るように私の顔をのぞき込んだ。
「どうした」
「いや、一つ気になることを言ってたんだ。あの男」
それが果たして、手がかりになるのかどうか。判然としないところだったが。

16

一週間が過ぎていた。

あの自殺を目の当たりにして、倫理ネットを介して心的ダメージを負った人間は、総じて研究所の世話になることとなる。義務や命令ではなく、ショッキングな事態を目の前に心の平静など保てるはずもないので、人々は進んで研究所に訪れ、プログラムを施し、何とか心的負担を少なくさせようと躍起になる――それに答えるべく、我々は一丸となり、彼らの心的負担と向き合う。そういう一週間だった。

私はプログラムにかかりきりになり、ストラウスは現場の対応に追われ、ソフィーヤもまた例の男の足取りを追うために駆り出され、そのせいでルカの面接は取りやめとなった。従って、私の感じた疑問をぶつける場が用意されたのは、事件から大分経ってからのことだった。

「悪いニュースと、最悪なニュースがある」

事件から十日目。膨大な患者をほぼ捌き終わり、診察室に呼ばれた時、ソフィーヤが口を開いた。

「どちらも悪いことしかないのですか」

「悪いにも程度があるでしょう。悪かより悪かで、ぜんぜん違う。個人的にはもっとも酷い方から聞いた方が心理的負担は少ないと思うけど」

「では、そちらから聞きましょう」

私が言うのへ、ソフィーヤはやや疲労の色がにじむ微笑をしてからスクリーンを開いた。

「あんたの腕をぶっ壊した男の個人データが取れた。都市警の猟犬が嗅ぎつけて、その男の生体を分析したんだけどね」

「それは良いニュースではないのですか」

「結果を知るまではそう思っていたけど」

言って、彼女はスクリーンをなぞる。見知らぬ男の顔と個人情報が、半立体のグラフィックとして浮かび上がった。
「ネイサン・ジョーンズ。それがこの男の名前。ＮＹの市民ＩＤを持っていたけど、三年前にデータが抹消されているわ。老衰に伴い、なけなしの金でフリーサイドへの切符を買ってあちらの世界に行ってしまったため、ね」
「それは」
確かに最悪と言えた。私を拘束した男は大分若く、まだ三十歳手前であるかのように見えたのだが。映像の男はかなり老け込み、そのまま寿命を尽きさせるか、あるいはフリーサイドに行くべきか、その分岐点に立っている。そういう年齢に見えた。深い皺が刻まれた、老人の顔。
「確かなのですか」
「残念だけど、連中の猟犬（ドッグ）部隊が今まで外れを出したことないんだよね。あれが狂っているとなれば、あんたの古巣を訴えなきゃいけないレベルだけど」
犬（ドッグ）と呼称しておきながら、その実六本の機械脚を持ち、羊と鯨の神経を組み込んだ自走ロボットＴ―０型、通称「猟犬（ドッグ）」。現場の生体を正確に走査（スキャン）して、膨大な生体データの中から合致する生体を探し出す、生物捜査専用のロボットが都市警に採用されている。犬というよりも猫のような細心さで探し出した生体は、ほぼ確実に選別されるので、間違いなど考えにくい。
「機械の故障でなければ、あの言葉は何なのでしょうか」
「あんたの聞き間違いってことはないの？」
「確かに言いました。妹と」
ソフィーヤはしばらく考え込んだ後、ため息混じりにつぶやいた。
「兄弟がいたとは聞いたことなかったけどね」
「オベール夫妻に引き取られたときは、確かに一人だったのでしょう。しかし引き取られる前はそうとは限りません。彼女の個人情報は飽くまで都市内部でのこと。ゲリラ村にいた頃の情報は乏しい」

「つまり、あの子だけ引き取られて、あの子の兄が今更になって戻ってきたということ？　回収された生体は、別人のものだけど」
ソフィーヤはスクリーン上のデータを見ながら唸った。
「ルカに兄がいたのかどうか」
私はソフィーヤが自分の世界に入ってしまう前に訊いた。
「本人に聞くべきでしょうか」
「あまり面接に関係ないことはしたくなんだけどね。余計なことは考えてもらいたくないし」
スクリーンを消し、ソフィーヤは向き直った。
「実は自殺事件のことも、例の本についても伝えていない。あの子自身が微妙な問題抱えているってのに、これ以上神経を刺激するようなことがあったら、それだけでも心理的に悪影響を与えかねないから」
「しかし事実関係がわからなければ」
「そういうのは都市警の仕事だよ、ユーリ。滅多なことはしないことだよ。あんたも懲りたでしょう、その腕で」
ソフィーヤは私の腕に触れた。ようやく神経がつながり、折れ曲がった関節が修復された右腕だが、まだ指を曲げ伸ばす時に違和感を覚える。二度と余計なことをするなという戒めのような腕は、未だ私を縛り付けていた。
「きれいに靱帯が切れていたから、まだ修復が早かったんだよ。中途半端に伸ばしたままだと、その分治りが遅くなるんだから、あんたラッキーだったよ」
何が幸運なものかと口にしかけたが、あのまま殺されていたかもしれないことを思えば確かに幸運だった。私は腕をさすりながら、ため息をついた。
「ルカのことを口にしたら、折られました。血縁関係は無くとも、やはり何かしら関係があるのかと」
「そうは言ってもね。生体の元の持ち主については、すでに委員会が確認した。フリーサイドに、ネイサン・ジョーンズを示す固有波

形が見られたわけだから、間違いなくネイサン・ジョーンズはフリーサイドの住人だって分かっているんだけど」
ならば、あの男が口にしたことが虚構だったのだろうか。だが、そんな嘘をついて何の得があるのか。
「この件は、追って調べる必要がありますね」
「ほとんど都市警の仕事だから、私たちがやることはないけどね。生体の分析も、捜査チームで行うだろうから」
どこかソフィーヤは冷めた口調だった。あれほどの事件があっても、すべてを突き放して見ている。
「あまり驚かないのですね」
私が問うのに、ソフィーヤは意外そうな目で見た。
「どうして？」
「平然としていますが、あの本のことを忘れたわけではないでしょう」
例によって、自殺した男性の家には地下出版『ナツィオへの帰還』が発見されたという。元々銀行員だった彼は、仕事でも家庭でもトラブルはなく、順風満帆に過ごしていたという。その彼が、あの本を持っていたということは、家族も同僚も全く知らなかった。当然、自殺するようなそぶり――悩みを抱えていたり、誰かと関わるのをいやがったり――そういったことは一切なかったということだったが。
「自殺者、あるいは自殺未遂者は皆、あの本を読んでいる。そしてあれの著者の名が」
「阿宮圭ってね。あんたの言いたいことは分かるよ、つまりあんたの腕を折った奴が、ルカの兄を名乗った。その兄ってのが、阿宮圭なんじゃないかってことでしょう」
「何かしらのつながりは疑うべきことかと。偶然の要素ですべての説明がつけばそれでも良いですが」
「でもその仮説にはいろいろと無理があるね。第一、阿宮圭はすでに死んでいる」

「その情報が偽り、ということはないのでしょうか」
ソフィーヤは手を止めた。私の言ったことを反芻するように視線を宙に漂わせ、しかしそれでも意図を掴みかねるというように、聞き返す。
「どういうこと？」
「データベースへの侵入は、通常の都市住人にはできません。したがって情報の書き換えなどまず不可能でしょう。しかし倫理院の、コードを知っているものならば可能です」
「倫理院だろうと何だろうと、閲覧と書き換えには生体の記録が必ず残る。それだけじゃ何とも言えないよ」
「本当に、データの侵入は可能ではないのですか？　その侵入記録を消すことは」
まるでそれが重大な何かであるような、深刻な目をする。ソフィーヤはそれを口にすることを、非常に躊躇っているようだったが、それでもようやく口にした。
「それは」
と前置き、それも相当の時間が掛かったように感じた。
「多分出来ないよ。技術的にそれが不可能というわけじゃなくて、行政がそれをさせないからね。ただ、ネットワークをかいくぐることができないわけじゃない。でもそんなこと言ったらキリがないからね」
ソフィーヤはやがて、馬鹿らしいことだと頭を振った。
「でも滅多なことは言うもんじゃないよ。仮にできたとして、それこそ何の得があるって話だから。ゲリラの手助けする義理なんて何もないし、都市の人間にとって、ゲリラは自分たちの存在を脅かすものだから、手を貸すはずもない」
ソフィーヤは気分を切り替えるように立ち上がった。大きく伸びをして、それまでの悪い空気を入れ替えるように深呼吸して、
「でもまあ、その男がルカの兄だとしても阿宮圭と結びつくものがなければね。捕まえることができれば、それでも良いけど。でも捕

まったところでまた死なれるかもしれないし」
「また、とは」
「ああそうだ、言ってなかったね。悪い方のニュース」
とソフィーヤは言って、
「あんたが追ってた男、昨日自害したってよ」
「自決ですか？　どのように」
確か、捕縛されたときは猿ぐつわを噛まされ、両手は電子錠で固定されていたはずだった。自害できるような風でもなかったように見えた。
「納得いかないって顔だね」
ソフィーヤは当然のごとくに私の疑念を感じ取ったようだった。私は何度、彼女に言い当てられる運命にあるのだろうかなどと妙な考えが浮かびながら、
「あの状態で自害とは考えにくいので」
「都市警も予想外だったんだろうね。体の中に毒仕込んでいたんだよ」
「体内をスキャンすればすぐに分かるのでは？」
「粒子のカプセルに毒を封入していた。そいつを気道から肺の内壁に張り付けてあったんだよ。細かいから見落とすんだよね、ああいうのは。体内で爆ぜて、内部に回るのに数秒とかからない」
「そういうものは取り除くことはできないのですか」
「できないってことはない。ただ体の内壁に一体化しているから、発見は難しいけどね。あっちのゲリラは特に、捕らわれたら自決すべきって思っているらしくて、よくこの手の自害を試みる」
自決の瞬間を目の当たりにした都市警の隊員たちは、さらに深い心理的ショックを受けたのだろう。明日からまたプログラムを作り直さなければならないだろう、と思いながら
「ルカに、そのようなものは仕込まれていないのですか」
「ああ、あの子は平気よ。都市に生活拠点を移してずいぶんになるんだから。それで、ルカだけど面接は明日にやろうと思う」

この一週間ずっとプログラムに掛かりきりで、今までルカのことに全くノータッチだった。なので彼女の面接自体、どこか現実味が薄れていたが、ソフィーヤはむしろそれこそが主であるべきという口調で話す。
「急ですね、また」
「前の面接から十日は経ってるよ。時間を置きすぎると、あの子の心も変わる」
それに、とソフィーヤは口にしかけたが、言うべきか否か迷った挙げ句黙り込んだ。しかし言いたいことは分かった。もうルカには、あまり時間がない。機械細胞の進捗状況によっては、彼女はすぐにでもフリーサイドに送られることとなる。そうでなくとも議会は、フリーサイドへの規制緩和を進めている。
「それと今度の面接は、あんたがやりなさい」
「私が？」
まったく予告なしにそう言われると、少しばかり面食らう。私が次の言葉を探していると、ソフィーヤはあきれたような口調になる。
「何驚いてんの。あんたがやりたいって申し出たんじゃない」
「それはそうですが、こんなに急に来るとは思いませんでしたので」
「しっかりしてよ。まあ余計なことを喋らなきゃそれでいいから。あと、あんたが会った男については」
とソフィーヤは、立体映像を再び現出させ、
「今はまだ言わない方がいい。ネイサン・ジョーンズについては、ルカとの関連を調べてはみるけど、ルカには余計なことは言わないように」
余計な情報は伝えず、当たり障りのないことだけを言うように。一見すればこちらの都合の良いことしか並べない、詭弁のようでもあるが、時にはそれが必要なこともある。
「分かりました、ドクター」
倫理規定にも、何ら違反しない程度の隠蔽。全て納得ずくのことだ。

17

「こういうことは、あまり好きじゃないけど」
開口一番、ルカが吐き捨てた。より狭い部屋、それこそ以前にも増して殺風景で、もはや牢獄といって差し支えない。そういう場所だった。乳白の真珠めいた床にルカの姿が写り、同じ光沢の壁面、天井に、それこそ全くの写し絵のごとくに、私と、彼女の対面を描き出している。もはや唯一の調度品ともいえたテーブルすらなく、しかしそれはそれとしても、ルカにとって納得しかねる事態というのは面接場所があれこれ変わるということなのだろう。いつになく不機嫌に見えた。
「すまないね。もうここしか空いていなくて」
私がついた嘘は、果たしてルカに見破られただろうか。変な危惧が頭をよぎった。たわいない、倫理規定にも反しない程度のものだから、特別こだわることなどない類の嘘であるにも関わらず。どうしてか彼女の敵意に満ちた視線が、気に掛かる。
「あの部屋は、今までは使っていなかったから良かったのだけど。事情が事情で、ここに移らざるを得なかった」
マニュアル通りの説明。本当はそうではないことを、もし目の前の少女が知ったら私のことを軽蔑するだろうか、などと考えて、しかし改める。軽蔑などしないだろう、すでに今、敵意に満ちた視線で私を睨みつけている。
「事情って何よ」
ルカは、アルミ椅子に座ったまま両足をゆらゆらさせ、退屈そうでありながら、しかし何かあればすぐにでも喉笛に食らいつくことができる、獣のような気配を纏っている。身をすくめ、足の先まで神経を集中させ、全身で警戒を露わにして、決して心を許さない。
「自殺騒ぎのこと、もしかして」
多分、私の思っていることがそのまま顔に出たのだろう。ルカは

馬鹿にするような笑みを浮かべた。
「どうして知ってるんだって顔だね。私が知ってちゃおかしい？」
「所員の誰かが言ったのか」
「ただ何となく慌ただしいから、ちょっと注意して聞いたら自殺者が出たって。小耳に挟んだだけだよ。というか、何でそんなことわざわざ隠す必要があったわけ？」
「君に余計なことを考えさせたくなかったからね」
ルカに刺激を与えまいと秘匿していたのだが、当のルカ本人は何ら気にかける様子でもなく、他人事であるかのように話す。
「私に気使ったっての？　いかにもだよね、そういうの。私がそういう話でへこんだり、精神的に悪いとか何とかしなくても良い気の使い方。私がそれでどうにかなるとか、勝手な想像でさ」
こちらが気にして、刺激にならぬよう配慮して、しかしルカはそんな思惑を軽々と飛び越えてしまっている。むしろ私たちがそうしたことを、彼女はひどく気に入らないようだった。
「死者が出ていてこういうことを言うことは不謹慎だけど、いかに自殺者が出ても君に伝える必要はなかったし、特に気を使ったということではないよ。君が弱いとか、そういうことを言っているわけじゃない」
「嘘吐くなよ、肉人形。意図的に私の目から逸らしていたくせに。私がやらかしたから、それで隠していたんだろう」
ここで反論すれば信頼など得られないので、私は黙っていた。そもそも、ここは議論を交わす場ではない。私は、彼女が落ち着くのを待った。
「で？　今日は何を言われて来たわけ？」
「言われたとは」
「あんたのボスにさ。あのロシア人がいないじゃん、今日は。まあどうせ同じことしか言わないからいいけど」
”ロシア人”が一瞬何のことか分からなかったが、そういえばソフィーヤはウラジオストクの出身だった。言われなければ分からな

いことだ、と思って
「同じことを言ったのかい？　たとえばどんな」
「命を粗末にしちゃいけません、とか。そういうこと、何度聞かされたか分からないことだよ」
「ソフィーヤが、そう言ったのかい？　命を粗末にしてはいけない、と」
「あの女はそうじゃないけど、どうせいつか、そういうことを言うだろうよ」
「それは決めつけでは？　先に、君が唾棄すべきと言った勝手な想像と同じになってしまうのでは」
　案の定、私の指摘は刺さった。ルカは自分の言っていることとの矛盾に気づいたらしく、押し黙った。あまり断定的に言うと心証を害するので疑問を投げかけるみたいに指摘したのだが、それでも彼女はあからさまに不機嫌そうな顔をした。ソフィーヤのようにはゆかない、と思いながら、
「私は、君にこうしろとか指示したり、命の大切さを力説したりしない。君が思っていることを、教えてもらいたいだけだ」
「あんな気味の悪いプログラムを押しつけて、ダメだとみると意味分からない面接させられて」
　ルカの声は、もはや棘そのものであるかのようだ。
「図々しく教えてくれだ何だって、何様だろうねあんたら。まして、肉人形風情に話すことなんて」
「その、肉人形ってどういう意味なんだろう」
　ルカはこの上ないほど酷薄な笑みを見せた。頬がひきつり、かなり作った笑みであっても、彼女にとってはそうすることが一番効果的であると。無理矢理そう思いこんだ末の表情であるかのようだった。
「あんたみたいな奴らさ。作った遺伝子プールで、都合のいいように組み合わせて、頭ン中を機械で埋めたような奴ら。機械だか肉だか分からないけど、とりあえず人形には変わらないだろう。だから

肉人形」
「私の体は、ヒトのそれと変わらない。私が人形なら、君も人形になってしまう。人の体も、精密な機械のようなものだ」
「私は違う」
断固とした口調。体をこわばらせ、椅子の端を掴み、細い肩を小刻みに震えさせ、必死で何かに耐えるような面もちで見ていた。彼女の幼い目が、今にも爆発しそうな熱を帯びている。何か、彼女にとっての地雷を不用意に踏んでしまったような後ろめたさが襲った。
「違うというと」
「私は歴とした人間だ。あんたみたいな寄せ集めと一緒にするなよ。適当に遺伝子選んで、適当に肉をくっつけたようなものじゃない。そんなものと一緒にするなよ」
「確かに、君と私の体の作りは違う。けれどバイオロイドも君と同じように思考し、心がある。バイオロイドが人間ではない、と結論づけるのは早計じゃないか？」
ルカは黙っていた。私が次に発するのを、じっと待っているかのようだった。何か主張しようものなら、即座に切って捨ててやろうと構えているように。
「元々の私の遺伝子は」
私は、注意深く言葉を選ぶ。どうすれば一番確実に、納得のゆく言葉を生み出せるかを考えた。
「フラーレン分子による人工塩基だが、それは等しくヒトと同じ配列になるように設計されている。まあそれはそれとして、大本が違うからといって人格が存在する限り、それはヒトであると言って差し支えないのでは」
「我思う、故に我あり」
突如、ルカがそう呟いた。
「ってね。あんたもそう言うんでしょう、きっと」
「デカルトはそれほど詳しくはないけど、そういうことだ。私が、私の体について本物か偽物かと問いかける自分の意識が確実ならば、

それは私が存在している証明に他ならない」
「暢気なモンだわ。次に来るのは、自分の意識があるならたとえ体が全部置き変わっても自分はなくならない、とかっていう説得。機械細胞だとか、あるいは」
憎々しいという、意思の表れであるようにルカは噛みしめた。
「フリーサイドとか」
彼女の口からそれが出てきたのは、おそらく初めてじゃないだろうかと思いながら、私は向き直る。脳波測定が成されていれば、どれほどの値を示したのか分からない、それほど嫌悪に満ちたルカの表(おもて)と、対面した。
「私の体をいじった奴らも、同じ事言ってた。肉体が何か別のものになっても、私が私だって意識している限り、私がどこかに消えてなくなるわけじゃないって。嘘をついた。あいつらにとっちゃ、嘘ついてまで私を送り込みたいのかどうか知らないけど」
「誰が嘘をついたんだ？」
「あんたら全員に決まっているだろう。機械の細胞だからって平気、プログラムだかを埋め込んでも大丈夫、って。こんな気持ち悪いものを、あたかも最高に素晴らしいんだって押しつけたのは」
「しかし、実際はそうではなかった？」
私の問いかけに、ルカは俯いた。答えることを拒否する素振りだった。
「君は、機械細胞やフリーサイドが嫌だから、だから抵抗を示しているのか？　そのために自傷行為を――」
「あんたに何がわかるんだ！」
いきなり、ルカは立ち上がった。椅子をひっつかみ、私に向かって投げつけた。果たして椅子の脚が額を掠め、衝撃を脳に受けてよろめいた。
頬を、どろりとした触感がなぞった。手で拭うと、黒っぽい組織液が付着した。そうでなくとも網膜に、額の裂傷を知らせる警告表示が浮かんでいる。

「やっぱり」
乱れた呼吸のまま、ルカは言った。
「痛みは感じないんだね」
私は椅子を引き戻し、彼女のところに持っていった。私が座るよう促すと、ルカは案外素直に従った。というよりも、力を失って立っているのが億劫になったのでやむなく座らざるを得なくなったという風だった。座り込み、力なくうなだれた。
「最近は、切っても何も感じないんだよ」
そして、深い絶望でも飲み込むかのような、か細い声で言う。
「機械細胞って奴は。いくらナイフで傷を付けてみても。ただ黒っぽい血が流れるだけで、痛みも何も感じない」
「君は痛みを感じたいのか」
私が訊くのへ、ルカは頭を振って
「この細胞が、いつか脳まで支配したら私は私じゃなくなる。あんたと同じになってしまう。思いっきり傷をつければ、もしかしたら違う風になるかもしれないって思ったんだけどね」
私と同じ、という言葉の意味を聞く間はなかった。面接終了の合図が、網膜の左下に点滅するのに、私は告げた。
「今日は、もう終わりだ」
ルカは椅子に座り直した。どこかぎこちない動きで、何とか腰を下ろしたという印象だった。
「来週、また面接をしたいけども良いかな」
「勝手にすればいい」
ルカはあくまでも素っ気なく言った。

18

部屋を出ると、すぐにソフィーヤが出迎え、ハンカチを差し出した。
「派手にやられたね。使う？」
「いえ、結構です」
傷自体が大したことがない上に、出血はすでに収まっている。わざわざ借りるまでもない。私は傷口を抑え、軽くなでると、すでに体内の高分子によって修復された膚の感触を得た。
「どんな感じよ」
とソフィーヤが訊き、
「ちょっとは理解できそう？」
「何も分かりません、少なくとも今は」
「そうか、残念」
そうのたまいながらも、ソフィーヤはいたずらっぽく笑う。まさしく予想通りの反応だ、と言わんばかりに。
「気にすることはない。カウンセラーは、必ずクライエントに共感しなければならないってわけでもない。中立な立場であることが求められるからね」
「彼女が」
いきなり足下を清掃ロボットが通った。円盤の機体を踏みつけそうになるのを、ロボットの方ですばやく軌道を修正して回避する。運動性能と反応速度は流石といえる、我らがＴＸコーポレーション。
「フリーサイドを忌避するのは、機械に対する嫌悪と同義といった印象でした」
「そうね。機械細胞も同様に嫌だって感じだね」
別室のマジックミラー越しにやりとりをみていたソフィーヤは、すでに何もかも心得ているというように頷く。
「自傷行為も、つまりは機械に対する嫌悪からなんだろうね」

「過去にもそのような例が？」
私は何の当たり障りもないように言ったつもりだが、以外にもソフィーヤは深刻そうな面もちをしている。何か余計なことを聞いたのかもしれない。
「だいぶ昔の話だけど。機械を埋め込まれたことによる心身のバランスが崩れるってことがね。随分前の、サイバネティック手術での例だけど」
「なぜそのようなことが」
「それを自分の体と認識できないからなんだろうね。声を発するにしても、自分が喋りたいことは一旦、スピーカーで合成されて発せられる、じゃあ話しているのは自分なのか、それともそのスピーカーなのか。また相手が話していても、その人が喋っているのか、スピーカーから発せられている音なのか。もっというなら、その人は「どこ」にいるのか。考え出すときりがない。それで、自分の体と心がうまく協調できなくなるって、そういうこと」
「しかし、機械細胞や疑似神経回路は本人のＤＮＡを基にしています。自分の声は、正真正銘自分の声帯から発せられたもので、例えば機械細胞であっても外部からのインプラントと違って内部からのボトムアップによって構成されます。異物という感覚は、それでも持ちうるのでしょうか」
「そうだね。脳神経にしても、全体の十パーセントを疑似神経にしても、本人の意識に影響がない。そしてそれを二十パーセント、三十パーセントと増やしても、やはり意識が変わらなければ、そのままいけば百パーセント疑似神経になっても本人は気がつかない。そのぐらい、機械細胞というものは自然に、本人の細胞と置き変わってゆく」
「ならば――」
「でもね」
ソフィーヤは、あくまでも個人の意見だと断ってから言う。
「時々、自分の体が一枚の絵に埋め込まれたような感覚になるよ。

これでも五十何年って生きてきたけど、そのウン十年の時間なんかなくて、最初から私がここにいたような、そんな感覚になる。自分が五秒ぐらい前に生まれたんじゃないかって感覚ね」
　正直、何を言いたいか分からなかったが、ソフィーヤはお構いなしに続ける。
「生体監視分子ってね。例えばホルモン量が少なくなれば脳に分泌を促し、紫外線で膚が痛めばすぐにそれを修復してシミになるのを防ぐ。定期的に入れ替える医療分子が、少なくなった代謝を促すし、遺伝子治療によって若々しい体を常に生み出してくれる。私の昔の映像なんかみると、今とぜんぜん変わらない。そうなると、本当は何十年って歴史は実は無くて、全部私の妄想だったのかと疑うことがある」
「あなたはあなたでしょう。外見がどうあろうと」
「そうね。そのように疑っている自分がいる以上、私は私なんだけど。けど時々、昔の人間みたいに皺の刻まれた、いかにも中年然とした姿で歩いてみたい気も出てくるよ。少なくともその皺の数だけ、年齢を重ねたっていう確証が得られるでしょう」
　年齢の証。それも過去の価値観である。私や他の人からみれば、年老いた姿とは不摂生や自己管理の杜撰さを宣言するようなものであり、それは社会全体の通念でもある。それを敢えてやりたい、ということは、殆ど社会全体に対する挑戦と見てもよい。
「もっとも、それを思うのは本当に一瞬なんだけどね。次の瞬間には、やっぱり嫌だって思う。年老いていく自分の姿なんて、想像したくないし。その先に死があるって、どうしても考えてしまうよ、多分」
　都市の住人は、老いることと死を恐れている。少なくとも病や事故、犯罪で死ぬ人間が毎年、極端に減りつつある中で、老衰による死というものは免れない。人間にとって、残された最後の牙城がフリーサイドであり、だからこそ都市の人間はフリーサイドを目指す。
「あなたも」

ふと口にしてみた。あまり、意味のない問いであることはわかっていたが、それでも聞かざるを得ない。そんな気分だった。
「あなたも、フリーサイドに行きたいと思うことが」
「さあ、どうだろうね」
ソフィーヤは曖昧な笑みを浮かべた。どのように意図をくみ取り、捉えようともかまわないという笑みを見せる。どこか陰りが垣間見え、しかし私にその意味など分かるはずもない。
「それで、イデオロギーの片鱗はありそうですか」
私が訊くのに、ソフィーヤは首を振った。
「かたくなに機械を拒むということは、機械細胞に対する思いこみ、非合理的な信条を固持しているためかもしれない。もちろん、機械でなくあるべき姿のまま生きるべきというゲリラの教義と言えなくもないけど、そもそも機械を忌避すること自体は都市生活者にもありえる信条だからね」
「では、厚生施設には送らないと」
「もう少し、様子を見ないと何とも言えない。大体厚生施設というものは本当にどうしようもない、都市の機関じゃ手に負えないっていう人間が送られるような場所だから、おいそれと移してもすぐに受け入れられるとは限らないし」
彼女の信条（ビリーフ）がそれほどのものか、そうではないのか。その判断は、いずれにしても人権委員会の規定に基づいて行われる。今日のやりとりを記録した媒体を提出し、それによってイデオロギーの影響が大きいと判断されたら、彼女は厚生施設へと送られる。
そうすれば私の仕事も終わる。

シリーズの中でも、遺伝子の選別は遺伝子プールによって違う。パーソナリティとはまた別に、身体能力についても、与えられるコードの違いにより、遺伝子の配列も変わってくる。私のようなベータ槽由来のシリーズは、知能を優先させたために、あまり運動性能には優れていない。

だから、その瞬間を察知できたとしても、私が自力で「その事態」から脱するのは不可能に近いことだった。
車を降りたときから予感はあった。郊外のアパートについたとたんに、後ろから銃口を押しつけられた。
「駐車場もセキュリティが効いているのだが」
私は振り向くことなく言った。こういう場合は何も言わない方が得策だ。
「都市の警備に比べれば、あんなものはザルだ」
左斜めの方向から声がする。相変わらず、ひどく聞き取りづらい崩れた英語だ。発音の文法の乱れは、東アジアのゲリラ特有のものだ。
「私を拉致したところで何の得にもならない。他を当たった方が良くないか」
「あんたに話があるという人間がいる。ついてきてもらえりゃ、痛い目は見ないってよ」
「話とは誰が」
もっとも、それを質問することは許さぬという雰囲気があった。男が銃口を強く押しつけるのに、私はハンドアップを余儀なくされる。銃の種類は分からないが、おそらく先日と同じ火薬式の旧いタイプの銃だろう。回転式ならシリンダーを掴めば、自動拳銃ならば銃口を押し込めば引き金が引けなくなると聞いたことがあるが、試してみる気にはなれない。大人しく従うより他なかった。
「歩け」
短く、そう命じられた。車をそのままにして、私は駐車場を出た。願わくばこの瞬間の映像が監視カメラに写っていることを期待するが、すぐに反応しないところを見れば、おそらくはあれも何らかの方法で無力化されているのだろう。
「乗れ」
そう言われ、指し示されたのは白塗りのワゴンだった。化石燃料がまだ主流だった時代の名残で、燃料を直接燃やして動力を得る。

そういう類の古い車だ。私が躊躇していると、いきなり男は私の腕をひねりあげた。さすがに一週間前と同じように痛めつけられた箇所だけあって、少し間接をねじ曲げられただけでも監視分子が過剰に反応した。

「乗れと言ってる」

「わかったよ。あまり乱暴にしないでくれ」

「乱暴になどしない。言うことを聞けばな。抵抗するならば、少々、手荒なことも許されている。お前の命運は今俺らの手の中にあることを忘れないように」

銃の先でこづかれるのに、私は仕方なくワゴンに乗り込んだ。

車中は体を折り畳んで入らなければならなかった。スモークのきつい窓ガラスに手をついて、腰を折り曲げ綿のはみ出す座席に身を預ける。果たしてシートからつきだしたスプリングが、私の背中を刺激した。

「ろくな車じゃないな」

「我慢しろ」

男は律儀に私の悪態に答え、私の横に座り込んだ。そこで初めて男の顔を確認することができた。以前の、帽子の男と同じぐらい、若い。十代後半といった顔つきだが、目つきだけはやたらと老成していて、鋭い目つきは都市警のそれに共通した殺気めいたものに思える。右のこめかみから頬にかけて、切りつけられたような深い傷が走っている。否応無く威圧的で、何も語らずとも十二分に力量を悟らせる迫力。例え従うことがなければその先はないと思わせるに足る、そういう気配を纏っている。

「出せ」

ドアを閉めると、傷の男は運転席に――ドライバーの顔は見えなかった――短く命じた。騒音とともにガソリンエンジンに火が点いて、車が動き出す。すさまじい振動に見舞われてシートの端を掴み、何とか体のバランスを取った。

「それで、どこまで行くんだ」

私が質問すると、傷の男は迷惑そうに顔をしかめた。
「貴様が気にすることではない」
「身柄を拘束されておいて、何の説明もないというのはあんまりじゃないか」
「とか何とか言っておいて」
男は、私のこめかみに銃口を押し当てた。
「衛生追尾システムを作動させようというのだからな。言っとくがこの車はナノボットを完全に遮断しているから、ＧＰＳの類は使えない」
流石に、すべてお見通しといった様子だった。網膜のスクリーンには粒子の不足を表す表示がまざまざと浮かび上がり、おかげで私の現在位置だとか、外部との通信だとか、そういう操作が一切出来ない状態になっている。アナクロなガソリン車によくそれだけの仕掛けが出来るものだと感心したが、よくよく考えればナノボットが入り込めない程度の機密性を保てればそう難しいことではない。ＧＰＳも使えず、また窓のスモークのせいで外の様子も伺えない、となればもはやどこを走っているのかなどと、まるで見当もつかなかった。
「あんまり驚かないな」
男が言うのへ、私は少し顔を傾けた。
「驚くとは」
「妙に落ち着いている。バイオロイドは誰もがそうなのか」
「誰もが、というわけではないだろうが。先日のことがあってから、予感はしていた」
「予感？　あんたらバイオロイドがそんな言葉使うのか」
初めて男は笑ったが、全くの侮蔑の色に彩られた底意地の悪い笑い方をする。どうやら相手への敬意や最低限の礼儀というものが欠けているような彼の態度は、やはりゲリラだろうという気になる。
「予感という言い方が気に入らないのならば取り消すが、あのとき君たちに接触したときから、ただでは済まないとは思っていた。大

方、私を拉致したのも彼の命令なのだろう」
「頭の回転早い奴は嫌いじゃない。一週間、あんたの動向を探らせてもらったが、あの駐車場が一番実行しやすいから、そうさせてもらった」
「ビルの管理人に忠告しておこう。セキュリティにかける労力の三割でも、あの駐車場にかけておくべきだったと。それで、なにが望みなんだ」
「勘違いすんな。たかが一施設の職員ごときに要求ふっかけても何もならないことはわかっている」
「私が帰っていないことがわかれば、自動的に通報が挙がるようになっている。都市警が動くのも時間の問題だ」
「それまでにカタはつくだろうよ。着いたぜ」
時間にして、二十分ほどだろうか。以外に早く、目的地に到達したようだった。男は私に、車を降りるよう促した。
ドアを開けた瞬間、ナノボットの洗礼を受けられるかと思ったが、やはりと言うべきか網膜のセンサーは何の反応も示さない。一立方の空間に粒子が三十パーセント含まれていれば簡単な通信は出来るが、今は十パーセントを下回る数字をはじき出している。あくまでも、助けを呼ばせないという心づもりであるらしい。
それならば自分で状況を把握するより他はない。私は周りを見渡した。薄暗がりだが、思った以上に周囲の様子を確認出来た。四方には鉄骨を編んだ無骨な壁が迫り、同じような鉄の構造が天蓋を塞いでいる。足下のコンクリート、そして陰が落ちている四隅には、使い古しのコンテナめいた立方体が積み重なっていた。どこかの倉庫のようだったが、都市部には空き倉庫というものは存在しないはずだったので、どうにも腑に落ちない。
「買い取ったんだよ、ここ」
声がした。傷の男ではない、もう少し歳を食った人間の声音だった。傷の男が照明を点けると、声の主が明らかになる。
まさしく予想通りだったので、あまり新鮮味はなかった。中央に

積まれた鉄骨の上に、足を投げ出して座る男の姿は、忘れようにも忘れられない顔だった。すでに都市には存在せず、粒子の群知性に肉体を置き換えたはずの人間。
「コウヨウ、ご苦労だった」
傷の男はコウヨウという名であるらしい。その男――ネイサン・ジョーンズが労いの言葉をかけるのに、コウヨウは恭しく頭を垂れた。続いて二人は私にはわからない――おそらくゲリラたちの固有言語でネイサンと二言三言交わすと、ネイサン・ジョーンズは私の方に向き直った。
「驚かないのな」
「何を」
ネイサン・ジョーンズは、どうやら私が面食らうことを期待していたらしい。思い切り不服そうな顔をする。
「俺の顔見ても。さっきから妙に落ち着いているし」
「彼にも言ったが、予感はしていたからな。こういう事態になってからも、だいたい分かりきっていたよ」
「予感ねえ、予感。あんたみたいなのでもそういう言葉遣いするんだな」
「その答えも予測済みだったよ、ネイサン・ジョーンズ」
目の前の男は、眉尻をあげて、何か格別興味深いものでも見つけたような顔をする。
「その名はどこで」
「現場から生体を拾った。本来ならば存在しないはずの名前だが、現実にこうやって邂逅している以上、そう呼ばざるを得ないだろう」
男は立ち上がり、独り言のようにつぶやいて、
「そうか、そういやそんな名前だったんだな」
私の方に近づいた。それによって改めて、男の顔を確認することが出来た。
映像に写されていたネイサン・ジョーンズよりは幾分若く見える。彼がフリーサイドに身を預けたのが八十三の時分で、そのときでも

三十代の外見年齢だった。今はそれよりもさらに十年、若く見える。いくらホルモン治療が進んでも、年齢を逆行するということはありえない。そうなれば
「クローンか」
私が問うのに、ネイサン・ジョーンズの肉体を持つ男は満面の笑みを浮かべた。
「それだけじゃ半分だ。確かにこの肉体は裏で仕入れた細胞を元にしたが、もとの持ち主がフリーサイドに行ったのはつい最近。あんた、わずかな間に人格が形成されたって思うわけか？」
「回りくどいな。存外に」
私の言に、男の目が好奇の色を帯びた。
「バイオロイドでも苛立つことはあるんだな」
からかうような口調で言うのに、私は反論すべきかどうか迷ったが、男はそのような暇すら与えるつもりはないらしい。私の周りを尋問官よろしく歩き回り、歩きながら言葉をつなぐ。
「人格と肉体を切り離すことは、そう難しいことじゃない。フリーサイドが良い例だ。人の心がソフトウェアで、それ単独では維持できるだけのハードがあれば、そちらの方に写すことも容易だろう。ならば、元々のソフトウェアである人格を、何か別のハードウェアとなる肉体に移しかえることも可能だろう。あんたのように、フリーサイドで人格を形成し、培養槽で出来た肉体にそっくりそのまま移植することも可能ならば」
その先は、何を言いたいのか、などと。推測することすら馬鹿馬鹿しいという、殆ど答えに等しいことだった。私は深く息を吐き、男は私を正面に据えた。
「俺の名は、すでに知っているのだろうが、名乗るのは初めてだったな
ネイサン・ジョーンズの体を借りたゲリラの戦士は、薄い笑みを浮かべた。
「阿宮圭だ」

その名もまた、予感していた通り。

19

壇上には、一人の女性が立っている。紺色の布地に金糸を折り込み、特注らしきスーツに身を包んだ姿。レイラ・アードニーが聴衆を見渡すと、熱狂的に騒いでいた群衆が静まり返った。

「人類は次のステージへと進みつつある」

ややあってから、アードニー女史が告げる。群衆がわっと沸き立つ。倫理社会の正しさを確信し、己が正義に何の揺るぎもない者たち。この場はアードニーの独壇場だった。

「近代の歴史は、個人が個人らしく生きられることを目指してきた。社会に埋没され、個性を否定され、親と子が引き裂かれた、そんな時代に戻ってはならない。我々は、常に進化し続け、個々の理性と願望が否定されることはあってはならない」

仕事柄、人権要求のロビイストとは顔をあわせる機会が多いが、アードニーほどの説得力を纏って説き伏せる者はいない。倫理の権化とも言える存在だった。

「しかるに現在、その人類の理想を追い求めるはずの都市政府が、時代に逆行しようとしている。かつて個人を社会に埋没せしめた国家を解体し、ようやく倫理を手に入れたはずの都市で、今重大な人権侵害が行われている。我々は、国家権力や社会の因習のために、親子を切り離し、子供を孤独に晒し、家族一緒にいたいという至極当たり前の願望すら取り払う宗教社会のような、そういう道を選択した覚えはないはずだ。今まさにそれをしている都市政府は、なぜ我々がこれほどまでに自由を渇望し、求めているか、その理由を考えてはいない」

よくそれほどまでの文面が、台本もなしに出てくるものだと感心するほど、男の物言いは滑らかだった。観衆は熱狂的にプラカードを振り、めいめい何かを叫んでいる。プラカードの、フリーサイドへの規制緩和を、との文言だけは見て取ることが出来た。

一人の少女に、権利を。そう締めくくられて、映像は終わった。
「これが三日前」
阿宮圭はモニターのスイッチを切った。映像が立ち消え、果たして机の上に置かれた基盤はただのガラス板に戻り、同時にスピーカーの音も消えて静寂が戻った。
「今の演説。ルカがフリーサイドにいる両親と離ればなれであることはあってはならない、と主張すると見せかけて、その実フリーサイドへの切符を手に入りやすくしろと言う。自分らの要求のために、あいつを利用している風にしか見えないな」
「だが、実際彼女は、岐路に立たされている」
椅子に座らされ、特に両手足を拘束されているわけでもないのに、窮屈な思いだった。後ろからコウヨウが、銃で狙いをつけているからかもしれない。居心地悪いことこの上ないが、それを表に出すのも癪なので、じっと阿宮の顔だけ見ていた。
「彼女の体が機械細胞に完全に置き変わるか、それとも彼女自身が衰弱して死に至るか。彼女はすでに自殺未遂を繰り返していて、後者になる可能性が高い」
「放っておいてもフリーサイドへ送り込むつもりだろう、あんたらは」
私はあまり彼を刺激しないよう、反論はなるべくしないようにと決めた。ナノボットの絶対量どころか、ここは単純な電波も届かないらしく――あるいはどこかでジャミングされているのかもしれない。ともかく、外との通信手段がない以上は、大人しくしているより他なかった。
「議会はフリーサイドへ傾いていることは確かだ」
「親族に何の相談もなしか。大層なものだ」
「君がルカの兄であるという証拠はあるのか、阿宮圭。いや、君の中身が阿宮圭であるという保証もない」
阿宮圭――であろう人物は肩をすくめて、
「確かに証明する手だてはないな。この体に記憶を移し換えたとい

っても、記憶の何パーセントかは失われているし、実際には俺がそう思いこんでいるだけかもしれない。そういう可能性だって、まあるわけだ。あのコウヨウにしても」
と阿宮は、私に銃を突きつけたままの男を示して言う。
「ああまで外見が違ってくると、もはや俺たちは故郷ではなく、どこか違う、そうだな――今までの記憶やらなんやらはまやかしで、つい五秒前に生まれたって言われてもそうかもしれないって、思ってしまうかもしれない。今まで積み重ねてきたものなんて、実はなかったのかもしれない、ってな」
阿宮は再び鉄骨の上に座り込んだ。懐から、都市内では禁制となっている煙草の箱を出して、一本くわえる。
「まあ、そういう意識ってのは、俺だけじゃなく都市の連中も多かれ少なかれ抱えている。だからあの本が受けるんだろうな」
火をつけて、深く煙を吸い込み、吐き出した。有毒な煙の塊がぶつかり、思わずむせてしまった。
「人の嗜好にとやかく言うつもりはないが、もう少しだけ気を使ってくれるとありがたいのだが」
私が言うのに、阿宮は何のことか分からないという顔をしたが、
「都市じゃ、こういうものはやらないか」
と阿宮が示す煙草の箱には、金色の羽毛をした鷲か鳶めいた鳥が翼を広げている。違法に流入した煙草なのだろうか、あるいは彼の持参物かもしれない。どちらにしても有害であることには変わりないので、あまり目の前で吸ってもらいたくはないが、阿宮はお構いなしに吸い続ける。
「それで、あの本が受けるというのは」
私は、出来るだけ彼を刺激しないよう努めなければならなかった。そうしなければ彼は何も語らないような気がしていた。そうでなくともあの部屋から消えてすでに三時間は経過している。都市警が捜索を開始していてもおかしくない。
「あんたは読んだのか、あれ」

「あいにく、所員には閲覧できない。私が見ることが出来るのは、冒頭の部分と、著者名を伺うだけだ」
「本当は巻末に顔写真つけたかったんだけどな。ここに来るまでに顔は変わっているだろうってことで」
　阿宮は愉快そうに笑うが、いくら笑みを見せても決して油断するところはない、心の奥底は誰にも許さぬという目をしている。私を見据えるネイサン・ジョーンズの目は、オリジナルのネイサン・ジョーンズが生涯一度も放ったこともないだろう、強い光に満ちていた。
「あの本は、もともとは俺の親父の経験をつづったものだ。物心ついたときから、世界政府の誕生と、それに伴う国家の解体、そして民族融和策が唱えられた時代にな。反体制派として投獄されたその獄中で、最初の原稿を書いたらしい」
　阿宮は煙草を投げ捨てた。コンクリートの地面でぱっと赤い火花を散らす。
「その本が、なぜ都市に流入するんだ」
「勘違いするな。そのオリジナルのまま出版したわけじゃない。もともとはあれはゲリラたちにしか普及されないものだった。俺の親父は、故郷に俺たち兄妹を残したまま投獄され、のちに厚生施設に送られた。一生帰ることのない故郷への思いをしたため、それがゲリラたちの琴線に触れたのだろう。俺が最初に銃を取ったときには、すでにあの本はゲリラたちにとってはなくてはならないものになっていた」
「ならば、なぜそれをわざわざ翻訳して、都市内で普及させたのだ」
「最初は偶然だった」
　阿宮は二本目の煙草に手を伸ばすところだった。そうやって間を持たせようとしているのだろうが、それにしてもやけにペースが早い気がしていた。
「都市の連中と接触することは、基本的にない。ゲリラが遭遇する政府側の人間は倫理院の抱える外縁部隊ぐらいのものだ。だがあの

本を、都市の外に出て読んだ人間がいた」
　阿宮はゆっくりと煙を吐き出した。少ない照明に当てられた煙の粒子が、光の筋道を作り、しかしそれも一瞬で空中に散り消えた。
「都市の中には、自分が存在する根拠がない。それを読んだ奴がそう言った。都市では、ただ人間が人間であるというだけの理由しかないってな」
　阿宮はそう言ってから、二本目の煙草を投げ捨てた。
「今思えば」
　反論の余地を与えぬというように、言葉を繋げる。この場は阿宮の独壇場だった。銃を突きつけられたままの私に、何かしら異議を唱える権利はない。それがゲリラの流儀であるらしい。
「そのとき気づくべきだった。あの本が何かしら、心に訴えるものがあるのかどうか。それを知る前には俺は一人の戦士となり、戦場に出ることとなっていたからな」
　記録では、阿宮圭の初陣は十三歳だった。都市では初等教育の、自立促進プログラムを受け、一個人としての自立心を養うべき年齢。そのときから彼は、銃を担いでいたのだろう。
「厚生施設に入れられ、そこでの生活は決して肌に合うもうものではなかったが一つだけ学んだことがある。あんたはそこの厚生プログラムがどういうものか知っているか」
「脳神経回路へのインプットだろう。電位言語を用いる方法は、どこも変わらないはずだ」
「それもある。だが厚生施設が他と違うところは、まだ別にある。俺が受けたものは、単純にプログラミング言語による論理療法というものだった。人権や倫理、それを縛り付けるものがどれほど不合理であるかということを、ただ脳に直接送り込むというもの。だがそれによって”更正”させられた仲間もいた。俺はそれが耐えられず、結局逃げ出してそのまま死んだのだがな、文字通り」
　確かに、彼は肉体的には死に絶え、その体は埋葬されたのだから間違いではない。彼は一度死んでいるのだ。

「書物には、そうした強制的に言語を送り込むという効果は望めない。だから俺は厚生施設の言語体系そのものを模倣することにした。父が遺した原稿を翻訳するときに、彼らのプログラムを使うことにした。非合理的な判断を合理的に導くレトリック。あんたたちが使う文法の構造を、あの本にそのまま応用した。それが『ナツィオへの帰還』だ。人は生まれた場所のために生き、どこへ行こうともそこに還るという我々の信仰を、深層意識に働きかける文法で翻訳した。脳内には、すでにある深層の言語を、なるべく思い起こすように。プログラミングが望めないから、効果は限定的なものになるが、それでも繰り返し刷り込めば、脳が認識するようになる」

「我々の技術の応用か。道理で、君たちのカルトなイデオロギーがなぜ都市住人に受け入れられるのかと疑問だったのだが」

阿宮は私の目を見て、立ち上がった。歩み寄り、頭二つ分ほど高い位置から私の顔を見下ろした。何事かと思った瞬間、いきなり阿宮が椅子を蹴りつけた。果たして支えを失い、私は転倒を余儀なくされた。

倒れ込んだ瞬間、私はしたたかに頭を打った。視界が揺らぎ、それでも何とか立ち上がろうとするのへ、目の前に靴のつま先が差し出される。

「本来、言語というものは生得的に備わっているものだ」

言うと、阿宮は私の頭を踏みつけた。鼻と口を地面に押しつけられ、砂を噛む。口の中に鉄の味が広がって、網膜の電位信号が出血を報せる。しかしそれを是正する機会など与えられるはずもなく、私は靴の裏越しにただ阿宮の顔を見上げるしかなかった。

「言語能力とは、単に文字に変換して表すだけでない。実際の感情を表に出すための情報は、生まれたときすでに持っているものだ。人間の脳とは、そのようにできている」

じりじりと阿宮は、片足に圧力をかけていった。私の頭を、徐々に踏み砕こうとしているかのようだった。不思議なことに、体の一点を固定されているだけであるのに、それだけでもう全く身動きが

出来ない。私は出来るだけ足掻こうとしたが、無駄だと悟った。
「それに気づくには少し時間が掛かった。もっと早くに気づいていれば、完全なものも出来ただろうが、それを応用するには俺はあまりに無知だった。あの厚生施設から戻って、あの書を作るのには、半端な技術をかき集めなければならなかった。それでもあれだけの効果が望めるのだから、もう少し寝かせておけばよかったかもしれんな」
「何を気づいたと」
「あの本がどうして人々をとらえてはなさないのか。父はそうした言語を操り、先導する術に長けていた。だからこそゲリラのリーダーになり得たのだろう」
静かに、淡泊に、阿宮は告げるのみだった。どんな暴力性も寄せ付けないほど冷徹で、彼は自分の行為を普遍的なものと見ている、その証であるかのように淡々と喋っていた。
「文法は経験によって得られるものとは別に、生まれながらに持ち得ているものがある。そのほとんどは遺伝子によって決定づけられ、人間の脳に深く刻み込まれている。子供が複雑な言語を、親の真似だけで操ることが出来るのはそういうことだ。深層の文法構造は、脳がすでに認知している」
ちょうど、子宮の中にいる胎児が、歩行を覚えた状態で生まれるように。かつての心理カウンセリングの講義が思い出された。性格も、病も、ほとんどが最初の遺伝子によって決定づけられている。二十世紀から盛んに唱えられている学説だった。
「認知心理学の応用として、結局のところお前たちのプログラムも言語を用いる方法も変わらない。ただ文字によるインプットは膨大な頁を裂き、しかも個人の理解力が必要となる。だから本来ならば死んだメディアである書物を用いることは、あまり確実とはいえない」
「確実ではないから、自殺者ではなく、自殺未遂者ばかりを増やしていたというわけか」

「あの本は自殺を説くものではない。なぜ人が、どうしようもなく生誕の地(ナツィオ)を求めるか。人にとって、それが必要であるか」
阿宮はようやく足をどけた。それで体の自由が効くようになったとは言えず、しばらくは筋肉の回復を待つためにその場に伏せるのを余儀なくされた。阿宮はどうせ反撃などしないだろうという、ひどく緩慢な動きでもって私の顔をのぞき込んだ。私などどうにでも出来る、そして私は実際にそれを体験している。その事実だけは互いに理解し合っているという奇妙な状況だった。どれほど語り合っても、ゲリラとは決して理解し合うことなどないと思っていたものが。
「あんたは、ルカの担当医なんだろう」
確信を持った物言い。どこでそれを知ったのか、と説い正すよりも先に、阿宮は立ち上がって、虚空を見つめながら独白するように言う。
「あんたはルカのことを良く知っているみたいだったからな。はっきり言って不愉快極まりないけど。あいつが今カウンセリングを受けていて、それでいてあいつの今の状態を知り得ているあんたは、きっとあいつの口から直接理由を聞いたことだろう」
「何故、自殺をしようというのかということか」
「違う。フリーサイドと機械を拒む理由」
まさか外縁のゲリラのイデオロギーだろうとも言えず、私はルカの言葉を思い出していた。
「記憶が確かなら」
意識に靄がかかりそうになるのに、私は頭を振った。脳の衝撃も分子が和らげてくれれば良いのにと思いながら、
「細胞が脳に到達すれば、私は私でなくなる。そういう類のことか」
「良く聞いている。やっぱりあんた、ルカと話しているんだな」
額の傷と引き替えに。口には出さなかったが。すぐに手を出すのは兄妹故なのかと。
「それこそイデオロギーだ。非合理(イラショナル)な思いこみに過ぎない」

「だが、事実それを求めるものが多いのも事実。都市の人間が、いかに根拠を持たぬかという例だ。アイデンティティが希薄な都市住人にとって、あの本に書かれた歴史的背景に裏打ちされたアイデンティティが魅力に写るらしい。自分が存在する根拠が、少なくとも都市の中よりは如実に反映されているからな」

一見すれば馬鹿馬鹿しい理論であっても、阿宮は真剣そのものという風情だった。私を見下ろす目は、自らの論理を確信している者の目だ。

「あの本は、一つだけではない。各文化圏ごとに、アイデンティティを想起させる文脈を変えている。もっとも、言語を変えることは出来なかった。都市の人間は英語しか操ることが出来ないから」

「あんな本で」

私は半身を起こした。椅子を引き起こし、どうにか立ち上がって

「感化されるとは考えにくいな。君たちの、民族的ナショナリズムも所詮は幻想。二十一世紀の終わりにとっくに否定されたものだ」

「そうかもしれないな。だがその幻想を求め、都市の外に出るものがいる。しかも都市の外に出ることも叶わず、絶望して死に至る者が出る、それが事実だ」

「偶然の一致かもしれないだろう」

「人権委員会が躍起になって、あの本の出版を止めようとしているのにか。あれこそ、影響を認めているようなものだろう」

阿宮の返答に、私は反論の機会を失ってしまった。阿宮は勝ち誇ったかのような笑みを浮かべている。

「私を拉致したのは」

おそらく、今の私は阿宮からみてかなり滑稽に写るのだろう。それでも何か発していなければ、そのまま負けを認めるような体になるので、無理矢理に訊く。

「そんな話をするために、わざわざこんなことを」

「そうじゃない。ただ、あんたがルカと関係が深そうだったからな」

「あの子をどうにかしようなどと無駄な試みだ。今は都市警が施設

を囲っている」
「監視のためだろう、どうせ」
「何？」
　おそらく私の表情がよほどの変化を見せたのだろう、阿宮は唇をねじ曲げ、皮肉めいた笑い方をする。
「驚くんだ、肉人形風情が。プログラミングされた規定行動しか取れない輩が。感情の機微なんて、あんたにはあるとは思えないが」
「驚いてなどは」
「ああそうか、あんたらにゃ感情の機微なんぞ無いか。所詮、遺伝子の水槽から生まれた物」
　見下した目をしている。阿宮にとって、私が何の価値もないということを示している。それ以上に、嫌悪の対象として見ている。
　ルカもまた、同じ目をしていた。嫌悪と敵意とを抱き、私を見ていたのだ。
「私がどこから生み出されようが、私と君とは同じ物質で出来ている。けれど君が自分で思考し、自我を持つように私もまた自我を持っている」
　阿宮は冷笑を浮かべたままだった。
「だから、プログラミングされた通りのことしか出来ない、などということはあり得ない。同じことだ。君は、民族的アイデンティティやナショナリズムが生来のものだと主張するが、人間はそれほど単純ではない。生まれたときからそれに縛られているなどと」
　靴の裏を見た。そう思った時には、私の顎が跳ね上がり、上半身ごと弾き飛ばされていた。阿宮が繰り出した蹴りが口中を傷つけ、折れた歯が舌の先に転がる感触を得た。
「言うことはそれだけなら、あとはもう黙っていな」
　と阿宮は、倉庫の入り口を睨みながら立ち上がった。
「どうやらお仲間だ」

20

直後のことだった。倉庫の壁が凄まじい爆音とともに吹き飛んだ。最初、強い光が差し込み、光の中にちらちらと人影がゆらめいている。確認するまでもなく、都市警であるとわかった。

阿宮は私の腕を掴むと、私の首筋に銃を押しつけた。そのまま引っ張られ、コンテナの陰に飛び込む。都市警の突入員たちが非致死性の鎮圧銃を発砲し、コンテナの外壁に着弾し、火花散らし、甲高い音を奏でる。

「尾行けられてんのに気づかなかったか？　コウヨウ」

「トレースは全くされていなかったんですがね」

物陰には先客がいた。顔に深い傷を刻み込んだコウヨウが、猟銃のようなライフルを持っている。銃床と銃把が一体となった、やけにアンティークな形の騎兵銃。先端に銃剣が取り付けられていて、そのまま歴史の教科書に出て来そうな体を成していた。

「この街では、人が消えたら三時間後には自動的に捜索される。私をさらったのが、ちょうどそのぐらいだろう」

私が言うのに、阿宮は心底くだらないという風に舌打ちし、

「都市の人間は、おちおち行方不明にもなれないってか」

コンテナを盾に半身を乗り出、突入員たちに向けて発砲した。光の中で何人か倒れたのを確認した。コウヨウも阿宮に倣い、壁に背をつけたまま連射で撃つ。それでも突入員たちは攻撃の手を緩める気配はなく、徐々に間を詰めてきている。

「投降した方が良い」

私はどうすることも出来ず、コンテナの脇に身を寄せたまま言った。こういう時は大人しくしていた方がよい。

都市警は決して対象を殺すことはしないが、抵抗を続ければそれだけ攻撃も苛烈になってくる。君たち二人では防ぎきらないだろう」

「ちょっと黙れよ」

阿宮はため息混じりに言って、銃を投げ捨てた。どうやら、弾切れのようだった。
「仕方ない。突破するぞ、コウヨウ」
阿宮が言うと、コウヨウは心得たように、紫色の布に包まれた、何か棒状のものを差し出した。
阿宮が布をとった。そこで、全容が明らかになった。
黒塗りの鞘、金色の鍔を備え、柄には茶と赤の糸を編み込んだ紐を巻いている。コウヨウの銃もそれなりだが、阿宮が受け取ったそれは、もはや博物館に置いてあるかどうかすらも怪しいという、古い剣のようだった。
阿宮が鞘を抜き、鋼めいた刃を露わにさせる。サーベルに似た湾曲した刀身、しかしサーベルのような護拳はなく、刃も幅広で重厚な作りになっている。
阿宮は鞘を腰に差すと、刀を両手で保持した。陰から都市警の突入員たちを覗き込みながら、
「あんたも連れていこうと思ったが、どうやら今日は無理そうだ」
コウヨウが銃撃を止めた。突然攻撃を止めたので、都市警の突入員たちは不審がっているようだった。おそらく、突入員の誰もが、それを投降の合図と見たのだろう。発砲するのを止めて、出てくるように呼びかけた。
「だが、ルカについて俺はあきらめたわけじゃないからな。あんたの上司に伝えろ、近いうちに迎えにいく」
阿宮がそう告げたのと同時に。
コウヨウが突入員たちに向かって、手榴弾を投げ込んだ。地面に着くまでのわずか二秒間、都市警たちが待避すべく身構える。
破裂した。瞬間的に強烈な光を炸裂させ、すさまじい破裂音を奏でた。突入員たちが身をすくめ、阿宮とコウヨウが飛び出した。
走りながら阿宮、手前の一人を斬った。防護服ごと首を斬り、数秒おいてからぱっと血の霧が舞った。
背後の隊員が、銃口を向けた。間髪入れずに三連射、発砲する。

なんと阿宮、銃弾を刀で弾いた。明らかに狼狽しているその男の顔面に刀を浴びせ、瞬く間に二人目を斬り伏せる。
煙が晴れた。突入員たちが一斉に銃を向けた。阿宮は自ら飛び込むと、刀を諸手に構え、二、三振るう。発砲する間もなく突入員たちは喉を突かれ、腕と足とを切り落とされ、くずおれた。
阿宮が何事か叫んだ。私には分からない言語だった。阿宮の声を受け、銃剣で一人一人貫いていたコウヨウがうなずいた。再び閃光弾を投げ込み、今度は間近で炸裂させた。先ほどよりも強い光が倉庫内に満ち、突入員たちの姿もすべて埋め尽くし、私は眩しさに目を閉じた。
目を開いた時には、すでに二人の姿はなく、倉庫の中には突入員たちが倒れていた。私は隊員の一人に助け起こされ、肩を借り、とりあえず外に出た。突入員たちはめいめい、自力で立ち上がれるものは立てないものに手を貸しながらなんとか外に出る。あの一瞬ではそう遠くには行けないはずなのだが、倉庫の外に停めた車にも人影はなく、隊員たちも彼らを追うほどの余力は残っていないようだった。
二十分ほど経った後、都市警の装甲車が二、三、駆けつけた。
「また貴様か」
聞き覚えのある声がした。都市警の装甲車から降りてきた、ダークスーツに身を包んだマクガインが、呆れたような視線をくれる。手には暴徒鎮圧用のショットガンを携えているあたり、自ら突入する気でいたのだろうか。
「いきなりそれか。もう少し何かないのか」
「労いの言葉でもかけてもらいたいというのか。お前の不注意が招いたことで、そんな言葉の一つも必要があるか」
「私の不注意というよりも、マンションのセキュリティの問題だと思うが。しかし、迷惑をかけたようだな」
「まあ、それは良い」
とマクガインは、倉庫の中を見つめた。負傷した突入員たちは緊

急治療用のポッドに入れられ、搬送されてゆく最中だった。例によって治療ナノボットの溶液に満たされた、透明な紡錘形のケースからは十四本の鉄骨脚が生え、なるべく揺らさないようにと慎重に運ぶ姿は、繊毛で泳ぐ微生物めいてすらいる。
「全員、助かるのか」
「今夜中に処置すりゃ何とかなるだろう。もっとも二人ほど、駄目だったらしいが。処置もへったくれも、即死だった」
マクガインは忌々しそうに唇を噛んだ。
「しかし、突入班が剣一本でやられるなんざ、にわかには想像もつかんが」
「記録媒体で一度、見たことがある。中世から近世の、極東アジアの戦士階層が使った刀だ」
「民族派ゲリラは自らの象徴として、古い刀剣類を持ち歩くことがある。だがそれはあくまで象徴で、実際に使うなんて聞いたことなかったが」
近代の装備が原始的な刀剣で打ち破られたことが、よほど納得いかないらしく、マクガインは舌打ちして吐き捨てた。これほど露骨に感情を表すマクガインも、珍しい。
倉庫の中に、猟犬（ハウンドドッグ）が二機入っていくのが見えた。庫内と入り口付近を、人工操作手を駆使してスキャニングして、嗅ぎ回っている。
「いくら血や膚の欠片を集めても、同じ結果だと思うが、マクガイン」
私が言うと、ただでさえ険しい顔をさらに強ばらせてマクガインは言う。
「またぞろネイサン・ジョーンズの生体しか回収できない、ということか。何もそれが目的ではない。あの一瞬ではまだそう遠くには行ってないはずだから、追跡するんだよ」
「次に会うときが、再びネイサン・ジョーンズの身体であるかどうかは分からないがな」
マクガインは不可解そうに目をすがめる。説明を求めるように睨

むのに、私はため息をついて
「あの男、肉体を入れ替えている。元々の人格を、クローンの身体にインプットしているから、だから都市の住人になりすますことができたようだ」
「昔のサイバネティック義肢みたいなものか。しかし、脳神経に意識を移すなどと」
「確かに、あまり聞かない。だからといってあの男の言うことを確かめる術は、今のところないが。ただ肉体を入れ替えることができるなら、猟犬（ハウンドドッグ）の追跡をかわすこともできるだろう」
「そんなことを、本人から聞いたのか」
マクガインは、まるで私が敵と通じているのではないかというような迫り方をする。
「そう、本人から聞いた。ネイサン・ジョーンズの中身の、阿宮圭から」
さすがにその名前には驚いたらしく、マクガインは目をみはった。
「こんなところで、作者と会う羽目になるとは思わなかった。もっとも、前回も会っているのだけど」
「確かに阿宮圭なのか」
「確かめる術はないと言っただろう。そこは本人を信じるしかないが、あの本、「ナツィオへの帰還」について言及していたから、本人なのだろう」
マクガインは腕組みをして、視線を倉庫の方に向けながら何事か一人つぶやいた。何を言ったのか判然とはしなかったが、独り言などという無駄な作業を無意識に行うあたり、アルファグループの遺伝子はやはり私のものとは違うらしい。
「では」
とマクガインは向き直り、
「奴の追跡は不可能ということか」
「そうと決まったわけではないが。ただ、一応報告すべきことかと思ったまでだ」

「他に何か言われたか。まさか奴に何か吹き込まれたわけじゃあるまい」
「吹き込まれてなど――」
いきなり阿宮の声が、脳裏によみがえった。ナショナリズムを想起し、アイデンティティを呼び起こすもの。脳に刻まれたプログラム、人は白紙の状態で生まれるわけではない――。
頭を振った。それこそイデオロギーだ。根拠の乏しい、所詮は個人の思惑に過ぎないものだ。気に留めることなど、何もない。
「どうした、何かあるのか」
マクガインが詰め寄るのに、私は努めて冷静に答える。
「いや、何もない。そもそも、まともに話など出来る状況ではなかった」
「わざわざお前をターゲットにして、何も話をしなかったなんてことはあるまい」
「まともな話などないということだ。イデオロギーの講義を聞いて、それを理解しようなどと考える方がどうかしている」
まだマクガインは不審がっているようだったが、ちょうどマクガインの個人回線に通信が入ったようだった。他の誰もがそうするようにマクガインは通信窓を目の前に現出させ、表示された文字情報を眺め、眺めながら言った。
「まあいい。お前を問いつめても仕方ない。奴の足取りは消えたが、とりあえず奴が阿宮圭ならば、狙いとなるのはあの娘だろう」
「あの娘とは、ルカのことか」
「そうだ。当分はルカ・オベールに張り付いていれば、奴も動きを見せるかもしれない」
「張り付くって、監視を増やすってことか」
マクガインはスクリーンを閉じると、装甲車に乗り込んだ。私は後を追い、後部座席に座ったマクガインの腕をつかんだ。
「監視ではない。ルカ・オベールの周りに網を張るというだけだ」
マクガインはうるさそうに私の手を振り払った。もはや今夜のこ

とは全て終わりということにしたいらしい。
「今、通達が入ったばかりだ。これは決定事項だ、明日から人員を増やす」
「余計悪い。そんな危険なことにあの子を利用するなどと」
「お前たちはあの娘を厚生施設に送りたがっているようだが、これは行政の意向だ。阿宮圭をこの都市で捕縛する、そのためにルカ・オベールには撒き餌になってもらわなければならない」
「撒き餌だと」
そんな物言いが飛び出すこと自体が信じられなかった。まるでルカの人格を否定するかのような言動だ。それを、全くの悪意も差別心もなしに言ってのける、すなわちマクガインは本当にルカを囮としか見ていない。
「ふざけるなよ。第一そんなこと、越権行為じゃないのか。行政が許しても倫理院が許可するはずが」
「そんなものは何とでもなる。我々は都市の治安を維持することが目的だ。あまり部外者が口を挟むなよ」
忠告めいたことを言うと、マクガインは乱暴にドアを閉めた。私は走り去る装甲車を、ただ見送るより他なかった。
後部パネルの蛇と亀の印が一瞬光に照らされて浮かび上がり、しかしすぐに闇の中に消えた。

21

もはやここは都市警たちの拠点である。そう言われても違和感がないほど、物々しい空気に包まれている。研究所を包囲するかのような装甲車の群と、二十メートルごとに配置された制服に混じって、スーツに身を包んだ私服たちが闊歩する。その背広の下に納められた、無骨な銃と雷撃棒の存在を所員たちは如実に感じ取り、だれもが眉をひそめて遠巻きに眺める。異様な光景だ。

私が阿宮圭と接触し、誘拐された時から三十二時間後には、都市警による戒厳令が敷かれ、ルカへの監視が強化された。阿宮圭との関わり――兄妹という関係が明らかになったためであるが、それにしてもルカの移送ということも許されない。完全な異例の自体に、ストラウスもやや動揺しているようだった。

「あの辺りは買い占められていたようだ」

最初にストラウスが発する。

「阿宮圭が、都市の住人コードを使ってフロント企業を作り、港のフェリー埠頭の半分を買い取っていた。あの連中は地下に通路を作り、そこを拠点にしていた」

私を朝一番に呼び出したストラウスは、普段通りの渋面を作るが、視線がわずかに揺らいでいるのを私は見逃さなかった。

「連中の足取りは掴めていないそうだ。都市警は倉庫を買い取った企業の口座を凍結したが、資金はすでになかった。今頃は都市の内部に潜伏しているかもしれない」

「そんな話のために、わざわざ？」

いちいち口答えをするなというように、ストラウスは睨みを効かせ、

「足取りが掴めないがための、この厳戒態勢だ。だが倫理院は都市警に対して警告を発している。さすがにこれは越権行為だ。委員会も警告を発したのだが、連中は聞き耳を持たない」

ストラウスはひどくやつれているように見えた。体内の恒常性を保つあらゆる手段を投入したバイオロイドが「やつれる」ことなどないが、普段見せない彼の狼狽した表情がそう見せたのかもしれない。

「施設を移すという話は」

すでに答えが分かっていることだったが、私は訊いてみた。もしかしたら状況が変わっているかもしれないという期待があったが、そうそう期待通りになるはずもない。

「三交代での監視体制。それが向こうの条件だ」

それどころか、状況は時に悪化することもある。私は、ため息を余儀なくされた。

「やけに、焦っていますね」

「私も先ほど聞いたばかりだ」

ストラウスはいくつか並べたスクリーンの中から、一つを選んだ。机を取り囲むようにして浮かんでいた情報小窓の、最右翼のものに指を触れ、空間をなぞると、ナノボットの粒子膜が立体映像として再構築される。東洋系の顔立ちの人物の、立体胸像。ネイサン・ジョーンズになる前の、阿宮圭の元々の顔を細部に渡るまでに再現している。

「阿宮圭の動向は、以前から監視されていたらしい。実際に彼の死体は埋葬されたと言うが、彼の死後ゲリラたちの間に阿宮圭の名を聞くようになり、都市警や外縁部隊が奴を探していたらしい」

「失礼、外縁部隊とは」

「文字通り、外縁の軍だ」

ストラウスは、苦虫をかみつぶしたような顔になる。

「都市の警備機構は、どのような条件であっても殺人は認められない。彼らの倫理規定は、確保を第一に考えたものであるから、装備も非致死性のものに限られる。だが、都市外縁の対ゲリラ部隊にはそれは適応されない。彼らは都市の安全とともに自らの身を守る義務がある」

「つまり、殺害が許可されていると」
私が言うことを、いちいち応答することなどしない。沈黙することが何よりの肯定であるというように、ストラウスは黙し、代わりに少しだけ頷いた。
「都市警はそれでも、都市の中だけを見ていれば良かったのだが、ゲリラの侵入を許したとあれば話は別だ。先日も阿宮圭の一派を抑えきれなかったようだが、それも無理のない話だ。殺すための訓練を積んだゲリラに、捕まえるための規定しかない都市警が敵うはずはない」
にわかには信じられない話だった。殺害が許されないということが唯一ゲリラと差別化されている、という認識であるのに、外縁部隊は相手の殺害をも辞さない。そうなれば、ゲリラとほとんど変わらないのでは、とさえ思う。
「だから、阿宮圭がこの都市にいるとなれば、外縁の部隊も都市に流れ込むかもしれない。そういう危惧があるらしい」
「阿宮圭という人物はそれほど危険視されているということですか」
「ゲリラのリーダーということならば、当然そうなのだろう。外縁部隊が躍起になって追うぐらいだからな」
外からの部隊が、阿宮を追って来る。平和そのものだった都市に、最大の人権侵害を行うことも許されるという集団が、ゲリラを討伐するために。奇妙な話だった。都市の住人からすれば、ゲリラも外縁部隊も変わらないだろうと、おそらくそういう判断を下すだろう。
「君は」
ふと思い出したようにストラウスは顔を向けた。
「そういえば阿宮圭と会ったのだったな」
「会ったと言っても、無理矢理ですが」
そこで何を話したか、などとは言うべきかどうか迷ったが、結局口にすることはなかった。ゲリラのイデオロギーの講義をストラウスが望んでいるとは、思えない。
「それでも都市警は、おそらく色々聞いてくるだろう。できるだけ

協力するように、嘘偽りなくだ」
「無論、そのつもりです。しかし、それも業務に差し障りのない範囲で、ですが」
「プログラミングならば、他の者もサポートしてくれるだろう。ともかく我々としては、都市警に全面協力を要請されているのだから」
「いえ、それだけではなく」
私が言い淀むのに、ストラウスは怪訝そうに目をすがめた。
「まさかあの娘の面接のことを言っているのか」
「施設を移らないにしても、あの子の治療はまだ終わっていません。ルカに監視がつくのは構いませんが、せめて最後まで」
「早晩、それも必要なくなるだろう」
私の言うことなど最後まで聞く必要はない。そういう意志の表れだった。断固としたストラウスの口調に、私は少しばかり気圧されてしまった。
「必要なくなるとは」
「委員会が結論を急いでいる。ルカがゲリラたちの手に落ちるよりも先に、フリーサイドに送り込もうとな。特別法案の提出に着手している」
法案。ルカのようなフリーサイド遺児と呼ばれる子供には、無条件でフリーサイド行きの切符を与える特別措置法案。たとえ親が非合法手段で以てフリーサイドに行ったとしても、子供と引き離すことは人道上問題が大きい。そういう触れ込みだ。フリーサイドの推進派がもっともらしい理由をつけて、人権と倫理を基調とする社会を目指すためであるということであるらしい。
奴らの道具にされている――阿宮の声がよぎる。フリーサイド推進派にとってはまさしくルカはうってつけだったのだろう。阿宮の謂いが、少しはわかる気がした。フリーサイド推進の象徴となり、人道上の理由を旗印にルカのフリーサイド行きと、それに伴う規制緩和を推し進める。言い得て妙だ、「フリーサイドの広告塔」。
しかし、ルカをそうさせているのもまた、阿宮たちゲリラの存在

でもあるのだ。
「どうかしたか」
ストラウスの声で我に返った。我を忘れるなんて初めてのことだった。
「あまり自分の義務を疎かにしないことだ、12（トゥエルブ）。君は最近、あの娘に執着しているように見える」
「私がですか」
それは濡れ衣だ、と私が発する前にストラウスは口調を厳しく言った。
「君の仕事は何だ。脳神経プログラミングは確かに論理療法を元にしているとはいっても、君は本来カウンセラーではない。そうでなくともあのような治療法、本来ならば行われないものであるはずだ。特例的に行われている原始的治療を、君はなぜか率先してやりたがる」
とストラウスは、唇をゆがめた。皮肉でも込めるかのようだった。
「だがあくまでも例外だ。君は君の仕事をやりたまえ。彼女の件はもう、我々の手に負えることではない」
「それを」
私は、自分が何を言っているのか、よくわかっていた。
「それを、私たちが口にするのですか」
ストラウスは暗に、警告を含むような視線をくれるが、私は気づかぬふりをした。気づいていても無視をした。
「我々が、倫理に携わるべき立場のものが、それを口にすればそれはもはや敗北と同義ではありませんか」
「敗北ではない。ただ能力に限界があれば、他に委託することも必要だ。カウンセリングの世界でも当然そういうことがあるだろう。君たちも施設を移す必要がある、と言っていたはずだ」
「しかし、それは彼女の治療を考えた場合です。治療を第一に考えればそのような措置も必要でありますが、あなたはルカの処遇を委員会に任せ、早々と手を引くことしか考えていない」

「現実にそうするより他ないと言っているだろう。委員会の決定だ」
「しかし、彼女の意志はどうなるのですか。委員会に任せれば、そうでなくとも今はフリーサイドへ彼女を送りたくて仕方ない、自己満足の輩が議会を占めている。彼女を、彼らに託すとでも」
「口を慎め、１２（トゥエルブ）」
ぴしゃりと言い放ち、それでいてか細い、奇妙な叱責と言えた。ストラウスは完全には否定しきれないものを抱えているような面もちで――そんな顔など、一度も見せたことのない、悲哀めいた色すらあった。
「フリーサイドを推し進めるのならば、それはそれで構わない」
「本気で言っているのですか」
「無論、本気だ。倫理を守ると言うのならば、それもまた倫理に即した方法だろう。生命と、自由を保証する。フリーサイドの役目の一つだ」
「ならば、彼女がどれほど拒否しようとも、フリーサイドに送るべきと。所長はそう考えるのですか」
「どのみち、今のままでも機械細胞と全て入れ替わる」
ストラウスの周りにあった、複数のスクリーンが、役目を終えて空中にとけ込むように消えた。粒子が霧散した後の空間にはすでに光はなく、スクリーンの迷光が照らしていた室内が薄暗くなる。ストラウスの、神妙そうな表にも、陰が落ちる。
「もともと、機械かフリーサイドか。どちらを選ぼうとも拒否するのであれば、どちらかに抵抗を無くしてもらう。それが面接の意義だったはずだ。あの原始的なやり取りで、彼女の自殺願望を抑え込むことに役に多立たないのであれば続ける意味はないだろう」
「プログラミングとは違います。彼女が心を開くには、時間をかけなければなりません。少なくとも、彼女の意志を尊重した上で事を運ばなければ」
「彼女の意志を尊重すれば、あとには死しか残らない。それこそ我々の敗北だ」

ふとストラウスの脳波が、倫理ネットを伝う気配がした。冷静な口調とは裏腹に、脳波が高ぶっているのがわかった。明確な怒りや不満ではないものの、彼自身が口にしているもの全てに納得などしていない。そういう意図を感じさせる波長だった。

「いずれ、委員会の決定が下る。その際は相応のプログラムを組むことになるだろう。そうなれば君の役目も終わる。業務に戻れ、1（トゥ）2（エルブ）」

それ以上ないほど隔絶的な物言いでもって、締めくくる。

22

正面の、ＲＮＡ鎖のオブジェの足下に都市警の一群が固まり、廊下を行き来する制服たちをやり過ごす。誰かとすれ違う度に警告と威嚇がない交ぜとなった視線を送る彼らには、いずれも思考プロテクトがかかっていた。脳波の相互発信が倫理ネットの原則であるが、都市警にとっては自分の脳波を読まれることは致命的であり、そのため都市警に限っては脳波を遮断することが義務づけられている。こちらの脳波は監視して、自分の頭の中身を見せない。唯一、公的機関としての暴力である以上、都市の住人とは違う倫理規定があるのだろう。

そう言い聞かせても、相手の脳波にふれることが出来ないことには得体の知れない恐怖がある。私は目を逸らして足早に廊下を歩いた。どこにいても都市警の制服姿が目に入るので、出来るだけ遠ざかる必要があった。

「あんまりビクついていると、目立つぜ」

いきなり背後から声がした。振り返るまでもなく、声音と脳波が如実に語っていた。

「気持ちはわかるがね、この仏頂面が三メートル置きに立ってやがるんだ。見たくもない面拝まされりゃ気も滅入る」

シェン・リーはわざと制服たちに聞こえるように言っているようだった。ヘイトスピーチになりかねない物言いであっても、少しぐらい罵ることは与えられた当然の権利であるかのような口振りだった。

「誰はばかることなく悪口を言うために都市警がある、とでも思っているのかシェン・リー。配慮に欠けた言動は慎めよ」

「構うことない。誰も気にしないし、奴らも言われ慣れてるだろうよ」

シェン・リーが通り過ぎた後ろで、若い警官が顔をひそめていた。

強化プラスチックの警備杖を携え、微動だにしないが、不愉快さを込めた視線だけ私たちの動きを追っていた。
「ただでさえ今は非常時だ。下手に刺激するようなことは避けた方が良いと思うが」
私が言うのにも、シェン・リーは鷹揚に肩をすくめた。
「あんまり肩肘張っても始まらんよ、こういう時は。まあ今まで無かったことだからな、無理もないけど」
廊下を突き当たってカフェに入ると、さすがに制服たちの姿は無かった。私は近くの椅子に座るとコーヒーを注文した。
「誰も彼も、おびえている。ゲリラたちがこの街にいるってことを意識してりゃそうなるだろうが」
シェン・リーはというと、自走式のオーダーテーブルに運ばれてきた無料のミネラルウォーターを煽った。
「出版社もすでに手入れが入ったみたいだが、あとどれぐらい、ゲリラのフロント企業があるかわからない。この水のメーカーだって、分からんものさ」
まさか、と口に仕掛けたが倉庫街を買い取るぐらいだから、そのぐらいはやるかもしれない。私は思わず、コーヒーカップの底を見てしまった。
「しょうがない。倫理ネットの中和作用も追いつかないくらい、皆緊張感漂わせて。所長もそうだっただろう」
「動揺しているようではあったが」
「へえ、そりゃすごい。滅多にないレアケースだ」
まるで今ある空気を全て入れ替えようとしているように、シェン・リーは大げさに言った。わざとらしく笑うシェン・リーの脳波も、かすかに緊張の波長が感じ取れた。相当、無理しているのだろう。
「おまけに都市警の警備がついているとあっては、誰も落ち着いてはいられんよ。あの連中、何考えているか分からないからな」
シェン・リーは、ふと何かに気づいたように顔を上げた。
「ああ、すまんな。お前の同期がいるんだっけ」

「別に気にすることでは」
私はコーヒーを口に含んだ。そういえば今朝は、マクガインの姿は無かった。
「それより、例のことは調べはついたか」
私が訊くのに、シェン・リーは少し迷うようなそぶりを見せた。
「一応、分かったことは分かったんだが」
「何か問題でも」
シェン・リーが言い淀むことなど初めて見たが、それを気にすることは今どうでも良いことだ。
「いや、とりあえず見てもらおうか」
とシェン・リーはスクリーンを開いた。空中の粒子ディスプレイを指で軽く弾くと、反転し、私の方にデータの表示された面を向ける。文字列が流れ、映像ファイルと一緒に再生された。
「電子回路に記憶を移して機械の体で代用するという構想は二十一世紀からすでに存在していたが、それをクローンで応用しようとしたのが彼の研究らしい」
「それは違法だろう」
「いや、再生医療の分野が発展してからしばらくは、幾分規制が緩かったらしい。一部の地域では、クローンの生成も可能だった。その中で、記憶を移し返るための研究も為された。その開発チームにいたのが」
シェン・リーがスクリーンをなぞった。微かに表面の粒子が流動したかと思うとそれらがより集まり、一人の男の映像を具現化させる。
「セルゲイ・ニコライヴィチ・テテリンは当時最高の技術と知識を投入して、これに臨んだ。彼自身は分子生物学者だったが、チームにはコンピュータプログラマーとエンジニアがいたそうだ。プログラム演算と、生物回路を構築して神経とネットとをリンクさせるやり方も、そのころにはすでに出来ていたらしい」
スクリーンの男は学者というよりもアスリートのような体躯の持

ち主で、眼光が異様に鋭く何か差し迫ったものでもあるかのようなにらみの利かせ方をしている。落ちくぼんだ目が、そう見えるのだろうか。体格のわりには顔はやつれ、膚がやや浅黒さを帯びていた。
「彼は、今は」
「記録によれば」
シェン・リーが触れる指の動きにあわせて、スクリーンのページが捲くれて内容が更新されてゆく。経歴も、嗜好も、政治的思想も、過去一度でも都市住人であったときがあれば全て、ナノボットの群知性に記録される。
「二十年も前に、フリーサイドに行ったみたいだ。かなりの大病を煩っていて、当時の医療では到底治せるものではなかったらしい。他の選択肢もなかったので、病巣を抱えた体を捨て去ってフリーサイド入りを果たしたというわけだ。もちろん、ちゃんとした手続きを踏んで」
シェン・リーはカップを握りつぶし、清掃ロボットの前に投げ捨てると、無骨な金属の箱が律儀に拾い上げた。
「彼の構想は結局実ることはなかった。クローンそのものが倫理の問題とぶつかりやすいからな、この研究は倫理院では認められなかった。今ではこの技術も都市内では違法になっている。セルゲイは、自分の研究で自分の体を作りたかったようだったが」
「クローンが倫理に問題があって」
私が口にするのに、シェン・リーは意外そうに目を細めた。
「何だよ」
「いや、クローンが倫理規定に抵触するなら、私たちのようなバイオロイドはどうして許されているのかと思って。いくら人工塩基であろうと、幹細胞から肉体を作り、そこに意識を宿すという工程は同じだろう」
シェン・リーは最初、私の言っていることが分からなかったらしい。おそらく一分は黙り込み、頭の中で反芻し、精一杯の理解を示そうと努力しているが肝心の理解が追いつかないという表情で首を

傾げ、
「つまり、どういうことだ？」
やはり分からなかったらしい。訊いた本人も完全に理解出来ないまま投げかけてしまったのだから、それも無理からぬ話だろう。
「クローンは本人の細胞を元に生み出すだろう。当然、ＤＮＡは本人に依拠したものになる。体を造り、意識を移す、これは機械細胞と同じ理屈だろう。機械細胞も本人のＤＮＡをコピーして肉体を造るのだから」
「クローンってのは幹細胞から生殖細胞を生み出して、そこからヒトが生まれる過程を水槽の中で培養するんだ。つまりどうしたって一人、人間をそっくりそのまま造らなければならない。もしかしたらそのクローンに意識が芽生え、自我が出来ているかもしれないところに、無理矢理オリジナルの人格を植え付けることになるんだ。そうすると、クローンの人権を踏みにじることになるだろう。バイオロイドは意識とは別に、体を造っていくのだから意識は宿りようがない。倫理セッションでやったことだろう」
「だが、本人の肉体をそのまま用いるのだから、機械細胞よりは本人に近いものを造ることが出来るのでは」
「機械細胞は模倣だ。クローンはまるっきり人間が生み出される過程をなぞるわけだ。赤ん坊から生み出し、成長に関する因子を欠落（ノックアウト）し、自我が芽生えるよりも先に別の人格をアップロードする。それは人権侵害だろう」
シェン・リーは最後にスクリーンを指でなぞると、セルゲイの経歴を記したページに戻る。再びのやつれた表情と対面し、シェン・リーはやや食傷気味にため息をついた。
「それよりも、フリーサイドに記憶を移すのとクローンに移すのとじゃ違うんだと。人間の意識を完全に移行させるための回路は、人間の頭脳に収まるほどのバイオチップじゃ容量が足りない」
「チップに移すのか？」
「脳から脳へ移すってことは出来ないからな。言語によるインプッ

トは時間がかかるから、電子回路への入力になるだろう。だがそれだけなら、かなり不十分で、フリーサイドぐらいの大がかりな回路でないと収まらない。フリーサイドは、普段は見えないから認識しづらいけど、あれは都市内全てを覆うぐらいの容量がある。そのぐらいのフィールドを用意してやらないと、意識の移行は出来ない」
「もし、無理矢理移したとしたらどうなる」
「さあ、例がないからなんとも。記憶が全て移ることはないだろうが、意識も宿るのかどうか。だからお前を拉致した阿宮圭だって、本当の阿宮圭かどうか分からんぜ」
　それは、阿宮本人が口にしていたことだ。自分には、生まれてからの記憶が全て備わっていないと、まるでそれが恐ろしげな響きもない当たり前の事柄であるかのように語っていた。
「最初にお前がこいつ調べてくれって言ったときには、驚いたよ。ゲリラがそんな技術を持っているとは思えなかったからな。どうやら都市の技術が流出したものらしいが」
　シェン・リーは心なしか興奮しているように――実際脳波は高ぶっていた――少し意地の悪そうな笑みを浮かべた。
「そういや、調べるうちに結構おもしろいことも見つかったぜ」
　ゲリラの情報におもしろいも何もない気がするが、シェン・リーの期待に答えてやるべく、私は聞き返した。
「どういうことだ」
「経歴のところ、見てみ。そいつは既婚者だったみたいだが」
「半世紀も前の結婚制度がそんなに珍しいのか」
「お前もなかなか言うようになったな」
　シェン・リーはスクリーンを新たに開き、文字列をなぞるとその箇所だけが金色に光り、浮かび上がった。丁度彼――セルゲイが二十歳の頃に結婚したことを記している。相手は同じ研究チームの、二歳下の女性であるらしい。
「公開された情報とはいえ」
　私は、シェン・リーの高揚する波長とは裏腹に、少し気重だった。

「何か人のプライバシーを覗き見ているような感覚になるな」
「プライバシーってほどの情報じゃないさ。いいからここ見てみろ」
シェン・リーが指し示す先を、私はみた。私にとって、おそらくシェン・リーにとっても一番馴染みの深い名前がそこにはあった。

23

彼女の診察室を、自分から訪れるのは初めてだった。普段から呼び出され、健康診断と称して雑談をして帰るというパターンが定着していたので、自らの足で進んでいるという感覚が奇妙なものに思えた。

廊下を突き当たり、診察室に入る。案の定、ソフィーヤはいた。スクリーンに打ち込む手を止めて私の方を見て、あからさまに驚いた顔をした。

「珍しいね。あんたの方から来るなんて」

「私もこういう事態になったことが」

入るよう促され、私は彼女の目の前の椅子に腰掛けた。

「少し信じられません。ドクター、少しあなたから事情を訊くことになるかもしれませんから」

「事情ねえ、さっき都市警が事情聴取に来たばかりだったけど」

ソフィーヤはスクリーンを閉じると、私の方に向き直った。

「過去に結婚歴があるか、とか。そのときの配偶者は今どうしているか、とか。フリーサイドにいるって言ってやったらばつが悪そうな顔してたよ。あんたはどういう反応示すのかな」

「分かっていたのですか」

果たしてソフィーヤは肩をすくめた。

「薄々ね。前回のことから、もしかしたらそうじゃないかとは思っていたけど」

「なぜ、黙っていたのですか」

「確信が無かったから。何かの間違いじゃないかってね。今更あの研究のことで揉めることもないだろうって思っていたけど」

ソフィーヤの机に、見慣れないものが置いてあるのに気づく。木製の小さな額縁の中に、人物画を描いた絵が飾ってあるのかと、最初はそう思った。よく見れば絵ではなく、ソフィーヤに寄り添うセ

ルゲイの像を写し、二人して笑みを浮かべて、フレームの中に収まっていた。
「あんたは写真って見たことなかったっけね」
私がその絵を見ているのを受けて、ソフィーヤは額縁を手に取った。
「ちょっと懐かしくなって、引っ張りだして来ちゃったよ。ナノボットが投影するものじゃなくて、これは特殊な紙に直接像を焼き付けるもの。昔の記憶装置の中じゃもっともポピュラーなものだよ」
「写真は知っています。しかし、回路に保存しておけばナノ粒子でいつでも具現化出来るのではと思うのですが」
「確かにね。私もそう思っていたけど、けれどこうして形に出していないと分からなくなることがあるからね」
「何をでしょうか」
「あの人がいたってこと」
ソフィーヤは、憂鬱さを抱えたような目をする。
「実際、最近まで忘れていたからね、私も。回路に蓄えていつでも取り出せる、って言っても常に具現化してあるわけじゃないし、具現化してもすぐに消えてしまう。こうやって無理にでも写真を飾って、常に見ていないと。無理矢理、外部記憶装置に触れていないと、過去にそれがあったのかどうかも忘れてしまう」
ソフィーヤは、それこそ無理に作ったような笑みを見せた。
「偉そうなこと言えないよね私も。こんな事件があってから思い出しているようじゃ、ダメだね」
珍しく、自嘲するような笑い方だった。本心をいくら覆い隠そうとしても、脳波は如実に語り、弱々しく鬱屈したような波長が伝わってきた。
「フリーサイドに行った、と聞きました」
「当時は機械細胞も、まだ補助的な役割しか果たさなかったからね」
ソフィーヤが眦を押さえたのを、私は見逃さなかった。それを見ていない素振りをするのに、相当苦労した。おそらく相当不自然に

視線を逸らしただろう。そうでなくとも私の乱れた脳波を、コンマ何秒かソフィーヤは関知したはずだ。
「再生医療も、全身に病巣が散らばったらどうしようもないっていう、そういうレベルの話。臓器という臓器、筋肉という筋肉が急速に蝕まれてね。あの時は分子を導入するにもいちいち許可が必要だったから、あの人面倒がって入れてなかったんだよ」
私の下手な演技に気づかない振りをして、ソフィーヤは続けた。
「あの研究はあの人のためでもあった。でも倫理の問題に触れて、結局封印せざるを得なかった。あの人はもうどうしようもなくなって、親族からフリーサイドを勧められ、最終的にはそれに従ったってわけ」
「今でも連絡は取っているのですか」
言ってから後悔した。そんな余計なことを聞く必要などまるでない。それこそプライバシーの侵害になりかねないことだった。
「そんな気を使わなくてもいいって」
ソフィーヤは可笑しそうに言った。いつもの、茶化すような口調で。
「他人のことを詮索することが良くないって、多分そう思っているんだろうけど、それも程度によることだから。あまりに露骨でなければ何の問題もないよ」
「いえ、不躾でした。今の発言は取り消させてください。この話も、これで終わりに」
私はかまわないのに、とソフィーヤは言って、スクリーンをかき消した。
「しかしあんたも運がないね。ゲリラに二度も捕まるなんて、多分あんたが初めてだよ」
「ゲリラが入り込むこと自体がなかったことですから」
ようやく彼女はいつもの調子に戻ったのを受け、私は少しだけ安心する。
「クローンの体は生きながらえるためだけでなく、都市に入り込む

ためであったようですね。おそらく他のゲリラも、同じようなクローン素体を用いているのでしょう。あなたとセルゲイの研究が、どうして外に流出したのかは分かりませんが」
その辺りは、都市警の猟犬(ドッグ)が捜索をしているに違いなかった。今朝からマクガインの姿を見ていないが、現場の指揮に入っているのだろう。
「クローン素体であれば、体を乗り換えることも危惧されますが」
「記憶の移し換えなんて滅多にできないことだ。昔のサイバー義肢とは違うよ。それより」
ふいにソフィーヤの目が、鋭さを帯びた、気がした。それもはっきり分かるほど、緊張の色を帯びた瞳をしていた。それと分かる変化はほんの一瞬のことで、脳波の揺れにも何の影響もないほどの短い時間ではあったのだが。
「それより、あんたが何もされなかったのか、ってのが気懸かりだよ。危害は加えられていないみたいだけど」
すぐに元の、穏やかな目に戻る。私はその変化を気づかない振りをしなければならなかった。
「もう一度、骨を折られそうにはなりましたが。他には異常はありません。ただ気になるのは、ルカのことですが」
「何か言ってたの？」
「いずれ迎えにいくと。そう言っていました、阿宮圭は妹を取り戻すと」
「やっぱり兄妹なんだねえ、まあそれが自然といえば自然。親子を引き離すのがダメで、兄妹を引き離すことは良い、じゃあ矛盾している」
「しかし、ゲリラとなれば区別して考えるべきでは。たとえ親子でも、虐待や育児放棄がされていれば隔離されます。兄妹であっても、ゲリラと一緒に住まわせておけば悪影響であることには」
「でも阿宮兄妹は、二人とも機械が嫌いみたいじゃない」
ルカをわざわざ旧姓で呼ぶ辺り、どういう意図なのか理解しかね

たが、私は黙っていた。
「ああ悪いね。別にあんたの悪口を言っているわけじゃないよ」
「それは分かりますが、しかしあなたの考えそのものには、正直同意しかねます」
「そう思う？」
「一度も口にしたことがない合成肉を嫌いだと言っているようなものです。阿宮のあの本と、ルカのフリーサイド嫌いはそのような非合理（イラショナル）なものです」
「合理（ラショナル）なものでないと認めないという態度は、ちょっと偏りすぎだね」
ソフィーヤは、まるで叱責するかのような口調で迫る。特に私が何かミスを犯したわけでもないのに、子供をたしなめるかのような風情すらあった。
「自殺っていうものは」
ソフィーヤは、ほとんど声にならないような囁き声で言った。
「集団の中で、不合理なルールの元で個人が追い込まれるケースもあるけど、実は逆のことだってある」
「逆とは」
「まだカウンセリングなんてものが脳波測定と併用されていた時代のことだけど」
都市が出来て間もない頃の話だろうか。都市の人間は実年齢と外見は比例しないので、過去の話を聞くときは正確に暦と照合しないと、苦労する。
「都市が開発されてしばらくは、自殺とまではいかないけど鬱にかかる人間が多くてね。それこそ、今みたいな脳神経回路のプログラミングはそんなに一般的じゃなかったから、一人一人を相手しなきゃならなかった」
ルカ一人でさえも、すでに手に余るというのに、それが何人も何日も続くと想像すればソフィーヤの苦労も分かる気がした。そんな私の勝手な想像などよそに、ソフィーヤは遠くを見るように目を細

め、
「都市ができる前から、自由主義というものは社会から個人を切り離すことに躍起になっていてね。社会に埋め込まれた個人を何よりも嫌って――まあその究極がフリーサイドだね。ただあれはあれで、また違った自殺の類型があるんだけど」
「違ったものとはどういう」
「それで、その都市内部の鬱症状というのが」
おそらくわざと、ソフィーヤは私の疑問を逸らした。あまり余計なことを聞いて話を脱線させてもいけないので、私はそれ以上は触れなかった。
「近代社会は細分化の歴史だよ。ワークライフバランスを第一にして、在宅勤務が一般的になったことで煩わしい人間関係から解放され、自分の趣味の時間が大幅に増えた。言論の自由が保障されていたから、妙なしきたりに縛られることもなくなった。近代の歴史というものはそのサイクルの繰り返しで、民族や部落や国家、そういう集団がどんどん消え去っていった。この都市も、単純に入れ物としての都市であって、外縁の世界みたく宗教や君主によって人々を結びつけるものじゃない。そうやって個人は個人になっていった」
「そうした集団の中で、個人が圧迫されることがなくなったのですから、良いことなのでは」
「でもそんな時でも、自殺者は出た。集団の結びつきが弱い社会で、孤独に耐えかねて死に至るってケース。多分、あの本を読んで自殺未遂に追い込まれるのはこっちのケースかもしれないね。都市の人間は皆孤独を抱えているから」
都市の人間が孤独、というのは初めて聞くことかもしれなかった。総じて、都市住人は倫理院のセッションや、人権会議に出席し、おそろしく短縮された労働時間のお陰で大幅に余暇が増え、社会活動を通じて人間関係を広げる機会は一昔前より増えているはずだ。余暇を与えることは、企業の義務の一つとなってさえいる。
「特別、都市住人が孤独とは思いません」

「しかし彼らには、共通意識というものがない。やはり個人はどこまでいっても個人。社会との連関はない」
私が聞き返すよりも先に、ソフィーヤは話を続ける。もはや私の存在など気にも止めていないかのような振る舞いだった。
「人間の心は、生まれたときにはすでに決定づけられていたって知っている」
まるで私が知らないことを見越しているかのような物言いだが、あいにくその手の話は倫理院の基礎講義で聞き飽きている。
「心は太古の昔には完成していて、脳はそれを実行しているに過ぎないという、認知心理学のテキストにある話ですね」
「なんだ知ってるんだ」
と残念そうに言って、
「じゃあこういう例は知ってる？　人間って、本来はゴミの分別が出来ないってこと」
「あまりそのようなことは」
「人間は、昔はまだ居住地が決まってなくて、遊動生活を送っていた。そういう時代の人類にとっては、ゴミが出たらそれはどこかにうっちゃらかしておくものだったんだよ。だって、明日にはどこかに行ってしまう身だから。どこに何のゴミを捨てるか、なんて考えていればその分体力の消費も激しく、野獣に襲われるリスクも大きくなるから」
私の理解の速度など気にも留めず、ソフィーヤは続ける。
「そのときに形成された脳がその行為を覚えて、遺伝子にその行動が刷り込まれている。だから定住を初めてからも、誰もかれもがゴミをその辺に捨てていた。環境問題が取りざたされるようになって、ようやくゴミを分別する必要があると人類は悟ったんだけど、いくら分別を呼びかけてもなかなかすべての人がやってくれるわけじゃない。やはり遊動生活のときの癖が抜けなかったわけ。どう、面白いでしょ」
「ええ、まあ」

ゴミを分別する、というくだりは。私の知る限り、ゴミはどこに捨てようと勝手に清掃ロボットが回収して回るものだったので、わざわざ分けていた時代の話は、確かに新鮮といえば新鮮だった。

「で、その社会と個人の関わりも、そういう理屈で説明できる」

どういうことなのか、と私はそんな顔をしていたのだろう。ソフィーヤは全て得心した表情で言った。

「人間というものは、生き残るためにどうしても社会的な生き物にならざるを得なかった。牙や爪を、何の武器も持たない人間が唯一、原始の時代で他の動物に対抗出来る手段は仲間同士で群れ、コミュニケーションを取りながら獣の位置を探り、また狩りをするにも互いに連携を取りながら行った。そうして戦いに赴く男たちを癒すために、女たちは彼らの家を預かり、男たちが安らげる場所をつくった」

「男尊女卑の保守論調にも聞こえますね、それは」

「現代じゃカルト扱いだけど、あながち間違いではない。言語を武器に、コミュニケーションを取ることで獣に対抗してきた人間は、社会的な言語をそうやって、進化の過程で獲得していった」

ソフィーヤははっきりと、自分の言説を理解しているものの話し方をする。その次に何を口にするのか、妙な期待感を持たせる、演説めいた口調だ。

「社会の中で、人は他者との連帯を強め、それによって他者と共感し、その社会に貢献することで生を獲得していった。その社会に関わることで生きて、逆に関わりがなければ死んでしまう。生きるためには社会の中で自分の役目を見つけて、人からはその役目を果たしていると認められ、初めて社会の一員となれる。遊動から定住生活に変わってもそう、職場であったり、家庭であったり、村邑（そんゆう）や部落、はては国家まで社会の形態は様々だけど。民族ごとにある儀式とか祭典はそうした確認作業で、自分が何者であるかという客観的根拠を与えるための装置だよ。社会に帰属意識を持つことが、生存のために必要なことだった」

ソフィーヤは言葉を区切り、
「そう考えれば、あの本に触発されて都市を去る人間が増えるのも無理はないかもしれないね。都市にはない、社会の中で他者との連帯や共感を得るということがない。ただ個人は個人であるということ以外には客観的に自分を認める集団性が乏しいからね」
「それは」
恐ろしげな響きもなく、言ってのける。ソフィーヤの冷淡な口調の前に、私は言葉を失いかけていた。やっと捻りだした声は、自分で思うほどずっと力なく響いたことだろう。
「ゲリラのイデオロギーを、あなたは認めるということですか」
「そうじゃない。けど、そういうケースも確かにあるってだけで。都市が出来る前も出来た後も、社会との連帯感が得られずに鬱を患うケースはあったけど、今じゃすべてプログラミングで解決できるからね」
そこまで言ってから、ソフィーヤは身を乗り出して私の目を覗き込むようにした。視線を逸らすことなど許さない、そういう意志が、脳波ごと感じられた。
「ユーリ。人間、というか生きているならばある程度は遺伝子によって決定づけられるものだよ。なぜ赤ん坊は誰にも教わらずに歩行し、簡単な言語ならばすぐに取得するのか。なぜ世界中には似たような寓話や神話が存在し、どの民族も同じようなモチーフの神をあがめるのか。あんたは考えたことはある？」
私が是と答えることなど無いであろう、そう確信しているかのような問いかけをしてから、ソフィーヤはさらに畳みかけるように言う。
「人間が通常抱く、愛情や排他的な差別も、そうした構造があってのこと。集団に帰属するのは、その集団に属さなければ生きてこれなかった事情があり、差別はその自分が生きている集団を守ることであり、愛情は集団の連帯に他ならない。遺伝子はそのような情報を伝えるものであって、人間は生まれたときからその情報を持って

いる」
私の反応を見ながら、ソフィーヤは徐々に語気を弱めていった。
私の発言を待ちながら、というように。
「遺伝子が、決定づけるという考えは優生学的ではありませんか」
「あんたは自覚ないだろうけど、あんただってそうだよ。全くの白紙で生まれたわけじゃない、倫理規定をインプットされて、そのプログラムから逸脱しない行動を、無意識に取っている。もっともその規定も、都市警みたいな実力機関に従事する者はまた違う言語を刷り込まれているけど。それと同じことだよ。あんたは別に、倫理規定に反しないよう常に心がけているわけじゃない、あんたの行動がすでに、倫理規定に縛られているわけだから」
なんと返せば良いのか迷っていると、ソフィーヤは薄く微笑んだ。
「まあ、そうだからといって、これはあくまで一つの説に過ぎないわけだから。この理屈すべてが当てはまるわけじゃないよ」
「ならば何故そのような話を」
「暇つぶしみたいなものだって。そろそろ終業時刻だし」
そう言われて、退出時間が迫っていることに気づいた。網膜裏にクレジットされた時刻表示は、刻限まであと十分少々しかないことを告げ、私は立ち上がった。
「長居しました」
「かまわないよ。他の連中だったらさっさと追い返しているけどね」
冗談なのか本気なのか分からないことを言って、ソフィーヤは声を上げて笑った。
「私はまだ残るから、帰ってていいよ」
「残業ですか」
自己管理の甘さと効率の悪さの象徴でもあるかのようなオーバーワークを、自ら好んでやる彼女ではない。何か他の理由があるのだろうが、私はそれには触れずにおいた。
「ルカの、次の面接は明日やろうと思う」
去り際、ソフィーヤが思い出したように言った。

「また急ですね」
「時間がないからね。まだあの子から、本心を聞き出していないし。一応、面接はあんたに任せるから、どうしても難しければ代わるよ。私は外で控えているから」
続きソフィーヤは、忌々しそうにため息をつき、
「実は、人権委員会が直々に動いているみたいでね」
「それは」
なぜと言いかけて、しかし理由など訊くまでもないと気づく。都市警の判断が優先された今の状況で、委員会も焦りを見せ始めていた。法案の提出を急ぎ、急進派が台頭し始めている、その中でルカに白羽の矢が立つことは至極自明のことであって、当たり前すぎることだ。
「あの子も、多分私たちの手を離れることになる」
それは予言にも近い言葉だった。ゲリラたちが取り戻しに来るのか、それとも彼女がフリーサイドに送られるか。いずれにしても、あと一回。それですべてが終わる。

24

都市始まって以来のことだった。

地下出版『ナツィオへの帰還』は回収され、出版は差し押さえられた。出版元の営業資格剥奪と、都市政府が初めて治安維持のために表現を制限し、強権を発動させてからすでに十日ほど経過している。その間にもゲリラたちは都市のどこかに潜伏し、都市警はゲリラの捜索に躍起になり、メインストリートやショッピングモール、美術館のエントランスにすら、制服警官たちが巡回するようになっていた。都市住人にとって威圧の象徴でもある、鰐亀と蛇の徽章を見かけない日はない。乳白のビルと通りに、黒服と濃緑が点在し、上書きされたような、そんな異様な光景。猟犬（ハウンド）たちが徘徊し、装甲車両で都市内を見回り、それでもゲリラの糸口はつかめないことに対する苛立ちが警官たちの顔に現れている。それと分かる脳波を発することがないとはいえ、焦燥は目に見えるものだ。

早く捕縛しなければならない、という圧力。

それでも表だってゲリラの行動はなく、都市警を除けば人々は変わらぬ日常を送っているように見える。ゲリラがいるのだとしても日々の業務をこなさなければならないことには変わりなく、また実際今の都市にはゲリラの気配など感じられない。制服姿とすれ違う装甲車が増えただけでは、まだ都市は二人の自殺者と若干名の自殺志願者を出しただけの、いつもの日常を繰り返しているに過ぎない。それでも、住人たちの緊張感は倫理ネットを覆い、どうあっても今が変わらぬ日常などではない、ということを否応なく自覚させられる。

私が出勤したころには、ほかの所員たちが認証ゲートをくぐり抜けてゆくところだった。静脈を走査するレーザーが、所員一人一人の血管パターンを読みとっている。パターンは首から下、全ての静脈の配置をＡＩが記憶し、個人認証としている。血管の配置は複雑

を極め、この世に二人として同じパターンの人間はいない。たとえ所員のクローン体を生み出したとしても、クローンとオリジナルで血管の配置までが同じになることなどなく、したがってどれほど精密にコピーしてもここを突破することはない。セルゲイの技術を受け継いだゲリラたちに対抗すべく、つい最近導入されたシステムだ。認証を受けた所員たちの目の前に、認証済みを表す情報スクリーンが自動的に開き、それに触れることでゲートが開き、彼ないし彼女は入場を許される。これほど厳重なセキュリティに疑問を呈する者も少なくないが、それでも中に入ることができれば皆一様にほっとした表情を浮かべる。どれほど平静を保とうとしていいても、外よりも施設内の方が安らげる、という皮肉。

「慣れたものだ」

ＲＮＡ鎖のオブジェ越しに、聞き慣れた声を聞いた。マクガインの抑揚のない声をなぜか私は、誰よりも正確に聞き分けられるようになっていた。

「あの大仰な装置の前でも、躊躇せずにパスするとは」

「ただ前を通過するだけのものに、慣れるも慣れないもない」

「そうかい。俺はもう、三回もエラー出しちまったよ」

よほどのことがなければエラーなど出ないが、都市警は捜査員、突入員の別なく、足早に駆けるような歩き方をする。レーザーの読みとりが間に合わなければ、確かにエラーも出やすくなるかもしれない。

「次からは気をつけることだ。あれを通らなければ施設に入場は出来ない」

「出来ればそのままエラーを出し続けてくれって」

マクガインは、おそらく冗談を言ったつもりだったのだろう。

「そういう面をしているな」

「脳波を読みとれよ。私が今、そういう下らないことを言いたい気分なのかどうか」

全くの無表情のままでは、冗談も冗談には聞こえない。もともと

アルファグループにユーモアなど備わっていないのだろう。そのようなプログラムを意図的に組み込むことなど、無駄なことだ。
「それで、今日は何でここに」
「お前のとこのボスに用事があったんだ。それももう済んだがね」
ストラウスの所にはここのところ、警官が頻繁に訪れる。捜査チームの背広姿が入れ替わり立ち替わり、おそらくはルカの処遇について話し合っているのだろうと推測できた。具体的にどういう話かを知る手段はなく、マクガインに訊いたとしても教えてくれるということはないだろう。
「今日、また面接をやると聞いたから」
「今日が最後かもしれないけど、一応ね。監視をつけたいのなら、診察室の外にしてくれよ」
「それはそれで良いが、もう一つ確かな情報がある」
診察室に向かう私の後に、マクガインがついてくる。歩く歩幅が極端に違うので、時折マクガインが追い越しそうになるのを、マクガインは相当苦労して速度をゆるめ、私の速度にあわせていた。
「まだ何かあるのか。私に直接言うようなことでもないだろう」
「その様子じゃまだ聞いてはいないようだな。今日、人権委員会が来るということを」
「委員会からの通信は毎日入っているよ」
「直接、赴くそうだ。急進派のアードニー女史が来訪するから、その護衛を依頼されてな」
アードニー委員と直接のやり取りは、一度だけだった。あとは彼女をウェブニュースで見かけることはあっても会話を交わす機会などなく、そもそもが一介の所員に過ぎない私と委員である彼女が言葉を交わすこと自体が異例なことだ。
「わざわざここにか。通信を使えば良いものを」
「あの娘、ルカ・オベールについてだろう。俺も詳しくは知らんが、ここの所長と話があるということだ」
知らぬ間に、事態が動いているという気配。私の知りうる範囲の

外で、委員会の思惑が進んでいる。アードニー女史はすでにフリーサイド推進派を率いて規制緩和を推し進め、そしてそのためにルカを「広告塔」として祭り上げている。その「広告塔」の扱いを、今後どうするのか。ストラウスとそんな協議をしている姿を想像する。
「苛ついてんな」
マクガインが言うのに、私は自分の脳波が高ぶっているのに気づいた。警告を与えられるレベルではないにしても、人が通常、平静な判断を下すことが出来る許容範囲を越えそうになっている。倫理ネットを通じて、他の所員にも伝わったことだろう。得体の知れない高揚。
「珍しいものだ。お前が苛立つとは」
「そういうものではない」
深く息を吸い込んだ。そうすれば高ぶった気持ちを押さえられる気がした。完璧に脳波を操り、感情を制御するための倫理規定であるはずなのに、どうしてこのような気分にさせられるのか。
「バグかもしれんな。お前、ろくに休んでないんじゃねえのか」
「必要な休養は取っている」
ようやく脳波が安定してきた。私はマクガインに向き直った。
「ゲリラに誘拐されて尋問受けて、普通じゃまともじゃいられん」
「思考のブロックがうまく効いていないだけだ。神経回路に制御プログラムを打ち込めば、事足りる」
「それならば良いが」
明らかに懐疑の目を、マクガインは向けていた。詰問するようなその視線から、私は思わず目を逸らした。
「委員会の目の前で、失態演じるわけにゃいかんだろう」
「そうなりそうな時には、早々にギブアップする。お前が心配するようなことは何もないよ、マクガイン」
「別に心配なぞしてない。そんな義理もないだろうし」
やがて、診察室の前まで来た。入り口を二人の制服が固め、私とマクガインを見ると敬礼でもって迎えた。私はＩＤをかざして中に

入ると、マクガインは入り口に立ち止まって言った。
「何かあれば、外に通信を飛ばせば良い。外には誰かがいる」
それは、マクガインなりの気遣いなのだろう。都市警は脳波が読みとれないから、もしかしたら気遣いなどではないのだろうが、私はとりあえずそう思うことにした。
「分かった、ありがとう。心遣い、感謝する」
「別にそういうわけじゃないんだが」
最大限不服そうなマクガインの顔は、自動扉によって遮られた。

25

診察室には、すでにルカがいた。中央の椅子に腰掛けて、透明なテーブルと対面し、私が入るのにも何の反応も示すことなくテーブルを見つめている。

最初、私は無視されているのだと思った。しかしルカはもっと別のことに集中していたため、私の方に気づかなかったようだった。テーブルの上には、二十センチ四方の正方形が散らばっており、そのどれもが、赤や紫、橙の色を帯びている。

よくよく近づいてみれば、それは正方形をした紙だった。ルカはその紙を、丁寧に折り畳んでいた。

「ナノボットがこれほど溢れていると」

私はテーブルを挟んで、ルカの目の前に座った。そこえようやく、ルカは私に気づいたらしく顔を上げた。

「紙というものは、目にすることはない。培養パルプで今でも作られている場所はあるけど、実用品として使う機会はないからね」

「別に変なことは書いていないよ」

私が何かを発したところで全く今の作業をやめるつもりはない。そういう口調で、ルカは言った。

「自殺に導くようなテキストもないし、死ぬ方法が書いてあるわけじゃないし。あと紙で死ぬとかまずあり得ないし。こんな紙で死ねるというなら、やってみてもいいけど」

「できれば試して欲しくはないね」

ルカの細い指が、正方形の端を摘んで、三角形に折り畳んだ。全く寸分の違いもないのでは、と見間違うほど正確な折り目だった。

「紙ってここじゃひどく高いんだってね。外じゃ、こんなものいくらもしなかったけど。メモとるだけじゃなくて、こういう遊びもわりとまだあった」

「これは何なんだい」

「紙を折って、形を作るんだよ。私はあんまりうまくないけど、動物とか花とか、この紙一枚で作る。私の村じゃ、子供のころからこれをやるんだ」
器用に折りながら、確かに紙は一つの形に収束しつつあった。紙の端が鋭角になるように、幾重にも折り込み、正方形を三角に、三角を広げて折り目を作り、私には理解も及ばないような指の動きをする。
やがて小さな赤い紙は、尾と翼を持った鳥の形になった。立体構造を持ち、翼を広げるとそれが紙であることを忘れさせる。
「うまいものだ」
碌々、芸術など知らないのだが、つい私はそう口走っていた。
「何、バイオロイドも世辞は言うの」
ルカはなぜか居心地が悪そうに、体を揺すった。少し顔が紅潮しているようにも見えた。
「世辞ではない。私は良いものは良いと言うし、悪いものは無理に褒めることはしない。本心で良いと思っている」
「そう、それはどうも」
恥じるようにルカはうつむき、紫の紙の方に手を伸ばす。手元が少しだけおぼつかなかった。
「私はこれしか折れないけど、すごい人は何でも作れる。でも最近じゃこんなことする人間も少なくなっているんだ、私の村でも」
「伝統工芸みたいなものじゃないのか」
「伝統ってだけじゃ、弱いよ」
ルカの発言の意図を計りかねていると、ルカは手を止めて、私の方をみた。
「ゲリラに会ったんだってね、あんた」
なぜそれを知っているのかと口にしかけたが、ルカだって四六時中診察室にいるわけではない。最低限の生活ができる居住空間に身をおいていれば、少なからず外の情報は入ってくる。
「会ったよ」

私は答えた。嘘をつく必要はなかった。
「刀、持ってたってね」
ルカが言う。私は頷く。
ルカは、再びうつむいた。
「じゃあ生きてたんだ、あいつ。死んだものと思ってたけど」
「あいつとは」
「兄貴だよ、私の。あんた会ったんでしょ？　わざわざ銃相手に刀で突っ込む奴なんて、一人しか知らないし、私」
捨て鉢な言い方。実の兄であろうと赤の他人であろうと、誰であろうと同じだという風情が感じられる、自棄になったかのような口調だった。脳波を計ることでもできれば、あるいは本当の意図を探ることはできたかもしれないが、ナノボットの含有率が少ない今となればそれは叶わない。
「君に、兄がいたとは知らなかった」
「私はオベール夫妻の一人娘。ちょっと異国情緒漂う不思議な雰囲気な、ミステリアスな少女。スポーツ、特にフェンシングが得意で、でも両親はもうちょっと女の子らしくして欲しいって思ってピアノを習わせている。勉強は中の上、だけど数学だけは得意。そういうことになっているから。薄汚い外縁に、ゲリラの兄がいたなんて過去、都市に引き取られた瞬間に抹消されたよ」
ゲリラと血縁関係にあったとしても、それを理由に差別することはどこの都市でも許されていない。許されていないのだが、多くの夫婦には養子に迎えた我が子の将来を鑑みて、子供の過去のデータを消すことが許されている。過去をリセットして、都市での新たな生活を始める。引き取られた子供自身がそれを望む傾向も、無くはない。
「私が十歳になるかならないかってときに、人権委員会だかが私のところに来てね。こう言ったんだよ。新たな生活が待っている、って。その日兄貴は、大人達と剣の稽古をしていて、夕方まで戻ってこない予定だった。どう、都市での生活を送ってみないかって、私

は何かよくわからなくてＯＫしちゃった。あとで兄貴来るものだって思っていたけど、結局来なくてさ」
紫の紙が、同じような鳥の形に仕上がった。刃めいたくちばしと翼、いかにも華奢な首と尾を持った鳥。それが透明なガラス板の上に並べられてゆく。
「兄貴が別の施設に預けられたって知ったのは、大分後のことだった。その後は何にも聞かなかったから、たぶんもうダメだったんだろうって思ったんだけど」
「君の兄さんを、今都市警が追っている」
まさか、ルカを取り戻しに来たとも言えず、私はそのように告げた。
「あんた達からみたら、倫理社会に対する冒涜だかんね。外の世界は、個人を埋没させて、イデオロギーを優先させるカルト連中を放っておくわけない」
本心からそう思っているわけではない、だけどそう答えておくことが正解であると。そんな投やりな含みがある物言いだった。ルカは自分の言葉にすら責任も持たない、というように、ルカは赤い色の鳥を指先で弾いた。
「でもよかったね。そのうちフリーサイドの規制緩和だかができるんでしょ。そうすれば私、無条件でフリーサイドだから」
「それは」
私は胸のうちがざわめく感覚を押し殺しながら言った。
「君の意志を尊重するから、無条件ということはない」
「心にもないこと言っちゃって。バイオロイドは嘘つけないんじゃなかったの」
嘘ではない。嘘など言いようがない。確かに委員会はルカの意志を尊重して、フリーサイドへ行くか否かの判断をさせるようにことを運んでいる。彼女の意志は、尊重されてしかるべき。ただ真に彼女が望むことを、認めないというだけであって。
最終的に自ら死を選ぶということが、どうしても許してはいけな

い一線であるというだけで。
「私はさ、別に兄貴の言いなりになっている、わけじゃないよ」
ルカは鳥のくちばしを摘んで、くるくると回転させた。
「あんたたち、きっと私がゲリラ村出身だから、イデオロギーに縛られているって思っているだろう」
私はその問いかけに黙っていたが、ルカは小馬鹿にしたように鼻を鳴らし、
「みんなそうなんだよね。私が外縁から来たってわかると、決まって同じ態度を取る。イデオロギーに囚われているから、そうなんだろうって。ちっちゃい頃だから、そんな小難しいことわからないまま引き取られたし。そんなんでイデオロギーも何もないのにね」
ルカは自分の作った鳥を投げ捨てた。ガラスのテーブルとぶつかって、乾いた音をたてた。
「それならば、どうあってもそれを受け入れることができない理由などないのでは」
「そうだね、実はないかもね」
ルカは、やはり投げやりな口調だった。
「でも、嫌なもんは嫌なんだよ。こんなこと言っても、あんたみたいなのには分かるわけないだろうけど」
ソフィーヤの言葉が、脳裏をよぎった。人が社会的な生き物である以上、その社会に連帯することで進化を遂げてきた以上、人は社会に帰属意識を持つ。ルカの感じていることは、その社会との関わりなのだろうか。
「ならば」
意図せず、私は口にしていた。
「ならばどうすれば、君のことを分かることができる」
ルカは顔を上げた。一瞬、意外そうな表情をつくり、しかしすぐに皮肉を表すように唇をゆがめた。
「分かろうっての、私を」
「すぐには無理かもしれないが。君は、自分のことを分かる人間な

どいないとしているけど、分かるための道筋が分かれば、私も君に共感できるかもしれない」
「分かるわけないだろう。あんたみたいな肉と機械の塊が、何を分かろうってのさ」
「その決めつけは、君が嫌う人たちと同じ理屈じゃないか」
私の言葉に、ルカは何か重要なことを気づかされたような、驚いたような顔をした。
「君はゲリラ村の出身、だからイデオロギーに縛られているに違いない。個性を埋没させた、かわいそうな人間。そういう決めつけを、君は忌避しているのではないのか。ならばそういう彼らと同じように、最初から決めつけることは避けるべきじゃないのか」
このようなとき、あまり詰問するような物言いは相手に敵意を抱かせるだけだ。私は言葉の調子がきつくならないよう、努めた。努めて柔らかい口調を選んだが、それでもルカほどの年齢の少女には、どうしても堅苦しく聞こえてしまうのだろう。あからさまに、ルカは不満さを抱いた表情をしていた。
「すごい屁理屈だねそれ」
「それでも、そんなに筋が通らないとは思わないが」
やはりソフィーヤのようにはいかない。ルカは整った顔をますますしかめて、ため息をついた。
「私は確かに君のことを分からないかもしれない。ならば、分かる方法があれば、私はそれを試してみるつもりだ」
残された時間は少ないけれども。そう告げそうになるのを必死に自制した。急進派の動きや、都市警の思惑など、この少女の前で論じることが、どれほどの意味を持つのか。
おそらく、何もない。
「あんたって」
ルカは心底呆れたという風情だった。
「なかなかないよね。私のことを分かる、だとか言ってくる人は結構な数いたけど。分かるための方法って、それ考えるのがあんたの

仕事なんじゃないの」
「それはもっともだが、私自身カウンセリングというものは初めてのことだからね。色々と手探りなんだ」
「馬鹿じゃん」
ルカは笑みを見せた。目元を緩めただけだったが、それでも私には笑ったように見えた。
「でも、あんたは私とは違うだろう。どうやって分かるつもりだよ」
しかしまた冷淡な表情でもって、私に問いつめる。
「口だけじゃ何とでも言えるよ」
「それは――」
私は答えに窮した。次の言葉を、口にしかけた。

26

突然、網膜の裏に通信が入ったことを告げるシグナルが点滅した。ソフィーヤかと思ったが、ソフィーヤとは違うパターンを示している。文字列が、拡張視野に表れるのに、私は声を上げそうになっていた。

レイラ・アードニーの個人識別信号だった。一度、言葉を交わしただけであったにも関わらず、なぜ私の識別信号にアクセスできたのか、そんなことを疑問に思う間もなく、診察室の空気ロックが外れる音がして、三人分の靴音が進入してきた。

「ずいぶん殺風景なところでやっているのね」

黒服二人を従えて、紺色のスーツのレイラ・アードニーが入ってくる。まるでこの診察室はすでに委員会のものである、と公言するかのような振る舞いだ。

「久しぶりね、ユーリ。元気だった？」

「委員直々にお見えになるとは聞いていましたが」

私はルカを背中側に隠すように、立ち上がった。ルカが明らかに敵意を帯びた目で睨んだのが見えたからだった。

「主治医は生憎、遅れてくることになっています。面談は、彼女の許可が必要です」

「ソフィーヤが遅れるって、珍しいわね。何かあるの」

理由は聞いていない。私には今朝、遅れるとだけメールを寄越しただけだった。面談に関しては私に一任されているので私はルカに会っても支障はないのだが、他の人間を会わせるなると話は別だ。

「大変申し訳ないが、主治医が来てからにしてもらえませんか。今はまだ」

「なんかナノボットの濃度、薄いわね。含有率十パーセント以下ってところ？　こんな中じゃ脳波なんて計れないわね」

アードニーは私のことなどまるで気にかけていないようだった。

ルカを見かけるなり、満面の笑みを作った。
「初めまして。あなたのことは以前からよく知っているわ、ルカ。今度のことは大変だったわね」
アードニーはおそらくどこに行っても、誰にでもそうしているであろう、社交辞令から入った。ルカがどれほど敵意むき出しにしても関係ないというように。
「今日はどうしても、直接会っておきたかったの。あなたはたぶん、フリーサイドを誤解しているんじゃないかってね。ちょっといい？」
アードニーは私を押し退けて、ルカの対面に座った。何を遠慮する必要があるのかという態度で、ガラス板の端末を取り出して、文字列を打ち込むと一つの画像を映し出す。
「あなたはゲリラの掟を、守らなければって思っているかもしれないけど」
ルカの眉が動いた。アードニーは気づかない。
「けどね、フリーサイドってそんなに悪いものじゃないのよ。たぶん、あなたのご両親から話は聞いていると思うけど。あそこは苦しいことや痛いこと、死ぬことや老いることもない」
アードニーは一方的に話を進めている。カウンセリングの基礎など、全く無視している。ルカは拳を作って、うつむき、じっと話に耐えている。
「もちろん、この都市内でも同じように苦痛から解放される術はあるけど、それでも人間同士の諍いは絶えない。だけどフリーサイドならば、そのようなことはないわ。個人が尊重されつつも、互いに感情を共有できる。電子に変換されているから、傷つくこともない」
「委員、少し控えて――」
「あなたは黙って、ユーリ」
アードニーは、どうしてもフリーサイドのすばらしさを伝えたかったようだ。これ以上ないほど強い口調で私をたしなめた。
「もちろん、外縁にある因習やしきたりに縛られた、不合理な思想の押しつけもない。個人が集団に埋没させられ、自由を制限された

りすることもないわ。あなたもゲリラ村にいたことは、そういうしきたりに縛られていて。ううん、それについてあなたは、自分を責めなくていい。だけどそういう不合理な因習のもとでずっと我慢していてそれに慣れてしまったから、きっと嫌なものも嫌って言えなくなったのよね。だからフリーサイドも、ゲリラが忌避するなら自分も忌避しなきゃって、そう思っているのよね？」

確信を持った言い方。アードニーにとっては、絶対的に正しいこと。しかし。

「あんたは」

ルカは、うなるような低い声を発した。

「あんたには、分かるってのかよ」

アードニーはしてやったりというような笑みを浮かべた。

「そういう人って、ずいぶん見てきているわ。ゲリラのイデオロギーに洗脳されて、自分で判断できないって人はね。でも私がそういう人たちにフリーサイドを薦めてあげるの。最初はいやがっていても、後で説得して、フリーサイドに行ったあとは幸せそうに暮らしている。そうすると私はよかったって、思うの。人間を押し殺す、外縁のしきたりに縛られて人生を終えるなんて、人として間違っているからね。今でもそういう生活を選択して、都市の生活すら忌避する人たちがいるけど、私はそういう人に言ってあげたいわ、そうやって洗脳されたままでいいのって。きっと皆、本当は都市の生活に憧れているのに。かびの生えた掟で、選択を狭めてしまうのね」

ルカの細い肩が、小刻みにふるえている。もはやその目に少女らしい柔らかさなど、微塵もなかった。今まではそれでも、幼い面影を残していた横顔も、すでに敵意そのものでしかなく。

「だからね、あなたにもフリーサイドをもっとよく知ってもらいたい。そのために私もできることを――」

最後まで発することはできなかった。ルカは立ち上がると、右の拳で、アードニーの頬を張った。

アードニーが派手に椅子から転げ落ちた。隣の黒服があわててル

カを止めに入ろうとしたが、それよりも早くルカはガラス端末を拾い上げ、黒服の顔面に思い切りたたきつけた。
ガラスが砕け、黒服の一人が顔から血を流して倒れる。もう一人がルカを押さえつけるが、ルカはガラス片を男の手に突き立てた。拘束がゆるんだところで、男の顔に切りつける。黒っぽい機械血が飛び散り、白い壁を汚した。
「あんたに何が」
ルカはガラス片を拾って、床に伏しているアードニーの前に立ちはだかった。アードニーの両目は驚きに見開かれていた。殴られたことに対してか、それともルカが自分を拒否したことに対してなのか。
「あんたに何が分かるってんだよ」
ルカがガラス片を逆手に持ち、アードニーの顔面に向けて、振りおろした。先端がアードニーの右目をえぐる寸前、私は手を伸ばした。ルカの右手を押さえて、凶行を止める。
「やめるんだ」
静かに告げたつもりだが、息が上がっていたのでやや怒鳴るような物言いになった。ルカは最大限、憎悪を込めた視線で私を睨んだ。
「こいつの肩持つんだ」
「そうじゃない。だがそういうことは」
「肩持つんだ、私のこと分かりたいとか言っておいて」
いきなりルカは、開いている左手で私の首をつかんだ。華奢な骨格からは想像できないほどの力だった。そのまま私を壁に押しつけ、ガラス片を喉元につけた。
「どうせあんたら、そうなんでしょ」
ガラスの先端が、少しだけ膚を傷つける。微量な出血を、関知する。
「あんたら、自分がそうじゃないと気が済まないから、あんたらの理想にそぐわなければ無理にでも引き込もうとするんだろ。そうやって、私のいたところがどうだったか、なんてろくに知らずに否定

するんだろうが」
首にかかる、力が強くなる。ルカの細い指が、膚に食い込んで行く。
「だったら、分かろうとか言うなよ。分かりたいとか、変なポーズつけるなよ。私がどう思っているかとかこうに違いないとか、勝手に想像して、そうでなければならない、とかって決めつけるだけなら、私のこと放っておいてよ。哀れんで、慈しんで、良いことしたって悦に入って、そういうことしか能がないんだったらもう黙ってろよ」
ルカの両目は、見開かれていた。獰猛な光を宿し、しかし瞳がかすかに潤んでいた。涙なのだろうか、すでに眼の異物を除去する以外に使い道などない涙が、ルカの目ににじんでいるようだった。
「私は」
ようやく、私は声を絞り出した。
「どうして君を、そこまで苦しめているのか知りたかった」
「苦痛なんて、何一つ覚えないってのに？　この肉人形」
すっと、ルカはガラス片を振りあげた。
「私のことを分かりたいってなら、いっそ死んでみなって。こいつを受けてみて、それで少しは痛みも分かるってなら、考えてやるよ。どうせ分かりゃしないだろうけどさ」
「構わない」
ガラス片を、私は見据えた。先端は私の首筋を向いている。おおよそ二十四度の鋭角を成した破片は、首筋に切りつけられれば頸動脈を完全に破壊し、それはナノ分子の修復も間に合わないほどの出血となる。そうなれば私は自分の血に溺れて事切れる。そんな予測が、ぼんやりと頭の中に浮かんだ。
そこまで分かっていても、尚。
「それで気が済むのならば」
私は何故、そのように答えたのか。
ルカは唇を噛んだ。彼女の桜色めいた唇から血が滲んだ。やはり

同じ黒、しかし色素の薄いものだった。
ルカは腕を振り下ろした。破片の先端を、私の首筋と垂直になるように傾け、水平に切りつけた。次には膚が切り開かれて、血管に達するだろうと、思われた。

影が割り込んだ。
そうとしか言いようがなかった。私とルカの、わずかな合間に割って入り、ルカの腕を掴んだ人物をみて、ルカはかすかに驚愕の声を上げた。
「これは持論なんだけどね」
私には彼女の、白衣の布地しか見えなかった。それだから彼女、ソフィーヤ・テテリナがどういう顔をしているのか分からなかったが、ルカのおののいた表情を見るに相当なものなのだろうと推測できた。
「おイタがすぎる子供は、言葉で言っても分からないことがある。もちろんやりすぎは良くないけど」
と言って、ソフィーヤはルカの腕をひねりあげた。ルカが悲鳴を上げ、ガラス片を落とした。それでも細い腕を壊さぬよう気を使っているのか、かなりきわどい角度で関節を極めている。手首を返し、肘を縦方向に捻りあげることで尺骨を伸ばし、同時に上に突き上げることによってルカはつま先立ちを余儀なくされている。完全にルカは抵抗する体を成していなかった。
「でも、最後の手段としてこういうことも必要だ。特にこういう馬鹿な大人しかいないようだとね」
ソフィーヤはそのままルカを引き離し、壁に押しつけた。ルカの肩を掴み、腕を持ちかえて、都市警がそうするように彼女の身柄を完全に拘束する。ルカは抵抗するが、ピンで押さえつけられた標本の虫のように全く動くことが出来ない。ソフィーヤはそれほど強く押さえているようには見えないのだが。
「遅くなって悪かった、ユーリ。でも何で委員会なんて入れるんだ

よ」
「一応、止めはしたのですが」
「そうかい」
そんな言い訳など無用だっただろうが、ソフィーヤは気のない返事をした。
診察室に、都市警の制服が二人入ってきた。入り口を固めていた二人だ。まだ年若い警官は、中の状況を見て困惑顔で効いてくる。
「これは、一体――」
「一体、じゃないよ。こういう事態に備えてのあんた達なんじゃないのかよ」
ソフィーヤは、ルカの腕を押さえたまま制服の一人を叱責した。
「脳波に、変化がなかったので」
もう一人が、やはり困惑した様子で、それでも職務を果たそうとルカの腕を押さえ、身柄を拘束する。ルカは、もはや抵抗する気はないらしく、ぐったりとしていた。
「脳波は切ってあるって、何度も説明しただろう。あんた達、脳波がなきゃ何もしないでくの坊か。大した仕事だね、税金食っておいて」
ひどい侮辱の言葉だが、今のこの状況で異を唱えられるはずもなく、警官二人は恐縮したようにうなだれるばかりだった。
ソフィーヤはため息をついて、二人に指示をした。医務室に連れてゆき、あとはスタッフに従うように。彼らの経験不足を補うような的確な指示を飛ばした後、二人はルカを連れて診察室を去り、それを確認してからソフィーヤは私の方に向き直った。
「何で彼女、あんな状態に？」
「私のミスです」
「そうだね。こいつをここに入れたのはあんたのミスだよ。カウンセラーでもない人間に、一言だって喋らせたりするから」
続きソフィーヤは、まだ床にしゃがみ込んでいるアードニーを睨み、

「危うく部下を死なせるかもしれませんでしたよ、委員。彼らの生命を守ることも、あなたの責務ではないのですか」
「まだあなた、柔術なんてやっているのね」
アードニーはふらふらと立ち上がった。ルカに殴られた頬が、赤みを帯びていた。
「趣味でやっている分には文句はないでしょう」
ソフィーヤは、特に手を貸そうとか助け起こそうと気はないらしく、アードニーをただ見下ろす格好だった。
「他人の体を壊すことに愉悦を感じることなんて、あんまりまともとは言えないわね。別に禁止されていることじゃないけど、あまり委員会としては推奨したくない趣味だわ」
「あなたがしている、人に説教して回るような高尚な遊び、私には似合いませんから」
アードニーは、頬をさすりながらソフィーヤを忌々しげに見据えた。
「ああいう、イデオロギーに毒されていたら直接暴力に訴えてくる、そういう意味じゃあなたの趣味も役に立つかもね。暴力を暴力で迎えるには、ぴったりだわ」
「それが本音ですか、アードニー」
ソフィーヤの声は、静かだった。しかし少しだけ震えていた。
「カウンセリングとは、クライエントに襟元を開いてもらわなければならない。そのためには相手を見下ろす態度がもっとも禁忌で、あくまで対等でなければならない。あんたがそんな態度で臨んだら、クライエントだって分かりますよ」
倫理ネットが健在ならば、脳波が爆発しそうに高ぶっていたはずだ。ソフィーヤは両拳を、握り込んでいた。
「あなたに半端な覚悟しかないことは、昔からよく知っていました、アードニー。別にそれはそれで構わないですし、誰もが覚悟を持たなければならないなんて言いませんよ。でもそれならばそれで、余計なことはせずに黙っていて欲しいものですね。とりあえず、ここ

と早々に立ち去ってもらいたいものです」
「私はただ――」
ソフィーヤが睨みを効かせる視線は、最後通牒じみていた。ソフィーヤが次に口を開くときには、同時に実力を伴いかねないという威圧感がある。アードニーはソフィーヤを睨み返し、黒服二人を従えて診察室を出た。空圧ロックの扉が閉まる音がして、再び静寂が訪れる。
「喉をやられたね」
ソフィーヤが私の首に触れた。体温がほとんど感じられないほど冷たい指先だった。
「切られてはいませんよ」
「でも相当な力で握り込まれている。痕が出来ているよ、首」
「異常はありません」
「そう」
とソフィーヤは、手を下ろした。
「筋繊維も機械で、普通の細胞より出力が大きいんだ。あんたみたいに最初から機械細胞を持って生まれていれば、力の加減は自然に出来るけど、あの子は移植されて間もないから加減を知らないんだね。相当の力だっただろう」
ソフィーヤはテーブルの上に置いてある、紙の鳥に目を付けた。人工血の黒ずんだ粘液に浸り、赤いくちばしと翼が黒ずんでいた。ソフィーヤは壊れやすいものであるかのように、両手ですくうように鳥を拾い上げた。
「汚れちゃったね。都市内じゃ、この手の紙はそんなに扱っているところはないんだよ」
「あなたが持ってきたのですか。その紙を」
「探すのに難儀したよ。この三枚しか手に入らなくて、でもせっかく作ってもこれじゃあね」
ソフィーヤは血を拭おうとしたが、紙である以上はそれも叶わない。あきらめて、テーブルの上に置き、

「何を言ったの」
詰問するようでなく、ソフィーヤはただ訊いた。私の答え方など特に何も期待しないという問いかけだった。
「彼女に、どうすれば分かるのかと」
「ルカを分かろうと？」
「分かるはずがないと、言われました。痛みすら覚えないくせに、分かろうなどと言うな、そんな体裁をつくるなと」
ルカの言葉をなぞってみた。それが絶対的な拒否であるかのように思われた。絶対的に拒否して、その拒否の源が、彼女の感じている痛みそのものであり。
そして私には、その痛みを知る術はない。
「痛みを知らない私には、ルカを知ることなど不可能なのでしょうね。あなたの言うように、カウンセラーはクライエントと対等でなければならないのに、私はそもそも彼女と違う場所に位置していた」
ならば、彼女の前に立つ資格など、私にあったのだろうか。本当に彼女を救うための手だてを、考えることなどが。
「私には、その資格が」
「ユーリ」
それの先に触れてはいけないとばかりに、ソフィーヤが遮った。ひどく沈うつそうな顔をしていた。
「あんたはよく頑張ったよ。あの子のことをちゃんと考えていた。体裁じゃなく、本気であの子を分かろうとしていたってことも、私は知っているよ」
ソフィーヤが私の肩に手を置いた。そうすることで彼女自身も、気持ちに整理をつけようというように。
「だから、そんなに自分を責めることはない。あの子はそう、もう少し急がずゆっくりやれば、もしかしたらまだ芽はあったかもしれない。けど、そうはならなかった。だからもう、この話は終わりなんだ」
そうやって、無理にでも彼女自身が終わらせようとしている。そ

うしなければならないことは、分かっていた。どれほど納得できなかろうと、続けていくことが困難であるならば。我々は元々の場所に戻るべきだった。

私は日常に、ルカはフリーサイドに。それが最終的にあるべき姿と、言い聞かせ。

27

その日、どうやって帰ったのか覚えていない。特に意識せずとも、ほぼ全自動の車に乗り込み、高速（ハイウェイ）を駆け、家にたどり着けばやはり自動的に食事が出る。生体監視のその日一日のデータを元に、栄養素が調合され、人造肉とペーストの穀物、培養野菜の有機スープとが並ぶ。調合機械は所員の家に支給されるもので、否応なく健康的な身体を作る装置から排出される食事を口にして、明日に備える。そこまではいつも通りのことだった。

食事を終えてしばらくして、通信が入っていることに気づいた。シェン・リーからの、プライベート回線。まさか仕事のことではないだろう、と私は通信窓を開いた。

「起きているか、ユーリ」

スクリーンに、シェン・リーの顔が映し出される。何故か切迫した声音だった。

「これからシャワーを浴びようというところだが、珍しいなこんな時間に」

「起きているなら良い。ちょっとウェブのニュース、つけてみろ」

「何をつけろと」

最初言っている意味が分からなかった。ニュースならばいつも見ていることなので、シェン・リーに改めて言われるまでもない。

「ニュースがどうしたというんだ」

「いいから早く」

シェン・リーはスクリーン越しでもそれと分かるほど色めき立っていた。私は食事を終えたばかりの食卓に、情報スクリーンを固着させた。

映像が飛び込んできた。普段ならばその日のニュースを延々流すだけのチャンネルが、ライブ映像に切り替わっている。映像は、どうやら中心街の高層ビル群の一つであるらしく、ヘリから撮影され

たものであるようだった。
ひときわ高いツインタワーの屋上に、豆粒ほどの人が見える。柵の外側に出て、下界を臨む姿が、遠方からとはいえかなりはっきり映し出されている。六人の男女、そこに都市警のヘリが近づき、しきりに怒鳴っている――。
「真ん中に、うちの所員がいるんだ。わかるか」
シェン・リーが言うのに、目を凝らしてみた。中央の白衣姿の年若い男性は、確かに所内で見かけたことのある顔だ。ひどく青白い顔をしている。
また新たなスクリーンが開いた。同じようなビルの映像、しかし今度は郊外のビルだ。屋上で身を乗り出した男性の姿を捉え、アナウンサーが切迫した声で状況を報せる。今まさに飛び降りようとしている男性を、都市警らしき影が取り押さえようとして、男性はそれに抵抗して暴れている。
今度は三つ、スクリーンを開いた。中心街の広告塔、都市境界の商業ビル、研究所に近い高速道路のベイブリッジ。それぞれに人の姿があり、それぞれが高所から下をのぞき込んでいる。これから何をするのか、分かっているという顔で。
都市警の突入員たちが彼らを押さえ込もうと走ってくるのが見えた。それとほぼ同時だった。全部で五カ所、数にすれば十五人以上の人間が、一斉に飛び降りた。突入員が捕まえるまもなく、人々は何かのためらいも見せず、あっけなく飛んだ。飛び降りた時点で、映像が暗転した。おそらく放送局側の配慮なのだろう、残酷な映像をこれ以上流すまいとするための。だが。
「見たかよ、おい」
シェン・リーがスクリーンの向こうから呼びかけるのに、私は答えることが出来なかった。明日からＰＴＳＤの対応に追われるだろう、あるいは委員会の動きがどうなるのか。そんな考えと平行して、私はあの男の言葉を思い出していた。
――近々大きな動きがある。

阿宮圭の予告は、このことだったのだ。おそらく「ナツィオへの帰還」が発禁になることを見越した上での、もう一つの仕掛けだったのだろう。あの本だけではない何かを、いやもはやテキスト形式ではない決定的なものを、すでに阿宮は手にしているのだ。

シェン・リーの言葉も、もう耳に入らなかった。阿宮はこの都市の人間すべてを人質に取ったのだという思いだけが、私の頭の中を巡っていた。

大きな動きがある。

その動きが、まだ何も終わっていないことを如実に告げている。

精神汚染レベルを差し計る、脳波測定が限界値を突破し、脳神経が異様な興奮状態に包まれた数値。電意信号が示すベクトル――安定的嗜好と対局の恐怖と不安と、嫌悪。それらを修復するためには、もはやリレーション作業など必要ない。ほとんど修復のための言語を直に脳幹に入力する、そんな規定違反ギリギリの行為をしなければ間に合わない状況だった。

その日に自殺を見た全ての人々――映像として目の当たりにしたもの、直接現場に居合わせたもの、飛び降りた後の彼らを見てしまったもの、倫理ネットでそれらの感情と同調してしまったもの――そうした人々で、どこのセラピーもパンク状態で、研究所も例外ではない。

配属されて初の、勤務時間制限解除が発令された。ワークバランスのために設けられた拘束時間の上限が、この日を境に取り払われ、脳神経技師もプログラマーも、総員で患者の対応をすることとなった。シェン・リーも、当然ソフィーヤも。研究所の全てを投入しても、心的外傷を抱えた人々は後を絶たない。

「腕十本ぐらいは増やして欲しい」

などと悪態をつきながら、シェン・リーは七つも八つもスクリーンを展開させて、すさまじい速度で更新される脳波のコードを読みとり、出入力を繰り返していた。いくら脳神経とデータを同調させ

たとしても、平行して処理するには限度がある。その限界を大幅に超えての作業。
「技術屋どもに造ってもらうか、義肢。背中からマニュピレータ生やしてさ」
「ああいうものを使うには、ある程度訓練が必要だ。簡単には出来ない」
「分かってるよ。言ってみただけだ」
冗談めいたことを交わしながら、その間にもまた新たなプログラミングの画面が開いた。こちらが望まなくとも、プログラムの要請は勝手に送られてくる。シェン・リーは舌打ちした。
「作業効率が悪くてしょうがない」
「同感だ。これほど多くては」
「それだけじゃなくて。こういう、石のベンチじゃなくて、もっとちゃんとした椅子でやりたいってことだ」
今私たちが作業を進めている場所は、エントランスのＲＮＡ鎖の足下にある、人工大理石のベンチだった。普段の業務も、特に決まったオフィスで行うわけでもなく、またプログラミング専用の部屋というものも用意されてない。多くのプログラマーはナノボットが散布されているすべての場所――屋上のビオトープや食堂、エントランスホールで作業をしていた。ここの事態に陥って、急遽専用の部屋を用意するということも出来ず、プログラマーたちは固いベンチや粗末なパイプ椅子の上で作業を余儀なくされている。
「今の状況を悪く言っても仕方ない。それよりも、お前」
私はスクリーンの手を止めることなく言った。
「どうして昨日、あんな連絡を」
「ニュースつけたのはたまたまだったんだが。その後ネット上に、いろんな憶測が流れているのを見つけたんだ」
「憶測って」
ようやく一つ、プログラムを終えた。実際の入力には脳幹技士の手が必要なので、技士たちに完成したアルゴリズムを送信する。そ

の間も、手を止める暇はない。
「放送局には流れなかったけど、ゲリラの思惑ってのがさ、ネットで議論されていたんだが。ただ当局のチェックが入って今は閲覧できなくなっている」
「都市警が検閲を？」
　およそ考えられないことだった。自由競争と倫理の表現のために介入されるべき警察力は、最小でなければならない。一つの権力が表現媒体や報道を制限することがどれほどの弊害を生み、そのような弊害を見直すための都市であったはずだ。権力を分散し、倫理による監視を設け、実力装置には制限をつける。異なる論調を封殺することが、危険な結果を招きかねないという歴史の教訓に、逆らうような行為といえた。
「このところおかしいとは思うよ」
　シェン・リーの脳波は正常だったが、その口調には切迫したものがある。
「誰もかれもがギスギスしてる。あんな事件が立て続けにあっちゃ無理もないが、都市内部をどうにかして締め付けてゲリラを炙り出そうとしている。治安を守るためとは言っても、こちらの権利まで縮小することが本当に治安維持になるのかどうか。非常事態宣言が出されているから、そういうことにもなるだろうとは思っていたが」
　よほど納得できないのだろうが、それは私も同じことだ。外縁を、自由と人権のない世界と断じても、非常事態ともなれば外とそう変わらずに締め付けを強くする。外縁の洗脳を解くと豪語していた、アードニーのような人間はこういう時こそ倫理を説き、ゲリラを説得すべきではないのか――。
　私は頭を振った。また考え込めば、脳波が無節操に乱れそうな気がしてきた。脳内の分泌器官が壊れているのではと思うほど、最近は気の高ぶりが顕著だ。
「まあ、検閲がかかる前に読んだんだがね」
　シェン・リーがそんなことを口にする。私は思わず手を止めてし

まった。
「読んだのか」
「そりゃあ。見たからといって、罰せられたりゃしないだろう。それでどうにかなる、ってなら都市警なんぞクソ集団でしかない」
向かいのベンチで作業していた女性が、眉をひそめて私たちの方を睨んだ。発言もさることながら、シェン・リーの発した嫌悪の脳波が伝播したのだろう。二十代前半のまだ年若いプログラマーは、それこそ次にそんな発言をしたらセクシャル・ハラスメントとして委員会に報告しかねない、そんな顔をしていた。
「発言には気をつけろよ」
私は彼女の方に頭を下げてから、
「お前はどうも、口が軽いところがある。お前のシリーズは皆そうなのか」
「まさか。シリーズ皆が同じにはなり得ない。ユーリとあの都市警とは同じパーソナリティってことになる。でもそうじゃないだろう」
「同じシリーズでも、タイプは全く違う」
「でも遺伝子プールは一緒だ。よく、遺伝子が性格を決定づけているとかいう理屈があるけど、それこそクソ食らえだって話で――」
向かい側の女性が、一生分の辱めでも受けたような嫌悪に満ちた視線を送ってくるのに、シェン・リーは言葉を切って、
「倫理規定にしても、俺たちは基本的には同じ規定を与えられている。その倫理自体は、もちろんなくてはならないものだが、それによって個人の性質まで変わる、ってなればそれこそ問題だろう。そんなものは倫理社会とはいえない、外縁のゲリラたちと同じ理屈だ。集団の中に個性を埋没させて、自我を押し殺す未開の地だ」
「私だってそのような社会は望まないよ。ゲリラの理想とは全く違う」
だが。それならば何故。
「それだから、俺は俺だし、お前はお前だ。それを認めるのが人権だ。けれど今の状況は、残念だけど倫理的とは言えない」

それは同意だった。しかし都市の社会は、ルカに都市の生活に馴染むようにと言う。ルカにフリーサイドのすばらしさを説き、フリーサイドに反発することは非合理とする。生きていることが第一であり、それ以外の選択などあり得ないかのように振る舞う、倫理的な社会。そして私はその倫理を強制する側の人間であり、どうあってもルカが望む結末を導かせることはできない。

ソフィーヤの言葉がよみがえる。生まれつき言葉を持ち、脳に倫理規定を刻み込まれたバイオロイド。生きることしか許さず、誰かを生かすことを行わなければならない。それは、本当に自由とは言えるのだろうか。

もっとも、完全な自由などは都市の中に存在しない。完全な自由は誰かの人権を無制限に認めることにつながり、そうなれば他者の人権を制限することになる。常にバランスを保つための脳内監視と倫理ネットであるのだから。完全な自由となれば、そこはもうフリーサイドにしかない。「そういや、お前はもう都市警に呼びだされたか」

シェン・リーに言われて、我に返った。いつの間にか目の前には、心的外傷の脳内マップ画面がいくつも開かれていた。空中に三重に連なり、二十は超えそうなスクリーンがシェン・リーのパーソナルスペースを侵しそうなほどに展開され、とてもではないが一人では手に負えない位にまで増えてしまっている。手伝うよ、とシェン・リーは私の前のスクリーンをいくつか引き寄せた。粒子で固着されたスクリーンは、シェン・リーの指の動きにあわせて移動する。

「すまない」

私はスクリーンの一つに指を当て、神経を同調させた。我ながら、完全な失態だった。考えごとをして目の前の業務をおろそかにするとは。

「まあいいって。それで、どうなんだ」

「どう、といわれても都市警が私たちを呼び出す理由なんてあるのか」

「昨日のことを聞きたいらしい。事情聴取だな、つまり」
「そんなものが必要になるのか」
研究所の静脈認証、駐車場の車両照合、ショッピング時の生体ＩＤ使用履歴と、アパートの居住空間内センサに至るまで、私が存在した証など至る所にある。特別な許可もなく、それらは一般的な機関であればどこでも閲覧できるようになっている。それらが揃っている中で、わざわざそのような手間をかける意味が分からない。
「さらに、嘘発見器にもかけて、昨日のあの事件のときなにをしていたか、って調べるようだ」
「そこまで許すのか。ストラウスは何と」
「快く、承諾したみたいだね。あの親父案外、権力ないな」
それでもそれは非常事態であるからだろう。ストラウスもおそらく、分かっているはずだ。今この時期に権利を主張することに意味がないのだと。
「それにしても何故、そんなことを」
「あの時点で、すでに本は回収されていた。それでも自殺者が出るってことは、脳に何らかの干渉をされた可能性が高い。そしてそんなことができる人間は、限られている。俺たちみたいなプログラマーだったり、民間セラピストであったり」
「だからＩＤを辿れば」
「その時間になにをしていたか、とかそういう記録が改変されていないとも言い切れないってことだろう。都市のシステムに介入なんて、よっぽどじゃなきゃ出来ないってのに、都市警の奴ら可能性は全て潰すんだと。同調神経回路をつないで、脳波を測定しながら嘘をついていないかどうかを確かめて、それを所員一人一人に行っている。税金の無駄遣いだな」
ようやく、目の前の小窓が数を減らし、行列式で埋め尽くされた画面も徐々に更新速度を遅くしてゆく。クライエントの絶対数が減ったわけでもないのだが、それでも少しは気が楽になる。
「ともかく、全員ということだから。もうそろそろお呼びがかかる

とは思う」
「行かなければどうなるんだ」
「どうって」
シェン・リーは答えに窮し、ややあってから、
「どうにもならないんじゃないかね。一応は任意ってことらしいから。別にやましいことはないから、俺は行ったけど。お前、どうするんだ」
「いや、行くさ」
最後のスクリーンを閉じた。外傷性のストレスに対する処方は、ストレスを取り去ってやるリファーから始まる。今はその前段階で、それ以上行えばかえってストレスを煽ることになってしまう。
「聞きたいこともあるし」
その二時間後には、都市警から捜査協力の依頼がくることになる。依頼主はアルファ９――マクガインの名が連なっていた。

28

脳神経を同調するときに感じる、電気刺激を腕全体に感じていた。
青いコードがつながっている。コードというよりも糸、カーボンナノチューブを織り込んだ、触れれば切れそうな細いものだった。その先端が、私の指先と、手首と、肘の膚に刺さっている――ナノメートル単位の針など、刺さるのではなく単純に付着しているだけであるかのようだが、より正確に言い表すならばミクロの針が膚と膚の間から進入し、そこからナノチューブに収納された疑似神経の腕を、私の神経がある層にまで伸張させる。
神経とリンクした。コードは、私の右隣にある立方体の装置とつながっており、脳波測定と平行して体内の恒常性監視を行う。嘘をつけば体内に何かしらの変化が現れ、そのわずかな変化――その変化とは発汗であったり血圧の上昇やホルモンの分泌であったりするのだが、その変動幅と脳波の乱れを元に、嘘をついているのか否か、判断するらしい。
「昨日は午後十八時に退出したことに間違いはないか」
イエス、と答えると、立方体に白色のランプが灯る。データは箱を通して、生体監視と脳波値は都市警のサーバに送信される。今、目の前にいる都市警の取締官は、ナノボットが生み出すホログラム映像であり、遠く離れた本部の一室で私の生体リズムを見守っているのだろう。
「十九時には、居住部屋の人感センサが作動している。その三十分前には静脈認証を行い、本人確認。その際、入室したのは本人か」
「イエス」
「間違いないと言えるか」
「その三千秒後には、シェン・リーと話をしている。何だったら通話記録でも見てくれ」
「イエスかノーで答えろ」

取締官とは別の声が、割って入る。同じようにホログラムになった、マクガインが仁王立ちで構えていた。
「この質問に意味があるとは思えないが」
「意味など知らずとも良い。さっさとすませることだ」
口論しても意味がないので、私は言うとおりに質問に答えた。私の方からはデータを見ることが出来ないので少々不公平であるように感じたが、今は非常時というシェン・リーの言葉を噛みしめる。私の権利など、いとも簡単に制限されてしまう。これを致し方ないと諦めて、重大な権利の侵害であると憤ることのない私は、人権に関してあまり積極的ではないと見なされるのかもしれない。そんなことを考えていると、次の質問が投げかけられる。
「あの娘と、接触していたな」
マクガインが、そう聞いてきた。明らかに今までの質問とは違う。
「ルカのことか」
「そうだ。面接を行った」
「それならばイエスだ」
「何を話した」
「それは答えられない。守秘義務があるからな」
私の受け答えがよっぽど不満だったのか、マクガインは苛立ちを露わにしていた。腕組みしながら舌打ちし、次の質問を繰り出す。
「阿宮圭について話したのか」
「答える義務はないな。クライエントのプライバシーに関わる記録は開示しない、そういう条件だったはずだ」
「そんな悠長なことは言っていられない。事情が変わったんだ。この研究所で、ルカに接触しているお前とあの医師、今のところ疑わしいのはお前たち二人なんだから」
「私があの自殺を引き起こした、とでも」
「正直に答えなければ、そんな疑いなど持たずに済むが」
私は、ソフィーヤがいつもそうするように肩をすくめて、
「彼女との会話が、どうしてそんな話になるのか、理解に苦しむな」

「この研究所から」
とマクガインは言いおいて、
「あの集団自殺があった時間帯に、ここからプログラミングの言語が発せられている。ここだけでなく、都市内の数カ所から、だが。あの本をそのままプログラム言語に翻訳したものを脳に、直接介入させている」
別に機密でも何でもないのだろう、マクガインは平然とそう言ってのける。
「そんな言語が送られているなら、生体認証のデータが残っているだろう」
「普通ならば。ただし、生体をすり替えたのか分からないが、認証のデータがきれいに消えている。誰がアクセスしたか、などは分からない」
「それならば、少なくともそれは私ではないと証明できる」
私は自信たっぷりに、というわけでもなかったがそう言った。認証データの改竄など、一所員である私には不可能なことだった。生体認証に伴うデータはすべて倫理院が統括しており、一度でも倫理院に身を置いたことがない私には方法すら検討がつかない。
「阿宮圭の妹、ルカに接触していて、さらに本の内容が送信されたから私やソフィーヤを疑うというのは軽率ではないか。もし私がそのようなことをして、何の得があるのだ」
「動機など今はどうでも良い。都市警はあらゆる可能性を潰す、それだけだ」
つまり、私やソフィーヤがルカと接触しているという理由は、数ある可能性の一つに過ぎないということなのだろう。他にも、探せばいくらでも見つかる懐疑の一つであり、送信者が割り出せないのであれば全員を調べようという発想。おそらくは他の研究所でも同じことをしているのだろう。だがそれにしても。
「何故、そこまで焦るんだ」
マクガインは、どうあっても不可解さの拭えない行動を取ってい

る。私をわざわざ呼び出し、すでに何十回と繰り返したルカの話を今更蒸し返し、大層な理由をつけて聞き出そうとしている。
「そこまでのことなのか、分からないが。私にはそうまでする理由が分からない」
「……こいつはあまり言いたくはないのだが」
マクガインの目が、一瞬躊躇するように宙を泳いだが、
「外縁部隊が、都市に入ってくる」
マクガインが言うのに、取締官が驚いたように目をみはった。声に驚いたというよりも、マクガインの言動そのものに対して。おそらく都市警の中でも、他者に提示してはならないという類の情報だったのだろう。
私が声を失っていると、さらに続ける。
「そういうことだ。連中は長年、ゲリラとやり合ってきたから、今回はゲリラそのものを討つ気でいる。正直に言えば、都市警の手に余る相手で、そういう奴らを倒すにはもはや一片の迷いもない。そういう判断だ」
外縁部隊。ただでさえ暴力を忌避している都市住人には、到底受け入れられそうもない名だった。治安活動のためには、対象の殺害も辞さないという、話に聞いただけでも恐ろしく現実味のない組織。それでも外縁に位置する以上、永遠に交わることも目にすることもないと思っていたその名が、
「すでに連中、都市流入の準備を進めている。奴らなら前回みたく、ゲリラ相手に遅れを取ることはありえない」
その名が、やけに近しいものに感じられる。マクガインの言うことが、それほどに説得力を持ち、都市警の焦りの理由となりうる話だったからだろうか。
「その、外縁部隊が」
私はやっとの思いで、声を絞り出した。私の神経は装置につながったままなので、もしかすれば都市警側ではとんでもない数値を拾っているかもしれない。身体の変化と脳波の振動、そうでなくとも

自分自身の動揺は、どう振舞おうと隠せそうにない。
「阿宮を殺しにくるのか」
「殺害が第一目的というわけではないから、その言い方は正確ではないが。ただそうだな、少なくとも奴らに与えられた規定は、ゲリラという人類共通の敵を残らず潰すことだ。我々都市警としてもそれは同じことだが、ただそのための手段に、選択の幅がある。都市警は捕縛しか許されないが、連中はそれだけではない」
わざわざ強調されるまでもなく、マクガインの言うことの、次の言葉は何一つとして私の予想を越えないものだった。
「ゲリラが抵抗したとなれば、奴らは必ず殺しにゆく。必ずだ。だから連中、外縁部隊が入ってくる前に片づける必要があるんだ。阿宮圭は、俺たちに捕まったところで厚生施設に送られるだけで済む。だが外縁部隊が相手なら、間違いなく」
その先は、言わずとも分かるだろう。マクガインはそういう目をしてくる。私の飲み込みの早さを期待しているかのように、やるべきことはすでに分かっているはず、そう確信したかのような沈黙だった。分かっているのだったら、すぐに実行せよと。暗にそう語りかけるような。
「私の一存では決められない」
そう答えるのがやっとだった。
「クライエントの情報は、開示するか否かクライエントの返事ひとつだ。ルカに確認して、それから決める」
「あまり悠長なことはしていられないのだがな」
「すべてを都市警の都合にあわせるわけにはいかない。そちらの条件を飲むのならば、こちらの条件も飲んでもらわなければ」
その一線は譲れないと、私は尋常ではなくそう思っていた。これ以上、ルカの意志を殺ぐようなことはしたくないと、その思いが伝わったのかどうか定かではないが、
「まあ、いいだろう。十二時間の猶予を与えるからそれまでに決めろ」

「ただ、会話を知ったところで阿宮を捕縛などは出来ないだろう。記録をとってはいるが、彼女がイデオロギー的であるという証拠は会話の中にはない」
「捜査については」
マクガインの像が揺らいだ。立体映像そのものにノイズが走ったようになり、粒子のひとつひとつが結合力を失い、砂の城めいて像そのものが崩れてゆく。スクリーン同様、ナノボットの固着によって投影される映像は、やはり砂糖菓子じみてあっけなく空間に溶け入り、輪郭が曖昧になってゆく。
「こちらの方法で進める以上、そちらに伝えることなどない。追って連絡するから、そのつもりで」
そう言い終えて、マクガインの姿と取締官の若い男の姿を構成していた三次元映像が霧散して消えた。
「外縁部隊が来ることを」
暗かった部屋に照明がついたのを受け、私はコードを引き抜いた。
「いつ決定したのですか」
私が振り向くと、壁際にいたストラウスが近づきながら
「昨日には倫理院と委員会に通達があった。機密事項でも何でもない、明日には私も所員全員に通達するつもりだった」
ストラウスは私の右隣に立って、マクガインたちが消えた空間をひどい渋面をつくって睨んでいる。
「たったそれだけのことを、いちいち勿体つけて話すあたり、お前はなかなか良い友人を持っているようだな１２（トゥエルブ）」
「友人ではありませんって」
私は立とうとするが、ストラウスが何かを言おうと口を開くのに私は注視する。
「例のテキスト」
とストラウスは前置き、
「あれを脳に直接送り込んだからといって、自殺願望が高まるとは思えないがな」

本の内容そのものを、閲覧できた研究所唯一の人間の感想は、案外素っ気ないものだった。
「人の社会性を説いているということですが」
ストラウスは、それが何だというように肩をすくめた。
「人が糖分を摂取するのは、原始の時代ではそれが貴重だったから無意識にそれを欲するだとか、そういうことは確かに進化の過程で得られたものだろうが、あくまでも副次的なものだ」
「万人が、そのような願望を抱いているというわけではないでしょうが、しかし一定以上の未遂者と自殺者を出しているからこそ、都市警が動いているのでしょう」
「都市警は過剰反応だ。もし人が、社会への帰属意識を無意識に抱えているのであるならば、我々は今でも神をあがめ、君主を立てた社会に生きていなければならない。社会に縛り付ける個人を解放し、習俗的な因習を打ち破って個人が権利を獲得してきたという歴史を見れば、もはや社会への帰属などは存在しないに等しいだろう」
自由主義は加速している。そんな文言を思い出す。肉体の死を乗り越え、意識のみで生きるフリーサイドは、肉体に縛られているうちには絶対に実現できない、完全な自由が保証されている。
「近代の歴史は、細分化の歴史といっても良い。社会構造そのものを守る行為から、個人の意志を尊重する社会への変容を余儀なくされ、それに応じることができないものたちは外縁へと追いやられた。今、都市の外にいる民は、すでに死んだはずの民族血統主義や伝統主義を掲げ、それすらも徐々に廃れつつある。今ですら、外縁の地でも合理的な考え、都市のライフスタイル、フリーサイドの基本概念は広がっている。すでにそうした時代の流れにあって、今更社会への帰属意識が無意識にあるなどと、およそ考えにくいことだ」
ある人間が言った。外縁の社会は個人を埋没させる。人が人らしくあること、自由であること、それこそが倫理であるのだと。
「遺伝子が全てを決定するわけではない。もし、そのような社会の帰属意識があるとしても、それに従う義務などない。人類が今まで

そうしてきたように、我々は理性で押さえ込み、反逆する事ができる。もし、それに従うことに慣れてしまえば、人類は歴史の過ちを再び犯しかねない。同胞意識からくる争いや虐殺、自分が優位であるという優性学的民族意識を排除するための倫理だ」

至極正論だった。その正論を実行するために都市があり、倫理ネットがある。外縁を徐々に懐柔し、いつかルカの紙細工を誰も作ることが出来なくなるまで、その正論を貫かなければならない。

それが私たちの使命なのだ。どうしようもなく「正論」を抱いて生まれた我々が、外の理論に少しでも同調することはない。権利を守り、倫理を守り、生命を守る。それが私に課せられた、生まれながらに入力された言語（アルゴリズム）である以上。

「明日には会話を開示する」

ストラウスは、何も反論する気概すら起こさせない、厳然とした口調で告げた。

「ルカ・オベールには私から話そう。元より都市警には全面協力するつもりだ。委員会の思惑よりも、今はこちらの方が優先される」

了解、と答える間もなく、ストラウスは消えた。彼を形作っていた粒子が散り、立体映像は消滅した。後に、私一人を残して。

29

夕闇が覆っていた。

つい三週間前ではまだ明るかった時間帯も、冬が近づくにつれ徐々に日が短くなってゆく。日が傾き、橙の陽光が赤紫を帯び、あきれるほど明るかった周りの空間を濃い群青に染め上げつつある。すでに街の灯がともり、高速（ハイウェイ）を車の列が成し、ＬＥＤの白色電光が尾を曳きながら流れている、そんな時刻だった。

ナビゲーションシステムが導くまま、私は家路を辿っていた。郊外の共同住宅街までは、混雑がなければ十分とかからない。そして先日のように、交通システムに狂いがなければ混雑はあり得ないことだ。都市の動脈が高速（ハイウェイ）とすれば、生体分子が体内の恒常性を保つように、交通を監視し、あるいは誘導しながら車両を管理している。

それも狂いがなければの話だ。どのようにしてシステムに侵入したのかわからないが、先のようにシステム自体が狂ってしまえば、渋滞が生じる。我々は常に完璧でなければならず、完璧以外の選択はあり得ない。それはすなわち綻びでしかなく、途端に生活の基盤ごと崩されてしまう。　だからこそ、都市警も倫理院も必死になっている。都市のシステムに綻びがあれば、倫理そのものが崩されかねない。外からの暴力を招き入れてまで、止めたいものがある。社会そのものを守ろうとする理論は、外のゲリラとあまり変わらない。

私は高速（ハイウェイ）を降り、住宅街へと車を進める。その先は工業地帯、そこを抜ければ共同住宅に至る。

その道の途中、一人の女性が道を歩いているのが見えた。いくら監視システムが働いているとはいえ、こんな場所を女性が一人で歩くこと自体が珍しい。私は彼女を追い越して車を停め、窓から身を乗り出した。

声を、かけようとした。道に迷ったか、あるいはどこか体の調子でも悪いのか。いずれにしても放っておくわけにもいかなかった。

「どうしました？」
そう問いかけてみたが、返事はなかった。もう一度呼び、彼女の顔を覗き込んだ。
女性の目には、全く生気というものがなく、虚ろでどこを見ているのかわからない。顔は病人のように青ざめていた。ただ病人であるならば体内の生体分子が異常警告を発し、周囲の人間に伝えるはずであるのに、その気配は全くない。ということは、健康に異常はないのだ。ただ私が見た限りでは、病人そのものにしか見えない。
私は車を降りて、彼女の元に駆け寄った。話しかけるが、何もしゃべらず、私を押し退けて歩き――足取りもおぼつかない――何かに向かって、のろのろと歩を進めていた。
「ちょっと待って。君は一体どこに」
私はそう訊いた。我ながら馬鹿馬鹿しい質問だとは思ったが、最初に口をついた言葉がそれだったので仕方がない。
彼女は一度、振り向いた。口の中でぼそぼそと何かを呟く。多くは聞き取れないが、一つだけ分かる言葉があった。
「ナツィオ……」
耳を疑う。もう一度聞き返すまでもないほど、その単語だけは鮮烈だった。とっくに回収されて消却された本の題名を、この女性が口にするということは、つまり彼女は自殺願望者なのだ。
「ナツィオ」
建物の陰から、別の人物が現れる。同じように虚ろな目で、ただ空の一点を見据えて。また一人、二人と人は増え、皆一様に同じ方向に向かって歩いてゆく。気づけば沿道には数十人と人の群が出来ていた。
呆気に取られていると、マクガインから通信が入った。網膜の拡張視野を通じて、私は回線を開いた。
「ユーリ、そこにいるのか。今どんな状況だ」
頭の中にマクガインの声が響いていたが、私はどう言ってよいか分からなかった。

「分からない……皆、同じ方に……凄い人数」
多分、聞いている方は相当の理解力を働かせなければならない説明だっただろう。マクガインは回線越しに舌打ちして、
「今、あっちこっちで通報が入った。郊外の都市住人が大挙して、門(ゲート)を目指しているって」
都市の円周を囲む、門と呼ばれる障壁は、通常は堅く閉ざされている。他の都市に移動するでもなければ、一般人は近づこうともしない。そんな場所を徒歩で目指せば、どれほどの日数を要するか分からない、などと。私はそんな愚にもつかないことを考えていた。
「今、都市警がそちらに向かっている。俺もそっちに行くからな」
そう言って、マクガインは通信を切った。私は彼らの見据えている先を見た。人々は道一杯に広がって、ただ進むという意志だけで歩いている。その先にある門を目指して。

門(ゲート)付近は、工業地帯となっている。
石油が世界を席巻し、争いの元になるまでに貴重な存在となっていた二十世紀ほどではないにしろ、石油が数あるエネルギー源の選択肢からあぶれることはなかった。徐々に天然由来のガス体エネルギーやバイオマスに押されつつあっても、完全に排除されることはない。石油は工業製品として用い、さらにそれらに付随したプロパンなどは液化ガスとして利用される。
その、液化ガスの精製施設だった。旧型の化学プラントとガスタンク、錆びた鉄骨で編み込まれた解剖模型じみた工場には、毛細血管のように入り組んだ配管構造がある。微かに鉄とガスの匂いが漂い、充填場の機械音が唸っている。ここだけはまさしく、外縁のそれとそう変わりない、産業革命時代そのままを写したような工業施設が広がっている。
人々の群は、工場の合間を抜けながら歩いていた。私も彼らに混じって歩く。完全に理性を失っているかのように見えて、実際は規則正しく、群衆は整然としている。列を乱さず、規律正しい亡者の

行進と形容出来そうだった。
　どうするべきか、迷った。ここで一人を取り押さえれば、おそらくは他の誰もが気にもとめず行進を続けるだろう。しかし一人だけだ。一人押さえ込むのに精一杯で、その他大勢を救うことは出来ない。その一人ですら、私の腕力で抑えきれるかどうか、分からない。
　そのとき、上空でヘリのホバリング音がした。私の真上を飛び越える黒塗りの機体は、透明羽を目一杯広げ、その羽を昆虫のそれであるかのように羽ばたかせている。よく目をこらさなければ、三角錐の物体が浮かんでいるようにしか見えない。その腹からは、大型の銃器らしき先端が突き出ていて、都市警にしてはやけに物々しい装備に思えた。
　群衆がふいに止まった。私は道の先を見た。群衆から五十メートル先、灰色の装甲車が三台停まっている。彼らの行く手を阻むように、黄色の簡易バリケードが道を封鎖し、装甲車の上とバリケードの前には屈強そうな男たちが立ちはだかっている。
　都市警とは明らかに、格好も装備も異なっていた。赤と緑のジャングルパターンの迷彩服を着て、エンジ色のベレー帽を被っている。持っているのは、都市警の短針銃や電気銃とは違う、もっと無骨な小銃だ。装甲車は、威嚇専用の都市警のものとは違い、複合チタンと思われる鉄板を何枚も重ねたつくりとなっている。車体には所々煤けたあとすら見えた。その側面には、ヘリについていたものと同じ――赤い羽毛の猛禽が羽を広げた意匠。鋭い目つきは、黄金色をしている。
「今すぐに引き返せ。警告を無視すれば発砲する」
　拡声器で、告げる声。無機質じみた警句と共に、バリケードの前にいた兵士たちが小銃を構えた。まさか、本当に撃つはずはない、そう思っていた矢先、兵士の銃口が一斉に火を吹いた。
　銃声がした。上空に向けて撃った威嚇射撃は、鼓膜どころか体の芯に響くような、そんな音だった。群衆は止まらない。もう一度撃つ。発射炎が横一列に、黄緑の華めいて咲く。

先頭集団の、足下の地面がえぐれた。彼らの進行を止めるための威嚇射撃だった。それでもゴム弾や電気針では、アスファルトを打ち抜くだけの威力はないはずだ。
「止まれ」
命令する声。先頭の兵士が発砲した。
群衆の一人が、足を押さえて倒れた。太股から血を流し、うずくまって苦痛に身悶えしている。非殺傷性の武装しか認められない、都市警の銃ではない。やはりあれは実弾なのだ。
「外縁部隊が」
後ろから声をかけられた。振り向くとマクガインが口惜しそうに歯噛みして、群衆を見ている。
「ここまで早く入り込むとは」
「許可を出したのか」
「まさか。だがこの事態、都市警じゃどうにもならないな」
まさしく敗北宣言に等しいことを言うが、マクガインの言葉通りだった。一人が撃たれて、群衆は明らかに動揺していた。それでも進もうとするのに、兵士たちは足下を撃ち、肩の辺りギリギリを狙い、あるいは群衆の頭上を撃つ。いつ当たるか分からない、そんなタイミングで。
「安心しろ。外縁の連中、射撃は慣れているんだ。あれで外すことなんざ絶対にない。死の恐怖を、ああやって想起させて自殺を思いとどまらせようってんだろ」
「そんなやり方――」
「ああ、クソだよ。でもどんだけクソでも、人死には出なけりゃそれに越したことはないってことだろうよ」
兵士たちが撃つ。群衆がそろそろと、後ずさりを始めた。それでも前に進もうとする者がいれば、足を撃つ。皮膚をほんの数センチえぐるだけの射撃で、致命傷にならぬように撃ってはいるものの、都市の概念からすれば信じ難い暴挙だ。
「これが外縁というものか」

マクガインが呟いた。どうにもならない現状を傍観するしかない、悔しさが滲んだ物言いだった。市民に銃を向け、恐怖で操る姿には、もはや倫理的などとは全く当てはまらず、しかしそれでも群衆には効果的だった。

「どうするんだ」

と私が訊くのに、

「とりあえずここにいても仕方がない。お前は早く戻ることだ。あとは連中と連携して、ことを収める」

マクガインはそう言うと、短針銃を取り出す。早く去れというマクガインの言葉通り、私は逃げまどう群衆と一緒に、その場を去った。

30

すでに群衆はなかった。人々は正気を取り戻したのか、あるいは恐怖にとりつかれたままどこかへ消えたのか。いずれにしても、先ほどまでの人だかりと熱狂はなく、いつの間にか私は一人になっていた。それでもまだ遠くでは、外縁部隊の銃声が鳴り、上空には三角錐の機体が飛び交っている。

「あり得ないことだって」

声とともに、背中に堅い筒状のものを押しつけられる。確認せずともそれが何であるか分かってしまう辺り、私も相当参っているのかもしれない。

「思っているんか？」

ひどく崩れた英語話者は、こと都市では限られている。私は少しだけ首を傾け、背後の人物を見た。

「やはり、君たちが」

そう言うと、男は嘲るように鼻を鳴らした。サングラスをかけた若い男は、手に持ったサブマシンガンの先端で私の背を突っつき、

「ただの研究員が、あまり冒険心起こさない方が良い。痛い目見かねんぜ」

「自分の家に戻るのに、ゲリラの許可が必要とは知らなかったな」

「車を降りて、いちいち確認するのが余計だったんだよ。そのまま真っ直ぐ帰っていりゃ」

「確かに。あそこに行けば、外縁部隊に撃たれかねないな。君たちも、早く逃げた方が良くないか」

「いいだろう、逃げるさ。お前を連れて」

「言っとくが」

私はハンドアップと同時に告げる。

「前にも言ったかもしれないが、私に人質としての価値はない」

「都市住人は誰でも人質になる。自殺者出たぐらいで、こんだけ騒

ぐほど、人死にを嫌うぐらいじゃ」
「都市警には効くかもしれないが、あるいはあの外縁部隊だったら分からないのでは」
いきなり男は、私の髪を引っ掴んだ。私の首を仰け反らせ、抵抗出来なくしたところで後頭部に銃口を押し当てる。
「いいから歩けってんだ、クソ野郎」
声質が変わる。もし脳波が読みとれたなら、急激な嫌悪の値にこちらが吐き気を催していたかもしれない。私は言われるまま、歩いた。

工場群の一つ一つに何があるのかわからない。化学プラントの林を抜け、金属パイプの城壁をくぐり抜けた先まで連れてこられる。壁際に、工業用ボンベの残骸が綺麗に並んでおり、天井から給油ホースらしきゴムの紐が垂れている。充填所はいつでも操業出来そうなほど整っていたが、全ての機械は止まったままだった。
後ろ手に縛られ、私は充填装置の前に転がされた。小銃を持った男たちが、私を取り囲んだ。
「あまり感動の対面というわけには行かないか」
一人が、銃口で私を小突く。暗がりの中で、顔の傷跡がやけに目立つ。コウヨウは私の顔を見るなり、ため息をついた。
「自分から飛び込む奴も珍しいな。この前と違って、こっちは何もしていないというのに」
「目の前であんなことがあれば、助けようとするのが人間だ。お前たちとは違ってね」
「何だ、減らず口を覚えてきたのか。まさかそれを披露するために捕まったわけじゃあるまい」
コウヨウは後を振り返り、何事か言った。私にはわからない、彼らの言葉だった。
奥の方で、人影が動いた。それが誰であるのか、もう予想するまでもない。

「自由主義は加速している」
阿宮圭は、計ったようにぴったりと、フリーサイド創始者の言葉をなぞる。当てつけや、皮肉や、どんな意図であろうとそう発することで自分の立場を明確にするというような声音だった。
「フリーサイド行きは、整ったかい。カウンセラー」
「君たちが暴れれば、彼女のフリーサイド行きも早くなるだろうね」
私が言うと、阿宮は刀の鞘で私の顎を持ち上げた。酷薄な笑みを浮かべる阿宮の表は、ネイサン・ジョーンズとは違う、東洋系の顔立ちをしている。肉体を入れ替えたのか、あるいは顔自体を整形したのかわからないが、阿宮の今の顔は元々の彼のそれに、似ていた。
「図らずも、俺らのショーに立ち会ってもらえるとは光栄だな。どうだ、楽しめたか」
「ショーとは、あの集団自殺のことか」
人の命をもてあそび、それをショーなどと呼ぶ阿宮に怒りを覚えたが、阿宮はそんな私の思いなどどこ吹く風と言わんばかりに鼻を鳴らす。
「集団自殺とは違うな」
阿宮はしゃがみこみ、私の顔をのぞき込んだ。
「君たちがやったことだろう。どうやったのか知らないが」
「いつもと同じだ。あの本の内容を、ただネットに流しただけで。ただし、プログラミングの技術は使ったがね」
阿宮の声は、氷点下の遙か下をさまよっているかのように冷たい。
「お前たちと同じだ。お前たちが、通常使っている脳神経回路への言語注入をして、思考を導く方法。そいつをちょっと改変した。ニューロンの言語変換には、お前たちの技術がかなり役立った」
周りの男たちが笑った。嘲笑の色をありありと浮かべて。
「知っての通り、俺は厚生施設に入れられた身でな。そこじゃプログラミングするのに、リレーションなんてまどろっこしいことはしない。脳に直接言語を放り込むやり方をして、それで随分な仲間が「改心」させられたんだ。そのやり方を学ばせてもらったよ。結構

な効果があるものだな」
耳を疑った。リレーションをしないということは、本人が拒否してもそれを無理矢理押し退け、脳の思考回路をいじるということだ。倫理規定としては、明らかに人権の侵害となる行為、それを厚生施設がやっているということか。
「あれ、何で驚いているんだ。まさか知らなかったのか」
「あの技術は」
我ながら言い訳じみていると思ったが、精一杯強がる必用があった。
「洗脳技術ではない。本人の意志をねじ曲げるなんてことは、倫理上許されないはずだ」
「お前たちの施設とまた違うのだろう。あそこでは倫理を強制させ、今までの道徳を捨てさせる場所だった。大抵の奴は理性を保ちきれず、奴らのプログラムを受け入れるが、最後まで抵抗した奴らもやっぱり耐えきれず、発狂しちまう。そういうところだ」
阿宮は、鞘で私の頬を小突いた。
「倫理倫理とお前は言うが、もし倫理が素晴らしいならどうしてそんな洗脳みたいなことするかね？　それとも人権を守るって理論なら、人権を侵すのもありってか」
「人権を守らない、君たちが言えることではないだろう。一体どれだけの人が死んだと思っている」
阿宮は鞘の先で地面を突いた。砂埃が舞い上がり、私はそれを思い切り吸い込んでしまった。
「お前たちは、俺たち外を見下すが。何十年も何百年も、俺たちは俺たちの理屈で暮らしていたものを、お前たちの都合を押しつけ、俺たちの伝統を低俗と決めつけ、自分たちが正しいと宣い、それに従えと言う。何が倫理的なものか」
「時代が変わっているんだ。君たちのように、古い掟に縛られて個人を埋没させる社会はもはや必要ではない。君も、ルカも、そこを理解していないから」

刀の先端が間近に迫った。そう思った瞬間には額に衝撃を受けていた。私の顔が跳ね上がり、仰向けにさせられたところで、鞘の先端を鳩尾に押しつけられる。疑似神経が暴れ、警告表示が網膜上にいくつも展開された。

「ルカは、俺の唯一の肉親だ。母親はあいつを生んですぐに死に、父親は外縁部隊に殺された。俺のたった一人の妹を奪っておいて、正義面するのか」

「君は」

声が、うまくでない。口元から空気が漏れた。

「君は、ルカに生きて欲しくはないのか。この行為が、ルカを苦しめているということに」

「生きて欲しいさ」

阿宮が体重をかける。胃の内容物が逆流してくるのに、私は必死でこらえた。

「生きて欲しいのを、お前たちが奪った。機械に作り替え、フリーサイドとかいうところに送り込み、とりあえず形だけ生かしておこうって言って、あいつから色んなもの奪って」

阿宮の目を見る。憤怒そのものの目。それでも冷徹に、仮面じみた表情の下に隠している怒りの矛先が刀の先端に向かっているかのように、圧迫を強めてゆく。

「ここにいる連中、皆そうだ。家族をお前たちの正義の元に奪われ、中にはすでに肉親をフリーサイドに送られた者もいる。子供や、親兄弟、配偶者……そうした者たちの思いを無視して」

「都市の中でも、虐待を受けたりすれば親や配偶者から引き離されるものだ。何も特別なことではない」

阿宮は刀を外した。私は思い切りせき込み、胃液を吐き出してしまう。苦い体液と鉄の味が口の中に広がった。

「あの本の内容が、確かに人々の心に作用しているのかもしれない」

私はようやく、しっかりと発声出来るようになった。

「遺伝子が、確かに社会への人々に帰属意識を植え付けさせたかも

しれないが、しかし人は学ぶものだ。遺伝子に従うのではなく、それに抗って歴史をつくってきた。いつまでも非合理な考えを持っては生きていけない」
コウヨウが銃剣を向けた。阿宮はそれを手で制し、言った。
「所詮、お前には分からないことだ」
阿宮は、ひどく疲れているかのような顔をする。
「合理的な部分と、非合理な部分がある。あの本で、外に行きたいと願う人の心が、都市の人間にもあるんだ。俺はその部分を刺激してやっているに過ぎない。お前たちが一方的に非合理と切り捨てる部分も、また人の一部だ。それを切り取って、人でない何かに仕立て上げるのが倫理と言うのならば」
阿宮が刀を抜くのに、私は目を見張る。暗い構内に差し込む月明かりの下に、白銀が映えるのを見た。幾人斬ったか分からないその刃が、皮肉なほど美しい光を放っている。
私を斬るつもりだった。阿宮にとって、完璧な倫理社会、自分たちを脅かす象徴を斬り捨てようというのだ。
「私を殺しても」
なのに、やけに冷静になって見ている自分がいる。生命の危機に立ち、慌てるでもなく、他人事と見ているかのような。
「ルカは喜ばない」
「そうだろうよ。お前を斬っても、ルカは戻らない」
阿宮が刀の切っ先を私に向けた。
「だが行き着く先は、これしかない」
振り上げた。剣先が、私の喉を貫く瞬間を想像した。

31

銃声がした。破裂音とともに、複数の靴音が踏み込んできた。阿宮が音の方を向き、コウヨウが銃を向けた。

また銃撃。私を連れてきたサングラスの男が倒れ込む。腕を押さえ、意識を失いくずおれるが、出血はない。帯電針が、二の腕に刺さっていた。

「散れ！」

阿宮の号令の元に男たちが散開した。コウヨウが私の首を掴み、充填装置の陰に隠れた。コウヨウは半身を出し、発砲する。都市警の突入員の一人が倒れた。

突入員たちがライフルタイプの短針銃を一斉に撃つ。金属針がガス容器と鉄骨に当たり、不協和音を奏でた。ゲリラたちは応戦しながら後退するが、多勢に無勢。電気針が打ち出され、ゲリラたちが次々倒れていった。

コウヨウは私の首を掴み、立ち上がり、私を盾にしながら突撃をかけた。いきなりのことで狼狽したが、もっと狼狽したのは突入員たちだろう。狙いをつける間もなく、突入員たちは一瞬躊躇した。その躊躇が仇となった。

コウヨウが私を突き飛ばした。私の体が投げ出され、先頭の隊員にぶつかった、直後にコウヨウが銃剣を突き出した。

剣先が貫いた。長い切っ先が、フルフェイスヘルメットを砕き、後頭部に抜ける。刺した状態で発砲し、その反動で銃剣を引き抜いた。黒い血に混じって脳漿が飛び散る。

迷うことなく、二撃目。右隣の隊員の喉を銃床で突く。銃身を返し、左の隊員に斬りつけた。喉を掻き切られ、倒れこんだ隊員の背後に発砲。撃たれた突入員は等しく心臓を撃ち抜かれ、成す術なく崩れた。

背後からまた突入員たちが近づいた。コウヨウが銃を向け、私は

地に伏したままその対峙を見つめた。
唐突に、阿宮が突入員たちの目の前に飛び出した。隊員たちが狼狽するのに、阿宮、刀を振るった。二、三、銀色が空間に孤を描いたかと思うと、血の飛沫が上り、突入員たちが崩れ落ちる。わずかに二秒足らずのことだった。
怒声が聞こえた。遙か彼方に、マクガインの声を訊いた。入り口、非常階段の方からマクガインが駆けてくるのが見える。
「先に行け」
阿宮がコウヨウに短く命じた。コウヨウは私の腕を掴んだが、次の瞬間身体が痙攣したように仰け反り、倒れこんだ。背中に小さな電気針が刺さっている。見ればマクガインが、銃口をこちらに向けていた。
マクガイン、阿宮に銃を向ける。阿宮は恐れる様子もなく、飛び込んだ。
発砲。電気針が阿宮の肩をかすめる。三度撃ち、三度とも刀で弾き、弾きながら阿宮は間をつめ、袈裟に斬った。
金属音。鉄が噛み合う音がした。マクガインは銃身で阿宮の斬撃を受けている。刀は、銃の半ばまで食い込んでいた。
両者が離れた。マクガインは、使いものにならなくなった銃を捨てた。右腰に吊った特殊警棒を伸ばし、その棒の本体に、青い電光が走った。
雷撃棒。暴徒鎮圧用に開発されたそれは、電圧を上げれば触れただけで対象を失神せしめる。実際に使うことはこれが初めてであろうそれを、マクガインはぴたりと阿宮の方につけた。右半身のフェンシングスタイルを取るマクガインに対し、阿宮は刀を肩に担ぐようにして構える。
そのまま睨み合っていた。二人して、出方を伺っているようだった。相対し、相手の隙を探り、腹のうちまでさぐり合っているかのような膠着――そうしている時間はわずかだったかもしれないが、私には恐ろしく長く感じた。

二人同時に動いた。阿宮が斬り下ろすのを、マクガインは棒の先端で弾いた。剣先が流れ、阿宮の体勢がわずかに崩れたところへ、マクガインが突く。

先端が阿宮の肩に触れる瞬間、阿宮が身体を開いた。棒を避け、体を転回し、マクガインの背後に回る。マクガインが振り向くのへ、横薙ぎに斬りつけた。

斬り結ぶ。雷光が走った。阿宮、間を取り、再度両断に斬る。マクガインが受け、下がり、阿宮がそれを追う。

二度三度と打ち合った。阿宮が斬りつけ、刺突するたびに、マクガインは雷撃棒で受け、あるいは流し、剣をかわしながら突きを放つ。金属が接触するたび、白光が弾け、鋭さを帯びた閃光を放った。互いに互いの攻撃を見切り、捌き、仰け反り、躱す。受け、弾き、二つの鉄が衝突するに、光を爆ぜさせる。

紙一重、膚一枚を隔てて刀を避け、しかしマクガインは徐々に押されていた。壁際に追いやられるに、阿宮、留めとばかりに刺突した。

雷撃棒が躍った。刀を横から払い、剣先の軌道を逸らした。マクガイン、そのまま刀身を抑え込み、がら空きの阿宮の胴に蹴りを見舞う。身体を折った阿宮の肩に向け、雷撃棒を突き出した。

阿宮の身体が沈んだ。棒が空を切った。阿宮、狼狽するマクガインの襟首を掴み、刀の柄を首に押し当て、マクガインの腰を跳ね上げた。マクガインの巨体が空を舞い、地面に叩きつけられる。

斬撃。両断に斬り下ろす。雷撃棒と十字に噛み合い、雷光が走った。マクガイン、仰向けのまま刀を跳ね除け、飛び起きた。棒を構え、すかさず突き出す。

刀が走った。マクガインの目の前で、三日月状の軌跡を描いた。やや遅れて血が飛び散り、私の目の前に雷撃棒を握ったままの、マクガインの腕が降ってきた。

阿宮、横薙ぎに斬る。マクガイン飛び退き、距離をとった。斬り落とされた腕をかばうように、左半身に構えた。

「ほう」
と阿宮は笑い、
「素手で、やろうってか」
血で汚れた剣先を向けた。ぎらつく刃は、マクガインの喉元を向いている。マクガインは左拳をつくり、相対した。
「無茶だ、やめろ」
私は、そう叫んでいた。そう言うのがやっとだった。しかしマクガインにはまるで聞こえておらず、阿宮もまたやめる気など毛頭ないようだった。
マクガインが飛び込む。阿宮が剣先を下げ、応じようとした。
まさにその瞬間だった。二人の間に、黒い球が投げ込まれた。地面に落ちた瞬間、すさまじい光を放ち、爆音を飛び散らせた。一瞬にしてマクガインと阿宮の顔を煙が覆い、私の目の前を白く染め上げた。
煙が晴れかけてきたころ、小銃を構えた影がなだれ込んでくるのが見えた。レーザーサイトの赤い光線が交錯し、規則正しい靴音が響く。私は地に伏したまま見ていると、やがてはっきりと煙が晴れ、迷彩の軍服と赤茶けたベレー帽、大鷲か何かのエンブレムを張り付けた外縁部隊の姿を見る。
続き、うずくまるマクガインを。しかし阿宮の姿はない。
「逃げたか」
マクガインは斬られた腕を押さえて呻いた。いくら痛みを感じないからといっても、出血が酷ければ意識が遠のく。マクガインは脂汗を浮かべていた。
「また取り逃がすとはな、しくじった」
私がマクガインの元に駆け寄ると、口惜しそうに言う。外縁部隊は、もはや私たちのことなど目もくれず、倒れているゲリラを捕縛し、阿宮を探してそこらを探索し始めた。
「無理をするな。殺されるかと思ったぞ」
私はマクガインを助け起こそうとするが、縛られたままであるこ

とに気づく。都市警の突入員たちが駆けつけ、倒れているゲリラたちを確保し、次々に連行してゆく。私とマクガインは突入員の一人に助け起こされ、私は工場を出た。

都市警と外縁部隊の装甲車が、包囲していた。上空を三角の機体が旋回し、工場群を空から捜索している。ＬＥＤの光芒が切り裂き、錆びた構造体を照らし、昆虫の羽が唸りをあげていた。

都市警の救護車に収容されたマクガインは、とりあえず止血し、斬られた腕は簡易型の医療槽の中に入れられた。細胞の壊死を防ぎ、細菌の侵入を防いで鮮度を保てば、直に神経接続を行うことが出来る。

「大丈夫か」

私はというと、マクガインと向い合せに座り打撲傷の治療を受けていた。治療といっても体内分子で治る傷であるので、額の傷を診る程度だった。脳に異常がないか、脳波テストを受ける。スクリーンに私の脳波が映し出された。

「一応、このスーツは防刃布なんだが、意味がなかったようだな」

斬られた腕を見ながら、マクガインはぼやいた。心底、情けないという様子だ。

「それにしても」

と言って、マクガインは鋭い視線をくれる。

「馬鹿な真似を」

吐き捨てるように言うのに、私は声を詰まらせた。

「悪かったよ。毎度足手まといで」

「そういうことじゃない、あの男」

マクガインは、窓の外を見ながらいう。外縁部隊の兵士たちが過ぎ去るのを横目に見ながら、

「ここで俺たちに捕まっておけばよかったものを。外縁の連中がこんなに早く出張ってくるとは計算違いだ。ことこういう事態になれば、奴ら」

それ以上のことは言わずとも、如実に語っていた。殺害を許された外縁部隊の前で、そこから先語らなければならないことなど、何もなかった。

外を見た。工場の周りを装甲車両が囲っている。空には機械の羽虫、構内には兵士――喧噪を耳に、私は目を閉じた。

32

一つ二つ、名前を数える。白い背景のスクリーンに、黒い文字列が流れる。犠牲者を悼む賛美歌と、淡々と犠牲者の名を読むキャスターの声。世界同時中継の追悼式典の映像は、フロアに響くすすり泣く声と相まって、もの悲しさを増していた。

一つ二つ、名前が流れる。ＲＮＡ鎖を取り囲むように展開されたスクリーンを見上げながらその名を目で追う。この研究所の、最初の犠牲者であるメイニー・ジェーンの名が刻まれた、ナノボットが生み出すスクリーン上。すぐまた新たな名前を刻み込み、彼ら彼女ら、自殺によって命を失った人々、ゲリラに殺された都市警の隊員たち。最後に、ゲリラたちの名が流れた。漢語表記で「李光陽」の文字を見たとき、コウヨウの銃剣の切っ先が脳裏をよぎる。

あの日生き残ったゲリラは一人もいなかった。都市警の電気銃に連行された後、体内の毒カプセルを弾けさせ、自決し果てた。ハイスクールに通っているほどの少年たちが、自らの意志で命を散らすことが、都市のものは皆衝撃的だったのだろう。若者たちを戦に向かわせ、自分の命すら軽く扱わせるイデオロギーを根絶しなければならないと、キャスターは声高に叫んでいた。人がようやく手にした倫理を、この都市に住まうものの正義を今一度刻み込むかのように。

この悲劇、この惨劇を記憶せよ。記憶しなお、その悲劇を憎むことのないよう。それが都市に住まうものたちの義務であるかのように――その確認作業であるかのような黙祷が捧げられた。彼らは憎むべき敵ではなく、外縁の世界の犠牲者であるのだと強調する。彼らの死もまた、都市の正しさを証明するための根拠とされ、彼らの理由はなにも明らかにされなかった。

私は一つ一つの名を見ながら、理由を探してみる。彼らが死に至った理不尽さを噛みしめ、外縁の不道徳を呪い、犠牲になったゲリ

ラたちを哀れんでみようとした。隣ではシェン・リーが、茫洋とした表(おもて)を晒し、嘆き悲しむわけでもないがいかにも口惜しそうに唇を噛んでいる。皆が皆そうするようにうつむき、胸の内に去来するものを押し殺し、密やかに悲しむ、という風に。せめて私も、シェン・リーと同じように出来ればよいと思ったが、それすらも自信がない。ひたすらにうつむき、全ての名前が流れるのを待った。

一つ、二つ。

自死することで、奪われた命の名称。

より完璧な倫理を目指すため、いっさいのほころびも許さぬと決めた、倫理院の思いの丈を集めた、尊い犠牲者たち。

あの日の騒動から、変わったことといえば二つある。都市警の黒服に代わり、外縁部隊の迷彩がメインストリートに立つようになったこと。もう一つは、フリーサイドの規制緩和法案が議会を通過したこと。推進派のアードニー女史が押し進めた法案により、フリーサイド遺児と呼ばれる子供たちは、これで自動的にフリーサイド行きの切符を手にすることとなった。ほとんど予定調和的に進められたルカのフリーサイド行きも、決定的となる。阿宮や、ゲリラたちがあれほど命をかけた事柄は、フリーサイドの門戸開放を促進し、倫理社会の正しさを認識させることにしか作用されなかったように見える。それでも肝心の阿宮と、ゲリラたちの残党が都市の中に潜伏しているとあって、外縁部隊の捜索は続いている。

そして、フリーサイド。もっぱら研究所もその準備に追われていた。ルカ・オベールをフリーサイドへと後押しする、研究所内の全てのものがそのために進んでいるかのような慌ただしさだった。私とソフィーヤによる面接は当然のごとく打ち切られ、彼女の身柄は人権委員会預かりとなる。

「十日後には」

シェン・リーは私のことを気遣ってか、同情めいた色を成し、話しかける。

「あの子もフリーサイドに行くことになるんだろうな。倫理院がそ

う決定を下したようだ」
　ＲＮＡ鎖のオブジェがゆっくり回転していた。私が見上げた先のスクリーンが消え、巨大なモチーフのみが残った。
「ルカはまだ、拒否していたはずだが」
「いずれあの子の体も弱ってくるだろう。急激に機械細胞に換えたことで、負担も大きいだろうし。放っておいても、自傷行為がなくなるわけでもないだろう。それに」
「両親と離ればなれは、人権上好ましくないと」
　私の物言いが、よほど刺々しかったのか、シェン・リーは言葉を詰まらせた。
「あの子がフリーサイドを拒否していたのは、委員会も承知の上だ。それでも尚、フリーサイドに送り込もうというのは解せないな。本人の意志をねじ曲げることは、人道上の問題はないのか」
「ちょ、ちょっと」
　シェン・リーは声を潜めて、私の袖を引っ張った。フロアにはまだ人が残っていて、そのうちの何人かが私たちの方を睨んでいた。最大限、侮蔑と怒りを込めたような、あるいは悲しみの余韻に浸っているところを邪魔されて迷惑がっているのか、とにかく複数の視線が突き刺さる。シェン・リーはフロアから私を連れ出した。
「いきなり何だよ、あんなところで言うことじゃないだろう」
　廊下に連れ出し、シェン・リーはたしなめる口調で言う。
「どこで言おうと関係ない」
　初めて私は、自分の脳波が乱れていることに気づいた。嫌悪の値に一歩手前の、それこそあの場に集う人々にとっては好ましくないグラフを示している。
　示していて、それが何だと言うのか。
「ルカはイデオロギーからフリーサイドと機械を嫌っているのだろうよ。なら仕方ない、多少は意志に反するとしても」
「多少で済むことなのか。彼女はイデオロギーとは関係ない、彼女自身が拒否しているというのに」

「そんなこと言っても、それを突き崩すための面接だったんだろう。道筋が違っても、結果的にはあの子をフリーサイドに送るか、機械細胞を受け入れさせるか、どちらかだったのだろ。ならば、結果が同じだから構わんだろう」

そうではないと、口にしかけた。

ルカが持っている信条（ビリーフ）がどれだけ非合理なものであっても、それを非合理であると納得させた上で今後のあり方を決める。プログラミングだろうと面接だろうと、クライエントとの信頼を得た上で、全てにおいて辻褄をあわせながら治療を進めることが論理療法であったはずだった。それらの手順を踏み越えて、ただ人道的見地で彼らの行く末を決めることとは違うのだ。

そう言ってしまえば良かった。言えば良かったのだが、どういうわけか言葉が出なかった。をれを口にしたら、脳波が限界値を越え、私自身がプログラムの対象にされそうで。

そう考えれば、黙るしかなかった。

「必要なことだろう、ユーリ」

シェン・リーが言う。至極真っ当な、倫理社会ではもっとも正解に近い答えを。

「あの子はこのままにしていても、自分の固定観念（ビリーフ）は変えない。リレーションプログラムを受け付けなかったときから、その兆候はあったんだ。これから先、ずっと面接を続けていっても消えないイデオロギーが」

「あの子にイデオロギーはない」

「機械すら拒否するのは、じゃあ何だと言うんだ。自分の意識を保ち、肉体を保持することすら拒否するのはイデオロギーとは違うのか」

シェン・リーは私の肩に手を置いて、

「疲れてんだよ、お前。ゲリラに取っ捕まったり、色々ありすぎて疲れたんだ。ゆっくり休めば、また正常な思考も取り戻せるだろうよ」

「その言い方、私が正常でないと言っているみたいだが」
「ああ正常じゃないね。俺の見たことないユーリがいる」
シェン・リーの言うことは、もしかすれば正しいのかもしれない。私の言うことは、間違っているのかもしれない。もしくは間違っているのだろう。
だがやはり、違うのだと、私は去り行くシェン・リーの背中を見て思う。カウンセラーはクライエントを否定するものではない。それが非合理なものであっても、その考えを一度は受け入れるものだ。その上で、話し合い、協議して同じ方を向き、共に考えるものだ。委員会や都市警は、ルカの考えをイデオロギーの産物と決めつけ、手順を踏まずに答えを性急に出す。彼女の意図を無視して。
それが、本当に倫理的なのかと――結局私は、最後まで口にすることは出来なかった。

33

特例などほとんど下りることはない。通常、フリーサイドへのアクセス権限は私にはない。アクセスへのパスコードは倫理院が保有しており、こちらからフリーサイドへ交信することは出来ない。

それでもその日、私は聖堂にいた。倫理院のパスコード、一時的にフリーサイドへのアクセスを可能とするソフトウェアを実装した、ＤＮＡチップを手にしていた。

「こういう措置は」

私を案内しながら、ソフィーヤははひどく不服そうに言う。

「特例中の特例だよ。本来ならあんたは、フリーサイドにアクセスなんて出来ないからね」

ちなみに、パスコードはソフィーヤのものだった。倫理員についてはなく、仕方なしに頼ることになった。ソフィーヤは、私の申し出を最初は断ったのだが、

「ルカのために、フリーサイドの下見をして、説得させるとかあなたが言うから。本当にそれが目的なのかどうか知らないけどね」

「私が嘘偽りなど言えないことを」

精一杯、脳波の乱れを押さえ込みながら私は告げた。

「よくご存じでしょう。倫理規定に逆らうことがどれだけ困難であるかを」

「どうだろうね」

生体認証を受けて、聖堂の中に入った。倫理員のパスコードさえあれば、ここへは何度でも入ることができる、とソフィーヤは言う。

「フリーサイドへのアクセスは」

私は歩きながら訊いた。

「何故制限されているのでしょうか」

「何故、ってもねえ」

回廊には、強化ガラスの柱が並び、その合間には案内表示のスク

リーンが浮かんでいる。大理石めいた床と天井、他にはなにもない廊下を、粒子の膜が浮遊して、ある種の彩りにすらなっていた。
「フリーサイドから呼びかけることはあっても、こちらからアクセスするには制限があるのでは、本当の意味での自由化とは言えないと思われます」
「意識をそのまま転写するのが、フリーサイドだよ。当然、面倒な手続きもある」
ソフィーヤは広間へ通じる空圧錠の扉を開ける。パスワードを入力し、承認された後、重々しい扉が開かれた。
「もしただアクセスして、そのまま意識がフリーサイドに転写されたら、もう二度と戻ることはない。だからアクセスするにも、色々と手順を踏まなきゃならないんだよ。市民が勝手にアクセス出来るようになって、事故でも起こされちゃたまんないでしょ」
「あなたは」
私は、彼女の背中を見て言う。
「あなたは、フリーサイドにアクセスすることがあるのですか」
「開いたよ」
とソフィーヤは、私に入るよう促した。己の肉体と意識を転写する広間は、ただ広いだけの何もない部屋。白い壁に囲まれた、ルカといつも会うあの部屋を、もう少しだけ広くしただけの。
「余計なこと、考えなくていいの。あんたは本来、ここにはいない人間なんだから。アクセス出来るだけでも感謝しなよ」
それ以上の口答えなど許さぬという口調でもって言う。私は、中に入った。
「アクセスを開始するよ。十分したら自動的に切れるから、それまでにことを済ましなさいよ」
ソフィーヤは扉を閉めた。
一人、広間に残された。私は中央に歩み寄る。粒子の濃度は、これまでにないほどの量だと知れた。拡張視野で見る限りの数値は九十パーセントを越え、その粒子の中にはフリーサイドのそれも含ま

れている。たとえ粒子が死んでも、粒子群そのものは増大し、また配列を変えるため、そこにある意識はいつまでも生き続ける。今まさに、その中に私は身を置いている。

果たしてフリーサイドからは、こちらの姿を認識出来るのだろうか。出来るのだとすれば、どのような思いで見ているというのか。そんなことを想像していると、外にいるアードニーの声が、室内に響いた。

「始めるよ」

その言葉と同時に。不意に、膚がざわめくのを感じた。

目を閉じる。呼吸を止める。耳をすませる――私の体内活動が全て活動を停止したかのように、次には静寂が訪れた。自分の体の末端からが感覚が消失し、それこそ今ここにある意識が、暗転した空間の中をさまよっていた。

目を開いた。実際は開いていなかったのかもしれない。それでも見た。

光が差し込んだ。白昼めいた眩しい光だが、それを眩しいとは感じなかった。

オベール、オベール――

呼びかけた。意識は途絶えることなく、探していた。ルカの両親、その波長を探した。

オベール、オベール――

光の中に飛び込む。まるでそれを、最初から望んでいたかのように、あるいは予定されていたかのように引き寄せされる。ひどい眠気と、意識の混濁と、心地良さとが、満ちてくる。

暗転。膚のざわめきが大きくなった。すさまじい刺激がかけ、神経が灼ける感覚がした。再び自分の肉体が、戻ってきて、私の体中を焼いた。

強制射出。

針で貫かれている。指先から神経の奥に入り込み、体内で暴れている。思わず声を上げる。その声すらも聞こえない。

灼熱、灼熱、灼熱。

次にその感覚がおそってきたとき、意識がはじき出された。衝撃を受け、目を開き、息を吐いて起きあがる。周りを見ると、聖堂の白い壁が目に入り、私は大理石の床に伏していた。どうやら気づかぬうちに倒れこんでいたらしい。

額を拭う。ひどく冷たい汗をかいている。私は起きあがろうとしたが、足が立たないことに気がつく。

「何が――」

漠然とした記憶を頼りに思い出した。私は確かにフリーサイドにアクセスした。そこでオベール夫妻の波長を探し――しかしそこから先の記憶が曖昧だった。

時刻表示を見る。まだ五分も経っていない。ソフィーヤは十分経ったら交信を切ると言っていたのに、これはどういうことなのか。

「思ったより短かったね」

入り口で声がした。視界がぼやけるのに、私は目を凝らして声の主を見る。曖昧な輪郭が、徐々にはっきりしてきて、その姿を知覚する。ソフィーヤ・テテリナの姿を見て、私は少しだけ安堵した。

「時間には早いのでは」

「早くて正解。あんた、あのままだったらフリーサイドに呑み込ま

れていたよ」
「呑み込まれるとは」
「分かったでしょ、アクセスできない理由が」
ソフィーヤは私を助け起こそうと手をさしのべた。
「あそこは少しでもアクセスしようとすると、集合意志の中にとけ込んでしまう。よほど強固に拒否しなければ、いつの間にかフリーサイドの一部になってしまうんだ。意識が混濁して、自分の意識がそのままフリーサイドの意識となり、フリーサイドの思考がそのまま自分の思考になる」
彼女が何を意図して言っているのか、私には見当もつかなかったが、とにかく私は立ち上がった。神経がまだところどころ断ち切れたように、痺れを残している。
「強制終了させたんだよ、今。意識が一つになる時というのは、それは心地よいものらしいけど、そこから無理矢理引きはがすとなると痛みが伴うみたいだね。あんたも結構、痛がっていた」
「痛みですか」
神経接続など比較にならないほどの強烈な刺激が、まるで四肢を引き裂かれたような心地にさせていた。それが痛みというのならば、痛みで間違いないのだろう。ひどく不快な感覚だった。
「フリーサイドでは、苦痛というものはない」
ソフィーヤは、肩を竦めて言った。
「苦痛や、しがらみや、そういうものから全て解き放たれたい者が、フリーサイドを目指す。この都市で、倫理に守られても尚、苦痛は消えることがない。結局、肉体がある限り、苦痛の原点は消えないから。だから意識だけで住まうフリーサイドに、一切の苦痛はない。あんたも、心地よかったんじゃない？　呑み込まれかけて」
正直に言うべきかどうか迷ったが、はっきり言ってその通りだった。このまま、意識の中に呑み込まれても良い、とちらとでも思ったことは確かで、しかしそれを口にするのもはばかられたので黙っていると、ソフィーヤは微笑を洩らして言う。

「別に恥じることじゃないよ。そういうように出来ているからさ。意識が一つにとけ込み、老いや死の恐怖からも解放されて、痛みの元である自分の体もない。その先には集合意志の一つであるという安心感だけが残る」
「それならば、個人の意識が消失してしまうのでは」
「そうではないね。フリーサイドを構成する一つにはなるけど、個人の意識が消えるわけじゃない。だって全体の意識が、自分のものになるわけだから。ただ、それでも外側の人間から見たら、どこに個人の意識があるのかなんて分からない。オベール夫妻の意識も、分からなかったでしょう」
「気づいていたのですか」
私がオベール夫妻の意識を探していたことを。ルカがこれから向かう世界で、オベール夫妻がどのように迎えるのか、そしてその世界がどういうところであるのか。その確認を行うために、アクセスしたことを。
「薄々ね」
ソフィーヤは腕を組み、
「委員会の言い分は間違ってはいないよ。ルカがフリーサイドに行けば、オベール夫妻の意識とも融合し、ルカは永遠に心地よい世界で生き続けることが出来る。両親の意識と共にね。ただあんたが外から見たとしても、向こうはもうあんたを知覚することはないだろうけど」
私はなんと言って良いのか分からなかった。ルカは、自分が自分でなくなる気がしていると言い、機械細胞を嫌っていた。機械細胞を傷つけ、痛みがないと嘆いていた彼女を守るための世界の実体が、これだと言うのならば。
「ルカの望みとは、まるで逆ではないですか」
私は、まともにソフィーヤの顔を見ることが出来なかった。少しでも目をあわせると、何を口走るか分からなかった。ルカのためと言っておきながら、ルカの望みとは違う世界を提供する。それが、

ソフィーヤのせいではないと分かっていても、何かしらの悪態をついてしまいそうだった。
「そうかもしれないね。でも、彼女の望みを叶えることが出来ないならば」
その先の言葉が、しかしソフィーヤも口にすることが出来ないようだった。奇妙な沈黙、それがその先が何もないことを、如実に語るように。
やがて、口を開いた。
「時間だよ、ユーリ」
そう告げるのがやっと、という風に。

34

通信が入ったのは、翌日のことだった。

プライベート回線からであったので、最初はシェン・リーかマクガイン辺りだろうと思った。ソフィーヤということも考えられたが、彼女ならば施設にいるときに直接呼び出すだろうと考えられた。

すでに、回線を遮断しようなどという気は失せていた。私はもはや、選ぶことも面倒になってしまっていたようだ。スクリーンを開き、暗号化されたその通信を受ける。差出人不明。普段ならば破棄してしまうそれを、私はこのときだけは画面を開いて見る。何の意図も、誰からの差し金かも分からないこの通信を、しかし私は何の抵抗もなく受け入れている。そのことを不思議に思うと同時に、私は画面に書かれている場所を探そうとしていた。

車に乗り込み、市街地へと走らせた。工業地帯を抜け、高速（ハイウェイ）に乗る。研究所と聖堂を過ぎ去り、さらに都市の中心部へと。あんな通信一つで、ここまでのことをする必要などないのだが、それでも私はひたすら車を走らせた。

確かめたいことがあった。フリーサイドの片鱗を見、その後で、ルカについて聞いておく必要があった。私一人で答えを出すには、あまりにも大きすぎることを抱え、その思いを抱えたままルカを見送ることが出来ない。そんな予感があった。

中心街。最初にメイニー・ジェーンの遺体と遭遇したビルを通り過ぎ、中央の広告塔へ赴いた。

屋上は展望台にもなっている。かつてこの都市が出来たとき、ランドマークと認知されていた広告塔だが、開発が進むにつれてより高いビルや塔に追い抜かれ、都市のシンボルとしての役目は終えていた。それでも最上階まで行けば、都市全体一望出来る。

最後の最後に、都市を抱いて死ぬ。質の悪い冗談のようだった。彼なりの皮肉なのだろうが、そこに私を立ち会わせるという辺りが、

なにやら当てつけじみている。もっとも、それに乗っかる私も、傍から見れば相当なものだろう。あれほど被害を受けた相手からの呼び出しに、応じているのだから。
展望台には誰もいなかった。週末には珍しい光景だが、はっきり言えば今はそう珍しいことではない。自殺者たちの追悼式典以来、都市は喪に服したように静まり返り、市民たちは自粛のつもりか、仕事以外での外出を控えている。聞かれたくない話をするには、好都合だ。
それだからこそ、彼はここに呼び出したのだろう。この都市で、ルカを知る者の一人として。あるいは因縁を終わらせるつもりだったのだろうか。
街の灯を背にして、男は立っている。私が声をかけると振り向く――ネイサン・ジョーンズの容姿を借りた、最後のゲリラ。
「久しぶりだな」
てっきり腰の刀を抜くのかと思いきや、阿宮は銃を向けた。すでに都市では廃れて等しい、火薬式の拳銃。回転式の旧型は、やはり博物館の展示品以外の何ものでもない。
「こんなところに」
銃口の先が、私の心臓を向いている。阿宮が、本気で撃とうと思えば易々と貫ける、そういう距離にあった。
「呼び出すとはどういうつもりいなんだ」
「わざわざ出向いておいて、今更だな」
阿宮は、銃の激鉄を引き戻した。
「私の回線に介入すれば、お前の居場所も明らかになると思うが」
「人の心配か？　ゲリラに同情するのは都市のならわしか」
「同情とは」
「あの式典、見ていた」
阿宮は銃口を下げた。
「俺の仲間を犠牲者呼ばわりしていたから、見てらんなかったがな」
「その通りだろう。イデオロギーの犠牲になって、しなくてもよい

自死をさせられたのだから。お前の勝手な都合で」
阿宮の指が動いた。引き金に指をかけるが、また戻す。いつでも殺せるのだという、無言の警告かのように。
「都市の人間は、皆そういう。誰も望まないことを、社会規範で縛って、個人の意志を無視してやらせるのだと」
「そうでなければ、なぜ自ら命を絶たなければならない」
「誰彼に命令されてのことではない。皆、自分で選んだことだ」
「個人を埋没させることを、自我を殺すことを選んだというのか」
かちゃり、と阿宮は刀の鍔を鳴らした。
「そうやってお前たちは、否定することしかしない。自分たちが正しいと言い、それに従わなければ野蛮であると決めつける。そうやって俺たちの故郷も、消えていった。今までの習慣も、文化も、そうやって全て呑み込まれてしまった」
そう言って、ゲリラの文化そのものであるかのような刀を打ち鳴らす。今では古びた、誰一人使うことのない刀。かつてのような美術的価値も、今では殆ど残っていない。
「俺や、俺らの前の世代で失われたものはずいぶんとあった。都市からすれば、何の意味のない形式的な儀式や習俗は批判されなければならぬものとなり、人権を理由に廃れていった」
かちゃり。
鍔元を鳴らす。
「たとえばそういう、お前たちから見て意味のないものであっても、俺たちにとっては必要だと主張しても。倫理にかなわなければ、否定される。事実、そうやって都市のルールに従って消えていった部族も多い」
「だから、抵抗したというのか。あれだけの人間を殺して」
「何かに愛着を持つということはそういうことだ。人が生きていくために、進化の過程で人は社会性を生み出した。その社会を守るために、愛情を生み出した一方で、その社会に仇なすものは容赦なく排除する残忍さも備えた。外敵からの侵入も含め、裏切りものを絶

対に許さぬという排他的な側面も生まれた。愛郷心とは、そういうものだ」
かつて、国家を愛するがために虐殺を繰り返した独裁者がいた。
かつて、神のためにその身を捧げ、異教徒を焼き殺したものがいた。
かつて、愛する者のために死ぬと言い、敵の艦に突っ込み、散らした命があった。
「守るためなら、人道に反することもする。お前たちが野蛮と切り捨てるものであっても、俺たちにとっては自分の価値を証明するものだ」
「まやかしだ。そんな正しさを証明したところで、非合理なものに変わりはない。文化も習俗も、形を変え、いずれは消えるもの。それにしがみついて、あれほどの人を殺すことがどうして正義なものか」
「正義である必要などない。そうやって声高に正しさを主張して、ならばお前たちは誰一人犠牲を出すことはないと」
「そうだ。正義を成すのに、誰の命も奪ってはならない。人類の、過去の過ちを繰り返さないための倫理だ。そのためには――」
「人でなくなっても構わないと？」
もっとも的確に私の心を抉るような、そんな言葉だった。私が言葉を詰まらせるに、阿宮はとどめのように言う。
「人権とは、細分化の歴史だ。国から部落、部落から個人に、その権利の対象を移していった。個人が、この世界で一番尊いとしておけば、集団の争いも少なくなる。だが愛国心や民族主義が流血を繰り返してきた歴史が過ぎ去っても、個人間の争いは絶えることはない。だから人である部分を削り、最終的に生まれたあのフリーサイドに送り込むというのか。それによって――」
阿宮は拳を握り込んだ。
「俺たちが求めるものも、守りたいものも、全て踏みにじっても構わない。それは全て非合理なもので、不確かなもので、抽象的なも

のだからなにをしても構わないというのなら、そんなもののどこが人道的だと言うのだ」
拳の先が、震えている。怒りなのか、悲しみなのか。私には決して抱きようのないものがあった。感情を制御し、ささいな暴発を許さないこの倫理社会では、決してあり得ないこと全てのこと。
「俺は、非合理ではないと、証明しようとした。人の認知領域の、社会性のモジュールを刺激することで、無駄なものではないと主張したかった。だが実際はうまくいかない。こうして借り物の肉体でいること自体が、すでにその証明が無になっていると言っているようなものだ。今の俺には、阿宮圭たらしめるものはもう残っていない。仲間たちも、当時と同じ姿だったものはいない。俺に、自分が存在し続けているという証明は、すでに出来なくなっている。あれほど渇望したナツィオも、お前たちの言うように、幻想だったと自ら主張しているようなものだ」
自嘲気味に、阿宮は笑う。嘘のように激昂した気を鎮め、窓の外を見た。つられて私も外に目をやると、東の空に小さく写る黒い機体が飛行するのを目にする。それが段々と近づき、サーチライトの青白い光が、三角錘の浮遊物体を明らかにさせた。昆虫の羽は闇夜に溶け込んで見えないが、胴体の赤茶けた大鷲の紋章だけは、やけにはっきりと浮かび上がっている。
「ルカは」
私は、声を振り絞った。
「明日にも、フリーサイドに行く」
「そうだろうよ」
背後で靴音が響いた。複数。規則正しく、統制がとれた軍靴の音。
「あの子は、君の言うような正しさのために死のうとして、だけど結局それをさせることを防ぐのが、正しさだ」
「正しさなんて、立ち位置によって変わる。それにあいつは多分、死にたがっているわけじゃない」
どういうことかと、訊くまでもなかった。阿宮がいきなり銃口を

向けた。
「阿宮――」
「最後に一目、会いたかったけどな。それも叶わぬままだ。せめて一矢報いてやりたいところだが、それも難しい」
阿宮はそう言って、私の足下に何かを投げ込んだ。指の先ほどの、小さな薄板が床上を滑る。何十年も前に廃れたシリコンを媒介とするチップだった。
「冥土の土産に、そいつをくれてやる。この都市内部に、俺たちがどうやって侵入したかが細かく載っているから、それをやるよ」
「こんな――」
なぜそんなものを渡すのか。それを訊く間もなかった。軍靴がフロア中に響き、外縁部隊が踏み込んできた。小銃のレーザーポインタが、阿宮の胴体と首に集中する。
「動くなよ、でくの坊」
今更のように、私を人質にとろうとするが、外縁の部隊にはどうやら脅迫は通じないらしく、誰一人として銃を下げる者はいなかった。
阿宮が照準を外した。私の背後に向けて、一発撃った。
後ろで誰かが撃たれる――人が倒れる。それを合図にしたかのように、外縁部隊の一人が発砲する。
三連射――銃弾が、阿宮の体を貫いた。一つ、二つ、三つ、と。血の狼煙を吹き出させる。
阿宮が撃つ――部隊の小銃が火を噴くのと同時に。小銃から放たれた銃弾が、阿宮の肩を抉り、胸を穿つ。もう五、六連射ほど発砲――左顔面の皮膚をはぎ取り、頭蓋骨の一部を露出させる。裂けた頬から、今にも落ちそうな歯が垣間見える。
くずおれる。銃を落とす。膝をつく――阿宮は、刀を抜いた。再

び立ち上がろうとするのへ、新たな火線が閃く。銃弾が、刀を砕かせ、半ばから折れた刃が床に落ちる。銃弾が額を貫き、頭皮を引きはがし、肉を飛び散らせた。

阿宮の体が、完全に支えを失い、崩れ落ちた。それでもわずかに意識は残っているのか、私にはわからない言葉でつぶやいていた。

「ルカ、ルカ、ルカ」

祈りか。後悔か。かつて自分を自分たらしめていた全てを惜しむためのものか。言葉とともに流れ出る血は、ナノボットに侵されていない、赤い色をしていた。

阿宮はやがて、ゆっくりと倒れた。前のめりに、少しでも抵抗しようと、にじりよるように。外縁部隊がとどめに撃つ。背中に銃弾が突き立ち、阿宮の体が二、三度痙攣したように揺れた。

部隊の一人が駆け寄った。阿宮の死体を銃口の先で突っつき、完全に死亡したことを確認している。

私のところに、兵士が駆けつけた。怪我はないか、と訊いてくる。私は、阿宮の死体を見つめたまま、自分の無事を伝える。死んだ阿宮の、折れた刃の、流した血の、その一つ一つを、私は数えながら。完全にこと切れた、最後のゲリラの姿を見ながら。

三角の機体が、塔を旋回している。目映い光が差し込んでくる。部隊が阿宮の遺体を収容し、引き上げるまで――私はずっとその場に座り込んでいた。

35

所内では、私は一種のトラブルメーカーとして認知され始めているようで、さすがにゲリラの死を目の当たりにしたことで、もしかしたら私はゲリラと通じているのではないか、などと噂するものも現れた。シェン・リーが、そんな噂をする奴は許さない、などと息まいていた、もはやそれすらも関心がなかった。

ソフィーヤに、話をしたかった。阿宮が論じたこと、それが正しいのかどうか。そして私や、この社会は正しくて、阿宮が間違っているのかと、訊こうと思っていた。あるいは肯定してもらいたかったのかもしれない。

だがこういうときに限って、彼女は研究所にはいなかったりする。倫理院に呼び出されたと、わざわざどこかへ赴いた彼女から、最後にルカと面接をするようにと通信が入る。今となれば、もうルカへのカウンセリングなど意味がないように思えたが、それ以上に私はルカに会うことをためらっていた。

君の兄さんが死んだ。そう告げたところで、何を話せば良いのかわからなかった。君の兄さんは、倫理社会から目をそらし、その結果命を落としてしまった。外の非合理な教義を貫いたばかりに、自分の首を絞める羽目になった。彼もまた、外の不合理さに縛られた犠牲者だった。だからルカ、お兄さんの死は悲しいけど、外の間違った教えは忘れ、この倫理社会に身を委ねよう――などと、アードニーなら原稿も無しに演説するだろうが。私にはかける言葉が見つからない。その言葉を尽くすことができないならば、カウンセラーとしては失格かもしれない。

何故か可笑くなった。私の本業はカウンセリングではないのだ。他人の脳に介入して、脳波を測って、それに見合うプログラムを提供するプログラマーだ。これが終われば、またプログラミングに追われる日々が待っている、ただそれだけだ。さっさと終わらせて、

ルカを送ってしまえば良いのだと――何度も何度も、そう自分に言い聞かせる。
診察室の扉を開けた。もう誰もいないだろうと思われた部屋の中に、ルカがいた。
「聖堂に行くまでは」
私は、なるべく意識をしないよう、努めた。
「まだ時間があるのか」
「委員会だか、ってのが迎えにくるって」
ルカは手元の紙を、丸めたり、広げたりを繰り返している。手のひらよりも小さな紙片だった。
「何だい、それは。キャンディーの包み紙？」
「なんだか折りにくくって、これ。やけに薄いし、大きさも合わない。すぐ破けるし」
確かにルカの紙細工には適さないだろう。バイオ素材の紙は、役目を終えた後効率的に分解できるよう、ごく薄くできている。あの、紙細工に用いたような、木々を伐採して作ったものではなく、環境に配慮したものだ。パルプ素材の紙は、今では殆ど存在しない。
「これから五時間のうちに」
私は、なるべく声質を変えぬようにしながら、
「君の意識はフリーサイドに転写されることとなる」
「そう」
ルカは包み紙を、指先で丸めた。
「意識はその後、君の両親の意識と合流することになるだろう。そして」
「いいよ、大体分かるし」
ルカは、紙細工を作ることをあきらめたようだった。包み紙を放り投げ、椅子の背もたれによりかかり、
「何千回って聞いたかもしれない。私の意識がそこで生き続けるっていうんでしょ」
捨て鉢な言い方。そう答えることばお前の望みだろう、と言い含

めるかのような。ルカは、とっくに諦めたのだというような風情すらあった。
「それと」
私はそれを告げるべきかどうか、迷っていると、ルカが顔を上げて言った。
「兄貴が死んだんでしょ」
私は頷く。ルカは鼻先で笑い飛ばすようにして、
「私に気を使ってるつもりなら、そういうのいらないよ。兄貴が戦士として生きるって決めたときから、いずれはそうなるって分かっていたことだし。それに兄貴が何をしようと、いずれ私の故郷も消滅することは目に見えていた」
「君の兄さんは」
私は、その先をどう言えば良いのかを考えた。
「君の兄さんは、故郷を守ると言っていた」
「理想に偏りすぎたんだよ。故郷の姿だって今はどんどん変わっているし、都市の価値観が入ってきている。昔ながらのやり方が良い、なんてのも少なくなっているしね」
ルカは自分の手首の傷を、みていた。自ら刻みつけたものを、冷めた目で眺めて、
「でも、やっぱり都市は都市だった。私が引き取られて、皆が私を気遣って。都市の、オベール家の一人娘として、学校の先生も、友達も、そうやって接していた。私の、外での生活を知る人なんて誰もいなくて」
「君は、そこでは幸せではなかったと」
「そうでもないよ。最初はわりと良かったし。でも違うんだよね、私は外の世界で育って、どこか考え方も、立ち居振る舞いもそのときのことが抜けなくて。皆が皆、都市のエレガントなやり方を教えようとしていた。言葉遣いも、お洒落のやり方も、そうすることで私が一番喜ぶ顔が見たいって、母さんは言ってたね」
ルカが、これほど喋ることは、もしかすれば初めてではないか。

今までに無いぐらいの言葉だった。
「私の目と、髪と、膚と。由来を聞いてくる人もいた。そう言うときは、別に隠す必要もないから、実は外縁の出身だって言うんだ。そうすると、大抵の人間は同情的になる。苦労したね、かわいそうにね、って。私の故郷は、そんなに哀れまれなきゃいけないような所なのか、って思って」
　それとも、ルカは語りたかったのかもしれない。今までだれも、耳を傾けようとしなかったから。最後の最後に、それをぶつけようとしているのだろうか。自棄気味に、もうどうでもいいや、という心境で。
　私は、白衣の下に隠したものを、握りしめた。防刃布で覆った金属片が、今白衣のポケットに入っている。本来ならば回収されるはずのない、どこかに捨てられるはずのもの。
「同情とかいらないんだ。勝手に私のこと、分かったつもりになられても戸惑うだけなんだ。でもそれが都市では普通。確かに、ゲリラの中じゃ私ぐらいの子供を虐待して、殺してしまう、なんて話もあるから、そういう子供にとっちゃ都市は天国みたいなものなんだろうけど」
「君には違ったのかい？」
「ううん、私も私で結構良いなって、思ったこともある。村じゃ、幼い子供も戦士にされることもあったし。でも、それでも、そういうこと含めて全部私だと思っていたんだ。でも都市の人たちは、都市にいる私を、ルカ・オベールを見て、外縁の阿宮瑠香は哀れむものだったらしい。そのどちらも私だとは、考えなかった」
　ルカは、自嘲気味に笑った。
「こんなこと、話してもあんたは分からないだろうけどね」
「戻りたいと、思う？　君は」
　私が訊くのに、ルカは驚いたように顔を上げる。
「君と、君の兄さんが生まれた場所に」
「どうだか。多分、そんなことは許されないだろうけど、でもそう

だね」
一瞬、遠くを見つめるように、ルカは目をすがめた。
「生まれたところは、山の奥。秋には稲穂が実って、毎年収穫祭をするんだよ。そのときには村中の人間が集まる。あれ、まだやっているのかな」
「カーニバルか」
「そんな感じだね。一応、建前じゃ神に祈りを捧げるってことになっているけど」
ルカはため息混じりに言う。
「今そんなこと言っても、しょうがないけどさ。あと数時間もすりゃ、多分そんなことも考えなくなるだろうし」
私には、かける言葉がなかった。
ただ自問していた。これから先、することを。
ポケットに手をやった。防刃布に包んだそれを、握った。
私は今からしようとしていることが、どういうことなのか、自覚していた。良心なのか、それとも別の何かか。それをすることを、引き留めようとしていた。本来ならば、こんなものを持ち出すことだけでも倫理に反していることだった。
私はそれを取り出した。紫色めいた防刃布は、チタン繊維とエナメル質分子で編み込まれている。それでも、それを難なく切り裂くほどの刃が、布の中に収まっている。
「何、これ」
私が差し出すのに、ルカは不審そうな目で見る。
「君の、兄さんの形見だ」
「形見？」
ルカが受け取る。私は、言葉を選んで言う。
「どうするべきか、ということを私は口にできない」
私の言葉を、ルカは怪訝そうな顔をしながら聞いた。
「だから、その先は君がそうしたいという選択、それに委ねる。もし、本当に君の望みを叶えたいならば、そうすれば良い。でも少し

でも戸惑ったら」
ルカは、包みを解くことなく、それをテーブルに置いた。すでに、彼女の中ではどうするべきかを決めているかのように。
通信が入る。迎えが来たことを、報せるものだった。私が告げるに、ルカは椅子から立ち上がった。
「最後に、聞かせてくれるか」
私は、ルカを見ることはなかった。
「君の、義理の両親、オベール夫妻のことはどう思っているんだ」
「感謝しているよ、そりゃ」
だから私は、ルカがどんな顔でそれを言ったのか、分からない。
「すごく、感謝している」
どんな思いから発したのか、またその言葉の真偽すらも、不明なまま。

36

前方の車を、追いかける。委員会の、電気式エンジンを搭載した公用車だ。自動運転で走行するそれには、アードニーと、ルカが乗っている。スモークフィルムを張り付けた窓ガラスでは、中の様子を伺うことはできない。

私は前の車を見据える。隣には、委員会から派遣された係官が座り、スクリーンを広げて何やらやりとりしている。前方の、アードニーと通信しているのだろうか。

特にこのフリーサイドへの転送作業に、カウンセラーが同行する必要など全くないのだが、ほとんどごり押しのような形で同行するようになった。

「珍しいこともあるものですね」

係官が、スクリーンを閉じた。

「何がですか」

「いえ、あなたのようなバイオロイドが、あそこまで主張するとは」

多分、この同行のことを言っているのだろう。私は少しばかり不可解さを覚えながら、

「私が主張をしないと思っていたのですか」

「いいえ。ただ、合理的判断を優先させれば、このことに特に意味はないはず。あなたのシリーズは、もっと合理判断に長けていると思っていましたが」

「遺伝子の配列や、脳神経回路ではそのようになっているとしても、常にそうとは限りませんよ」

私が言うのに、若い係官は何のことか分からないという顔をしている。

私は、何の気もなしに訊いてみる。

「あなたは、たとえば一日の摂取カロリーを越えて、糖分を欲することがありますか」

「カロリーは自動計算されますから。生体分子が糖分量を換算して報せるので、それはあり得ません」
「もし、人が全て遺伝子のプログラム通りに行動するのであれば、そういう計算もなしに糖分を摂取してしまうでしょう。原始の、まだ人類が定住をしていなかった時には、糖分は貴重なものだった。その本能が、遺伝子に組み込まれているのですから」
「は、はあ……」
奇異なものを見るような目をしていた。係官の顔に、困惑が浮かぶ。まさかこんなところで、認知心理学の蘊蓄を聞かされるとは夢にも思わなかっただろう。
「でもあなたはそうしない。理性でもって、摂取量を控える。私も同じですよ、必ずしも遺伝子によって行動の全てが決定されているわけではない。私も、そのような行動から外れることもあります」
人に、非合理さを捨てよと説いておいて、と。もし、この場にソフィーヤがいたら、あるいはそう言ったかもしれない。非合理なものを、合理的な判断に変える。カウンセリングであっても、プログラミングであっても、同じことだ。
だからと言って、非合理さを敵としているわけではない。合理性が全てなら、ソフィーヤの写真立ても、阿宮の刀も、ルカの紙細工も、全て非合理なものだ。そうしたものを廃してしまえば、待ち受けるのはフリーサイドのみとなる。この倫理都市は、何かを強制するのではなく、個人の考えを尊重するものであるとしたら、そうした非合理な装置を廃する根拠などない。
だが、委員会は、フリーサイドを推し進めている。彼らの信条、合理的でかつ人道的、しがらみも争いも、老いも死もない理想的な世界のために。その象徴として、外縁によって哀れにも両親と離ればなれになった少女を、送り込もうとしている――アードニーや、倫理的な人々が描くシナリオ通りに。
それが正しさだと信じている。
「着きましたよ」

つい考え込んでいたので、車が停まったことに気がつかなかった。前方の車から、ルカとアードニー女史が降りるのを見る。私も車を降りた。

五メートルほど、ルカから離れながら、私は回廊を歩いていた。相も変わらず簡素な作りで、彩りと言えば案内表示のスクリーンぐらいなものだった。先日、私がソフィーヤと共に入った広間とはまた別の、もう少し広い部屋に入る。半球状の天井を備えた広間には、スクリーン表示が無数に漂っている。ドーム屋根の真下なのだろう。

「さあ、ルカ」

アードニーが言った。ルカは、中央の椅子に座る。私たちは彼女を取り囲むようにして立った。

「これからあなたをフリーサイドに送るわ。大丈夫よ、何も痛いこともないし、目を覚ませばあなたの意識は両親のそれと合流する。前のように、失敗することはないわ」

優しく、諭すように、アードニーは完璧な笑顔を見せながら説明する。当のルカには、何も耳に入っていないらしく、うつむいたままだった。

「あなたが過ごした、外の世界みたいなことはない。きっと、すばらしい人生が待っている。だから、緊張しなくていいのよ」

緊張だとか、そういうことではなかった。ルカは明らかに、自分のすることを自覚してた。その発端を作ったのは紛れもなく私で、そして私も、彼女が何を成すか、気づいていた。

アードニーが離れると、ルカを包み込むように、粒子が光りを帯びた。白光を放ち、ルカの背中と、肩に、真綿のような光がまとわりつく。

ルカの膚が、変化してゆく。立体映像、あるいは粒子スクリーンが消えるときのように、ルカの膚が、空間に溶け込んでゆくのが分かる。砂糖菓子めいて崩れ去ってゆくそれは、彼女の分子配列が信号に変換され、徐々にフリーサイドの情報に還元されてゆくことを、表していた。

彼女の髪と、指先と。儚いほど薄い彼女の膚も、やがて光に包まれ、フリーサイドへその身を委ねてゆく。徐々に、徐々に。意識もすべて、フリーサイドの精神の野に。

ルカが目を開いた。私を見た。目があった数秒間、ルカの唇が動いた。何事かを、喋ったが、その意味はもう永遠に分かることが無かった。

突然、ルカが立ち上がった。還元がまだ続いている中で、いきなりのことだった。アードニーも、係官たちも、驚いて目を凝らしていた。

ルカが、懐から包みを取り出した。紫めいた、防刃布。それを取り払うに、中身が露わとなる。

銀色の、鉄。鋭角の刃物。彼女の兄の形見――阿宮が持っていた刀の欠片だった。外縁部隊に砕かれ、現場に放置されたものを、私が回収したものだった。

係官たちが動いた。アードニーが叫んだ。

「やめ――」

その瞬間。ルカが向けた刃の先が、ルカの白い喉を、貫いた。

一瞬、時間が止まったようになる。係官たちが、駆け寄るまもなく、ルカの体が、崩れ落ちた。

怒号が響いた。フリーサイドの転送が、止められた。ルカの周りを浮遊していたスクリーンが、緊急事態の警告表示に切り替わった。出血のグラフと脳波グラフ、その他諸々の医療警告表示が映し出される。

ルカの喉元から、血が溢れる。床の上に、血のプールを生み出す。ナノボットの人工血の黒が、ルカの白衣を汚す。布に浸透してゆく黒い血が、ますます色を濃くさせる。

係官が、医療用カプセルを用意しろと叫んだ。アードニーは驚きのあまり、血の気が引いていた。その場に座り込み、事態を飲み込めきれず、目を見開いたままだった

私はルカの元に歩み寄った。ルカの喉元から、風の漏れるような音がしていた。ルカは虚ろな目でもって、私を見上げた。

「こんなことを、言う資格はないと分かっているが」

私は膝を突いた。彼女の頬に、手を触れた。まだ彼女の膚は、温かみがあった。

「君を失いたくはなかった」

ルカは、最後に微笑み。

やがて目を閉じた。

37

久しく呼ばれない、名を聞いた。名前というよりも、単純に外から見て識別できるか、そのためだけに与えられたコードだった。

ユーリという名は、ソフィーヤによるものだった。それ以外に呼ばれていたナンバリングは、略称でしかなかった。それ以外の名を呼ばれたことがなかったので、最初はそれが何なのか分からなかった。

「T－342521２――」

もう一度呼ばれる。私がこの世で最初に与えられた、識別コードを。

私は、立ち上がった。ただ一人。倫理院の広大な議場の中央で、与えられた私のスペースは、わずかに机一つ分ほどで、その周りを委員会の面々が取り囲む。

ルカが、自らを貫いてから十二時間後。彼女が息を引き取ってからは、およそ十一時間と四十九分後。生命維持装置も間に合わず、死に至り、彼女の死が各都市に伝えられ、狂ったバイオロイドの存在が明るみに出てから、わずか二時間後――私が覚えている情報はそのぐらいで、この場に引きずり出されるまでずっと、私は何かを考えていた。

委員会の誰かが、私の罪状を読み上げた。一番大きな罪は、殺人だった。立場上、彼女に鋭利な刃物など渡せばどうなるかなどと分かりきっていたことで、それを意図して手渡した罪は大きい。続いて、ゲリラの遺留品を勝手に持ち出したことなど。フリーサイドへのアクセスについては、なにも触れなかった。

「以上。間違いはないか」

委員長席に座る男の顔は判別できなかった。顔を見るのも、億劫になっていた。

「ありません。すべて間違いはありません」

私が言うのに、委員たちが唸る。一体全体、どのような間違いでバイオロイドが倫理規定に反したのか、と。
「君たちは、倫理を守るために生み出されたはず。そのような行為は、そもそもとれないはずだが」
「それ以上に私は人間です」
よくそんなことを、恥ずかしげもなく言えるなと。そんな憤りにも似た脳波が、そこかしこから伝わってくる。それでも私は顔を上げない。ただ手元だけを見ていた。
「人間だと、どうなるんだ」
「遺伝子や、あるいは脳に刷り込まれた情報だけで、行動が決まるわけではないと。あなた方がそう仰るように、私もそうしたまでです。自分の欲求に従い」
「それを押し殺そうとは思わなかったのか」
「思いました。だから私は、あのような形にしました。彼女が、自分自身どう選択するのか。私は彼女に約束しました。彼女の意思を尊重すると」
「だから、自殺に手を貸したというのか」
自殺。外縁の不合理な掟、イデオロギーに押しつぶされた人間が執る手段。その外縁の不合理さに抗するための倫理であり、その倫理を埋め込まれたバイオロイドが、自殺を肯定すべきではない。そういう理屈だった。
阿宮の言葉が、脳裏をよぎった。それが正義なのかと問う、阿宮の言葉を。
「私は、正しさを探しました」
どのような解釈をされてもよかったから、とにかく言いたかった。
「この倫理社会が、正しいと信じました。だから彼らの理論は間違っていて、非合理なもので、それを是正するのが私の役目であると」
「ならば、なぜその非合理さに迎合したのか」
苛立ちを露わに、委員長が言う。私は、拳を握りしめた。
「たとえば、彼らに。命だけあれば良いと説けば良かったのでしょ

うか」
ほとんど意図しないまま、言葉が出てきた。それでも良いと思った。
「彼らが生きてきた場所を否定し、彼らを育んだ全てを否定することで、彼らの非合理さを指摘し、それを正すのであれば。それは人格の否定であり、意思を尊重することとかけ離れた行為には、なり得ないのでしょうか」
正しさを探した。私は正しいのだと言い聞かせた。
たとえ阿宮たちの故郷が消え去っても。たとえ阿宮が妹と引き裂かれても。たとえルカが自分の生まれた環境を否定されても。たとえルカがフリーサイドを拒んでも――
それが正しいと言わなければならなかった。だから正しさを証明しなければならなかった。
「だが、倫理とは。人権とは、他者を尊重することではなかったのですか。外縁の社会は全て非人道的と決めつけ、こちらの正義を押しつけることが倫理なのでしょうか。その倫理によって、彼女は孤立していました。そのために、彼女が苦しんでいたのだとしたら」
ルカの、最後の言葉。聞き取ることは出来なかったが、その言葉は確かに――
「だとしたら、彼女は倫理に殺されたのだと。それを私は」
「もう良い」
厳然とした声。委員長は倫理社会全ての怒りを代表するかのように告げた。
「その倫理のもとに、我々は生きているのだ。かつて何度も繰り返した過ちを、もう二度と行わないための倫理だ。そしてそれを守るための、君たちバイオロイドだ。君の言葉は、自分自身の否定でもあるのだぞ」
それが正しさである。そんな、揺るぎない正義。分かりきっていたことだった。私には、もうそのような正しさを主張する根拠などないはずだと。

判決が下されるのを、私は聞いていた。厚生施設での再教育プログラムと社会奉仕。実質、この都市からの追放を告げ、査問委員会は閉会した。

「あの女のところにいて」
帰り際、アードニーが声をかけた。
「ちょっとおかしくなったのかしらね」
「なにがでしょうか」
あまり相手にしたくはなかったのだが、アードニーは私の進路をふさいでいる。
「それとも、あの娘のイデオロギーに感化されたのかしら」
「イデオロギーは関係ないです」
私は、アードニーを押し退けて行こうとした。
「私自身が決めたことですから」
「どうかしらね。外の連中とつきあううちに、洗脳されたのかもしれないよ。気がつかないうちにね。あなた自身、自殺願望がどこかで芽生えているかもしれないから、そこも直してもらったほうがいいよ」
「彼女は」
私は、それ以上アードニーの声が追いかけてこないよう、足早に駆けた。
「彼女は死にたかったわけではありませんよ」
「そうでしょうね。外縁のイデオロギーに毒されて、死にたいと無理矢理思いこまされて」
私は、立ち止まった。
「彼女は生きたいと、願っていました。社会から切り離された姿のままでなく、彼女の生まれた地で、切に」
「それがイデオロギーだって言ってるのよ。生きたいならば、機械細胞のままでも生きられるし、あなたが邪魔しなければフリーサイドで生き続けられたのに」

「そんなにフリーサイドが良いなら、まずあなたから率先して行けば良いのでは？」
私が問うのに、アードニーは忌々しげに唇を噛んだ。
「そういう問題じゃないでしょう。私が行こうと行くまいと、今私が話していることと関係ない」
「やはり」
私は背を向けて、
「覚悟がない、とは本当でしたか」
私は、そのまま歩き去ろうとした。
「ちょっと、待ちなさい！」
アードニーが追ってきた。私の肩を掴んだ。その手を振り払うのに、アードニーはすさまじい形相で睨みつけてきた。
「覚悟がないのであれば、そこに立つのは止めた方が良いかと」
アードニーは、まだ何か抗議してきたが、私の耳にはもう入らなかった。

38

私の施設行きまで、あと二十時間というところだった。定められた出勤時間よりも早く、私は研究所のゲートをくぐった。

ＲＮＡ鎖のオブジェが、私を迎えた。もう二度と目にすることはない巨大なモチーフを横目に、私はある場所を目指していた。

あれからの説明は簡素なものだった。私が送られる施設と、そこでの学習プログラムの内容を聞かされ、そこから二日間の猶予を与えられる。その間に世話になった人に挨拶でもしろということだったのだろうが、生憎私にはその類の知り合いが極端に少ない。シェン・リーにはせめて一言いっておこうと思ったが、回線が向こうから遮断されていてメッセージすら送れない。当然と言えば当然だった。

それで、もう一人。最後に伝えておくべき人物の所へ、私は向かっている。

時刻表示は、６：０３と指している。本来なら勤務者がこれほど早く出勤することはあり得ないが、しかし彼女はいた。診察室の扉を開くと、いつものように白衣に身を包み、机に向かっている。

「随分早いね、あんた」

ソフィーヤ・テテリナは、今までのことなど全く気にかけないかのように、常にそうするように私に声をかけた。

「時間外労働は、ちゃんと申請出さないとだめだよ」

「もう私は、ここの所員ではありませんから」

「その割には、正面のゲートをくぐれたじゃない」

「それは」

と私は、背中の荷物をおろした。

「あなたが細工してくれたお陰です」

「バレたか」

ソフィーヤは柔らかく笑い、私に向き直った。

「これから施設に行く、って格好でもないね」
予想通りの反応が返ってくる。実際私の出で立ちは、誰が見ても異様なものだった。これから登山か、あるいは探検にでも出かけようという服装だったのだから。家にはろくなものがなかったので、防刃加工の、デザートパターンの迷彩上下と砂漠仕様のコートを購入し、それらを身に着けた。
「都市を、出ようかと」
「出て、どこに行くのさ」
「外縁に」
ソフィーヤは、驚きいたような声を出す。
「どうしてまた」
「あれから、色々と考えていました。倫理社会の正しさが、どこにあるのか。彼ら――阿宮たちは間違っていたのか。ルカに、たとえルカ自身を否定することになっても、生きるように言わなければならなかったか、などと」
「正しいと思ったから、そうしたんでしょう？」
ソフィーヤは足を組み、椅子に深く座り直して、
「ならば、正しいと言えば良い」
「それが実際、自信がないのですよ」
「なにそれ」
とソフィーヤは笑う。
「正しさを探して、それでも見つからず、最後はルカに選択させた。本当は私自身が選択したとは、言い切れません。だから今度は、私が選択する番だと思ったのです」
「選択するために、外へ？」
「私は都市の外を知りません。だから、自分の目で確かめようかと」
「脱走ってことか」
いつものように、気だるさを滲ませた笑い方。私がした行為と、その意味も。犯した罪とこれから行う罪も、何もかもを飲み込んだ風情がある。私のことも、ルカのことも、何も語らないし、語る必

要もないと悟っているかのように。
ソフィーヤは卓上の写真立てに手を伸ばした。セルゲイと二人で写るそれを、指先で表面をなぞりながら、
「それで、ここに来た理由は」
と、ソフィーヤは手を離した。
「まさか、それを報告しに来たわけじゃないでしょう」
私は懐から、阿宮が最後の渡した記憶メモリを出した。それを見て、ソフィーヤの顔が若干こわばった。
「これに適合する機器を探すのに、苦労しました。ゲリラの世界ではまだまだ、シリコンチップが現役だったようで。中は、阿宮たちの一派が関わったこと。たとえば私の家の駐車場の、セキュリティをどう破ったか、とかも。全て暗号化されていましたが、見ることが出来ます。その中で、あなたの名を見つけました」
ソフィーヤは、覚悟を決めたような面もちで、私の目を見ている。
「最初、少し引っかかってはいました。あなたの夫、セルゲイ・テテリンの技術をゲリラが知っていたということも含め。偶然の一致とは、思ったのですが」
「偶然じゃないよ。彼らにそれを教えたのは、私」
そう、語るソフィーヤの目は、
「ついでに、脳神経回路にテキストを送り込む方法も、あとそもそもが都市に手引きしたのも。まあそっちは、他にも協力者がいるから、私一人でってわけじゃないけどね」
「あの集団自殺のときも、あなたが関与していたのですか」
「他の施設も、調べれば一杯いるよ。ゲリラの内通者が。都市警が躍起になって調べているから、私のところにも来るだろうね」
別に来てもいいけど、と言うソフィーヤの目に、かすかに涙が溜まっているように見える。ソフィーヤは目尻を押さえ、涙を拭うと、手のひらにスクリーンを現出させた。
「技術も価値観も、全部が全部合理的なものに変わりつつある」
スクリーンの表面をなぞると、色素が攪拌され、集合してゆく。

まるで違う種類の砂がより集まり、一つの絵を作り出すチベットのサンドアートを思わせ、一つの像を生み出す。机上の写真立てと、同じ。セルゲイとソフィーヤが寄り添っていた。
「あんたが探すのに苦労したという、電子機器もハードなものからだんだんとソフト志向になり、そのうちソフトウェアだけで起動させる、粒子の無形ＣＰＵなんかが生まれ、人の神経と同調させることで完全に有形のコンピュータは消えた。合理性を、推し進めるうちに、サイバネティック技術もそれに従い、義肢から機械細胞、そして知性を粒子群に移すことで、究極の形態を作り上げよう、と。そうやってどんどん、効率的合理的に、って。人も物も、そうやって無形のものになることが正しいというようにね」
　左手でスクリーンに触れながら、右手で写真立てに手を伸ばす。ソフィーヤは両方を見比べて、ややあってからスクリーンを消した。
「でも、写真とかの外部記憶装置ってものは、無形にすると意味がなくなるんだよね。忘れてゆくものを、強制的に思い起こさせるものでもあるわけだから、神経回路に蓄えておいても、いつでも取り出せるといっても、その作業すらも忘れてしまう。だから、無理矢理にでも形にして残さなければならない」
　写真を持つソフィーヤの手が、必死に何かに耐えるように、小刻みに震えていた。
「大事なものは目に見えないとか、そんなのは嘘っぱちだよ。ちゃんと人間は、目に見えるものを信じている。人も、物も、目に見えてこそ認識できるし、自分という存在も、自我さえあればそれで自分になれるわけじゃない。他人からの、客観的な視点があって初めて自分を認識出来る。人間の社会性は、そういう所から成り立っている」
　ソフィーヤは写真を置いて言った。
「でも社会というものは、同時にしがらみを多くするわけ。フリーサイドの創始者たちは、完全に自由で完璧な人権を欲した。その結果生まれたフリーサイドは、確かにその面においては成功したかも

しれない。そこに行った者たちが、他の誰かから知覚出来ないとしても、主体は確かに生き続ける」
「あなたは、それに反発したのですか」
「あの人の研究が、あの人自身のためだったって、話したよね」
ソフィーヤは、全てにおいて達観したような口調で話す。もはや自分の罪も、私の罪も、何も関係がないというように。
「私も、あの人に生きてもらいたかったから、研究の完成を目指した。あの人の親族が、フリーサイドを薦めたけど、目の前にいるあの人が知覚できなくなるのは嫌だったから。でも結局、あの研究は実らなかった。あの人が衰弱して、自力で立てなくなったとき、親族連中から私は責められたよ」
「どうのように」
「あんたが自分の都合でフリーサイド行きを阻止するから、彼はこの世界で余計に苦しまなければならない、ってね。勝手な理屈をつけて、あの人を独占したいだけだろうと。夫である以上に、人間として個人の自由を尊重しろと。私がセルゲイを、夫婦感情という理屈をつけてセルゲイを縛り付けているって、思っていたんだろうね。最後の最後で、どうしようもなくなって、彼はフリーサイドに行った。しばらくは向こうから呼びかけてもくれたけど、それも三年もすると、なくなってしまったね」
「何故ですか」
「さあ。でもあなた、フリーサイドの片鱗を見たでしょう。どうだった？」
どうと言われても、はっきりと思い出せるものではない。何か意識が判然としなかった中で、心地よさを得ていたことは分かる。
「さっきの話に戻るけど、あそこじゃいくら自我を保っているといっても、それ以上のことはない。客観的に自分を見るものがないから、結局は集合意思に取り込まれてしまうんだろうね。フリーサイドの管理者も、委員会も、その辺の判断は曖昧だけど」
「セルゲイは、あなたのことが分からなくなったと？」

「確かめる術はないけどさ。どうなったか、なんて」
ソフィーヤは真剣なまなざしで私を見つめ、
「完全な自由を求めたら、この世から去るしかない。そうやって、欲望が無秩序的(アノミー)に広がって、人を自死せしめたことがあったんだよ。それを引き留めるための社会構造でもあった。多少のしがらみと、痛みを伴うとしても、自己の欲求を抑制する何かがなければ、人の欲望は際限がない」
潤んだ瞳に、私の顔が写っていた。
「自由主義者は、あらゆる制約を嫌って、フリーサイドを作り上げた。そうすれば理想のまま、意識だけで生きることが出来る。願望と情念のみが、あの場所にある」
やがてソフィーヤは、目をそらした。
「でも、そうまでしてあの人を生かして、私を忘れて。同時に、この世界で彼と過ごした時間も、思い出も、全て社会の制約として、好ましくないものとして判断されてしまった。私がフリーサイドに疑問を持ったのは、そのときからだった」
ソフィーヤは、涙を拭った。
「でも、あんたを巻き込むことなんてなかったよね。フリーサイドを否定するってことは、あんたを否定するってことだし。私は同時に、あんたに罪を負わせてしまった。ルカがここに運び込まれたとき、私は何が何でもあんたを関わらせないようにすれば良かったのに、全部一人で良かったのに……ごめんね」
涙がこぼれた。悔恨や悲哀や、どうしてそこまで流すことが出来るのか。ソフィーヤは一人、泣いていた。声をかけようとして、しかし私は言葉を飲み込んだ。こんな時でも、言葉を尽くそうとしている自分が、ひどくつまらないものに思えて。
私は黙し、ただ彼女の震える肩を見つめた。

39

「これからどうするのですか」
私が訊くのに、ソフィーヤは恥じるような笑みを見せ、涙を拭いながら、
「しかるべき、処置をするよ」
「自首するということですか」
「それもいいけど」
ふと、ソフィーヤの後ろの棚にある、黒光りする物体を目にした。旧型の回転式拳銃は、阿宮が手にしていたものと同じものだった。
「それは――」
「ユーリ、これだけは言っておく」
ソフィーヤが私の手を握った。不意打ちを食らって狼狽するのに、彼女はさらに言う。
「あなたの体は、都市の中にいてこそ保てるようなもの。外に出れば、たぶん苦労すると思う。それを承知で行くんだね？」
おそらく、私は今までになく動揺していた。反射的に頷くのに、ソフィーヤはさらに強く握る。
「あなたたちは、普通の人間よりは長く生きられるけど、それでも都市の外に適応出来るだけの抵抗力はない。ナノボットが常に散布されているわけでもなく、倫理ネットもないから危険を予測することも出来ない。何よりあなた自身を管理するものは何もない。完全に一人で、何もかもやっていかなきゃならない。それを知ってもなお、行くの？」
「決めたことですから」
私は、自分の心音が訊かれやしないかと少し心配になりながらも、
「彼女の気持ちを、私は理解出来ず、このまま教育プログラムを受ければおそらく近づくとなんて永遠に出来ないと」
私はルカを分かろうとした。しかしそれは本当にそう思ったわけ

ではなく、分かろうとしている自分を見せることで、自分自身を納得させていたのかもしれない。私は君のことを分かろうとしているのだという姿勢を見せただけで、本当に分かろうとはしなかったかもしれない。

「分かろうとするならば、今までと同じには出来ません。どのみちプログラムを受ければ、倫理社会に、もう懐疑すら抱くこともないでしょうから」

「そう」

と、ソフィーヤは手を離し、

「それならいいんだ。そこまでの覚悟があるなら」

「そんな大層なものではありませんよ」

こんな時でも、気の利いたこと一ついえない自分が、なにやら情けない。彼女とのやりとりも、それが最後だと知っても、それ以上言うべきことが何一つ思い浮かばず、いつものようなつまらないことしか言えないのだから。

「最後にもう一つだけ」

ソフィーヤは真剣な様子で言った。

「この部屋を出たら、あんたは何があってももう振り向いちゃいけないよ」

意味を理解しかねていると、ソフィーヤは私の思いを知ってから知らずか、かみ砕くような口調で説いた。

「もしここを離れるというなら、都市のことは全て忘れなさい。振り向いて、そんな無駄なことをするぐらいなら、初めから都市を出るなんて言ってはいけない。あの子たちの気持ちを知りたいならば、今あるものは置いてゆくぐらいでなければ」

おそらく、彼女は自分のすべきことを実行しようとして、そしてそれを全て飲み込んだ上で、私には示そうとはせず背中だけ押す。彼女は、自分のことで多くを語らない。語らず、私に助言めいたことを言って送り出そうとしてる。

最後の最後でも、呆れるほどに彼女は自分の流儀を貫こうとして

いた。それも普段通りで、もう二度と会うことがないと知っていても尚、そうすることが二人の間には必要であるのだというように。
「了解、ドクター」
だから私もまた、いつも通りに行う。彼女と交わす会話の一つ一つが、何も特別な意味などなかった時のように。
「名前でいいって」
彼女は笑い、
「本当、クソ真面目だねあんたは」
「慣れていないので」
「頑固者」
彼女もそれをまた望んでいた。だからそのように応えた。
部屋を出てしばらくして、中で乾いた破裂音が響いた。砂袋を投げこんだ時のような、重い何かが崩れ落ち、ガラスの砕ける音が、立て続けに鳴った。
その音を背にして、私は立ち去った。何度も部屋に駆けつけそうになる衝動を、こらえた。彼女がそれを望まぬことを、私の望んだことの対価を。すでに都市の倫理に背いた私に、その選択はもはや残されていないことを。嫌になるぐらいに噛み締めながら。
彼女の脳波が潰えてゆくのを感じながら、私は歩いた。

郊外まで車を走らせる。聖堂が過ぎ去るのを横目で見て、もう二度と目にすることのないドーム建築を網膜に焼き付けた。
そこで行われたことの全ては、外縁では関係のないことなのかもしれないが、都市の中ではそうも行かない。これから先、規制緩和により、今よりも数倍に膨れ上がった希望者が、あの建物に詰めかけるだろう。そうなれば、フリーサイド自体も倍以上に膨れ上がるだろう、完全な自由と永久的な生命を求めるものたちによって。
そのことを想像しようとしたが、先のソフィーヤの言葉を思い出し、やめる。都市のことは、今ここで私は捨ててゆくのだ。だからそんなことに想像力を働かせても、意味がないのだと。

工場群を抜けた先が、都市と外縁との境目、門(ゲート)と呼ばれる関門だった。かつての中世における城壁よりは高く聳えるものではないが、それでも外縁からの進入を拒むかのような、鉄の壁がそこにはあった。

私は車を降りた。ソフィーヤから預かった、倫理院のパスコードを、管理システムに認証させる間、私は背後から視線を感じていた。

「腕はもういいのか、マクガイン」

私が振り向いた先に、壁によりかかった姿を認める。阿宮に斬られた腕は、まだ複合手術をしたままなのか、包帯を巻いて固めてあった。

「お前が見送りにくるとは、以外だったな。都市警から見たら、私なんて一番許せない存在じゃないのか」

「同期のよしみだ」

まるで似合わないことを言って、マクガインは懐から銃を取り出した。阿宮が持っていた、回転式の火薬銃を、銃把の側を私に向けて差し出す。

「初めて見たぜ、外縁に丸腰で出向く奴なんぞ」

「ゲリラの銃なんて、そんなもの持ち出しても良いのか」

「まあどうせ処分されるものだ。誰も気にしない」

受け取れ、というように突き出すのに、私はそれを手に取った。鉄の、冷たい感触が手のひらを包んだ。

「気休めみたいなものだが、そんなものでも無いよりはましだろう。弾薬は、そこに入っているのが全てだが、外縁じゃまだ火薬の実弾も現役だ。あとは何とかして自分で手に入れろ」

「礼を言っておけば、良いのか」

城壁が、静かに上がっていく。外からの、砂混じりの風が吹き付けてくるのに、私は顔を背けた。

「別にいらねえよ。ベータグループに有り難がられても、何の得にもならん」

「じゃあ言わない」

私は、門(ゲート)の外に目を向けた。環境工学に基づいて生み出された都市とは、正反対の景色が広がっていた。見渡す限りの砂漠地帯が、私の未来などまるで歓迎する風でもなく出迎えてくれる。
「ユーリ」
と彼が呼んだ。私は振り向き、
「お前がその名を口にするとは、驚いたな」
「前にも一度呼んでいるが」
マクガインはちょっと納得行かないという顔をして、
「それよりも、どうしても行くのか。危険な外縁に赴くよりは、おとなしくプログラムを受けた方が身のためだと思うが」
「何だ、心配してくれているのか？」
「一応な。ベータグループはそんなに丈夫にできてはいないだろうから」
マクガインは肩を竦めて言った。
「まあ、お前がそうしたいと言うならば、俺は止めないが。そうしなければ、答えが見つからないと言うのであれば」
「そういうものでも無いがね」
私の答えがよほど不可解だったようで、マクガインは怪訝そうに顔をしかめた。
「何だよそれは」
「ただ彼らの故郷を見てみたいと思ったんだよ。阿宮圭と、阿宮瑠香が生まれた場所はどんなところかと。そこも今では都市化の波が押し寄せているとは言うが、彼らがそこまで渇望したものがどんなところかって、興味があってね」
「まさか、それだけの理由ではあるまい」
「ほとんどそれだけの理由だ。彼女を知る手段は、それぐらいしか今は思い浮かばない。私は結局、彼女のことには鈍感で、最後の最後にあっても分かろうとはしなかったから。そこがどれほど良い所か、あるいはそうではなく非人道的な地なのか、いずれにしてもそこを見なければ分からない」

心底呆れたと、マクガインはそういう顔でため息をついた。
「どうせ俺が何を言っても、実行するんだろうよ、お前は」
そう言って、マクガインは頭をかいて、
「せいぜい気をつけて行け。この先は、都市のようには行かない。どこかでくたばっても、それはもう自己責任ってことになる。それを覚悟の上なんだろう」
「お前に心配されると、なんだか気味が悪いな」
「馬ぁ鹿、人がそう言ってんだからそういう時はありがたく受け取っとくもんだ」
マクガインは背を向けた。動く方の左手を、最後に高く掲げた。
「じゃあな、気張れよ」
まるで明日また顔を合わせるのだと、いうように。それが自分の流儀なのだと主張するかのような、気軽さを以て。

砂の上を歩く。
端末を覗き込み、気象情報を読みとりながら、砂嵐が過ぎ去るのを待った。シリコンのＣＰＵは、いよいよバッテリーと回路の耐久度の都合で、画面がかすれていた。こんな砂嵐では望むべくもないが、今更ながらナノボットの固着スクリーンの有り難みを、否応なしに味あわされる。
膚の表面を、砂粒がちくちく刺激してくる。どこまでが自分の膚で、どこからが外界であるか。その境界を教えてくれる。目を開けていられないほど吹き付ける風の、その渦中から、砂の大地を臨む。
私は目を開けた。風に吹き飛ばされそうになるのを、どうにか持ちこたえた。まだ先は長いと知っても、そこで倒れるわけにはゆかない。
あの日、フリーサイドを目指した人々が、この光景を目にすれば何と言うだろうかと想像してみる。私の今の姿を見て、笑うだろうか。蔑むだろうか。それとも哀れむだろうか。

およそ彼らには理解できないことだろうと思われた。それでも一向に構わないという気がしていた。砂に足を取られ、何度も何度も倒れそうになっても、その先に待ち受けることが確実ではないにしても、一歩でも多く、歩いている。徐々にでも、近づく気配を得ている、それだけでも良いという気がしていた。

あの日、命を投げ出した彼らは、きっと在るべき場所へ戻るのだろう。彼が自らの存在を見いだした、その場所へ。彼女が渇望したその地へと。私もそこで何かを見つける。そのために、一歩ずつ歩を進める。

赤茶けた大地が、唸りを上げた。私の進行を拒むように、風が吠えた。

目を向けた。この先にあるはずの、彼らの故郷を見た。私もきっとそこにたどり着く。そこでもう一度、答えを見出す。

そこはルカが夢見た場所。私もそこへ、彼らの望んだものの、すべてのために。

彼らの居場所へ。いつか還る、生誕の地へ。

39（後書き）

参考文献

『自殺論』　エミール・デュルケーム著　宮島喬訳　中公文庫
『生成文法の企て』　ノーム・チョムスキー著　福井直樹　辻子美保子訳　岩波書店
『カウンセリングの技法』　國分康孝著　誠信書房
『論理療法の理論と実際』　國分康孝著　誠信書房

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8404v/

ルカに捧げよ

2011年11月6日03時17分発行